

---

Persona4 **現語りノ夢**

べほま

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Persona4 現語りノ夢

### 【コード】

N5496N

### 【作者名】

へほま

### 【あらすじ】

鬱々とした主人公がなんかする話。

長らく休載していましたが、なんとか復活。更新は調子を戻すまでゆっくり。

## 第一棒 ガキンチヨの頃の話

【日時不明】

転生した。

そういったオカルトめいたものに触れず生きてきた俺には、其処を理解するに至るまでの行程が長すぎた。右も左も前も後ろも。果てには視界に広がる天井も、見下ろした先に広がる畳さえ俺の知らないもの。

ありとあらゆる感覚がマヒしたような不快感と、息をすることすら満足にできない閉塞感だけがはつきりとしたのを覚えている。

果たして赤子がこのような『飛んでいる』思考を巡らせることは、医学的に考えて可能なのだろうか。生憎俺の記憶にある『俺』という男は、そのような医学の道を示したことなど一度もない。故に知識もごく一般の人間が持ち得るような他愛ないものだ。

情報が足りない。何もかも、だ。

【日時不明】

時間が流れるのは早い。

そう考えるようになったのは、頻繁に意識が落ちるといふ事実を認識した時だった。つまり、赤子はよく寝る。俺の意思などおかまいなしに、だ。

どうにも精神と身体が切り離されているような気がして、などと考える内に俺は眼を閉じてしまう。

母親の乳に吸いつくという所業も、必要なことだと言い聞かせながらそれをする。赤子の意思表示として一般的な『ぐずり』も慣れない。前世でも芝居の才能などないことは小学生のお遊び劇で理解している。

### 【日時不明】

そろそろ満一歳。

おそらくは生後半月ほどで這いずって回るほどの身体能力は備えていたが、それでもまともな思考を回す余裕があるとは言いが難かった。言いかえれば現実逃避。俺は転生という訳の分からない事態に陥りながらも、それに関して思案することを避けていた。

何故転生、などと高次元過ぎる問題に頭を捻らせる意味はない。もつとも現実的な話。

今はいつで、此処はどこで、俺は誰なのかという話だ。

情報を整理する。

1996年。日本。山梨県、稲羽市。工藤洗征。男。  
父が片づけ忘れた新聞の日付を見た俺は酷く茫然としていた。何せ  
タイムスリップである。しかも過去へ。

しばし、悩む。

【1999年。夏】

慣れ、という人間独自の持つ感性に、俺は感謝の念を持たずにはい  
られない。

保育園の一室から同年代の子供たちが広場を駆けまわる姿を眺め、  
俺はそんなことを考える。

が、慣れと一口で言ってみても、それは短パンを穿くことであつた  
り頭を軽々しく撫でられることであつたりと、そういった子供とし  
ての生き方についてだ。

前世というものを捨て去って生きるというものに慣れなどない。母  
に連れられて帰宅すれば、俺は頻繁にタウンページやら新聞やらを  
広げている気がする。

前世において知り合ひだった人間達は。前世において築いた立ち位  
置は。前世において俺が築き上げた20年の歴史は。

未練など掃いて捨てるほどにある。その捨て場さえもはや埋め立て  
る場所などない。

新しい人生。新しい居場所。持ち越した知識。不安定すぎる感情。

3年の時を経て、俺は未だ赤子の如く泣きじゃくるだけだ。声も出さずに。

【1999年。秋】

前世の俺という人間にとって、如何にインターネットという情報網が有用だったのかを思い知る。それがなければ生きていけないなどと引きこもり染みだたことを言う気はないが、社会におけるその利用は一種の常識だ。

しかしそれを利用するには、工藤洸征を産んだ両親はあまりに古臭い人間であり、そして稲羽市という地も世間の流行からは幾分遅れるような場所だった。そもそもネットもそこまで整備されていないのかもしれない。

故に、様々なものを『検索』できないもどかしさが俺にはある。果たして前世の俺と言う存在は、この世界にもいるのだろうか。それは、この小さな身体の中に詰まっている俺という記憶に相違ない人間なのだろうか。

並行世界。言葉にすれば楽な話だが、それを深く考えるのは馬鹿馬鹿しすぎる。

百聞は一見に如かず。百考は一見に如かず。

これ以上無為な時間を過ごす前に、一つの決着を付けねばなるまい。工藤洸征を産んだ母と父に嘆願し、俺は、俺であった場所に行こう。ただ、確かめるために。

世紀の大予言者がただの法螺吹きに成り下がる年。俺はそれすら霞むオカルトの前にただならぬ決意を胸に秘めていた。

【2000年。春】

2回目のミレニアムを迎えるという、歴史上類を見ない体験を試してみても、別段それに舞い上がるようなことはない。むしろ世間がそれに盛り上がる様を冷めた目で見つめていたのが俺だった。

去年の暮れに両親を強引に説き伏せて赴いた、『俺』が育った地。俺が生まれ、俺が育ち、俺が旅立っていった家には、俺の知らない誰かが住んでいた。

玄関口から現れた中年の男に詳しい話を聞いた後、俺は稲羽市へと帰る軽自動車の中で独り、虚無感のようなものに捉われていた。俺の記憶の中に存在するあらゆる歴史が音を立てて崩れていくのが理解出来たからなのかもしれない。

俺を一番に知っていてくれた前世の両親も行方は知れず、一番仲の良かった友人も何処にいるのかはわからない。いたとしても、俺のことなど毛ほども知らないのだろう。

あとは、俺の問題だ。

前世への未練を捨て、工藤洸征として生きていくか。

それとも前世からの残滓に縋りついて、その足跡を辿って行くか。  
迷えるはずもない。

【2001年。春】

小学生となる年を来年に控え、保育園でも僅かながら読み書きやら数字の書き取りを教える様が見て取れる。果たしてそのような授業めいたものは幼稚園だけだったのではないだろうか。所詮前世より持ち越した知識などあまり当てに出来るものではない。

うんうん唸りながら鉛筆を握る幼児たちに交じって、俺も文字を書いてゆく。ひらがな、カタカナ、数字。握力のない子供の手では、さすがに知識が在るだけの俺でも拙い。むしろ前世のそれが邪魔してうまく書くことすらできやしない。

簡単だと知っているはずの上手くやれないということは、非常に腹が立つものである。

迷えるはずもないと宣言しておきながら、1年もの期間を経てようやく工藤洗征として生きていく決断をした俺は、それなりに今の生活に慣れようとしている。

ただ眺めるだけだった同世代の遊びにも加わり、両親からの愛をきちんと受け止めるように過ごし、身の回りの様々なものに眼を向けようと努力した。

まだその全てはきこちない。しかし、1年前のような窮屈で陰鬱と



した心持など、俺の記憶を作ってくれた前世の知り合いにも、工藤  
洸征を産んでくれた両親にも顔向けできない。

転生。それは確かに不幸だったかもしれないが、それだけじゃない  
はずだ。

### 【工藤洸征】

「最近先生から聞いたけれど、こーちゃん保育園でも楽しそうだったね」

「え？ ……そうかもね」

夕食時。父が残業で遅くなるとの連絡を受けて困んだ食卓は、母を  
対面とした二人きりだった。唐揚げ、味噌汁、サラダ、冷や奴。お  
ろし生姜をひとつまみ乗せた冷や奴の豆腐は、中央通り商店街でも  
有名なマル久豆腐店のものだとか。

器に盛られた唐揚げに伸びた箸を遮った母の言葉に、俺は苦笑を浮かべながら答えることしかできなかった。もうちょっと早く現実を

見据えていれば、母に余計な心配を掛けさせることもなかったのかもしれない。

何せ、保育園に入りたての俺は事あるごとに空虚な眼で呆けていただけだったのだから。

ニコニコとこちらに笑みを向ける母の顔に、少々の気恥かしさを感じながら、ごまかすようにご飯をかき込む。最近では前世の母と眼の前の母の味を比べることも少なくなつた。どちらも、美味しい母の味には違いない。

「お母さんはね、それが、とーっても、嬉しいの」

途切れ途切れ。震える声で告げる母の顔を、俺は見る事が出来なかった。その言葉に応えることすらできなかった。ごめんなさいと一言言えば俺の罪悪感を薄れるだろう。だが、母はそれを望むはずがない。

未だ転生という事実を認めることができなかった頃の俺は、ただひたすらに、ただがむしゃらに情報を欲した。日本地図を端から端まで眺めてみたり、この世界の歴史を片っぱしから調べてみたり。そういつた他者の視線を気にしない行動が、両親の目に触れたのはすぐだった。

それは神童とでも言うのだろうか。それとも不気味な子だと言うのだろうか。

若干5歳にも満たない幼児が、そんな漢字の群れを凝視して理解する。そんな異常を前にしても、母と父は俺に変わらぬ愛情を向けてくれた。前世の家に向かうとせがんだ時も、理由をうやむやにしたまま連れて行ってくれた。

「笑ってるこーちゃんを見るの、お母さんは、好きだから」

笑みさえ碌に浮かべない子の両親となった者の疲弊は、どれほどのものだったのだろうか。愛情を向けても笑ってくれない子供を持つ親は、どれほど不安に思うのだろうか。

未だ親をやった記憶などない俺だが、それがどれほど親不孝な所業なのかは理解出来る。

故に、涙で目を潤ませながら向けられる母の笑顔に、俺はただ何と書いていいのかわからなくなってしまったのだ。

ごまかそうとして箸を再び伸ばす気さえ、俺には残っていなかった。少しの沈黙が二人の間で流れ、母が目元を拭いながら食事を促したことで、その話はそこで終わる。ただ戸惑っただけだった俺に気付いたのだろうか。

どちらにしても、俺がきちんと両親に親孝行出来る日は遠そうだ。

これまで母と父を傷つけた時間が長すぎるのだから。

まずは償いから。生まれた瞬間に罪を背負った赤子など、酷いものだ。

【2002年、春】

入学式やら始業式やら。そういつたものに対する嫌悪感のようなものというのは無くならない。簡単に言うとか酷く面倒なのだ。校長やら教頭やらの話も俺たち新入生に掛ける言葉は最初だけ。後は体育館内部の後ろに並ぶ保護者達に向けた、教育理念がどうだの校風はどうだのと。

通過儀礼であるとは理解しているものの、前世の子供の頃では理解するのも難しかった大人たちの演説も、今の立場になるとより一層つまらない。

隣で眼を輝かせるような同級生のように、純粹な心が羨ましくもなる。

一年二組。俺が宛がわれた30人一組のクラスでは、ちらほらと保育園でも知り合った同級生がいる。まあ、いくら中身が大人とはいえ、このような新しい出会いがある場では緊張してしまうのは仕方がないのかもしれない。

これより6年間。どうなることやら。

【2002年、春】

学校の本業は勉強というのが一般的な考えであり、俺もそれには苦

々しく同意せざるを得ない。しかし成人男性の一般的な知識を持ち越している俺には、保育園で付き合わされたおままごと以上にそれが辛い。

見知っている国語。筆をとる必要もない算数。一般常識過ぎる理科社会。どれもこれも暇を持って余して辛すぎるのだ。

図工での工作などでは教師の度肝でも抜いてやるうかと奮闘したが、年齢など関係なく俺のセンスは酷いものだったらしい。違う意味でつまらな過ぎる。

そんな中で学校生活に有意義と言えるものを見出せたのは体育くらいだろうか。気だるいと思いつつも、気がつけば夢中になるくらい身体を動かしている気がする。

前世と比べれば勿論、力も何もかもが『弱い』のだが、それ以上に体力が有り余るほどに多い。つまりは、元気過ぎるということ。

将来的に部活動に入るのも面白そうかもしれない。

俺は、徐々に今の生活を堪能しつつある。

【2002年、夏】

勉強が本業、と言いつつもやはり俺たち小学生の本文となるのは『遊び』一択だろう。帰り際の通学路で傘を振りまわして帰るのもよし。グラウンドで球技に励むのもよし。家に帰ってコントローラーを握るのも悪くはないだろう。

そのほとんどにおいて俺は一步引いた立ち位置を取っているのが、どうしようもない話だが。球技やらゲームくらいには夢中になれるかもしれないが、さすがに『ごっこ遊び』は心にくるものがある。主に羞恥心的な話で。

まあ、兎に角遊ぶことが一日の4分の1を占めるようになる毎日ではあるが、そう言った中で遊びのグループなるものも定まって行く。簡単にいつてしまえばいつもつるんでいるような友達のことだ。まあ、小学生ということでは性別の垣根があまり存在しないと言つのが、気が楽でいい。

俺がよくつるむ中で目立つのは、小西尚紀という男子と松永綾音という女子だろうか。いや、この3人で遊ぶというのは別段多くないのだが、その二人が俺の目を引くという意味で目立つ。

尚紀は小学生には珍しいクリーム色をした色素の薄い髪。松永綾音はどっかの映画を思い出しそうなおかつぱ頭。どちらもある意味個性的ではあるが、まあ、子供らしくいい子たちではある。

## 【2003年、冬】

稲羽市における積雪量が一メートルを越えたとか越えないとかで、今年の冬は何年ぶりの豪雪を経験した。八十神山の麓に広がるこの稲羽市ではあるが、山梨県という地域の気候上、雪がよく降る地域がはつきり分かれていなかったり分かれていたり。

つまり、こんなにも多くの雪を見るのは久しぶりということだ。

小学生となって初めての冬休みに、俺はこたつでぬくぬくとだらけてみたり、時折連絡の来る知り合いと遊んでみたり。別段珍しくもない子供らしい生活を送っている。

未だに携帯電話の普及が一般的ではなく、そもそも時代的に子供にそれを渡すのが珍しいので、知り合いからの連絡は家電を使って行うことになる。それがなんだか懐かしくもあり、受話器越しに緊張したような声を出す友人たちは、なんだか俺をほっこりとさせる。

話は変わるが、稲羽市というのはどうしようもないほどに田舎だ。娯楽施設や時代の最先端に行くようなおしゃれな施設も存在せず、テレビのワイドショーで見ることの出来る流行から大分遅れているようにも見える。

別段流行に乗ることが重要だとは無論思ってもいないが、それが街単位の話になるとどうにも不便で、しかも不安に思えてきてしよがない。

未だ将来の夢など決まっていないが、この地に骨を埋めるとなるかもしれない7、80年後には、稲羽市という街は存在するのだろうか。

時期に問題になるのであろう過疎化やらの陰りが、この稲羽市ではよく見て取れる。

稲羽市なんじゃなくて、稲羽村なんかじゃないかと首を捻るくらいには。

【2003年、夏】

夏休みの宿題にひーほー言っている友人たちだが、無論俺はそんなものに一日以上の時間をかけるつもりはない。ドリルの束を机の脇に重ねて一日中机に向かう俺に、母も大分心配そうな眼を向けてくる。

叱られる謂れはないとは思っているが、まさかこちらを氣遣うような目で見られるとは露知らず、理由を聞けば「あなたの頭の良さは知っているが、それでは勉強にならない」とのこと。

成程、一夜漬けのように行われる詰め込みの勉強など確かに意味もないだろう。しかし、母よ。知識の持ち越しがある俺にはこれを毎日細々とやるのは辛すぎる。

俺にとっては自らの行動を記してゆく日記や、センスの乏しい身で行う夏季工作の方も辛いんだが。

そういえば、既に夏休みの宿題を終えている旨の話友人にすると、決まってそれを写させるとせがんでくる輩がいる。正直な話、反則染みた立場にいる俺が、そういったズルを批判するなどおこがましいにもほどがあるが、其処は丁重にお断りしておいた。

尚紀よ。夏休みはまだ半分だ。せめてせがむなら切羽詰まった最後の日にでもしてくれ。



【2003年、秋】

一般的な都市よりも幾分自然の景観が多い稲羽市では秋になると、田んぼの畦道に生えるススキやら、道路の傍に聳え立つ木々の紅葉やらで、一気に街の鮮やかさが映えてくる。

そうだった今年の終わりが見えてくる光景に少々の哀愁を感じるが、年端もいかない友人たちにはそんな想いを共感できるわけもなく。雑木林に広がる落ち葉の絨毯に興奮してみたり、ご近所のご老人から秋の味覚についてご高説を承ってみたり。幾分田舎を感じさせるような日々を俺は過ごしている。

そういえば、父に毎年せがんでいたネット環境の整備をこの年になってようやく認めさせることが出来た。父の職業は建築士であり、その方向性も随分とアナログなものであった。言ってしまうえば昔ながらの頑固な職人気質といったところだろうか。

どちらにせよ、ネットの有用性を必死に語ってみてもはてなマークを浮かべるばかりの父に、それを理解させるのは非常に困難だった。大人としての精神がある以上どうしても家でも学校でも一歩引いた立場にいる俺が、声を大きくして我儘を言う様に父も大分面食らったようで、逆にその我儘を好ましいとも思ってくれたようだった。

しかし、ネットを乞食のように欲するその心の奥底には、未だ前世への未練が渦巻いている。前世における世界の流れは変わらないのか。本当に此処は日本なのか。前世において俺の築き上げた歴史は欠片ほどもないのか。

テレビに映るニュースだけでは足りない。新聞だけでも足りるわけがない。四目内書店に売ってある本でもカバーしきれない。

それはひよつとすれば未練ではないのかもしれない。転生と言う事実に対する純然とした不安は、小学二年となつた今でも俺の中には確かにある。

細かな情報を取り入れることで、そういった前世との差異を執拗に探し回っていることから、我ながら嘆息してしまう所業だ。

自己の安定化から、世界に在り方に飛躍する俺の興味は、傍から見れば異常者極まりないのだろう。

### 【小西早紀】

彼が尚紀に連れられて家にやってきたのは、尚紀が小学校に入りたてだったころだと思う。ちよつとだけ引っ込み思案で、悪く言っちゃえば根暗な尚紀が、満面の笑みで彼を友達だと紹介した時は、尚紀のお姉ちゃんとして微妙な嫉妬を感じたのを覚えている。

自分で言うのもなんだけど、私は尚紀を弟としてすごく可愛がっていたし、たまにやるシュークリームの意地悪だって、悪気があつてやっていたわけじゃない。

高校になった今でも尚紀の買ってきたシュークリームを勝手に食べることは、ある種のスキンシップかもしれないと常々思っている。

最近では、マジになって怒るからあんまりできないけど。

時に一緒に遊んだり、時に喧嘩してみたり、時にお父さんに一緒になって怒られたり。普通の姉弟としてもそう珍しくない仲だった私と尚紀の間に、ふらりと現れてきた彼の存在は、私にとって微妙な苛立ちを残していった。

……結局、子供の覚える嫉妬だから、中学になる頃には一緒に遊ぶことに疑問はなくなったのだけだね。

だけど、中学となって色々なものを『分かってくる』ようになると、彼の異常性に気付かざるを得なくなる。そのことに対して尚紀とは何度も口げんかを繰り返したものだ。あいつは俺の友達だ、なんて暑苦しいセリフを吐く尚紀はちょっととした黒歴史かもしれないけど。

今となつては工藤洸征が多くの人に持たれる印象なんて、子供の中に紛れ込んだおっさん、ということに通ってるんだけど、彼のあまりに大人過ぎる行動やら言動に気付いた私は　まあ、ぶっちゃけ怖かった。

頑固で強面なお父さんと比べるのはちょっとだけかわいそうとも思ってたけど、其処らの大人と比べても遜色ないほどに、彼は『大人びて』いる。

まだ何も知らなかった子供のころの私は、彼や尚紀に向って姉貴面するのが楽しくて、ちょっとだけ誇らしかったけど、高校にもなると、なんだか彼との間にぎこちない溝が出来たようで気持ち悪い。

一歳年上のお姉ちゃんなのに、彼が私に、私たちの世代に向ける眼差しはあまりに暖かい。  
まるで子供を眺める大人のような態度に、一部では頼りがいがある  
だとか、一部では生意気だとかで賛否は分かれるけれども、今の私  
が彼に抱く印象は。

気味が悪い。

尚紀が彼を家に招く時、決まって私は彼の顔を見ないように縮こま  
ってしまふ。

それが、酷く、ムカつく。

だって、私は尚紀と彼の、お姉ちゃんだもの。思い込みかもしれない  
けれど、あの二人の面倒を見てきた頼りがいのあるお姉ちゃんじゃ  
ないの？

今頃になって、こーちゃんは私よりも大人びてた〜なんて。

## 第二棒 まだガキンチョの頃の話

【2004年、春】

今年になってようやく中学年と呼ばれる三年に上がり、周りの友人たちも子供らしさの中にませた考えを持つような人も出てきた。2004年という年代における子供たちの進んでいる実態など、前世では聞いたことしかなかったが、同じ立場に立ってみるとよくわかる。

異性に好意を向けることを覚えたり、妙に難しい言葉を意味も分からず連呼したり、喧嘩の内容も引つ張り合いから壮絶で生々しい口喧嘩へと変わって行く。

例に出したものがどれも負の方向に成長してしまったものだが、勿論いい方でも彼ら彼女らは成長している。精神が老けこんでいるためか、友人たちのそういつた目に見える成長を見ると、なんだか親になった気分がして非常にまずい。

前世も合わせれば『俺』は既に30を越えているといったところだろうか。

そんな俺と友人たちとの対比に一人落ち込んでいれば、ふと、気が付いてしまった。

俺は、何一つ成長できていない。

【2004年、夏】

夏休みの半ば当たりだっただろうか。小西一家からの誘いで、俺は両親と一緒に近場の沢に遊びに行くこととなったことがあった。

海に行きたいのは山々だったらしいが、山梨県という場所の都合上、近場にそんな海はない。故に八十神山の山林に踏み入り、その川辺で遊ぶのだとか。

緑の景色に彩られた清流にて、尚紀と早紀さんと共に入って行く。濁り一つみられない透明な水流の中に、きらきらと光る魚の影が見て取れる。水着のままにはしゃぐ二人に少々ため息を吐きながらも、俺はちよつとだけ童心に帰って参加することにした。

おそらく、の話ではあるが。

両親がこのハイキング染みたことに意欲を見せたのは、最近になって考え込むことが多くなった俺のことを考えてのことだろう。自分を客観的に見ていると、工藤洸征は酷く焦っているようにも見えるかもしれない。

未練を少しばかり断ち切り、この世界に生きていくことを決めたのにも関わらず、俺は未だ何一つ努力を見せてはいない。

尚紀のようにヘトヘトになるまで遊ぶこともせず、綾音のように勉学に精を出すこともなく、早紀さんのように友人関係を深く育むこともしていない。

まるで傍観者のように。まるで観測者のように。まるで、無気力な人間のよう。

ただ知識の持ち越しというものに胡坐を掻いて、俺は何一つ意欲を持って取り組んでいない。現実を嘗めきっている。

この世に生を受けて9年目。

何一つ成長することなく過ごした無為な日々は、あまりにももったいない浪費であった。

【2004年、秋】

夏休みが終わると同時に、俺は強迫観念に捉われるように四目内書店に通い始めた。時に立ち読みで店主に怒られてみたり、時に新書について店主と激論を交わしてみたり。そういった中で俺が買いたるのは、決まって参考書やら資格書やらの類のものばかりだった。

俺が何より欲したのは目に見える成長の証。

俺の貧困な発想の果てに出した答えは、学歴やら職業としてのステータスやらで随分と生々しいものになってしまった。例えどのような行程を辿ろうとも自分に誇りを持つことが出来れば、なんて青臭いことを思う事なんて俺には出来なかった。

この世は結果が全て。そして現実は甘くない。半端に覚えているそんな真理が俺の頭には確かにある。

弁護士にでもなればそれを成長と言えるのだろうか。高学歴と履歴

書に書くことが出来ればそれは証と言えるのだろうか。何を持って前世からの成長の証となるのかは、俺とて分かりはしない。だけど、せめて出来る所からやっつけていこうと思う。

知識の持ち越しという反則が認められるなら、もう少しばかり貪欲に生きるのも大切なのではないか。俺は最近、そう思い始めている。第三者として同年代の生活を遠巻きに眺めているのもそろそろ止めにすべきだろう。知識の持ち越しを盾にまとめ役を買って出るにせよ、縁の下の力持ちやら大黒柱やらを気取るにせよ、少しばかり表に出ることを覚えたほうがいいのかもしいかな。

工藤洸征は、もう少し真面目に生きてみるべきだ。

そうしなければ、捨て去った過去の全てに胸を張れない気がするから。

【2004年、冬】

もはや四目内書店に参考書等を漁りに行くことも少なくなり、専らネットからの取り寄せなどに終始するようになってくる。もはや10年ほど前の遠い記憶でも、高校レベルの教科書などを読んでいると英単語やら数式などが頭に浮かんで懐かしい気分になる。

未だ、前世における偏差値に辿り着くほど勉強が進んでいるわけなどないが、それでも小学生を卒業するくらいには、既に大学受験を控えるくらいの学力にはなるだろう。



そういえば、学級委員にも近々立候補しようかと考えている。来年になれば俺も小学4年生。クラブ活動やらと活動の幅が広がる学年であるが、それ以上の荷物を抱えても問題ないくらいには俺もまだ余裕はある。

正直な話をすれば、一年の頃よりそういった纏め係を頼まれること自体は多かった。ただそれを今までは面倒だという理由で固辞し続けただけの話だ。

友人関係はさほど変えようとも思わない。赤の他人に猫を被るのは別段心も痛まないが、元々の友人に対して自分の成長を促すような糧にすることはさすがに御免だ。

友人たちの前でだけは、普通に接していたいものだ。

そういえば母から頼まれた御使いにて、四目内書店の隣にある『金属細工だいたら』という店に行く機会があったのだが……あの店はいいのだろうか？

入ってすぐに目に入ったのは鎧やら刀やら大斧やらと、どこかのRPGにある武器屋にでも入ったような錯覚に陥るくらいに、この店は銃刀法違反を犯している気がしてならない。

店主の強面の男が言うには「アートの分類されているから大丈夫」らしいのだが、どう考えてもあれはその筋の系列の保護を受けているとは思えない。

しかし、ある程度一般向けのものも販売しているらしく、俺が母から頼まれたのはこの店特製のシャベル。家庭菜園を営む母であれば、そういったものを欲するのわからんでもない。

だが、こんなところを鼻屑にしなくてもいいだろうに。

とつとそれを購入して帰りがかった俺だったが、何の因果か、そこに居合わせた同年代くらいの女の子に、此処の『アート』について延々話を聞かされる羽目になった。

名前は、確か『坂崎舞』だったか。随分と奇特な趣味を持つ子供もいるものだ。

### 【松永綾音】

洸征さんと友達になって大分経ちますが、私は彼について一つだけ理解出来ないことがあります。え、えっと、別にそれ以外のことから全部知ってる、なんて意味ではないのですけれどね。

彼と友達になったのは小学生の頃からと結構昔の話なのですが、彼はその頃から他の人たちよりも大分大人びていたようでした。掃除の時もサボっちゃう男の子たちの中で、唯一真面目に取り組んでいる人だったし、文句一つ言わずにせつせとやっている姿を見ると、偉いなーなんて思っていたこともありました。

まあ、掃除するのが普通の話なんですけど。

そういった他のやんちゃな男の子たちからすれば、彼はすごく、何と言つか、浮いていたのかなあなんて思っちゃいます。それを抜きにしたって授業では間違ったことなんて一度もないし、国語の教科書だってすらすら読んでいましたし。

前に見せて貰った分厚い本には、何だかよくわからない言葉がびっしりと並んでいて、私もこんなのを覚えなきゃいけないのかな、なんて眩暈がしたのを覚えています。

適切な言葉を用いるとすれば、彼は天才だったと私は思うんです。

それに気付いたのは中学くらいになってからなんですけど、だからといって私が彼に抱く想いはあんまり変わらなかったと思います。気がつけばいろんな人の相談事を受けていたり、たまに担任の先生すら励ましているような姿が見えたり、怒ることなんて全くなくて、いつもニコニコとしながらみんなのことを見ていたり。

天才ってさつきはいいましたけど、もつと大きく言ってしまうえば、洗征くんは『とても頼りがい』のある人、という感じなのかもしれない。

それで、私が一個だけどうしても理解できないことなんですけど。

いろんな人が彼に、「凄いね」っていう感じで感謝したり褒めたりすると、決まって洗征くんは苦笑いを浮かべながら「ずる賢いだけ」って返すんです。

謙遜とか自慢することなんて一切なくて、必ず自分を馬鹿にするように。

それを、嫌味だーなんて根拠のない言い分で意地悪する人も中学に

なって増えてきちゃいましたけど、あの苦笑はそんな単純な話なんじゃないのかも、なんて最近は思い始めています。そのことについては尚紀くんも舞ちゃんもはつきり分らないらしくて、尚紀くんは格好付けなだけって馬鹿にして、舞ちゃんは思春期じゃないか、なんて笑ったりしています。

私の勘違いなんでしょうか？

あの苦笑が、酷く焦っているように見えるのは。

【2005年、春】

これでようやく学年的には全体の上半分の方に含まれることになり、下級生の面倒を見たり様々な委員会が発足したりと、この4年生という学年からは様々な責任を持たせるという傾向が見て取れる。

先生から下級生の面倒をみるように、なんて言われて顔を強張らせる同級生たちを見ると、どうにも顔が緩んで仕方がない。

まあ、俺にとってはいつもと変わらない。小学生だろうが、中学生だろうが、高校生だろうが。事実として俺が面倒を見る役に回って

しまつのは仕方がないのかもしれない。

そういえば今年から俺たちにもクラブ活動についてどうするのか、選択の機会が与えられる。曰く、少年クラブといったお遊びの延長にも見える部活動のことなのだが、俺はそれに少しばかり真面目に悩むようになっていた。

野球部やらサッカー部やら剣道やら。小学校ということでは高校、大学のそれと比べれば選択肢はずっと狭いのだが、それでも俺には選択の余地があるようにも見える。

レベルが低いだろっがどうだろっが、ああいったものに情熱を傾けるのは必要なことだろっ。

正直な話をすれば、最近は机に向かっていることが多すぎて、腹の肉が気になりつつあるのだ。もうちょっと身体を動かすことを考えねばな。

## 【2005年、春】

学校からの帰り道を尚紀と並んで帰る。ひよっとすればこのようにたった二人きりで帰るのは久しぶりだったのかもしれない。その最中に交わした言葉はどれも他愛のない事ばかり。途中で担任への嫌味やら同級生へのやつかみなどが出てきたことには、随分と顔を歪ませられたが。

最近は何だか尚紀が姉の早紀さんに似始めているような気がして複

雑な気持ちだ。彼女は往々にして遠慮というものを知らない傾向があるからな。

そういつて話題に出たのがクラブ活動の話。どうやら彼はゲームクラブに入る様子。まあ、ただ単に帰宅部になるよりはいいのかもしれないが、なんだかな、とは思ってしまふ。

内容としては囲碁やら将棋やらの昔ながらのものばかりらしいのだが、別段そんなものなど近所のお年寄りたちから習えばいいだろうに。

結局のところ、周りの同級生たちもゲームクラブに入ろうとする輩が多いらしく、1クラス30人の中でも5、6人はいるのだとか。外で何かをするという考えはないのか、お前たちは。

といつても、俺が前世において子供だった頃と比べれば、TVゲームの発達によって室内での遊びのレパートリーが格段に増えている時代だ。もはや30を越える中身の俺でも、ああいったゲームには心惹かれるものがある。それを考えれば仕方ない事が、とため息を吐いた。

お前は何処に入るのか、と尚紀聞かれ、俺は陸上部だと答えておいた。

まあ、人気など全くないクラブなのだが。

【2005年、夏】

炎天下の中を延々と走る、というのはさすがに気が引けるので、俺が所属する陸上クラブの活動は今のところあまり活発なものではない。といっても部員は4、5人ほどで学年もばらばら。如何にこのクラブが人気のないものかがよくわかる。

そもそも晴れ舞台とも言える学校別陸上競技大会とて、陸上クラブから選手が選出されるわけではなかった。ソフトボール投げには野球部の誰かが、短距離走には元々足の速い誰かが、そういった風にそれぞれの得意分野の人間を学校中からかき集めて参加するというのが、俺の学校での風習らしい。

なんというか、陸上クラブ形無しの話である。

といっても野球部やサッカー部と比べ、少々地味でもある陸上部に子供の興味が移らないのは仕方がない話かもしれない。傍から見れば、ただ走ったりしているだけの部だからな。

が、俺にとっては随分楽なクラブだ。個人競技、特訓の場所を選ばず、私生活にも体力的な面でダイレクトに影響する。

俺が選んだのは長距離走者。簡単だが、その鍛錬が俺に与える影響は計り知れない。

何より、ダイエットに最適だ。

いよいよ来年からは高学年。そろそろ中学での生活も脳裏に現れ始め、その先に見える様々なものにも想いを馳せることも多くなってきた。

稲羽市、という田舎の街である特性上、選ぶことのできる中学も大分少なく、さらにその先をいく高校など市内に5つあるかどうか。どうにも狭い街で仕方がない。

いや、別段高校などは市外の有名校に単身向かう考えもあるのだが、どうにも最近は家庭の雰囲気かきな臭い。母が、身体を壊すことが多くなってきたのだ。

父の話によると前々から身体の弱い人だったらしく、俺を産んだ直後もすぐに体調を崩したりと、中々安心できない状態だったそうだ。それに何一つ気付くことができなかった自分に憤りを感じてしまうが、それ以上に自分の弱さが露呈したような気がして不愉快な気分になる。

未だ30代の半ばという若さである母が、そういった危機に見舞われるのはどうしても避けたい。二人目の母とはいえ、其処に感じる愛情も、家族としての仲も、無くしたくはないと心から思う。

どう考えても、この田舎町に身体の弱い母と仕事で忙しい父だけを残していくのは考えられない。故に、将来設計に少々の歪みが出始めてしまう。

中学、高校共に家から近場のものを選び　ひよつとすれば大学もある程度近場を選ばなければならぬかもしれない。

高校からすぐさま就職するという道も見えてきてしまうのか？



成長の証。

俺は、揺れに揺れる。

【2006、春】

五年生へと上がり、新たにクラス替えによつて人間関係が目まぐるしく変わって行く。たかが隣のクラスに今まで仲が良かった人が移っただけなのに、どうして子供と言うのは気移りが早いのだろうか。すでにクラス内では様々なグループが出来上がっている。

そんな中で独り孤高を貫く子供が一人いた。

10歳の子供にしては鋭すぎる目つきと、あるかどうかわからないほどに薄い眉。ひよっとすると眉なしなんかじゃないかと俺はまじまじとそれを見つめてしまう。

そしてオールバックのように掻き上げられた髪は、尚紀のように色素が薄いと白に染めているのかとも言えるような目立つもの。

何故かは知らんが、彼はまるでガキ大将のように椅子にふんぞり返り、常にその鋭い目つきと薄い眉を顰めていた。まるで全てを拒絶するような威嚇めいた行為に、周りの同級生たちもどこか居心地が悪そうにしている。

はて、あんな奴なんて今まで見たことがあつただろうか。もしも今まで同じクラスになったことがない奴とはいえ、所詮2クラスだけの学年。体育の時間やらでも合同で行うことはあつたはずだが。あんななりであれば俺の目につかないというのもなんだかおかしな話であるが。

後日、尚紀に聞いてみたのだが、彼の名前は巽完二という名前らしい。

見た目と態度からして粗暴な輩、というのが見え隠れしているが、果たしてどういうことなのだろうな。舎弟を従えて威張るガキ大将ならば珍しくもないが、ただ一人で全方位に敵意を撒き散らすガキ大将は非常に珍しい。

ちよつとだけ話でも聞いてみようか。

【巽完二】

こいつも俺を気持ちわりいとか言つて遠巻きに眺めるだけのうざっ

てえ奴だと最初は思っていた。

そりゃ俺だってあの『工藤洗征』の噂は小さい頃からいろいろと聞いている。ガキン頃からしっかりした奴だとか、気配りができるとか、頭がいいとか。

うちのババアもそいつの噂をどっかで聞いてきたのか、お前も見習えとか口うるさく言ってきたのを覚えている。

別段虐められてる、だなんて思ったことはねえが、どこかハブられてんだろうなっつー居心地の悪さはもつと前から感じていた。男からはなんか気味の悪いような目で見られ、女に至ってはこっちに聞こえるように気持ち悪いだのなんだの言いやがる。

裁縫にちつとばかり興味があるっただけでだ。

まだその頃は、何でんなこと言われなきゃなんねえんだっていうムカつきの方が多かったけど、学年がどんどん上がって行くと、なんとなく自分の考えっつーか趣味が気持ち悪いものなんだってことが正しいような気もしてきた。

もしも俺が工藤みてえに頭がよかったら、ひよっとすればこんなにめんどくせえ話にはならなかったのかもしれない。

だけだよ、俺が好きなもんを好きって言って、それで気持ち悪いって言われて。。

そんなわけわかんねえ理屈、俺は認めることが出来なかった。

自分の好きなもんまで気持ち悪いとか思われてるよう。

そしたらハブられ始めんのも早かった。

こっついう趣味には男の方も微妙な顔をしゃがるし、女に至ってはも

うわけがわかんねえ。声を揃えて気持ち悪い気持ち悪いとかで、手を出せばお前が悪いだのなんだのと。

そうやってなんもかんもがウザくなっていた時に、あの工藤洗征は俺に近寄ってきやがった。初めて話をしたのは、確か俺が宿題ドリルを提出したとかしてねえとかで、担任の遣いっ走りとしてあいつがやってきた時のことだ。

その頃にはいくらクラスが変わったつつつても、俺に話しかけるやつなんてそう多くはなかった。多分、気持ちが悪いと言われる前に自分から壁を作っていたせいっつうのもあるんだろう。

とにかく俺は一人だった。

そんな中で、気持ちが悪いくらいの笑顔を俺に向けて話しかけてきたそいつは、いきなり自己紹介やら自分が先公の遣いで来たとか一方的に話してきやがった。

傍から見りゃ仲間外れにされている俺に対して気兼ねなく話してくる工藤に、めちゃくちや腹が立ったのを覚えている。いい子ぶりやがって、とか言って。よく考えてみりゃあ、それは奴当たりだったのかもしれないけどよ。

んでもって俺があいつの胸倉を掴むのは早かった。これでも喧嘩には自信があつたし、気持ち悪いとか俺に陰口叩く野郎は手加減なしにぶっ飛ばしてきたからな。

いや、まあ、この場合工藤の奴は何も悪くねえんだけどよ。

「……………んだあ？ てめえ」

我ながらドスの効いた声だった。だけど目の前でニコニコ笑う工藤

は胸倉掴まれたまんま、自分の要件をペラペラ喋りやがる。

「別に宿題をやれだなんて言うつもりはないよ。ただやってきたかどうかを」

「うるせえって言うてんだろっ！」

あとはアレだ。表出るや的な流れになったのを覚えている。

んで教室の前の廊下でメンチ切り合った俺たちは（注、完二のみ）、当然のように殴り合いには ならなかった。

あの野郎、いきなり俺の人差し指を掴んでわけのわかんねえ方向に引つ張りやがったんだ。その頃の喧嘩って言えば蹴ったり殴ったりが普通で、俺は無敗だった。そんな単純な喧嘩しかしたことがなかった俺は、いきなり激痛が走った右手を押さえながら。

「ギ、ギブ……」

そう言うしかねえだろうが。

そしたら、工藤は貼り付けたみてえな笑顔のままに、もう一度聞き返してくるんだ。

俺にとって工藤って奴は優等生で、いい子ちゃんで、いけ好かない野郎で。

でも人の指を折ろうとする野郎で。

女もわけわかんねえけど、工藤洸征っていう男もよくわかんねえ野郎だと、俺は思った。

### 第三棒 小僧の頃の話

【2006年、冬】

三年毎に身の回りの関係がリセットされたり再構築される高校や中学とは違い、小学校と言うのは6年間も同じ環境で過ごすため、非常に飽きやすい。

変わらない隣人、簡単すぎる授業、規定事項のように繰り返される行事。この生活も後1年弱と迫った今年の冬。俺の忍耐もそろそろ限界に来ているのかもしれない。

2年ほど前から懸命に現実を生きること決心したのだが、真面目に生きれば生きるほど周りの環境が酷く鬱陶しいものに感じてしまう。足を引く張る友人、意味もない授業、俺のポテンシャルを知っている癖に子供扱いする先生並びに大人たち。

幼少時において俺がそうだったものを鬱陶しく感じていなかったのは、おそらく俺が真面目に生きていなかったからだろう。

それは余裕とも言えられない。

呑気なままでいられたからこそ、周りに歩幅を合わせることが出来た。無気力なままでいられたからこそぬるま湯に浸かっていても問題はなかった。

といっても、まあ、なんとというか、散々こきおろしたが周りは何も悪くない。

そもそもこの年齢で遙か先の勉学を嗜む方が異常で、見た目でも書類上でも子供でしかない俺への対応が、急に大人のものに変わるの

などありえない。

今はまだ我慢するしかあるまい。

中学に上がりでもすれば、一気に周りの環境は変わるのだろう。たかが一つ歳を取り、その身に学生然りといった制服を纏うだけで、子供たちはがらりとその印象を変えるのだ。

去年の暮れに中学の制服姿を俺に披露してくれた早紀さんのことを思い出しながら、そんな取りとめもない事を炬燵にぬくぬくとしながら考えていた。

お転婆然りといった彼女が制服を着るだけで、やけに大人びて見えただけだから、なんとも不思議なことだ。

俺の身の回りの友人たちも、中学に上がれば変わるのだろうか。

【2007年、春】

高学年に上がってから巽完二と妙な争いを起こしてしまった俺だったが、それからというもの何故か担任の御使いとして彼に接触することが多くなった。

正直な話、彼がクラス内で微妙に孤立していることなど担任は知っているはずなのだが、彼はその担任にも頻繁に噛みつく輩であり…。

簡単に言えば、その手綱を取ることを丸投げされたということだ。

たった一度彼の人差し指を捻ったくらいで、俺と彼が対等に話の出来る輩だと思われては困る。あの時ばかりは軽く捻ることが出来たが、後日、彼が一暴れしているところを見て、俺はほっと胸を撫で下ろすばかりだった。

小学校五年にして、パンチで人を吹っ飛ばすというのは如何なものか。

生まれながらにしての怪力なのか、それとも喧嘩馬鹿なのかは知らないが、彼に真っ向から喧嘩を売るのは止めておこうと思う。

それを抜きにすれば、彼はいたって善良で義理固い『いい子』であり、クラスメイトも担任も彼を放置する意味が少々理解しかねる。半ばハブられ状態にあるその理由とは『男の癖に女のやるような趣味と遊びに興味がある』ということ。

一応、工藤洸征が作り上げた立場を利用して、彼を微妙な目で見る輩に裏でこっそりとハブらないように懇切丁寧説得してはいるが、完二とクラスメイトの間にある溝は大分深くなって来てしまっている。

実際のところ、彼が嘲りを受けたという事実は、この6年になる頃には大分緩和されている。あまりに子供すぎたばかりに暴言を吐いてしまった子も、今となっては彼の趣味に少しばかり理解を向けている節があり、それを凄いと思う輩もちゃんとしている。

だが、巽完二からの歩み寄りは一切ない。

自らの趣味が周りに受け入れられないものだと思ひ込み、それを表に出すことは何一ついいことがないものだと思ってしまっている。その上、見た目と言動は見紛うことなき不良だ。趣味云々の前に、



彼を怖がってしまったっている者が多数いるのだ。

そして、混じり合わない両者の中にも彼の趣味を本当に気持ち悪いとして蔑む者もいる。しかもそれは意外にも女子に多い。はっきり言っていくら二回目の人生とはいえ女の、しかも子供の思考回路まで詳しく理解できるはずもない。

故に、俺は彼をクラスの輪の中に連れていく方法が見つからない。さらに言えば、完二自身が今の環境を少なからず望んでしまっている。不和の種を表に無理に出さずにいれば余計な争いも嫌な気分を味わう事もなく、不良でいることを貫けば、それを隠すことに苦痛を感じることもない。

彼と色々と話すようになってから、そういった心の内を聞き出すことには成功したが、彼は論理的なもので動くよりも本能的に動く生物らしく、俺がいくら言葉を連ねても今の自分の在り方を変えようとはしてくれない。

そっちの方が楽だから、と言って。

それを言われると、俺も何も言えなくなる。

彼以上に俺は多くのものを隠し、妙な争いが起こらないように子供らしさを覚え、そして内心ではそれらを苦々しく思っている。

本当の自分を表に出すことが出来ないという点で、俺が彼に言えることなど何一つない。

何故にここまで彼のことを心配に思うかと言えば、それは俺が彼の友人であるから。

ならば、せめて俺だけでも異完二のことはきちんと理解してあげた

いと思うのだ。

【2007年、夏】

2、3年前に四目内書店に入り浸っていたこともあり、俺はあの周辺の中央通り商店街について詳しく知っていると自負があるというか、大型デパートやらショッピングモールといったような何でも揃う大型店がこの稲羽市には存在せず、生活に必要なものはこの中央通り商店街に立ち並ぶそれぞれの店から買い求めるしかない。

求める物によって様々な店を歩いて回るのは楽しくもあり、そして面倒でもあり。だからこそ店同士の連携が商店街中で上手くとれたり、時に店主と気軽に話しこむことができたりするのだが、やはりそこにおけるデメリットとメリットの差は大きい。

何故にこんな話をするかというと、稲羽市郊外に大型チェーン店を建設するという話がある商店街でも噂になっているからである。

噂、という段階ではあるようだが、ネットで調べたりしてみるとその噂はほぼ真実だろう。建設されるというチェーン店である『ジュネス』のホームページにもそんなことが明記されていた。

何故に過疎化の憂き目にある稲羽市に、全国的に有名なジュネスがねじ込んできた理由など分かりもしないが、そうなるはこの中央通りに立ち並ぶ店にとって非常にまずいのではないだろうか。

言っただけが悪いがそういった大型ショッピングモールと商店街では、

その利便性など比べ物にならないだろう。おそらく、稲羽市における需要の向かう先が大きく移動する。

幼少より通った四目内書店。たまに駄菓子で購入で向かう四六商店。なんだかんだで仲良くなってしまうた。の親父。マル九豆腐店も危ないとなれば、母も悲しむだろう。

昔から田舎すぎるだの不便だのと罵ってはきたものの、こういった状況に陥って初めてしんみりしてしまうのは、我ながら随分と調子のいい話だ。

## 【2007年、秋】

もはや小学生生活もあと僅か。長年通い続けていた場所を巣立っていくという雰囲気をなんとはなしに感じている友人たちも、何だか此処最近は酷くそわそわしている気がある。

小学生最後の思い出だとかいって異性に突撃告白する輩が現れたり、お世話になった担任に贈り物をしようと画策するものが現れたり。

田舎街であるということから、クラスメイトの多くが同じ中学に上がる可能性が高いだろう。別れの気配があるとはいっても、それは極々雰囲気のなはつきりとしらないもの。子供であり続けた立場から脱却する無意識の表れか、それとも6年間駆け回った校舎や通学路を懐かしむ惜別のものか。

俺の中にある感情はいまいちはつきりしない。ひよっとすれば「や

つとか「という思いの方が強いのかもしれない。

中学という節目が目の前にちらちらと見え始めると、俺は今頃になつて自分の行いに不安を覚えていた。

勉強は文句のないほどに先を進み、陸上クラブでの活動も部長を務めるくらいには充実し、身の回りの交友関係やら世間の評価も常々高い。それを苦痛に感じることもあるがそれ以上に少しだけ嬉しくもある。

前世のものに比べれば、何一つ文句のつけどころのない天才で好青年の立ち位置を既に作り上げている。反則と言われればそれまでだが、ただ知識を持ち越すだけではこうもいかないだろう。転生における前例など聞いたこともない俺が何と比較してそう思っているのかは不明だが、胸は、張れている。

最近、そうやって自分に言い聞かせることが多い。

不安の表れなのだろうか。何に対して不安を感じているのさえ分からないというのに。

うちの息子は、神童だった。それを否定する材料が見つからないくらいに。

洸征の異常性に気付いたのは妻の亜季だった。赤子の頃から本や新聞などの情報雑誌に異常なほど興味を示し、寝起きを繰り返す中において大声で泣き声を上げたのは数えるほど。時折空を見上げる眼差しはとてもじゃないが一歳弱の子供が見せるものじゃあない。

まるで何かを憂いているような、どこかに想いを馳せているような声を覚え、興味を覚え、歩くことを覚えた歳になれば、洸征の異常さはますます際立つようになってきていた。どこで覚えたのか高校生でも使わない言葉を口走り、保育園や家での振る舞いもどこか世間から一歩引いた傍観者のようなもの。

それを理解した時、俺は単純に「天才だ」と思ったものだ。まさか自分の息子がそうだった類の選ばれた存在だなんて思わなかった俺は、その事実が嬉しかった。

親としての俺は極々一般的な人間で、凡夫だと卑屈になる気はないが特別だと慢心する気もない、どこにでもいるような男。

そんな俺と亜季の間に生まれた子供が天才児であったことに、俺はただただその奥にある問題を無視して歓喜したものだ。

しかし、そんな思いも1年続くことはなかった。

日に日にはつきりとしていく洸征の異常性。それは、天才ということではない。

平仮名をすらすら書くことができたり、数式の答えを苦もなく導きだしたり、地図に載ってある地名を間違いなく答えることができた

り。  
そんな単純な所に息子の異常性は見られない。むしろそういった天才の類は世界中でも珍しくない類のものだと、インターネットを通じて俺は知り得ることが出来た。

何が異常かと言えば、洸征が、既に現実の仕組みをある程度知っていると云うところだ。

一瞬で様々なものを記憶する脳。成程、天才だ。

幼少より周りを凌駕する身体能力。成程、天才だ。

自ら持つ知識を変容させて改良する柔軟性。成程、天才だ。

そんな単純な天才を表す事実ではない。教科書では教えられない社会の生々しい仕組みを理解し、人の持つ矛盾した心の在り方を理解し、その結果、自分の立ち位置を『調整』しているという事実。

正直な話、俺は寒気がした。

大人の世界では既に珍しくもない多くの『矛盾した理屈』を洸征は既に理解している。

大人が罪を犯す理由、教師がPTAの影に怯えて生徒の悪事に手を上げない理由、社会に嘘が蔓延っている理由、人の心の機微によって起こり得る諍いへの理解。

そういうものは、経験によって理解するものじゃあ、ないのか？

たかが8、9歳の子供が、目立つという理由でその頭脳を表に出すことを避け、動きやすいという理由でいい子であることを望み、世間からの嫉妬や妬みを即座に察知して身を引く。

10にも満たない幼少の頃から、洸征は『生きやすい』ように立ち

まわっている。

うちの息子は、天才なんかじゃあない。

現実への異常過ぎる理解度と、その場の流れを察知して安置に居座ろうとする狡猾さ。

それは、単純な天才という言葉で表せるものじゃあない。世の中の天才と一線を画し過ぎている。

故に、俺の周りが自分の息子を褒めちぎっている様を見ると、怖くなる。

天才、神童、秀才、大人びた、しっかりした、気配りの出来る。

そしてその賞賛を、うちの息子は、苦笑を浮かべながら謙遜するのだ。

小学校の卒業式の後。

誰もが涙を浮かべながら校舎を出ていく中で、うちの息子だけは泣いていなかった。

ただ、お世話になった先生各位に肅々と頭を下げていた。

【2008年、春】

中学生。

あれほど前々からはその響きにある程度の期待を感じていたが、いざ入学してみると、別段小学校の時と変わらないような気がしてしょうがない。

もはや真面目に聞く気もない入学式やらの行事を終え、宛がわれた教室に向かえば誰も彼もが期待と不安に胸がいっぱいであると言わんばかりにそわそわしていた。

そんな光景を見ると、物事の始まりはいくら歳を重ねても変わらないか、などと苦々しく笑ってしまう。

どちらにせよ、これより新しい生活が始まるのだろう。

様々な小学校から集まっているとはいえ、田舎町と言う事でかそれなりに知り合いの数は多い。残念なことに小学からの付き合いである尚紀と一緒にクラスになることは出来なかったが、彼以外にもそれなりに仲のよい者は多くいる。

出席番号の関係上、彼が俺の後ろの席にすることが多かったが、それがなくなるといふのはなんだか不思議な気分だ。

入学式終わりに担任となった教師より様々な話を聞いている最中、ふと視線を教卓よりずらしてみれば、入学したばかりだということに完二は既に目つきをぎらつかせていた。

あれも彼なりの緊張の表れなのだろうが　なんとも不憫な奴だ。  
あれでは上級生に目を付けられるのは時間の問題だろうに。どこにも不良という輩は多いのだから。



俺の入学一日目は、身の回りの観察やら友人への気遣いやらで潰れたのだが、そんな中で俺に積極的に話しかけてくる女子がいた。俺の隣の席になった人なのだが、ツインテールのロングで眼鏡の女子に知り合いはいない。そうやって奇異の視線を向けていれば、改めて自己紹介をされた。

坂崎舞。あの、 дай だら に興味を示していた奇特な子だった。

【2008年、夏】

四六商店前にて尚紀と完二と三人並び、まるでコンビニ前にたむろする不良少年たちのように、ホームランバーを貪る。早めに食べねば真夏の気温で融けてしまうとはいえ、3、4口で食い終わってしまつのはどうかと思うぞ、完二よ。

結局のところ、交友関係やらといった部分は入学前より大きく変わることはなかった。友人も増え、その都度重なるしがらみを増えたが、前々より交流とある者と疎遠になることは少なく。いつもというわけではないが、こうやってなかよく互いの時間を共有するくらいに、俺達は変わらぬ日々を過ごしている。

その強面の顔と腕力に少々ビクつきながらも完二をからかおうとする尚紀。顔を真っ赤にしてみたり首を捻ってみたりと喜怒哀楽が激しいアホの子の完二。

どこかの国民的アニメに出てくるガキ大将とその子分役の関係をふ

と思い出した。尚紀はあれほど意地汚くもなく、完二もあれほど自己中なわけではないのだが。

そうなる、俺はどの立場になるのだろうか。

まさか、ネコ型ロボットの方か？

あまりに馬鹿らしい思考に自分を鼻で笑えば、完二がそれを自分に向けられたと思ったらしく、メンチを切っていた。そしてそれを笑う尚紀。

いい、雰囲気だ。

【2008年、夏】

俺は前世において学校のテスト結果が張りだされるといふ環境にいたことがなく、あの状況における場合の思いがどういったものなのか、いまいち理解できていなかった。

しかし、体験してみるとこれは酷い。わざわざこんなことをしないでいいだろうにと思ってしまう。

成績が下の方にあるというのもある種の恥なのだろう。実際完二は青い顔をしていたわけで。

しかしその頂点に名前が記されるといふのも面倒な話だ。幼少のころよりの勉学と知識の持ち越しのお陰で難なくその位置を取ることができたのだが、そうなる、そうなる、周からの興味の視線が急増して、非常に居心地が悪い。

そうやって徐々に広がって行く『工藤洗征』という男が作り上げた評価。子供の頃から小学校や近所に知られていた『天才』の噂は学校中に広まり、教師陣の方からも露骨なほどに期待の目が飛んでくる。

中身が大人でなければ、こんな環境など地獄だろうに。

反則なしで天才を誇る世の子供たちに、少しばかり同情した。これでは息が詰まる思いだ。

が、俺にとってはそれを受け流す術も鬱憤を吐き出す術も知っている。むしろそういった評価を利用できるという事実にはくそ笑む余裕さえある。賞賛されることに優越感を覚えるのは人間として確かなのだが、それに自惚れて目的を違えるような事態に陥っては意味もない。

この評価も所詮付属品。欲しいのは先へ繋がる結果というものだけだ。今の立場に甘んじて優越感に浸るまま私腹を肥やすなど……屑のやることだ。

だが、入学早々勉強について俺に泣きついてくる完二は勘弁したい。あわよくば俺もと狙っている尚紀の奴も。

【2008年、秋】

文化祭やら体育祭やらと中学特有のはっちゃけた行事が続くこの季節。名前こそ小学校の運動会などと変わっているが、基本的なノリは対して変わらない気がしてならない。

積極的に協力しない男子達とそれを咎める女子多数。担任は基本的に放置。合間に立つ人間にとっては胃が痛くなる状況だろう。

つまり、俺。

ある程度予想していた通りにクラスのまとめ役を担任やら同級生やらに頼まれた俺は、それを渋々ながらに請け負っている。

別段ちよくちよく委員長として頼まれる雑事はたいしたことなく処理しているのだが、こつやつて委員長として表に立つことを強制される機会では嘆息せざるを得ない。

といつても所詮男子に協力を仰いだところで戦力にならないのは目に見えている。事実、前世でも俺自身がそうだった。基本的に男は力仕事くらいにしか役に立たない。

体育祭ならばノリもいい男子も多いが、文化祭となると全滅だ。なんとなく昔を思い出して怒っていいのか懐かしんでいいのか微妙な気分になってしまった。

この時期になれば最上級生である三年生も文化祭に掛ける情熱は疎らなものだ。受験が近いと参加に意欲を持たない輩か、それとも最後の思い出といって張り切る輩か。

尚紀が早紀さんからそういった内容を愚痴られたと、俺に愚痴ってきた。いいから手を動かしてほしいものだ。

受験。

二年も経てば俺も決断せざるを得ない立場になるのだろう。

このまま稲羽市より外に出ず、それなりの高校に入って家族を優先させるか。それとも自らの目的のために外に目を向けるか。

未だ、母の身体は弱いまま。むしろこれは時間が解決するような問題でもない。俺が外に行こうが此処に残ろうが母が体調を崩すのに変わりない。

入院するような大事にはなっていないが、頻繁に布団で寝込む母を見ると、胸が締め付けられるような想いに駆られる。そこに母を心配する心はない。ただ、自らの未来に不安を覚えることのみ。

幼少の頃に決意した親孝行など、もはやどこにも存在しない。

少々、立ち止まる必要もあるのだろうか。

## 【小西尚紀】

つい最近の話だけど、あいつが一個上の男子生徒に恨まれていると

いう噂を聞いた。本人のスペック的な話をすれば、どうせ嫉妬に狂った馬鹿な奴なんだろうなとため息を吐く。子供の頃から洗征と親しくしていた俺にしてみれば、珍しくもないウザったい噂だった。

詳しい話を聞いてみれば、洗征が独自に模試を受けていると聞いて挑んだ身の程知らずの3年生だつて話らしい。

その3年も一般的には顔も頭も良いリア充らしく、それで調子に乗ったのか、頻繁にそういった優等生として話題に上る洗征に対抗心を燃やしたのだとか。

馬鹿な奴だ。

普通に考えれば、二個下の一年に勝負を挑むなんて情けなくて大人気ない話だと思うけど、俺はそうは思わない。むしろあいつに挑んだつていう時点で褒めてやりたいくらいだ。見事に玉砕したあとに逆恨みするのはだせーと思うけど。

その噂が完二の耳に入ったらどうなることやら。あいつ、洗征のこゝと大好きだからな。いや、友達思いな奴つて言った方が語弊はないな。

長年あいつの連れをやっていると、あいつに対する対抗心やら嫉妬やらが如何に無駄なのが分かってくる。

俺だつてガキの頃はいちいち比較されることにムカついたし、なんとか出し抜いてやろうかと思つたことも多くあつた。

頭の良さ、人の良さ、運動神経は……まあそれなりだけど。

兎に角、あいつは俺達凡人が辿りつける境地にいないんだ。もしもあいつが勉強もせずにも才能に依存していれば鼻をあかしてやることなんて簡単だつたけど、それだけじゃない。

あいつは、本当に努力しているんだ。

自ら割の合わない役目を受け、友達を蔑ろにしないように接し、周りの馬鹿な奴らに歩幅を合わせようとして、それでも研鑽を積むことは忘れない。

あいつは、手加減するように、努力してる。

普通ならこつちを馬鹿にしたように手加減する男を認める人間なんていないのかもしれない。お前たちのために俺も馬鹿をやっているんだ、とか、お前たちの馬鹿さ加減に合わせるように話しているんだ、とか。

そんなことを言われれば、誰だって洗征を認めないだろう。

だけど、その手加減のために、どれだけあいつが努力しているのか俺は知っている。

馬鹿をやる俺達にため息一つ吐くこと我慢して笑う。あいつの名声にたかってくる奴らの頼みもやんわりと対処する。いい加減聞きなれただろう世間の賞賛にも頭を搔いて謙遜する。

俺が、もしも、頭が異常なほどによかったら。

おそらく、俺は俺以外の全てを見下すと思う。自分よりも馬鹿な奴らがちらつく現実を、心底馬鹿に思う。頼ってくる人間なんかには心底鬱陶しいと思う。

それを表に出すことなく、そして何より、自惚れないように自分を抑えている。

多分、つらいだろうな、なんて俺は思う。

自慢したい、優越感に浸りたい、切り捨てたい、今までの評価を気にせずに……はっちゃんけたい。

あいつが今まで受けてきた評価と、今も変わらず出し続けている評価に縛られて生きているのは、見ていて辛い。

あいつがいつも浮かべている何でも受け入れるような暖かい笑みだつて、余裕のないことの表れなんだ。あんな風に俺の前では笑わない。あんな風に優等生をやっていない。

それを知ってるのなんてほとんどいなくて、それを知ってるのは俺だけで。

それを誇らしいとは思っけど、いつか違う誰かに分かってほしいと思っっているのが、正直な話だ。

完二は本能的に理解しそうで、ちょっと期待してるけど。



#### 第四棒 まだ小僧の頃の話

【2008年、冬】

新年の初詣と洒落込むべく、母と父と俺の工藤家で辰姫神社へと向かった一月一日。近場だということでも毎年通っている見慣れた神社なのだが、やはりというべきか俺達以外の家族は見られない。

完二や尚紀も毎年此処に来ているらしいのだが、今まで出くわしたことは一度もない。まあ、こういうものは手を合わせる本人の心次第だから、マイノリティだろうとて関係ないか。

三人並んで神社の前に立ち、賽銭を入れ、二拝二拍手一拝。放り投げた賽銭が木の板を叩く音が響き、俺達家族は少しばかり長めに頭を下げていた。

父の願いは何だったろうか。母の願いは何だったろうか。

無意味な思考に落ちかけたことが馬鹿らしくなり、俺はゆっくりと頭を上げた。未だに頭を下げたまま動かない母と父。そんなに願う事が多いのだろうか。それともそれほど強く願う事があるのだろうか。

そういえば最近、母とも父とも込み入った話をする事が少なくなってきた。日常生活でありきたりな会話は毎日交わしているが、学校生活やら将来の話やら、中学生の時期には必ずといっていいほど親から問いかけられる内容の話もしたことがない。

俺が将来の夢に何を思っているのか、それをこの両親は気にしないのだろうか？

ようやく頭を上げた二人を見つめながら、そんなことを考える。

そして此方を振りかえった母から問われた言葉に、俺は口ごもるしかなかった。

あなたは、何を願ったの？

【2008年、冬】

願い事。夢。希望。そういったものに子供たちは満ち溢れていた。

それを現実が理解できていないからと蔑む者もいるのだろう。そして、それは正しい。

望むだけではどうにもならない現実がある。夢の多くは叶わないと決まっている。希望が繋がるのは極稀な話。

前世における20年弱の歴史は、俺にそんな理屈を思い知らせていた。いや、俺だけじゃなくてもこの世界に生きている人間ならば、歳を重ねれば重ねるほどにその理屈を理解するはずだ。

現実、甘くない。

なんて簡単で、なんて汚い言葉なんだろうか。

中学一年の初めに隣の席になった坂崎のことを思い出す。

彼女は剣やら鎧やらそういった芸術なのかどうかもわからない無骨

なものを自ら生み出すことに憧れていた。将来の夢はと聞けば、だ  
いだら・の親父のような自分の造りたいものを世に送り出す仕事が  
したいと、当然のように胸を張っていたのが印象的だった。

馬鹿なことを、と内心では思っていた。

だってそうじゃないか。

幼少の頃に憧れる正義のヒーロー。小学の頃に憧れる野球選手。そ  
ういった馬鹿げた夢が叶う事などありはしなく、坂崎の夢だってそ  
んなもの叶うわけがない。

百歩譲って叶ったとしてもあのいだら・の有様を見れば、それが  
世間的にどう見られることなのかは理解できるだろう。

自らの夢が叶う現実などあり得ない。夢が叶った後に幸せが待つて  
いるわけではない。

そんな惨めな夢を背負い、夢に生きて 本心に胸が張れるとでも  
思っているのか。

この世に生まれ落ちて13年。長い事自分の精神年齢より低い子供  
たちと過ごしていても、この価値観は絶対に変わることがなかった。  
俺の周りの友人たちが、ガキたちが夢をほざく度に俺は居心地の悪  
い空気を感じ、内心では自分だけが成功している姿を夢想する。

程よく努力し、自らの能力に適した道を進み、しっかりとした職に  
ついて。

それだけだって現実ではどれだけ大変なものなのか、俺はわかって  
いる。そしてそんな夢のない生活がどれほど尊いものなのかを。

夢のない生を過ごし、願いのない生を過ごし、希望もない生を過  
し。

その果ての生によって、前世に胸を張る。

何を迷う事があるものか。俺は前世で何を学んできたのだ。

中学が上がってから初めての冬休み。

俺は、ただひたすらに、偏差値を上げることだけに精を出していた。

【2009年、春】

学校の校門を挟む桜並木を見ながら、春の到来を今一度噛み締める。新たに二年となって身の回りも一変し、教室を見まわしてみても尚紀や完二の姿はなく。まあ、こんな年もあるのかと一息つけば、妙に素朴『すぎる』容姿の女子が此方に話しかけてきた。

松永綾音。正直な話、完全に忘れていた。

しかし子供のころより変わらないおかつぱ頭を健在であり、筆記用具やら鞆やらと身の回りのものからも、彼女がそういったおしゃれのようなものに全く執着していないことが見て取れる。

女だからという理由でそういったものへの興味を強制させる思想などないが、お前それでいいのか、と思ってしまう。

そういえば、の話ではあるが。俺には友達というものが妙に少ないいや、話そうと思えば誰にだって話せる立場にいるのだが、工藤洸

征が作り上げた評価が邪魔するのか、どうにも深いところまで入って来てくれる友人が少ない。

つまり、親友と言う者だろうか。

尚紀と完二は自信を持って親友だと言えるのだが、それ以外となると首を傾げざるを得ない。いや、実際の話、何でも気軽に話せる親友を二人も持っている時点で大分幸せなのかもしれない。

何故こんなことを再確認するのかと言えば、一人机に座っている俺を見て、綾音が寂しそうだと思ったのだそうだ。

気まずそうにそう白状した綾音を白い目で見ながらも、まあ、間違っではないないと苦笑した。

そんな内容に密かに耳をそばだてていた坂崎もこのクラスにはいたようだ。

なんとも妙な者ばかり俺の周り集まるようで、何だか妙な気分になる。

【2009年、夏】

完二がとうとうやらかした。

何をと言われれば、自分でも正気を疑うような話なのだが。

夏休みの影響なのかどうかは知らないが、最近の稲羽市には悪質な

暴走行為を行う頭の弱い奴ら、つまりは暴走族の姿が夜中にちらほらと散見されており、その影響で中央通り商店街の近くに住まう住人が騒音被害を受けているらしい。

まあ、別段珍しくもない話であり、そういった事件も警察の方で処理するだろうと俺は思っていたのだ。それに取りかかるのがいつになるのかはわからないが。

そして夏休みも半分を過ぎ、そろそろ尚紀あたりから宿題の写しを依頼する連絡が来るだろうと予期していた手前、俺の携帯がけたたましく鳴った。

確かに予想通りであった尚紀からの電話。

しかしその内容は、巽完二が暴走族を壊滅させ、警察の御厄介になったという話だった。

さすがの俺もその時ばかりは閉口しながら唖然とするというような訳の分からないアクションをしてしまった。いくら喧嘩が強いといっても一人の中学生がやれる範囲には限界がある。

実のところ暴走族をシメに行ったという話自体は尚紀と俺の間ではやっぱりな、という感想で一致していいたりする。前々から親御さんが安心して眠れないなどと優しいことをのたまわっていた巽完二だ。

彼の性格を考えれば、いつか、というのが俺たちには予想出来ていた。

だからといって真正面から壊滅させるというのはどう考えてもおかしい話である。

めでたく警察に補導されてしまった完二であるが、たった一人と多

数の暴走族という状況や、相手が警察から見ても逮捕すべき輩だったという要因やら何やらが重なって、すぐに解放される次第になっただけらしい。

後日彼に会って見たのだが、掠り傷やら切り傷などで絆創膏が至る所張られた姿は非常に痛々しく、しかしどこにも重症の様相は見取れないから驚愕ものである。

漫画やアニメじゃないんだ、と忠告したものの、本当に理解しているのかどうか微妙なところだ。

心配を掛けたことには素直に謝ったのだが、そんな分かりやすい伝説染みた所業を繰り返せば、彼の本心も余計に隠されてしまうだろうに。

方法はともかく、親御さんを思っただけの行動だったというのは、誰にも知られないのだから、などと一人ため息を吐く俺だった。

ちなみに暴走族と相対した完二は、 дайだら から持ちだした『秘伝の盾』を使っていたらしく、それに関して俺も дайだら の親父から叱りを受ける羽目になった。

何でも、完二が秘伝の盾のことを知っているのはお前の入れ知恵だろうと思われたかららしい。

解せん。

【工藤洸征】

今一度自己をじっくりと見直す必要があると常々思っていた。

14もの年数が既に過ぎてているが、その過程で俺がはっきりと意思表示できたのは幾つあっただろうか。親孝行もあやふや、将来設計もあやふや、自らの価値観とて既に崩れかけている。

俺は、この世界に、何のために生まれてきたのだろうか？

前世の記憶を引き継いだままに。

実際のところ『転生』という不可思議なものについて、俺は何一つ考えを巡らせることをしていない。これは一歳にも満たない頃から頑なに守ってきた、一種の防波堤のようなものだった。

転生などわけのわからないものに考えを巡らせたところで何になる。誰が？ 何のために？ どうやって？ 帰れるのか？

そんなもの、どうやって確かめるのか。

だから、考えることを止めた。

むしろ転生という物事をなかったことのようにして日々を過ごし始める始末だった。しかし当然の如く俺の思考は という男の経験によって成り立っている。

の周りに溢れる人と、物と、モノ。それらによって、  
は成り立っていた。



だが、その全てに再び出会う事など、既に出来る状態ではない。

故に、せめてもの繋がりとして『それらに胸を張って生きる』というわけのわからない目標を俺に課した。そうしなければ、前世の記憶なんて忘れてしまいそうだったから。

事実、転生してから暫くは前世の親の顔が頭から離れず、それを夢で見ているような気がする。

しかし、工藤洸征という人物として生きていくうちに、  
の  
両親の顔は記憶から消え、工藤洸一とう工藤亜季という両親がそれに挿げ変わり始める。

工藤洸征の価値観は  
のお陰で出来ているというのに、その  
記憶から  
の思い出はどんどん消えていく。

だから、俺が決めた『前世のみんなに胸が張れるような人生を送る』  
というのは、俺が無意識的に放った、工藤洸征と  
を繋ぐ楔  
だった。

俺が辿り着いたのは、初詣でも訪れることがある辰姫神社。

夕暮れ時の紅い景色を背に、どこか哀愁の漂わせる古びた境内に、  
俺はふらふらとその奥まで歩いて行った。

何故俺は此処に来たんだろうか。おぼつかない足取りのまま呟いた  
言葉に、誰一人答えるものなどありはしない。

考え事をするには静かな場所だから。他に誰も人がこないから。転  
生といたら神様とかそういう話だろう。

理由を付けるのは簡単だった。

結局のところ胸が張れるなどという子供染みた目標は、全てにおいて自分の平静を保つための理由でしかない。異常な事態に陥ってしまった自分を納得させ、固執させ、目を逸らすため。

そもそも何だ、胸を張れるとは。子供の見る夢よりも具体性がない。

それでも、工藤洸征と

を繋ぐたった一つの楔だった。

今更前世のことなど忘れてしまえと？ 今更前世のことなど気にするなと？

そんなこと認められるはずがない。頑なに夢を否定するのも、頑なにどうしようもない現実に執着するのも、頑なに安定した未来を望むのも、全ては俺が転生という現実から目を背け続けるための理由。

の価値観と思想をそのまま工藤洸征に反映させることで、まるでこの世にも が生きてるように錯覚させることが、真の拠り所。

前世よりの脱却が出来ない俺が、転生という事実から目を逸らしたい俺が、無意識に考え出したもう一人の自分。

そうすれば、まるで転生などなかったかのように、錯覚できる。

ちよつと環境が変わっただけ。違う親の所にいっただけ。人生を最初から始めるようになっただけ。 が であるという事実は変わらない。

それでは、俺が工藤洸征として生まれた意味など、どこにもない。むしろ、生まれた事実さえ消し去ろうとしている。

俺は、何よりも、変わることを恐れていたのかもしれない。

この14年で培った経験によって、  
が違うナニカに変わってしまふことを何よりも恐れていた。

「何を、やってるんだろうな……俺は」

気がつけば既にすっかり日が沈んでしまった暗がりの中、俺は茫然としたままに呟いていた。

### 【2009年、秋】

10月14日、その日は俺が工藤洗征として誕生した日だった。様々な知り合いから祝いの伝えがメールによって送られ、その数は返すのも鬱陶しいくらい。中には誕生日を教えていない人もいたのだが、どこから嗅ぎつけたのやら。

尚紀や完二からも祝いのメールが届いており、尚紀は「おめ」といったシンプル過ぎて腹が立つ内容で、完二の方は延々と敬語ともな

んとも区別のつかない言葉で綴られた長文だった。

携帯などいらなと言っていた完二を説得して半ば無理やりを買わせたのだが、どうやら使い方はあまり理解していないようだった。手先が器用な奴だと言つのに、あいかわらず訳のわからない奴だ。

そして、重要な話。

俺は、転生の旨を、両親に打ち明けた。

こんな話をしても頭の中身を疑われるだけだと思っていたのだが、両親はどこか予期していたかのようにじっくりと俺の話聞いてくれた。

幼少のころから異常性を隠しきれずにいた所を考えれば、両親にも自分の息子がおかしいという点で迷惑をかけてきたのかもしれない。ただ黙って聞いてくれた両親に一抹の申し訳なさを感じてしまう。

しかし、俺は両親に転生の事実を伝えてどうしたかったのだろうか。それを話したところで俺の問題は解決できるわけもなく、そして現状が変わるわけでもない。

それでも、これ以上一人で抱え込むのは限界だった。

そうやって今の俺の精神状態をたどたどしい言葉で説明していけば、それが終わる頃には既に母と父に抱きしめられていた。

あなたを息子として愛しています

俺が何者であろうと、何があるうとも、その真理は変わらない。

父や母のような、『何か』を受け入れる度量さえあれば、俺もここまで落ちぶれることはなかっただろう。

痛いくらいに抱きしめられた俺は、視界がぼやけていく中でそんな

ことを考えていた。

【2009、冬】

両親に転生の話をしたといっても、俺の生活が劇的に変わることはなかった。周りよりも大分進んだ勉強を続け、誰からも尊敬できるような好青年を演ずる。それはもはや癖のようなものになってしまっているのだが、まあ、気が知れた友人の前では大分本性も出している。

自分と言うものを無くすことにはならないだろう。

ここ半年において俺が心を崩し掛けたのは、初詣の時に母から投げ掛けられた「願い事とは何か」という問いが原因だったはずだ。

工藤洸征として生まれた意味を見つけることもできず、願いも夢も見つけられないままに                    として生きていた俺には答えることが出来なかった問い。

たとえ青臭いものでも、思わず反吐が出るような理想でも、笑われすぎてしまいそうな夢でも、自分の中に一本でも通った何かがなければ、人間は生きていけない。

俺が、工藤洸征が理想とする想いは一体なんなのだろうか。

高校受験を来年に迫った二年最後の年。俺は、今頃になって将来について悩み始めていた。

そういえば今になって思い出せば、会社の面接や大学の面接でも必

ず夢の有無を質問されていた気がする。例えそれが叶わないものだとしても、それを持つことには意義がある。

果たして、俺は何を望み、何を夢見ているのだろうか。

まだ時間はある。何だかんだ言っ続けていく勉強のおかげで、それが見つからないとしても実力である程度の安定した未来はもぎ取れるだろう。

こうやって足を止めて悩むのもまた、重要な気がする。

話は変わるが、此処最近ネット上でも終末思想のようなものが氾濫しており、噂によると辰巳ポートアイランドと呼ばれる地域周辺で無気力症候群という病に掛かった人が多数見受けられているらしい。そういえばその終末思想もその地域から流されているとの話も聞いた。

2010年がすぐそこまでやってきたこの年になって、ようやく滅びの予言が成就し始めるなどと声を大きくする輩が現れたり、そんなオカルト染みたものについての特集がニュースで組まれていたりで、なんだか気味が悪い気配が世間を座巻しているようで不安に駆られる。

転生という事態を経験してしまった手前、そういったものを笑い飛ばせないのが困る。

中学最後の春。今までは呑気に学校生活を過ごしていた同級生たちも、受験と言う名の人生の選定に慌ただしく動き出し始め、それぞれの目標を持って動いている。

俺の知り合いたちのほとんどが高校に進むことを選択し、それぞれが望むレベルを上げながら妥協点を探している段階だ。

ちなみに俺と交友の深い友人たちの大体が八十神高校を志望校としているのだが、実のところ田舎町の学校としては、あの学校は中々に偏差値の高い学校なのだ。

しかしそれは『田舎町にしては』という限定条件が添えられての話。市外の有名学校と比べれば雲泥の差だ。

だが、其処に入学するものいいかもしれないと、此処最近思い始めている。

未だ夢の见えない生活と、相も変わらず身体の弱い母を抱え、未だ内心に燻る安定への依存によって、俺は進むことも退くことも出来ない臆病な立場にいる。

故に、家から近い高校を選ぶという安直な選択を逃げ道にして、あわよくば高校の三年間を経て、自分の夢を見つけることを目論んでいる。

俺が描いていた未来設計は一体どこにいったのやら。

今考えてみればなんて行き当たりばつたりの計画だったのか、自分でも呆れてしまうくらいだ。本当に俺は前世で20年も生きてきたのだろうか？

精神は肉体に引っ張られるなどと言う話をどこかで聞いた覚えがあるのだが、そんな言い訳では俺の思考の劣化など到底フォローしき

れない。

何のために生まれ、何のために生き。

高校受験の理由にするにはあまりに大それた目的も、俺にとっては重要な問題。

少しばかり、両親と相談してみよう。俺は、知識を持ち越したと言う事実には自惚れ、他人を頼ることをしていなかった。

俺の中身は他と違う。俺の価値観はきちんと現実を捉えられている。今になって考えてみれば、噴飯ものの考えだな。

今は、ただ純粹に、頼ってみよう。

### 【坂崎舞】

みんなしてあいつのこと天才天才って持て囃すけど、私はそうには思えないのよね。そりゃあいつは偏差値だって高いし、人を纏める寛容さっていうのも持ってるし、まあ、顔もそれなりにいい。あ、天才関係ないか。



あいつの通信簿見た時なんてちょっと目を疑ったし。5しか並んでないってどういことよ。

まあそんな話はさておき、あいつはそんなに凄くないって話だったんだけど。

志望校を決める時に友達と話していた時に、将来の夢のことについての話が出た時のこと。友達って言うのは完二と、尚紀と、綾音と、私とあいつのことね。

まあ将来の夢なんてあやふやなものではつきりとこれだ！なんて言えるものなんて少ないし、私が夢にしているアートへの憧れだってちよつとだけ不安があったりする。尚紀は家を継ぐんだろうなあとか他人事のように話し、完二はもごもご言いながら家業がどうかか、綾音はまだ悩んでるみたいだけど、高校になったら探したいと意気込んでる。

みんな先が不安で、でもちよつとだけ期待のようなものもあって。

そんな中、あいつは……洗征はただそれを聞いて静かに笑うだけだった。勿論あいつにだって夢はないの？とか将来の予定とかないの？って聞いたわよ。

そしたらいい大学に入って給料の高い会社に入るとか、家庭の関係上、役所勤務もいいかも、とか。

尚紀はそれを聞いてやれやれといった風にため息を吐き、完二はそれをすげー考えてんなと目を丸くし、綾音はお偉いさんにまで届きそうだね、なんて感心してた。

私は……ちよつと失望してた。

なんていうんだろうな、こういう気持ちって。夢がないなーってい

うか、楽しそうじゃないなーっていうか。でもでも、進路相談とかではそういった目標は先生から褒められ、あたしみたいなのはあんまりいい顔をされない。

ああ、これが現実なのかーってちょっとだけ落ち込んでみたりもして。

まあ、そんな現実の話は脇においておくとして。そんな夢のないような話をする洗征に、私は酷く落胆したんだ。だって。だってね？

誰からも理解されなかったアートに、彼は初めて、凄くなって言ってくれた人なんだよ？

本当に小さい頃、それこそ小学3、4年くらいの時、私には既にアートに対する情熱があって、そしてそれを夢見ているんなものを作るのが大好きで。そりやまだまだ子供だから造るものなんて、ガラクタかどうかも見分けがつかないようなものばかりだったけど、それでも、私は止めなかった。

そしたらお母さんもあんまりいい顔はしないし、身の回りの子供も訳わかんないみたいなの顔するし、真正面から否定されることは少なかったけど、理解されることは少なかった。

そんな時、私がそんな夢を持つきっかけになった『だいたら』の店で、私は洗征と会ったんだ。

あの店に訪れるお客さんなんて本当に少なく、しかもそれで子供なのは私くらいで。

不思議そうな眼で見てくるあいつを見た時、私は初めて、仲間がいた！って思ったんだ。まあ、ただ親の御使いで来ただけなんだって言われてすごいテンション下がったんだけどね。

でも私にとって此処で会う同年代の男の子なんて本当に珍しくて、げんなりとする洗征のことなんて気にせず自分のアートに対する情熱を時間一杯話しちゃったわけ。今思っても黒歴史だなーなんて思う。

そしたら彼は、私にこう言ったの。

「まだ小さいのに、凄いな。そういうはつきりとした、誰にも譲れない夢があるのは」

初めて、褒められた気がした。

何より嬉しかったのは、理解されないことが不幸じゃなくて、そんな不幸にも負けずに夢を追う私を認めてくれたこと。『譲れない』ってそういうことなんだなーって幼いながらに気付いた私がいた。

そりゃ確かに他人に理解されないのは嫌で、現実的に認められないのが嫌で、どこか子供の我儘みたいにそれを夢としていた時があったのかもしれない。

でも、それでも。

社会にも、他人にも、そして自分の弱い心にも負けずに、一つの妥協を見せずに突っ走ることがどれだけ凄い事なのかを洗征に褒められてからは、そんな自分が誇らしく思えた。

私がいいたら・に通ってた理由って、アートが好きだったからだけじゃないんだよ？

それが誰にも認められなくて、泣くために行ってたこともあったんだよ？

まだ私の夢そのものを認めてくれるのは少ないかもしれない。ただ、私の情熱を認めてくれる人はちゃんという。それだけで、私はまだ走り続けていることが出来るんだ。

だから、情熱の欠片さえ見せず、淡々と将来の夢を語る洸征が、私は嫌いだった。

頭がいいってそういうことなの？

大人ってそういうことなの？

現実を見据えるってそういうことなの？

たまに私の夢を馬鹿にする人もいる。

現実が見えてないとか。そんなもの叶うわけがないとか。

自分の夢も将来もはつきり見えてない癖に。

現実なんてもうちゃんと分かってるよ。私の夢は人に理解されにくいもので、とつても不安定なもので、世間的に言われるような『成功』とは程遠い夢。

何度も否定されて、理解されない経験をしている私が、それを理解出来ないわけじゃないじゃん。

現実をちゃんと理解してるとかって自慢する奴がいるけど、そのどこがすごいのか？

そんなの生きてればそのうち理解出来るものじゃん。

辛いことを辛いって言って諦める人のどこが凄いのか？

それを知っても、譲れないって思うことこそが、誇りなんじゃないのか？

そんなことを教えてくれた洸征が時折見せる、あの傍観染みた声と顔で言う言葉が、私は嫌いだった。

それがなきや……まあ、私の好きな人ではあるんだけどね。

いつからこうなっちゃったのかなー。

## 第五棒 若造になった頃の話

【2010年、夏】

中学最後の夏休み。学校というものに縛られずに自由を満喫できる最後の機会だろうか。勉強に励むにせよ、遊び呆けるにせよ、どちらも自分の責任で行われるのならば、それを咎めるものはいない。

つまり、俺は勉学に励み、尚紀と完二の二人は遊び呆けていたということ。

尚紀は元々の偏差値がそんなに低いわけでもないため、八十神高校に入学するのもあまり問題ないようだが、完二に至っては正直な話そこらの三流高校にも入れるかどうか不安な所だ。一体こいつはこの3年間一体何をしていたというのだ。

遊ぶことが学生の本分だとも思っているのだろうか。正確には遊ぶこと『も』学生の本分というのが常識的だろうに。

ということ、三人揃って勉学に励むことがこの夏休みでは多かった。

英単語など10個覚えていればマシな方、数式など加減乗除以外は全滅、生物社会の微妙な知識は覚えているとしても……こいつは受験を嘗めているのだろうか？

ここは完二のためを思って心を鬼にする。いくら染物屋の一人息子とはいえ、一般的な知識を持たずして世の中に出るなど俺が許さん。

完二の親御さんからも勉強を手伝う旨の許可を得たため、俺は何一

つ懸念を抱くことなく彼を教育することが出来た。

尚紀に関してはそのついで、という傾向が強かったのだが、一緒にやるというのであれば加減はなかった。こと勉強においては小学生の頃から妥協なく取り組んできた俺が、加減などするわけもない。

そうやって夏休み中には二人から鬼だ悪魔だと言われ続け、気付けば休みの最終日。

そこにはぐったりとして口から靈魂を吐きだしている二人の姿が！

しょうがないので親に頼んで資金を頂き、二人を近場の焼肉屋に連れて行ってやった。

飴と鞭。食べ放題3人分で彼らの機嫌を保てるなら安い話だ。

無論俺も受験に対する勉強の手は緩めていない。

というよりも昔から大学受験を目的にしてきたのだ。高校受験など俺にとってはちよつとした通過点でしかなく、今更焦ってそのペー  
スを早める意味はない。

いつも通りの生活をしていれば、ごく当然のように志望校には受かるだろう。

第一志望、八十神高等学校。

これを進路相談の際に打ち明けた時はどれほど教師陣の反対にあったことやら。有名校に進学した生徒を輩出した、なんて箔が欲しいのは学校側の経営の都合上分からもないが、ああも志望校の見直しを迫られると学校側が無様に思えて仕様がなない。

校長までも俺の進路に口出ししてきた時はさすがに閉口せざるを得なかった。生徒の意思を尊重、なんて校風はどこへやら。

兎に角、俺は家から近場、それなりの偏差値、何より多くの知り合

いが向かうという理由だけで、八十神高校を受けることに決めた。未だ答えの出ていない状態で、有名校を受けたところで何も変わらないと判断したから。新たな生活の中で答えを見つけるのもいいが、慣れた環境の中でそれを探すほうが随分と楽だ。

何せ、今俺が見ている世界と、去年まで俺が見ていた世界は違い過ぎる。

未だ、答えは出ず。焦る。焦る。焦る。

完二たちへの教育に一心不乱に打ち込めたのも、そういった焦りから逃げるための口実なのかもしれない。

### 【2010年、秋】

俺の進退に最も影響すると思っていた母の体調に関する話なのだが、何故か去年の暮れより大分安定してきており、貧血や過労で倒れたりすることが如実に減ってきている。

最初こそそれを家族で喜んでいたのだが、何故に今更、などと下種の勘繰りにも似た違和感を母に抱いてしまう事もあった。

俺の人生の選択において、母の体調という問題が絡んでいたのは事実であり、その影響で他県への進出を悩んだこともあった。今となつてはそんな理由が八十神高校を志望したことに関係はないために、俺が抱く違和感など何一つ意味はない。



だがそんな違和感を覚えている自分を騙すことは出来ず、それに俺は嫌悪感とも罪悪感とも言えぬ居心地の悪さを感じてしまう。

俺の心が不安定だったのは自分を正確に見つめることができなかつたから、と認識している。しかし心のどこかでは、身の回りが足を引っ張ったために心が崩れかけたと開き直る俺もいる。

なんて、汚い。

素直に母の回復を喜べていない俺を、俺は殺したくなる。

真実、母が体調を崩す様になったのは俺を産んだ後であり、その大体の理由はストレスによる心の疲弊が大きかったそうだ。

息子が、異常な人間だったというせいで。

幼いころより母が与える愛情を素直に享受することが出来ず、父との間も妙に不仲、一人黙々と間違った将来を望み続け、その果てに出来上がったのは家族とも言えぬ崩壊した家庭。

母が、一番苦しんでいた。

俺の存在する意味が、再び揺らぐ。

工藤洸征は、一体何をしているのだろうか。

【2010年、秋】

未だ、我々3年生のしなければならぬことは変わらず。誰も彼もが最後の追いこみと言わんばかりに勉強に励む様が見て取れる。といつてもここらの時期なれば推薦やらなんやらで余裕が出てくる人も多数見られる。

先に成功した人物と言うのはどうしてあんなに空気が読めないものなのだろうな。黙々と筆を走らせているクラスメイトの中で、先に推薦に受かった男がやけに鼻高々と自分の成功を語っていたのが印象的だった。周りの白い目に気付かないのだろうか。

兎に角、今の身の回りは大抵にしてピリピリとした緊張感に覆われており、何がきっかけで爆発するか分かったものではない。受験シーズンには珍しくない雰囲気ではあるが、やはり居心地は悪いものだ。

こういう時には気分転換が必須というのは自明のことわりなのだが、このような田舎町では娯楽施設も少ない。沖奈市にまで足を伸ばせば多少なりとも都会然りといった雰囲気を楽しめるのだが、やはり遠い。

そんな中、ようやくにして稲羽市郊外に大型ショッピングモールの『ジュネス』が完成した。正直な話、夏休みが終わる頃には既にオープンしていたのだが、ただのデパートとして日用品を買いに行くことはあっても、娯楽目的として訪れたことはなかったのだ。

といつても普通の田舎町では買えない物をネットショッピングで手に入れる俺には、何でも手に入ると友人間でも高評価のジュネスに価値を見出せないのだが。

といつてもこの地に生まれてから、ああいった大型施設を見ていな

かったのは事実。前世ではそういったものに対する感嘆など欠片も浮かばなかったのだが、ジュネスに初めて向った時は無意識に感動してしまったのだった。

慣れというのは本当に恐ろしい。既に田舎者として心情が出来上がっているのだから。

というか、だな。

田舎町というものとは避けられぬ定めなのか、商店街に店を開く人たちのジュネスへのやつかみが本当に酷い。確かに今までの稲羽市における商業を引っ張ってきたという自負が彼らにはあるのだろうし、生活的にも消費者の需要を根から持っていかれては困るだろう。

だからといって、ジュネスで働く人やその関係者にまで意地汚い態度を取るのはいただけない。坊主憎けりや袈裟までなんて言葉があるが、そういったものを大の大人が脇目も振らずに行うと言うのは本当に醜い。

生活がかかっているのであれば、多少は同情の念を感じずにはいられないのだが……いや、ないな。

いくらジュネスが出来たとはいえ、未だ商店街に赴くことも多い俺なのだが、赴く度にジュネスは敵だと吹き込もうとする商店街の方たちには、さすがに閉口せざるを得ない。

その魂胆の奥底に在るのは、少々知名度の高い俺の発言を盾にしようとしているというどうしようもない考え。

たかが若造一人の発言が、市や店舗の営業に支障をきたすなどあるわけがないだろうに。

随分と周りの声と自らが築き上げた評価が邪魔になってきている気がする。

まあ、自分で造り上げた評価だ。多少は付き合いのよい姿勢を見せねばな。

ああ、あと一つ変化があったとすれば、俺が眼鏡をかけ始めたことだろうか。

幼少の頃よりパソコンやら何やらと視力を低下させる要因に触れていたのが原因かどうかは知らないが、ともかく俺の視界は眼鏡なしだと大分ぼやけるようになってきている。

ちなみに眼鏡をかけた俺を一瞥して坂崎が一言。

急におっさんっぽくなった、だそうだ。

失敬な。

【2010年、3月】

受験、終了。

果たして二次試験の結果がどうなっているのかは未だ不明の時期だが、問題なく俺は第一志望の八十神高校に受かることが出来るだろう。そもそも面接の時の試験管の喰いつき具合が半端ではなかった。志望した理由や中学での評価などよりも、入った後に何をしてくれるのかに興味津々と言った感じで、如何に工藤洸征が八十神高校に利益を齎すのかが気になって仕方がないようだった。

さすがに其処まで露骨に期待されると、こちらとしても尻込みして

しまつ。適当に目的やらをブチ上げてみたのだが、その全ては嘘。俺が何をやりたいかすら決まっていけないのは内緒の話だ。

情けない話だが。

完二や尚紀の方も試験に関しては中々いいところまでいつていたらしく、完二にいたっては何をもってそんなに自信があるのか不明だが、ほぼ合格したことを確信している様子。

再び受験地獄に陥ることへの拒否感からくる夢想か、それとも受験を終えたことへの解放から来る楽観視か。

どちらにしても単純な彼にとっては珍しくもない反応だろう。彼の場合いくら試験がよくても内申の方に不安が残るのだが。暴走族壊滅の悪名は大きい。

そういえば坂崎も綾音も八十神高校志望だそうだ。綾音あたりはもつと上の高校を目指せるだろうが……まあ、人それぞれというやつだろう。彼女もまた為すべきことを見つけようとしているらしいが

妙にそれが腹立たしい。

彼女と俺の方向性は一緒のはずなのに、まるで隣り合うことなどあり得ない気がしてしまうが。むしろ彼女の在り方が酷く眩しいような。

悲劇の主人公を気取るか、それとも不幸に優越感を抱くか。

ひよつとすれば、そんなくだらなさすぎる心情が俺の内心にはあるのかもしれない。

工藤洸征という立場を作ったのは俺。工藤洸征という心を狂わせたのは俺。俺。俺。俺。

今更になって身の回りのしがらみを嫌悪し始め、狂わせた心に悩み、ただ一人依って立つことさえできないのも俺の責任だ。

そんな俺の異常性に尚紀や坂崎が気付いている節がある。  
その気遣いに一方では友として感謝の念を覚え、一方では現実も知らない子供風情がと蔑む自分がある。そして、それは後者の意が大きい…… ような気がする。

こんな俺でも、高校に入って変わることなど出来るのだろうか。

なんだか鬱病になりそうで怖い。

### 【工藤洸征】

「乾杯ッ！」

近場のファミレスにて一つのテーブルを囲んだ男子中学生の三人組が声を張り上げた。一人だけ体育会系然り、といったやけにごつい声を出したお陰で随分と周りの視線を集めることになってしまった。声を張り上げることにすら羞恥心を感じていた俺には酷い仕打ち。合格に歓喜するのは結構だがもう少しばかり声を抑えてはくれない

のだろうか。

「しかし受かるとは思わなかったな」

「ああ？ あの地獄のロードを越えた俺たちが落ちるわけねーだろ」

「あんなもん経験しなくたって俺は受かってたよ。問題はお前の話だっつもの。完二」

カラカラとグラスの中の氷を揺らしながら皮肉めいた笑みを浮かべた尚紀に、早くも完二は目をつり上げた。ヒートアップするには早すぎるだろうに。そして悲しい事に尚紀の言っていることはほぼ正鵠を射ている。

最後まで合否についてハラハラさせたのは完二くらいなものだ。

「しつつかし、これで俺らも晴れて高校生ってか」

「晴れて、とかって切羽詰まった言い方するとかどんだけ」

「んだと？」

「まあ、高校進学率などほぼ100%の世の中だからな。いくら阿呆でも受け入れる場所はある」

「あー……成程。喧嘩売ってんだな？」

「自覚があるようで何より。君は既に数式の二つや二つ忘れていないんじゃないのか？」

「ん、んなわけねえだろうが！」

唾を飛ばしながら否定する完二に苦笑しつつ、山盛りのフライドポテトを一掴み頬張る。あまりジャンクフードの類は好まないのだが、たまに食べれば大分その印象も違う。

つまりは旨い。油っぽいが。

「でも少しくらいは周りを見返せるんじゃないの？ 巽完二、八十神入学！ みてーに」

「けっ……んなもん関係ねえよ。まあ、ちつとはうるせえババアを黙らせられるけどよ」

「また思ってもないことを。親御さんと一緒に喜んでいたそうじゃないか。入学祝いとして奮発して作った蟹料理だって美味しそうに食らっていたとか」

「お、おまつ、誰から聞いた!？」

「マジで？　うちの親父もお袋も大して祝ってくれなかったんですけどー、完二くん？」

顔を真っ赤にしながらポテトをどんどん食っていく姿は照れ隠しの極地か。どちらにせよ分かりやすい人柄は子供の頃から変わらない。そしてそれが何より好ましい。

頬杖をつきながらニヒルな笑みを浮かべる尚紀が、隣であたふたとする男と比較されて酷く大人びて見えた。

「そついえば松永も坂崎も合格したって？」

「ああ。先ほどメールで届いたよ。坂崎は合格より受験から解放されたことの方が嬉しいみたいだったか」

「完二と一緒だな」

「一緒にすんな」

やれやれ。尚紀と一緒に肩を竦めつつ、そろそろ頼んだ食事が来ないものかと店員が出入りする調理場の入口を見やった。視界の中に入る他の席には、俺たちと同じように制服を着込んだ少年少女が集まっている様が見取れる。

どうやら合格の祝福に会するのは俺たちだけでもないらしい。

「っーかよ」

「何だ」

「どした」



「お前はよかつたのかよ。洗征」

視線を戻した先で、完二が此方をじっと見ながら重々しく口を開いていた。尚紀とてグラスに口は付けながらも視線は此方。やはり二人とも違和感のようなものを感じていたか、などと俺は頬を掻きながら視線を彷徨わせた。

どうにも自分の心の底を打ち明けるには勇気がいる。ましてや目の前の二人は未だ高校入学を控えた少年だ。……無意識の侮り。

「多分、これでよかつたのだろう」

「でもよ、うちのババアも言ってたけど、アレだろ？ お前つてもっと上に行けるんだろ？」

「同感。こんなバカばかりの場所に残ってもつまんねーだけじゃね？」

「……どちらを選んでも同じだろう。ならば、悩める方を選びたい」  
おそらく、それなりに頭のよい所へ進めば、周りの多くが俺の価値観に似た傾向を取るようになるだろう。現実を知らぬまま現実を生きようとする子供と、夢を知らぬまま夢を諦めようとする俺。その土台も何もかもが違うと言つのに、おそらく俺は錯覚する。やはり俺は間違っていないのだと。

ならば、少しくらい愚かなくらいでちょうどいい。環境か、それとも俺が愚かなのか。

「多分、な」

「あー……………そうか」

「あれだよな。洗征ってたまに中二病に掛かるよな」

「哲学的と言え。そもそも俺たちはまだ中学三年だろうに。まだ卒業式が残っているぞ」

俺の言葉に今更気付いたかのようにげんなりとため息を吐く二人。  
一応同級生たちとの最後の別れの日だろうに。惜別の念のようなものは彼らにないのだろうか。

いや、そもそも卒業式という行事自体長ったらしくて面倒なものか。しかし中二病と言われてそうも否定できない俺がいる。何せ現世から現世への転生など、それこそ『中二病』ではないか。どこかのチラシの裏にでも書かれそうな異常事態が、俺に現実として降りかかっている。

こんなことさえなければ生きる理由などに苦しむことはなかったのだ。

くだらん思考だ。今は合格の祝いとして楽しめればそれでいい。  
妙な空気になりかけていたが、どうやら注文した料理が出来上がったらしい。

調理場より店員の一人がカートを引きながら近づいてきた。

「お！ お待ちかねのビフテキとっちゃあく」

「ガキみてーに喜ぶなよ。しかもビフテキとか田舎限定の呼び方だし」

「マジか？」

「まあ、あまり聞かない名称ではあるが」

店員によって運ばれた主食たちを前にしてやおらテンションの上がる完二に、少々顔を引きつらせた。まさか大人になってもこんな感じなのだろうか、彼は。

というよりも鉄板の上で音を鳴らすビフテキ以外にも、たこ焼きやらピザやらも運ばれてくるのはどういうことか。

「ちょっと、待て、何で、こんなに」

「祝いの席だろうが。豪快にいこうぜ」

「……割り勘？」

「あ？ あったりまえだろうがよ」

顔を見合わせた尚紀と俺。

既に完二はテーブルの上に広がるものに下鼓を打っていた。

果たして俺の財布にはいくら入っていただろうか。

「まあ、食おうぜ」

「……ああ」

続々と運ばれてくる品々にうんざりしながらも、俺はひとまずサラダから手を付けるのだった。

ようやく中学が終わり、高校生へと俺はなる。  
果たして転生と言う不可思議を経験した俺が、  
また違う不可思議に遭遇することを予想出来ただろうか。

出来るはずもない。

2011年。

俺にとっては、どんな年と言っているのか。

失ったものは多く、だが確かに得たものも多く。

それこそ、テレビの中でしか見たことがないような、激動の一年だった。

## 【メモ】

工藤洗征　くどうしんせい

生年月日・星座　1995年10月15日・天秤座

身長　180?

体重　61?

血液型　A型

メガネ　　メタルフレーム（一般の物よりも丸みがなく、ほぼ長方形に近い）  
レンズ　　オーバル

黒の短髪に少々細身の長身。顔は年齢に反して大人びた印象を持たせる優男風。

眼鏡を掛けてからは、それを持ちあげる様が如何にも優等生らしさを強調し、一種のエリートサラリーマンのような姿にも見える。事実、スーツを着ると20歳後半くらいにまで老けこむ。

一般的に見れば男前の範疇に入り、なお且つ性格も好男子のため学内での人気は高い。

無論、告白されても彼はやんわりと断るが。

卒業式では幾人もの女子後輩が別れの挨拶に訪れ、その様を尚紀は親父と子供みただと揶揄したそう。

## 第六棒 未だ幕は開かず

【4月12日・火曜日・雨・工藤洸征】

「じゃ、行ってくる」

別段特別なことをするでもなくいつも通りに玄関を出て、これから三年歩き続けることになる道を一人黙々と歩いてゆく。初登校の日ではあるが天気は生憎の雨。俺の他にも道行く人々は揃ってビニール傘を指しながら不機嫌そうに歩いていく。その大体は俺と同じ制服に身を包んだ八高生。誰も彼もが不機嫌そうな理由は、この天気と春休みが終わってしまったことへの不満、といったところだろうか。

どちらにしても新たな門出というには周りの天気も最悪らしい。ちらほらと見知った顔もいるようだが、わざわざ声を掛けて共に八高に行くほど親密ではない。そもそも初登校だ。そんな心の余裕は互いにならないだろう。

傘を雨が叩く音を聞きながら黙々と目的地へ向かう。これから過ごすことになる八十神高校は俺の自宅より徒歩15分。遠いとも近いとも言えない微妙な距離だが……2、3カ月もすれば慣れるだろう。

そう。新しい環境には慣れることこそが重要。今感じる緊張感や期待感はある程度望まれて感じるものだろう。はてさて。俺の二回目となる高校生活はどうなることやら。

といつても俺達新入生は今日初めて同級生と顔を合わせ、校舎に足を踏み入れるわけではない。入学式やら始業式は既に終え、それぞれのクラスと席も既に決まってある。

簡単に言えば授業初めが今日、ということだろうか。なんにしても小学、中学と学ぶ場所が変わった始めに生徒たちがやれることなど少ない。

大抵は知り合いを増やすのが先、といったところだろうか。

「じゃ、これからよろしく頼むな！」

教卓の前で生徒たちに澆刺とした声で語りかけるのは、この組の担任の近藤武彦先生。

見た目バリバリの熱血教師といった風貌ではあるが、何故に初授業のこの日から彼はジャージ姿なのだろうか。いくら体育担当の教師といえどもラフ過ぎやしないだろうか。

そういえばこの八十神高校における服装について定められた校則なのだが、その内容は主に『制服は着用すること』という一文のみ。はっきり言ってわけがわからなかったのだが、登校途中に見掛けた上に緑のジャージを着こんでいる女子生徒や、真っ赤のカーディガンを着こむ女子生徒を見掛けて一人納得していた。

確かに制服は来ているな、と。

どちらにせよアフロの男子生徒がいたり、そもそも教師陣側にもツタンカーメンのような被りものをした教師がいたり、とにかくこの学校ではフリーダムな様相が見て取れる。まあ学力的にも素行的にも悪い意味で話題になるような学校ではないために、そういうところは見逃しているのだが……。

入学初日から学ランを着こまずに羽織ってきている男子生徒を見掛けた時はさすがにため息を吐かずにはいらなかった。

その男子生徒の名は巽完二。一体彼はいつなったら自重というものを分かってくれるのだろうか。

第一印象が大事だと言つのは常識的に通じる話だが、さすがにあれは違うだろうに。

ああ、ちなみに、の話なのだが。

小西尚紀、松永綾音、坂崎舞は一年二組。

巽完二は一年三組。

そして俺は一年一組。

なんというか、微妙な分けられ方をしたものだ。

新たな学校の生活に右往左往している内に登校初日は昼を過ぎ、ふと気付けば帰り際のホームルームを迎える時刻になっていた。

初日ということがかきちゃんとした授業を受けることはなく、オリエンテーションや自己紹介などを兼ねた簡単なもの。それでも夕方頃



まで時間はかかってしまうものかと、これより送る生活の密度が垣間見えたようだった。

まあ正直な話、そんな授業関係のことよりも俺の名を知るクラスメイトからの質問攻めが一番鬱陶しかったのだが。興味を向けられるのは既に慣れているのだが、オブラートに包まずズンズン迫ってくる高校生然りといったバイタリティで来られると非常に困る。

そしてその質問に担任の近藤先生までもが乗り気だというのがどうしようもない。

やんわりと一つずつ処理し始めていけば、新生活に対する疲れよりも対人関係に疲れを感じているような気がした。一度に名前を覚えることとて楽ではないというのに。

どちらにせよようやく一日が終わり、担任による挨拶によって初日が締めくくられようとしたその時だった。

和気あいあいとしたクラスの空気には似つかない、緊急の放送。

学区内で起こった事件に対する下校禁止令と、教師たちによる緊急会議だった。

「お前らー、帰っちゃ駄目だかな！ 大人しく待っとけよー！」

間延びした近藤先生の声は、不安に駆られる生徒たちを落ち着かせるものなのだろうか。むしろ生徒たちは、体験したことのないだるう非常事態に、どこか楽しそうなものを覚えているが。

ざわざわと疎らに話し始めるクラスメイト達の話し声。事件に対する単純な興味から、最近世間を騒がせる議員秘書の不倫騒動、そして生徒間で流行っている不可思議な噂についてと、瞬く間に話題は転換していく。

それぞれの話題の間に一体どんな関係性があるのか分かったものではないが、ひよっとしたらそれは事件発生によって浮ついた心の表れなのかもしれない。

どちらにせよ、今の所俺には関係ない話ではあるが。

それより事件の影響がどこまで出るのかが気になる。このまま此処に放置されるわけではあるまい。保護者同伴で帰宅させたりするのだろうか？ さすがに高校生に保護者は付けないか？

などと一人思案にふけていれば、結局のところ普通に下校していいとのこと。確かに保護者同伴の下校を促してはいたが、別段強制という話でもなかった。

どうやらその事件というのも大したことのないものらしい。

次々に帰り支度を済ませていく同級生の中には、現場を見に行こうなどと意気込む輩もいる。現場と言いつつ何の事件なのかも分かっていないだろうに。

まあ、そういう年頃なのかもしれない。そういえばちょっと昔に稲羽市で起きたひき逃げ事件にも、かなりの数の野次馬が集まっていたような覚えがある。

田舎町ということで刺激を求めているのは理解できるが、そういったものはさすがに許せるものではないだろう。

当の本人にとっては、という話ではあるが。

つまり、関係のない俺はさっと家に帰るに限る、ということである。当事者にも第三者にもなる気はない。

毛ほども関わることがない、第四者、ということだ。

というつもりでいたのだが、何故にこうなったのやら。いくら学区内で事件があったとはいえ、家の近所でパトカーやら何やらが赤いサイレンを回しながら止まっていれば、否応もなしに察せられる。

住宅街を網目のように走る何の変哲もない一車線の道路の脇。どうやら電柱を囲むようにしてそのパトカーは止まっているようだ。さらにはビニールテープやブルーシートのようなものがちらほら見え、そしてそれを囲む買い物帰りらしき主婦の姿。

俺の進行方向、というよりか現場らしき所が俺の家の近くなわけでこのまま回り道をするわけにはいかん。全く、余計なことに巻き込まれなければいいが。

というか、だな。ブルーシートとはどういうことだ。

ああいうのは、ドラマでよく見る。死体の。

「……………」

嫌々ながらも向かっていた足が、止まる。

ちよつと待て。俺の家の近所からそんな物騒な事件が起こったとしても言うのか。事故による怪我人という可能性……は違う。そもそも学校内の放送で警察官が出回るほどの事件だと確かに言っていた。事件。人が死ぬ、事件。

まさか、母が巻き込まれてはいないだろうな。

限りなく低い可能性でありながらも、どこか鼓動が速くなっていくのを感じていた。無意識に唾を飲み込めば、やけに乾いている唇を一度舐める。

携帯で家に電話を掛けようとも思ったが、それよりも早く俺は5、6人の人だけが集まる場所へと進んでいった。

「すみません、少しよろしいでしょうか？」

「あら？ 八高生の子？ あなたも野次馬になんか来ちゃ駄目よお」

「いえ、此処周辺に住んでいるもので少々気になっているのです。

何があつたのですか？」

これぞ野次馬の見本然りといった風にお喋りをしていた主婦の一人に話しければ、甘ったるい声と口調でやんわりと注意された。その注意に彼女自身が含まれていないことは指摘しない。いちいち突っかかるのも面倒だ。

しかし俺の質問に返すよりも先に、ビニールテープで仕切られた向こうから、やけにいかつい風体の男が此方へ近づいてくるのが見えた。

現場の中に入っているにしては制服も着ていないスーツ姿。むしろ上着を肩に掛けたそのスタイルは……刑事か？

ますます大事な事件の気がして緊張感が増す。さらに言えばその男も此方を睨みつけながら近づいてくる。現場に高校生が近づくのはさすがにまずかったか。

「おい！ なんで八高生が此処にいるんだ。学校側から通るなど言われなかったのか？」

俺に向けられた野太い声に、周りの野次馬たちもこそそと逃げ帰

つていき、残ったのはその刑事風な男と相対した俺だけだった。というか学校側から、とはどういうことだ。そんな話など初めて聞いたし、そもそも此処の向こう側がすぐ俺の家なんだ。そもそも母が巻き込まれてはいないだろうな。

「いえ、学校側からそのような話は聞いていませんが」

「何？ …… ったく、あの校長。人の話聞いてんのか」

「あの、ですね。其処の向こう側が俺の家なんですよ。 …… ひよつとしたら身内が何かに巻き込まれていないかと心配で。道を遠回りにもすることもできたんですが …… 近づいてすみません」

「あ、いや、そういうことなら気にしなくていいんだ。いや、気にしてはほしいが。まあ、どちらにせよ君が心配することはないぞ。ここらの住民には関係のないことだからな」

所々言葉を選んでいるところを見ると、おそらく俺の想定していた『大事』に間違いないだろう。それよりもいくら二回目の人生だからといって刑事や警察官といった輩に呼びとめられると胆が冷える。完二あたりならば気にも留めないのだろうが。

というか、そのいかつい風体に反してやけに喋りがたどたどしいのだが …… 口下手なのだろうか。

兎にも角にも此処周辺の住民が被害者だったわけではないようだ。だからといって安心するのも白状な話だが。というか先に家に電話でも掛けてやればよかったな。選択を誤った。などと考え込んでいれば、その刑事風な男は俺を観察するように睨みつけていた。

何だ。何か粗相をした覚えもないし、警察に厄介になった覚えもないぞ。

「君は …… 工藤洗征か？」

「……警察の厄介になった覚えはありませんが、確かに俺は工藤洸征で間違いないありません」

「いや、稲羽市でも有名だしな……それに、巽完二を知ってるだろう?」

「ああ、成程……あの節は申し訳ありません。友人として頭を下げるにはお門違いですが」

いや、いい。一言だけ発して俺と刑事の会話は途切れてしまった。

何だ、この雰囲気は。というより俺の相手をこんなにしていいのだろうか。母の安否が確認された手前、さつさと遠回りで家に行くしよう。

ならばと挨拶してから離れようとして口を開き掛けた時、刑事の視線が俺の背後に向けられ、そのまま小走りで視線の向こうへ行ってしまった。

その先にいたのは、上級生らしき一人の男子生徒と、登校時に俺の目を引いた緑ジャージの女子生徒と赤カーディガンの女子生徒。

刑事に注意を受けているようなところを見ると、彼女らも俺と同じく通りがかつたことを注意されているのだろう。

というか、俺が完全に放っておかれているのだが。

まあ、いいか。

「すみません! もう帰ってもいいでしょうか!」

「ん? ああ、すまん! 其処に立ってる警察官に頼んで通してもらいなさい!」

少々離れていたために大声になってしまったが、ビニールテープで仕切られた向こう側からやってきた制服の警官に連れられてようやく帰宅することが出来た。

もちろん隔離された中を通してもらったわけではない。通行止めになつていた道路の脇を通らせてもらったただけだ。

そうして帰宅すれば母は変わらぬ姿で俺を出迎えてくれた。どうやら、俺の心配は杞憂だったようだ。

しかしその後の夕飯時に見たテレビニュースでは、あの近所にあつた事件が殺人事件として報道されていた。

遺体で見つかったのは地元テレビ局アナウンサーの『山野真由美』26歳。しかもその遺体が電柱のアンテナにぶら下がっていたらしい。

被害者が今世間を騒がせている有名人で、その遺体がアンテナに吊るされた？

訳の分からない事件の内容に、ここしばらくは騒がしくなるだろうな、などと俺は思っていた。

「あの八高生って、もしかすると工藤くんだったのかな？」

「雪子の知り合い？」

「ううん、知り合いじゃないんだけど、千枝も知ってるでしょ？」

工藤洸征くん

「って、あの天才くん!？」

事件現場の喧騒を徐々に遠くに聞きながら、二人の女子生徒は先ほど遠巻きに見ていた事件現場の様相について話しこんでいた。

いかにも活発といった感じの緑ジャージが似合うショートヘアーは里中千枝。黒のロングヘアーと制服の上に着こんだ真っ赤なカーディガンを風に靡かせるのは天城雪子。

どちらも八高の二年生であり、先ほど立ち寄った事件現場で別れた男子生徒は、彼女らのクラスに転向してきた瀬多総司だった。どうやらその事件現場を担当していた刑事が瀬多の保護者だったらしく、そのまま別れてしまったのだが。

「あれだよ、有名人の」

「うん、多分だけど。いろんな人が噂してるから顔くらいは覚えがあつて」

「成程ねー。一瞬だけあの雪子が男子に興味い!？とか思っちゃつたのに」

「ち、違つてば! さっきの瀬多くんの時だつて言い過ぎだよ、もう」

うんざり、もしくは羞恥心を誤魔化すくらいの怒りを露わにした天城に、里中は冷や汗を掻きながら苦笑った。

ちよつとからかい過ぎたか。顔を真っ赤にした天城を前にして、内心で里中は軽く舌を出した。



「でも、あの子が工藤くんってことは後輩だよな？ 何かうちのク  
ラスの男子と比べてもすんごく大人っぽかったなー、やっぱり」  
「背も高かったしね。でも何してたのかな？ 刑事さんと色々話し  
てみたいだし」

「んー分かんないけど、それよりも瀬多くんの保護者が刑事ってこ  
とにびっくりしたけどね。こっちにあのおじさんが近づいてきた時  
はびびっちゃったもん」

「それはちよつとだけ同感かも」

工藤と話しこんでいた刑事が後から来た彼女ら三人を見つけた時の  
様子は、初めて工藤を見掛けた時と大して変わらなかった。自分が  
面倒を見ている瀬多の姿があつたという点でいくらか反応は柔らか  
なものだつたが。

その刑事の名は堂島遼太郎。瀬多の叔父にして稲羽市まで単身やつ  
てきた瀬多の面倒を見ているという話である。

「にしても工藤くんねー……確かモロキンもホームルームでベタ褒  
めしてたよね。お前らも少しは彼を見習えー、みたいな」

「諸岡先生が褒めるって、やっぱり噂通りなのかも」

「3月の時に噂になつてた入試験パーフェクトって噂？ 本当だ  
つたら凄いよね。ていうか噂の出所が職員室って時点でほぼ当たり  
つて感じだけど」

「……もう大学受験も楽々クリア出来るって噂も」

「どこ情報よ、それー。くあー！ その頭の良さを分けてくんない  
かなー」

頭をわしゃわしゃと掻き回す里中の姿に、天城はただクスクスと笑  
うだけ。

もはや其処に先ほどの事件の陰りが彼女らに与えた不安など何処に

もなく、いつも通りの帰り道を二人で歩いてゆくだけだった。

雨が止んだとはいえ、未だ太陽の光は薄く、曇天に覆われた灰色の空。

ひよっとすれば今日の夜には再び重たい雨が降る可能性があるのだろう。実際、外れることが異様に少ないと評価されている地方テレビの天気予報では、4月12日の夜は雨と出ている。

そんな雨の降る深夜には、この稲羽市の若者の間で噂になっている怪奇現象が起こるといふ。女子高生らしいとりとめもない話題で盛り上がる二人の一方、里中千枝もまたその噂に多少ながら興味を抱いていたらしく、おそらく今日の夜辺りにはそれを試すのだろう。

その噂とは、『マヨナカテレビ』。

雨の日の深夜0時に一人で消えたテレビの画面を見つめっていると、そこには運命の相手が見える、という眉唾物の噂。

見たと言つ者もいれば、見えなかったという者もいる、典型的なオカルト話。

里中が本当に運命の相手を見たいが為にそれを試みるのか、それとも単なる話題として試みるのかは不明な話だが……兎にも角にも田舎町という事で暇を持て余すことの多い高校生にはぴったりの噂話なのだろう。

マヨナカテレビ。

ただの噂であれば単なる笑い話として片づけられるのだろう。

しかし、此処最近のそれを試した者が一様にして証言するのは、『テレビの中に山野真由美が映った』というものばかり。

先ほどの事件現場でアンテナに吊るされていた、山野真由美。

「じゃまた明日ねー！」

「うん！」

互いに手を振って別れる里中と天城の日常は、いつもと変わらなかった。

## 第七棒 望まぬ開幕

【4月13日・水曜日・曇り・工藤洸征】

予想通りと言うべきか、朝から学校は昨日の事件関連のことで持ちきりだった。田舎町で起こった事件への危機感は見取れず、単純にそれへの興味と期待に生徒たちは胸を躍らせているようにも見えた。

人が死んだと言うのに……話題に貪欲な高校生とはいえ、いくらなんでも不謹慎にも程度というものがあるだろうに。

事件現場に近い場所に住んでいるということから、他の人間よりは多少なりとも事件について客観的な意見を言う事はできるだろうが、そんなことをしても余計に人の目を集めるだけだ。何一つ意味はないだろう。

時折事件について話題を振られることもあったが、そこは口当たりのいいコメントで適当に流しておいた。

全く……まだ学校に来てから二日目だというのに。

さて、ようやく今日から本格的に授業というものが始まるのだが、所詮それも初授業。最初はオリエンテーションのように各授業の進め方や傾向に慣らしていくだけで、しっかりと教科書を開いて教師の話に耳を傾けるようなものではない。

事実どの教科も担当する教師たちの挨拶やら自己紹介やらで時間は潰れ、今年一年の予定を大まかに説明しただけのようなものだった。

それを聞けば、まあ、こんなものかという感想当たりが無難だろう

か。

別段厳しいというわけでもなく、だからといって緩いというわけでもない。本筋の脇に逸れるような雑談を好む教師が多いということに少しばかり懸念を抱かせられたが、これも授業にメリハリを付けることだと思えば納得できる。

そも、まだ授業の一日目だ。何もかもを判断するには早すぎる。

そうやって時間を過ごしていけば、ようやく昼時を回った所。

弁当を喰おうと思っていたのだが、席の近場にいるクラスメイトたちに誘われ食堂に向かう事に。まあ、飲み物を買う事くらいには付き合えそうだ。さすがに母の作った弁当を差し置いて食堂の世話になるわけにはいかん。

余談ではあるが、母の作る弁当は美味い。

俺が訪れた食堂は、普通。

田舎限定ということなのか妙に種類の豊富な自販機や、学食然りといった食堂のメニュー、そしてテーブルに座っている微妙な食堂利用者の数。

特に目に付くようなものは何もなく、一ツ気になったことはといえればカップラーメンの自販機前に多くの生徒が並んでいたということだろうか。

前世において学生食堂にカップラーメンの自販機がなかった俺にとっては、少しばかり興味の惹かれるものがあった。

弁当を忘れるなんていう時に利用してみるのもいいかもしれない。

結局、自販機で買った益ジュースを昼食のお供として教室まで持っていただけだった。

100円のパック。500mlだというのに学校設置の自販機では消費税が加味されないらしい。

ある意味お得かもしれんな。

そして今日の授業は既に終わり、ただ帰るだけの身となったのだが、どうにも一人で帰るのは味気ない。中学の頃より尚紀や完二といった気のおけない友人とばかり行動を共にしていたのがアダとなったのか、どうにもクラスでの立ち位置が孤独だ。いや、まあ、まだ二日目なだけに気にする必要もないと思うが。

完二や尚紀とつるむようになってから時折影で囁かれる鬱陶しい声。何故あの工藤洸征があんな子供とつるむのか。

それを聞く度に俺は、その陰口を叩く輩を真っ向から叩きつぶしたくなる心情に駆られる。いや、実際に何度か言葉を用いてその下手人を叩きのめしたこともあった。何せそういつた陰口の大体は俺のことなど何も理解していない大人たちによるもの。

叩きつぶすことに罪悪感など浮かばない……それらを見無視できない子供っぽさに我ながら苦笑してしまうが。若気の至りというには、既にふさわしくない領域にいるというのに。

しかし彼らと、正直に言ってしまうえば完二と行動を共にすることによって、色々なデメリットが起こってしまうのは真実だ。

何せ彼という人柄を知り、理解し、そして多少の同情を感じる仲にあるとはいえ、不良というものは悪い事だ。巽完二と工藤洸征の仲が良いという事実で、巽完二という存在が社会的に考えて悪であるという事実はなくならない。

といつても俺の評価を隠れ蓑にして威張るほど彼は器が小さいわけではなく、そしてずる賢いわけではない。

俺と完二の仲を否定する輩には遠慮なく持論を叩きつけさせて貰うが、巽完二を悪だとして陰口を叩く輩には関与しない。それは完二自身が生み出した責任だ。

だが、子供の頃からそんな不器用な性格を矯正することができなかつた俺には、とやかく言う権利もないのかもしれない。何より、俺ごときが何を言つた所で頑固な彼がその性格を顧みることなどないだろう。残念ながら。

何が言いたいかと言えば、そんな巽完二との仲を疑問に思つて俺を怖がる輩も存在するということだ。そしてそういつた話に敏感なのは、ごく一般人の方ではなく、むしろ巽完二寄りの不良を気取る突っ張つた奴らの話である。

そんな不可解な事実を尚紀や坂崎に聞いてみれば、一件優男風な俺に手を出すと、その背後から巽完二が現れそうで強気に出るところができない、とのこと。

アホらしい。だったら不良などしなればいいと言つて。

さらに深い所を聞いてみれば、巽完二暴走族壊滅事件の真相は俺が完二に命令して行われたのである、という噂も出回っているらしいとか。

俺も、完二も、随分と面倒な尾ひれがついたものだ。昨日の刑事も、それで俺のこと知っていたのかもしれない。

鞆を肩に掛けたまま俺は随分と長い間停止していたらしい。帰る準備をしていたというのにいきなり思考の奥底に沈んでいった俺を、

隣の席の女子生徒はなんだか不気味なものをみるような目で見ていた。確か小林あずささん、だったか。  
気にしないでくれ、と一言告げれば、上ずった声を出しながら不審な眼を向けていたことに対する謝罪を申し上げてきた。

どうも、今日はなんだか調子が狂う。

一つ息を吐き、さっさと帰るべく適当に別れの挨拶を済ませながら俺は昇降口の方へと歩を進めていった。

「第一発見者だと？」

「面倒くせーことにな」

少しばかり語気の強まってしまった俺の問いかけに、隣を歩く友人は心底うんざりとしたように吐き捨てた。

帰り際の昇降口で俺は尚紀に遭遇し、彼も一人だったらしくそのまま一緒に帰ることになったのだが……いかんせん、彼の口から出た事実は少々物騒な事実にはならなかった。

帰り道の途中で尚紀のどことなく疲れた様子に気付いた俺は、早くも高校生活にうんざりしたのかと問いかけてみたのだが、返ってきたのは先ほど明らかになった事実。

驚いたことに彼の姉である早紀さんが、昨日の殺害事件における遺体の第一発見者らしいのだ。



「警察関係の者が出入りしていたりもするの？」

「いや、それもあるんだけどさ……うちの親父と姉ちゃんの溜まっていたストレスが爆発しちゃったみたいで」

「……ジュネスのバイトの話か」

力なく頷く尚紀の姿に、その複雑な問題の影が見て取れた。なんともままならないものだ。

年齢を重ねるごとに早紀さんと俺が話したり遊んだりすることはめつきり減っており、彼女の最近の様子などは専ら尚紀の愚痴によって知り得るくらいだ。

疎遠となってしまうことは確かに残念だが、俺も彼女も十分年を重ねている年代だ。この年になって仲良く遊ぶと言つのも常識的に考えれば、そこまで望まれることでもないだろう。

兎にも角にも彼女についての話は尚紀の口から語られることが多い。愚痴という形を以って、というのがなんだか複雑な話だが。

その愚痴の焦点というのも、彼女が去年の夏よりジュネスで働いているということである。

これまた商店街とジュネスの確執が小西家にとって深く影響を及ぼしてしまっているのだが、何せ小西家は酒屋として商店街に店を開いており、ジュネスが出来る前は酒屋としての需要をそれなりの割合で受け持っていたりする店だった。

しかしジュネスが出来てからはその商売も上がったりで、売れ行きはよろしくない。さらに言えば商店街における常と変わらず、小西さんご両親もあまりジュネスに対して良い感情を持っていない。

そこへ早紀さんのバイト話が出てきたわけだ。

早紀さんにしてみれば単純にお金欲しくて待遇のいいバイトを選んだだけ。さらに言えば小遣いを親にせがむのではなく、自分で稼ぐという意味でも家計的に苦しくなった場合の手助けという意味もあるのだろう。

しかし、親はジュネスで働くこと自体が気に入らない。さらに身の回りのご近所も早紀さんがジュネスで働いているという事実で陰口を立てている。

親と子のすれ違い、というのもあるのだろうが、やはりジュネスの存在は様々な問題を生み出してしまうものなのだろうか。

傍から見れば商店街側の態度の方が悪質であるというのは間違いないが、そう単純に割り切れないという問題でもある。

「親父が、さ。今回微妙に事件に巻き込まれたのもジュネスなんかバイト行ってるからだとか言い始めてさ。さすがにねーよ」

「……事実、酒屋の方は乏しいのか？」

「やばいらしいね。あんまり俺は家業を継ごうとか思ってなかったからよくわかんねーけど、売上は落ちてるって言ってた」

「そもそも稲羽市自体が……いや、詮無い話か」

互いにため息を一つ吐けば、俺の帰り道と尚紀の帰り道が分かれるところまで辿りついてた。

彼を慰めてやることも出来ず、ただ単に愚痴を聞いていただけだったが、それでも先ほどよりは大分彼の表情から陰鬱としたものもなくなっている気がする。

もっと力になればよいのだが。

「いや、そのうちどつちかが折れるだろ。何だかんだ言っただけじゃん飽きつばいし、親父はそこまでねちっこい人でもないしな」

「……そうか。苦労しているな」

「ははは、そうでもないって。学校も、まあ、つまらなくはねーもんな」

「まだ二日目だろうに。見限るのは早すぎる」

「完二の奴なんてそろそろ授業サボり始めるんじゃないかって俺は予想してるんだけど」

ありそうで困る。眉を顰める俺に、尚紀は低く笑いながら手を振って別れた。

なんとも草臥れた後姿が印象的だった。彼もその年齢に似合わず大分老けこんでいるようにも見えるのだが、どちらにせよ疲れは溜まっているのだろう。

帰り道の中、一人思索する。

そもそも俺の小さい頃から新規事業に手を出すことなく、現状に甘えた市の運営こそが現状を生み出した原因なのではないかという意見も確かにある。何せこの街には特産品というものが何一つないのだ。

温泉街を誇るといっわけでもないのに、この稲羽市で有名なのは個人経営の天城屋旅館くらいのもの。

確か、この稲羽市というのは八十神山とういう鉾山の麓町として発展したと聞いたことがある。八十稲羽が市として成り立っているのも、鉾山街として発展した影響があったのだろう。

しかし現在の八十神山は鉾山として成り立ってはおらず、となればその麓町であった稲羽市が廃れていくのは道理なのだろう。

昨今ではビフテキというものを名産として売り出しているらしいのだが、畜産業が稲羽市で盛んだったという事実は何一つない。

惣菜大学でも売られているあのビフテキの原材料が何であれ、その材料を他から取り寄せている時点で特産品、などと破綻しているの

ではないだろうか。

……無意味な思考。

一度の人生の蓄積があるとはいえ、それだけで街の運営を事細かに理解できるほど、俺はそんな知識に特化していない。ただの一般市民の戯言に過ぎない意見であるし、そもそもそんなこと稲羽市とて分かっているはずだ。

となれば、今更ながらに商店街の危機を謳う住民たちには呆れざるを得ない。

そもそも、この稲羽市の衰退は遅かれ早かれ起こるといっものは分かり切っていたことだろうに。俺以上に、だ。

日本が悪いのか。この地域が悪いのか。稲羽市が悪いのか。ジユネスが悪いのか。

なんともままならないものだ。

今日も生憎の雨。入学早々事件は起こり、天候は一向にすぐれぬまま。なんだかこれよりの学校生活に一抹の不安を抱えてしまうのはしょうがないだろう。

クラスメイトの話題もそういった陰鬱としたものが飛び交い、無駄に盛り上がる者多数。ああいった話題は話している人間からすればこれ以上ないネタかもしれないが、周りで聞いている人間にとっては眉を顰めるものにすぎない。

鬱陶しい。

というのが本音だろうか。

しかもその犠牲者の山野真由美という人物が、最近のワイドショーでそれなりに取り上げられていたという事実が、こんなにも話題の種として広まっている原因にもなっているのであらう。

議員秘書との不倫疑惑、だったか。ニュースを見る限りでは疑惑というよりもほとんど真実なようにも判断できるが……まあ、興味のないことだ。

そしてそんな様々な話題が行き交う教室の中で、俺は妙な噂を耳にした。

曰く、『マヨナカテレビ』というもの。

なんでも雨の降る深夜0時に一人で消えたテレビを見てみると、その人にとって運命の人が映るのだとか。

全く……転生なんて経験しなければ、そんなもの軽く流したというのに。

いや、転生したからといってこの世の不可思議を認めるつもりはないのだが、やはりそういったものを頭ごなしに否定することはできなかった。

そも、運命の人が映る、などと言いながら最近それを試した輩の話  
を聞くと、どうやらあの殺人事件の被害者である山野真由美が映っ  
たと証言する者が多数。

そんなに、山野真由美は多数に好かれるような人物だっただろうか。  
いや、女子アナウンサーとしてそれなりに人気があったのは知って  
いるが……。

そも、人気があるということが運命の相手になる理由になるのか？

……気には、なる。

無論運命だなんだという話ではなく、そういう不可思議が在るとい  
うことについてだ。

やるだけならただである。ならば今日の天気予報でも夜も雨は続く  
という話だし、確かめてもいいだろう。

そんな他愛ない思考にふけながら授業を受けていれば、既に全ての  
授業が終わる時刻。

別段それぞれの授業を呆けたまま受けたわけではないが、それでも  
筆を動かしている間はやけに無駄な思考に陥ることが多い。

やはり自分が周りの学力よりも二歩も三歩も先を行っているという  
余裕からだろうか。片手間でも教師の話す内容は理解できている。

席についたまま担任の近藤先生が清々しく挨拶するのを眺めていれ  
ば、既にホームルームは終わっていた。あの先生は常に明るくて好  
感が持てる。

ならばさっさと帰ろうかと思いい席を立てば、教室の外よりこちらに  
向けてくる視線にふと気付いた。

(坂崎?)

ドアの窓よりこっちに手を振る彼女に、俺は首を傾げた。

「尚紀が休み？」

「うん。なんか家庭の事情がどーのこーのって言ってたけど……洗  
征知らない？」

「家庭の事情、と言われてもな。そもそも体調を壊したわけでもな  
いのだから、そう気にしなくてもいいと思うが」

「本気で言ってる？ 最近家の雰囲気悪いつて愚痴ってたじゃん、  
あいつ。学校休むくらいって相当だと思っよ？」

「何故に家庭の拗れが休みに繋がったと断定してるんだ、君は」

俺の日和見的な発言に苛立ちを覚えたのか、幾分整った顔立ちで睨  
む彼女に、俺はしばし考え込むようにしてその視線から目を逸らし  
た。

いや、心当たりはあるにはあるのだ。例えば昨日の帰り道に本人か  
ら聞いた、姉の早紀さんが第一発見者であるという理由。さらに言  
えば彼女と両親の不仲が爆発したという事実。

しかし、それを休みの理由にするとしては薄い。

となればただ単純に胃でも壊したか？ とも思うのだが、それでは  
家庭の事情、なんて理由で休みはしないだろう。

「……心当たりでもあんの？」

「あることにはあるが、理由にするには薄い。そもそも気になるな

ら携帯にでも掛ければいいじゃないか」

「メール返つてこないし」

「……そこまで固執する理由がわからないな」

尚紀が休んだというのは確かに気になるが、その理由をわざわざ俺に聞いてくる坂崎の態度の方が理解できん。

虚空に彷徨わせていた視線を彼女に向ければ、なんだかいきなりそわそわとし始めた坂崎がいた。

まさか。

「好いているのか？」

「ちよっ……！」

「ああ、いい。廊下で騒ぐな」

「……むう」

顔を赤くしたまま頬を膨らませてこちらを睨む坂崎に、つい苦笑が漏れてしまった。

そのまま瞳に涙でも溜めてくれれば、アニメや漫画然りといった『萌え』な彼女を見ることも出来るだろうが……いや、それを望むのは少々意地汚い。

彼女が尚紀を好いているというのは中々に驚くべきことだが、確かにそうであればここまで坂崎が尚紀の休む理由を欲しがる意味も分かる。

だが、いつからそんな好意を持ったのやら。彼と坂崎が知りあったのは中学の頃からだったか。まあ、頼まれてもいないのに首を突っ込むのは野暮というもの。

「もちろん他言はしない。どうしても協力欲しいなら手を貸そう。だが基本的に不干渉を決め込むぞ？ 他人の恋路ほど難しいものは



ないからな」

「……別に協力してくれなんて」

「ならいい。所詮釘を刺した程度のものだ。で、だ。尚紀の休んだ理由だが、あいつから連絡が来るのを待てばいい。メールを届けたのであれば、ああ見えて完二に劣らず義理固い奴だ。そのまま無視はしないだろう」

「でも」

どうして恋に落ちた女というのはこうも喜怒哀楽が激しくなるのだろうか。しゅんとして気を落とした坂崎を見ながら、なんともこちらまで気恥かしい気分になってくる。

元々あつけからかんとして裏表のない性格をした彼女だが、こうも進退に悩む彼女を見るのは初めてかもしれない。

「君が懸念している家族間の話もそこまで深く溝を残しているわけでもない。尚紀が傍観の立場を気取るくらいには軽いものだ」

「あいつ、基本的にやる気ないじゃん」

「そう思っているのならますます君が惚れ込んだ意味が分からないな。彼は、真実優しく、そして空気の読める奴だよ。その小西尚紀が言うのだ。大丈夫さ」

「……そっか。そうだね」

おそらく俺の言葉に全幅の信頼を預けることは出来ないのだろう。

彼女は俺の言葉をゆっくりと噛み締めるようにして自分を納得させていた。

なんともまあ、愛い奴だ。

「ありがと、ちょっと安心した」

「事件も起こって少々この街も今は物騒だしな。分からなくもない」

「あんたも気をつけなさいよ」

「お互いにな」

そのまま適当に話しこみ、彼女とは別れた。

しかし尚紀が連絡にも答えず学校を休むと言うのは確かに珍しい。

近所に住んでいる完二ならば多少は知っているかもしれないが、それこそそこまで気にする必要もない。

明日になれば何気ない顔で登校してくるだろう。俺はそう思い、家に帰ることにした。

しかし、少々クサイ台詞を吐いてしまったものだ。

【4月15日・金曜日・雨・工藤洸征】

「3年3組の小西早紀さんが……亡くなりました」

意味が分からなかった。

登校してからすぐに全校集会として体育館に集められ、戸惑う生徒たちの前で校長が言い放った言葉を、俺は、理解できなかった。

## 第八棒 糧

【4月15日・金曜日・雨。工藤洸征】

人が死ぬ。それはこの世の常識において忌避されるものだ。

運が悪く、寿命によって、あるいは故意に。どのような因果で人が死ぬことになっても、それがどれほど『仕方がない』ものだとしても、人は死ぬことを認めない。

苦しいから。悲しいから。憎いから。

ならば俺が早紀さんに対して感じるこの思いはどうすればいい？

壇上で校長が並べた淡々とした言葉に、俺は一瞬我を失った。

何故に、などと具体的に問うことすらできやしない。

たた口を間抜けに開けたまま茫然とするしかなかった。

何一つオブラートに包むことなくただ死んだと言い放つ校長。次々におくびなく連ねていその言葉は、学園としてその死が無関係であることを強調するむごたらしい態度の表れ。

早紀さんの死に黙とうの意を捧げるでもなく、周りの生徒たちの喧騒が徐々に激しくなっていく。

その全てが、鬱陶しい。

「えー、みなさん、静かに！ 静かにしてください！」

校長のくぐもった声がマイク越しに響く。

俺はふと怖くなって、俯けていた顔を上げると周りの人間全てに目

を向けていた。

誰も彼もが表面では痛ましそうな顔をしていながらも、その実、隣同士に語る言葉は早紀さんの死というものに対する興味だけ。

昨日の山野真由美に対するような反応だけ。

それはそうだろう工藤洸征。こいつらはどうしようもないガキばかりで、その場その場の話題にしか興味の持てない屑どもばかりだ。いや、違う。それが普通だ。ガキじゃなくても大人でもそうなる。現実はこちらが普通だ。俺がただ、早紀さんと知り合いだったという、ただそれだけのこと。

視界に入る誰もが気に食わない表情を浮かべる中で、幸運にも俺の心情を共用できるであろう人間を見つけた。

坂崎舞。松永綾音。

集会が終わるや否や、俺は何かから逃げるようにして彼女らのところへ歩を進めていた。

朝の集会が終わったといっても、この状況ではすぐさま授業が始まるわけではないのだろう。自習を言い渡された後の教室は瞬く間に騒がしくなり、俺はその喧騒すら耳にすることが億劫で、すぐさま廊下へと逃げ込んだ。

そして、おそらくは俺と同じように話しがしたかった坂崎と松永も

また。

二組の教室から出てきた彼女らの手には揃って携帯電話が。おそらく尚紀に連絡を取りたかったのだろうが、身内が亡くなってしまう現状で繋がるわけもない。そもそも……いや、言うべきことじゃない。

「洗征っ」

「洗征くん！」

「分かっている。分かっているから、今は、落ち付け」

いくら自習を言い渡されたとしても、勝手に出て行って大声を出すのは憚られる。

いや、ひよつとしたら自分に言い聞かせている分もある。

「早紀さんが死んだというのは、聞いた通りかもしれん。だが俺たちはそれ以上のことなど分かっているし、それは学校側も同じだ。それに尚紀の方が今は俺たち以上に大変なはずだ。だから……」  
「だから……何よ」

坂崎に先を急かされるまま、俺は続く言葉が見つからなかった。今すぐ小西家に駆けこんで事態の把握に努める？ 阿呆か。

尚紀と連絡をとって、慰めの言葉を掛ける？ 阿呆か。

学校側に詳細を教えて貰う？ 阿呆か。

俺達が出来ることと言えば。

「待つだけだ」

「え、だ、だって、尚紀君のお姉さんが……」

「分かっているっ！ だがそれ以上に俺たちは部外者だ。いくら彼と親しくとも、身内の死に容易に関わっていくのは許されない。だ

から、まずは待つ。そもそも俺たちも冷静じゃないだろう？」  
「それはそうだけど……」

心配そうに俯く松永と、携帯を握りしめたままそれを見つめる坂崎が痛々しかった。

学校で知り合いの死を急に暴露される経験など俺にはない。後々部外者として伝えられることならばあったが、ここまで突拍子もなく事実を叩きつけられたのは初めてだ。

そもそも、学校側にももつとマシな対応があっただろうに。

「……………」

「大丈夫？」

「あ？ あ、ああ。とにかく、不安になるのも分かるが頭を冷やそう。いいな？」

「……………」

「坂崎、早まるなよ。一番大変なのは尚紀だ」

「……………分かってる」

今にも泣きそうな二人を宥めつつ教室に帰してやれば、俺は誰ひとりいない長い廊下に佇んでいた。一人でいると頭がおかしくなりそうな圧迫感に苛まれそうになるが、話を聞いた時よりは大分冷静になれているはずだ。

事実を、記憶から掘り起こす。

校長が壇上で言い放った言葉には、ほとんど事故や自殺といった可能性は含まれておらず、さらに言えば殺人事件として警察が動いているという事実があった。

未だ事実かどうかははっきりしていないが、集会が終わってから教室に帰っていく生徒の中には、早紀さんの遺体が発見されたのは山

野真由美と同じく、電柱の上に引っ掛かっていたという話をしていた輩がいる。

山野真由美と同じ殺害方法、第一発見者ということを考えれば、この一連の事件は連続殺人事件ということに。

「……何を考えている、俺は」

まるでテレビに出てくる刑事ものドラマのように、まさに『推理』し始めている俺に、喝を入れる。ちつとも冷静になんてなれていない。

俺がやれることなど、今のところ何も無い。

そも、やれることを探す前に、まずは心に整理を付けるべきだ。

一つ大きくゆっくりと息を吐けば、ようやくにして今は自習中であることを思い出した。

早紀さんが殺されたという事実にも心を擦り減らされたが、それ以上周りの声もまた酷いものであった。彼女に直接関係ない者であれば、日和見的な話が出てしまうのも仕方がないが、俺のようにはつきりと知り合いである人間もいる。

しかし、それが現実。人によっては隣の人間が死んだところで気にしない者もいるのが現状だ。



そういつた周りの声に眉を顰めながら過ごした一日は、おそらく工藤洸征が生きてきた中で最も不愉快な時間だっただろう。だから俺は、学校が終わるなりすぐさま家に帰ることにした。もはや周りの声を聞くことすら億劫であった。

そして家に着き、母と口数少なく言葉を交わし、自室に鞆を投げ込み、そこでようやく心を落ち着かせることが出来た。

ソファーに腰を落とし、そのまま天を仰げば、なんだか先ほどまで憤っていた俺が、酷く滑稽に思えてきた。

よく、思いだしてみろ。

はたして、工藤洸征はそこまで怒りを感じるほどに、小西早紀を想っていたか？

これほど周りが鬱陶しく感じるのも、小西早紀を想っているが故なのか？

自ら問いかけた言葉に、しばし、目を瞑る。

落ち着いて考えてみれば、俺が彼女を一人の友人だと数えていたのは、所詮小学校までの話だ。それ以降を疎遠に過ごせば、やがて俺の記憶に存在する彼女の領域はどんどん狭くなっていく。

此処最近など尚紀に愚痴を聞かされなければ、話題にも出ることがない過去の人だったではないか。おそらく俺の中にある『ナニカ』の優先事項について考えれば、早紀さんのそれは其処らの一般人よりも少しばかり高い程度のものだろう。

ならば俺が感じた憤りとは何だ。

それは単純な話だろう。

尚紀が悲しむだろうから。その一点だけ。

俺が感じる悲しみは、苦しみは、怒りは。  
その全てにおいて小西早紀の影響は微々たるものだ。

彼女が死んだことは悲しくない。尚紀が悲しむから俺も悲しい。  
彼女が死んだことは苦しくない。尚紀が苦しむから俺も苦しい。  
彼女が死んだことに怒りはない。尚紀がそれを感じるから、俺もそう思う。

所詮、俺もまた彼女の死に興味を抱かない周りの人間と同じであった。

真に大切な人がなくなったのなら、涙を流すはずだろう。

それが俺にはなかった。おそらく松永も、そして坂崎もまたそんなつもりは欠片もないのだろう。坂崎においては彼女の心配はほぼ10割尚紀に関することだろう。

「……それが現実」

漏れた言葉は最低のものだった。

幾度も俺はそれを理由にして逃げ惑っていた。それを理由に多くの年月を無為に過ごしていた。夢を見る、願いを探す、希望を求める。その口当たりのいい目的の裏には、俺が勘違いし続けていた現実というものへの反抗があったのではないのか？

そして、また、自分の感情すら現実のせいにして肯定しようとしている。

悲しめなかった。そりゃそうさ。4、5年も遊んでないし。

苦しめなかった。そりゃそうさ。彼女はその他大勢に過ぎないし。

憎しみもなかった。そりゃそうさ。赤の他人なんか同情できるかよ。

それが、常識的。現実的な思考ってなもんだ。

認められるか。

「……………」

あれほど現実的であることを欲していた俺が、そんな場違いの憤りを感じているのは、望まれるものなのだろうか。

成長？ 劣化？ どちらにせよ、誰かの死を持って促される変化など、素直に喜べるわけもないだろうが。

グルグルと際限なく回る心と思考を繰り返しながら、俺は少しだけ汚れている天井を眺め続けていた。

やはり夕食の間で話題となってしまうたのは早紀さんの話だった。既に夕方のニュースでは事件の詳細も少しばかりか明らかになっていくようで、警察は先日の事件との関連を、などと言ってはいるが、こんなもの誰から見ても連続殺人であることは分かるだろう。

家族間が出た事件の印象は、学校において語られるものとは違い、母も父も彼女の死を悲しみ、どこか落ち着かないような雰囲気があった。

多分、これが正しい反応なのかもしれない。

いや、今更反応の差にいちいち気を落としてもしょうがない。

今は、そのうち落ち着くだろう尚紀の帰りを待つて、俺も冷静に彼女の死を受け止める時期だ。

などと言いながら落ち着かない夜を過ごしていれば、唐突に俺の携帯が鳴り始めた。

画面に浮かぶ文字は『巽完二』。

そういえば彼は今日一日どこで何をやってたのだ？ 学校でも完二の姿は見えなかったが……本当に尚紀の言うように早くもサボり始めたのか？

俺はいぶかしみながらも、その呼び出しに耳を傾けた。

『……洗征か？』

「ああ。どうした……と聞くのも野暮か。事件の話だな？」

『おう。尚紀の奴のこと何か知ってたか？』

「……いや、俺もお前と変わらないだろう。そもそも俺たちは部外者だ」

俺の言葉に携帯の向こう側で完二が渋面を作る様子が思い浮かんだ。

事実、しばらく俺と完二の間では妙な沈黙が続き、その先で彼が戸惑っているようにも感じられた。

しかしこればかりはきちんと分からせてやらねばならない。

俺たちは、部外者だ。

「お前の言い分も理解る。だがこれは事故やら病死やらといったものではなく、殺人だ。俺達周りが騒げば騒ぐほど尚紀に迷惑が掛かる」

『んなもん、分かってっけどよ!』

頭では理解出来る。しかし心がそれを許さない。  
完二の力強い声を、俺は、心底羨ましいと思った。

なんとか彼を宥めつつ話を聞いていけば、完二は早紀さんが死んだことを聞くや否や尚紀の家に向かったらしい。なんとというか彼らしくはあるのだが、勿論のこと尚紀の家にはパトカーやら刑事の姿があり、巽完二がその中に入れることもなく。

元々稲羽署側からいい印象を持たれていない彼は、放り捨てられるように門前払いを食らったらしい。

殺人事件の犯人の見立てに高校生が拳がるのはあり得ないと思うが、いろいろと厄介事を起こしてきた完二だ。なんらかの要因があつて犯人扱いされればさすがに居た堪れない。

そも、完二の女嫌いは未だ治っていないし、さらに言えば早紀さんと完二が深い知り合いだったという事実はない。

お前も早紀さんではなく、尚紀を想った口か。

そう思うと、心が軽くなる俺を、殺したくなつた。

『……おい、聞いてんのか』

「いや……すまない、少し呆けていた」

『頼むぜホントに。冷静になれつつたのお前だろ』

「そつだな。確かにそつだ」

くぐもつて聞こえた完二の声に、少々安心させられた。

そもそも今日一日だけで何度『冷静』という言葉を使ったのか。どれだけ俺が平静を失っていたのか分かるというものだ。

「まあ、安眠はできないだろうが、早めに寝て明日は学校に来い。今時寝坊なんて流行らないぞ」

「た、たまたまに決まってるんだろ！」

「何年の付き合いだと思ってるんだ、お前は。せめて一カ月くらいは無遅刻無欠席を心がけてみる」

「……………」

「心がけてみる」

言葉を失ってしまった彼に少々笑わせられながら、俺は携帯を切った。

なんだろうか、幾分余裕が出てきたようにも感じられる。

たった半日でそれを得られるのは僥倖なのか、それとも人でなしなのか。

……………いい加減自己嫌悪も止めにするか。

俺はそのまま布団の中に潜り込んだ。

【4月16日・土曜日・雨・工藤洸征】

相も変わらぬ雨模様には陰鬱な気分が晴れないが、それでも学校には

行かねばならない。

登校途中に完二と遭遇し共に高校まで向かったのだが、完二はその間もずっと苛々と落ち着かない様子だった。

ピリピリとしたもの隠そうともせず不機嫌そのままにいる彼を、宥めながら学校まで連れて行く。そういえば彼が俺の登校時間と被るのは珍しい。もしかすれば昨日釘を刺した影響が出たのか。どちらにせよ、このまま遅刻せずに来てくれればいいのだが。

そのまま普通に学校で授業を受けたのだが、その中に少しばかり気になる話を聞くことが出来た。

クラスメイトがしきりに噂していたマヨナカテレビの話なのだが、早紀さんが殺害される前日の夜にそのテレビの中で見たという証言が多数あったのだ。

しかも、マヨナカテレビに映った彼女の姿は、何かに襲われているようにも、苦しんでいるようにも見えたのだとか。

正直な話、どうしようもなく気になる。

工藤洸征がそういった噂話に興味を抱いて聞きまわる姿は、余りにも柄ではないようにも思えた。しかし、どうにもマヨナカテレビの噂は俺の頭に引っ掛かるものがある。

結局のところ、百聞は一見に如かずというのが正論だ。

都合のいいことに今日の夜も雨。一度試してみるべきだろう。

というか昨日の時点で、俺はマヨナカテレビに少しだけ興味を持っていたではないか。

つい忘れてしまって昨日試すことができなかつたことが悔やまれる。

俺の感じるこの異様な違和感は一切なんなのだろうか。

自分がこの件に違和感を覚えるのは一体何故か。理解出来ぬものや訳の分らぬものに対する反応は基本的に恐怖だと言うが、俺のそれはそんな単純なものではない。何かが、引っかかる。

深夜0時まで後数分。この時間まで起きてることなどざらにあるのだが、何故か今日ばかりは何か悪い事をしているような感覚に陥ってしまう。別に夜更かしを叱られる子供でもあるまいに。

しかし、今までテレビを消したままこの時間を過ごしたことなどいくらでもあったのだが、何故その時はマヨナカテレビが見ることが出来なかったのだろうか。何か条件のようなものでもあったのか？

俺が聞いたマヨナカテレビの条件は、深夜0時、雨、一人で消えたテレビを見るといっ話だけだ。確かに消えたテレビをじっと見つめるなんて不気味なことをした覚えはないが……それなりに厳しい条件下で発生するものなのか？  
本当にオカルト染みてきたな。

ソファアの上に座ったまま時計の針が12を指す時をひたすらに待つ。

部屋の中は明りが消え、窓から見える電柱の青白い光が部屋を照らしている。耳に聞こえるのは雨の音と時計の針が動く音だけ。  
なんだかホラー映画にでもありそうな光景に、俺は逆におかしさを



感じてしまっ。

全く俺は何の違和感を感じてこんなに馬鹿らしいことをやっているのか。

「…………やるだけは、ただ」

自分に言い聞かせるよう呟いた言葉の意味の本当のところは、やるだけなら恥じやないというわけのわからない自己弁護。

常識的に考えれば、工藤洸征がこんなことをやるうとしていとうことは、酷く間抜けな姿だろうな、とため息が出た。

そして、0時。

時計の全ての針が12を指し示すその瞬間、俺は生唾を飲み込む勢いで、何も映らない灰色のテレビ画面に喰いついていた。

暗がりの中で画面に映る俺の顔。歪み、ぼやけて映るその顔を穴が開くくらいにじっとみつめる。

本当にあの噂は事実なのか。下らん噂ではないのか。若者が好き好む法螺の類か。

一向にマヨナカテレビとやらが映らない現状に、俺は徐々に苛立ちを感じ始めていた。

嘘か、嘘ならそれでいい。だが

「……………っ！」

映った！

少々砂嵐の多い画面ではあるが、電源も付けていないというのにテレビ画面には目が痛くなるようなピンクと赤に彩られた……劇場？

いや、違う。これは、どこかの……城？

未だマヨナカテレビに映った内容を詳しく把握することは出来ない。しかし何故このような『どこかの場所』が映るのだ？ マヨナカテレビとは運命の人とやらを映すのではないのか？

噂と違う映像が映ったという事実と、本当に実在したという事実と、俺の心臓の鼓動はどんどん速くなっていく。まるで喉のすぐ奥に心臓があるようだった。

これは一体何を意味する？

噂と差異が見られる意味は？

早紀さんが映ったことへの関係は？

殺人事件に繋がっているのか？

多くの疑問が次々に頭を駆け巡っていく中、マヨナカテレビに映ったものは。

「こんばんは〜！ えつとお、私、天城雪子がナンパ！ 逆ナンに挑戦してみたいと思いまあす！ 題して！ やらせなしっ突撃逆ナン、雪子姫の白馬の王子様探しい！ もう、ちょー本気い 見えないとこまで勝負仕様っ（はあと）みたいなあ、ね？ も〜私専用のホストクラブをぶっ建ててる意気込みでえ、じゃあ、行ってきまあ

す  
「

.....  
。

## 第九棒 苦言なき逃避

【4月17日・日曜日・晴れ・工藤洸征】

黒歴史、というものを知っているだろうか。

人生における「無かったことにしたい」もしくは「なかったことにした過去の事象」を指すネットスラングとして用いられる言葉である、というのが一般的な見解。

元々は髭の機動戦士のアニメ内で使われた言葉らしいが、まあ、そんな話はどうでもいい。

つまるところ黒歴史というものは、その人にとって思い出すのも苦になるような、羞恥心で死にたくなるほどの愚行ということに他ならない。

よくある例えと言えば、中学時に浮かんだ妄想を書き留めたノートなど、といったところだろうか。

前世では俺もそんな黒歴史の経験が確かにあり、そしてそれを思い出すたびに苦い思いをすることもあった。

しかしこの世に二回目として生まれた俺に二度目を犯す愚行などあるわけもなく、周りの友人たちが黒歴史を量産する様を痛々しく眺めながら生きてきたはずだった。

だが　　いや、思い出したくもない。

昨日のマヨナカテレビに対する俺の行動は一体何だったのだろうか？  
わけのわからない違和感とやりに導かれ、思うがままにその噂へと飛び付き、クリスマスプレゼントを待つ子供のように胸を高まらせ

た。  
いや、単純な期待や待望といったものを感じていたのではないとい  
うのがせめてもの慰めなのだが、それにしても酷い。

別に明かす義務もない早紀さんの死の真相に触れたがり、勝手な憶  
測とほんの僅かな興味によって深夜近くのテレビ前で息を飲み込め  
ば、灰色の画面に現れたのは意味不明な深夜番組。見ているこっち  
が顔から火が出るほどのくだらなさだった。

確か天城雪子、だったか。

天城と言えば天城屋旅館が脳裏を過るのだが、今日の朝に父に聞け  
ば、どうやら旅館の一人娘の名前も天城雪子だという話。身体的特  
徴やらも『何故か』詳しく知っている父曰く、漆器のような艶めか  
しい黒のロングヘアート、大和撫子然りといった気品のある容姿が  
特徴的なのだとか。

まあ、簡単に言うくと美人だそうだ。

それに鼻を伸ばした父が母に睨まれたのが印象的だった。

合致する。父から話を聞くと同時にそれを確信したのだが、どうに  
もマヨナカテレビに出た彼女は大和撫子に相応しい性格をしている  
ようにも見えない。

そもそも、俺にとつてそこに映る内容はどうでもよかったのかもし  
れない。

確かに、マヨナカテレビは映ったのだ。

だとすれば、あのマヨナカテレビは一体何を意味するのだろうか。  
そもそも運命の人だとかいう噂も、あんなものを映すのであればど  
うも信用に値する話ではない。

ひよっとすれば『ただ映る』という事実面白みを見出せなかった

誰かが付け足した、戯れなのかもしれない。

そこで俺は思考を止めた。

映った。ただその事実だけ十分ではないか。

この世のオカルトに興味を抱くことを否定するわけでもないが、そうであればマヨナカテレビよりも俺の転生という問題を解き明かすべきだろうか？

人間には理解不能な領域があり、解き明かすことのできない謎がある。

それを知ることができただけでも十分だ。

無理やりに早紀さんの事件と絡めるようなことなどせず、俺は日常を謳歌すればそれでよい。

結局のところ、俺が下した決断は『放棄』だった。

いや、まあ、あんな噂に躍起になっていた自分を思い出したくないだけなのかもしれない。

前述した黒歴史、というやつだ。

学校始まって以来の休日。

いろいろと物騒な話が多かった故に、溜まった疲れもストレスもそ

れなりに多いように思えた俺は、気晴らしに外を散歩することに決めた。それに此処最近は何模様が続く、からつと晴れた青空も随分久しい。

向かう先は四目内書店。すっかりお馴染みとなった店だ。

本当に余談なのだが、どうやら二回目の人生において勉学やら何やらを重視していた結果、俺は『読書』というわかりやすい趣味に陥ってしまった。

前世では文庫本一つ読むことがなかった俺にしてみれば、今の工藤洸征が時たま本を片手に時間を過ごすと言つのがどうにも信じられない。

というのも、この四目内書店の品揃えもまた俺に影響を及ぼした一端だろう。

何せこの店主である笹中氏の趣向が中々に素晴らしく、彼のこだわりによって厳選された品々は、都会の書店でも見られないようなものばかり。

世間の常識より少しばかりずれた『センスのある』本の数々は、中毒のような面白さがある。

それ故に、一般的な書店としての需要が低いのだが。

いつか店を閉じるのではないかと戦々恐々しているのだが、それに笹中氏の趣向を理解している顧客も多い。

俺が心配する必要はないだろう。

そんな期待できる新刊を求めて来たのだが、どうやら俺の目に叶う本は入荷していないようだった。笹中氏の話によれば20日に『素敵な漢』というコアなシリーズものの最新作が入荷するのだとか。少しばかりその名前に気が引けるのだが、彼が満を持してお勧めす

るといふのなら、ひよつとすれば期待できるかもしれない。

そういったとりとめもない話をしながらしばし過ごし、やがて家に帰ろうかと笹中氏に別れを告げれば、店前の大通りから何やら誰かの声が聞こえてきた。

少々遠くから途切れ途切れに聞こえる声は三つ。男と二人と女一人だろうか。

別段興味もなくそのまま家に帰ろうかとも思ったのだが、どうにもその声の発生源が『いだいだら』というのが興味深い。

あんな所にそれほど多くの客が一度に訪れるというのも珍しい話だ。俺は少しばかり気になって書店の前でいだいだら・の様子を窺っていた。

(……………高校生?)

しばらくして出てきたのは、私服に身を包んだ俺と同じ年代の集団。確かにその内訳は先ほどの声の主たちと一緒だ。

この田舎町の若者としては中々に格好のいい茶髪の男、上に羽織った黄緑のジャージがやけに似合う女、そしてその二人よりも幾分か年上の雰囲気を漂わす男。

……………緑のジャージ……………見たことがあるような。

何にしてもその彼らがいだいだら・より買い物袋をぶら下げて出てきたのだ。

というか、あそこで何か買ったのか?

「じゃ、ジュネスでな」

「遅れないでよ?」

「ああ」



三者三様。それぞれ口数少なげにそのまま別れると、ひと際大人びた黒服の若者が、店の脇の壁の前で動かなくなった。何やらその風貌に少々『危ない』雰囲気を感じ、そのまま動かなくなった彼を見ていたのだが、一体何をしているのだろうか？

どちらにしても怪しい雰囲気ではあるが、あんな店で何か買う客なんてどれくらいぶりに見ただろうか。それが俺と変わらない年の若者だということだから興味を持ってしまふ。

相変わらずピクリとも動かない彼の傍を恐る恐る横切ると、その詳細を聞くべく俺は дай だら。の中へと入っていった。

「らっ……お前か」

「相変わらずだな、剣堂さん」

あまり歓迎されていない様子とぶつきら棒な声に苦笑を漏らしながら返す。言っていることは不機嫌そのもののような台詞だが、その中には幾分かの機嫌の良さが聞いてとれた。

先ほど何かを買ってくれた若者たちのお陰だろうか。

パイプからぶかぶかと煙を吐きながら此方を見やる剣堂さんの視線は、手に広げた新聞に落とされていた。

どうにも彼の態度は俺に敵しい。どうせ愛弟子の坂崎がその態度に関係しているのだろう。

良くも悪くも双方互いに影響を受けている節がある。

見まわしてみれば子供の頃から変わりない鉄臭い匂いが漂う店内。飾られるのは黒や茶色のような鈍重な色をした芸術品ばかり。彼のアートはどうやらいつも通り絶好調らしい。

一通り見まわした後、俺は先ほどの話を聞くべく口を開いた。

「先ほどの若者だが」

「おめえ……いつからストーカーになったんだ。ケツ追いかけんなら舞ちゃんにしろよ」

「残念だが剣堂さん。彼女が今好意を寄せているのはコニシ酒店の倅だよ」

「何イ!？」

俺の言葉に、下に落としていた視線を驚くほどの勢いで此方に向けた彼の剣幕は凄まじいものがあった。しかしそんな顔をされても困る。

「別に彼女が誰を好きになろうと構わんだろうに」

「つかああ……おめえも罪作りな男だよ。絶対いい死に方しねえぜ?」

「所詮、彼女が俺に抱いていたものは一種の擦り込みだよ。すぐに冷める」

「……………ガキンチヨめ」

「自覚している。だがもう終わったことだ」

中学時代に彼女から向けられた好意に気付かぬほど、俺は鈍感ではなかった。そしてその好意に浮かれるほど子供でもなかった。いや、子供だったからこそ見て見ぬふりをしたのかもしれない。……所詮、過去の話だ。

俺にジト目を向けながら忌々しそうにする剣堂さんに、俺は一つため息を吐いて両手を上げた。

「それで、先ほどの若者たちの話だよ。彼らのニーズに合うような物があったのか？」

「俺のアート馬鹿にしてんのか、ったく。つーか、おめえも珍しいじゃねえか。赤の他人に興味を向けるような奴だったか？」

「俺はいつから冷酷な世捨て人になったのだ……あの緑のジャージを着た女性に見覚えがあつてね。八高生がこの店に来るのが珍しくて、少々興味が」

「ほーん……成程、惚れたな？」

「阿呆」

人の恋路に踏み入ってみたり、恋愛ことにすぐ結び付けてみたりと、この人は色欲魔か何かなのだろうか。アートを作るには逸脱した感性が必要と言うが、これはさすがに同意しかねる。

俺のような若造に舐めた口を聞かれても気にしない度量には感服するが。

「ま、おめえには構わんか。うち特製の模造刀とか狩猟鉞、後は鎖帷子が数点お買い上げだったぜ？」

「なっ……!？」

「何今更驚いてんだよ。うちはそーゆーのを取り扱ってんの知ってんだろ？」

「い、いや、普通に考えればおかしいのが分かるだろう!？」

つい声を荒げてしまったが、一向に剣堂さんとはぼける様に首を傾げるだけだった。

こんなもの誰が考えてもおかしいと気付くだろうに。ただの高校生がそんなガチガチの装備品を買い込んで行くことと言えば、危なっ

かしいこと決まっている。

……どこかに殴り込みに行くつもりか？ いや、しかし喧嘩をするような輩にも見えなかったが。

「毎回毎回気にし過ぎなんだよ、おめえは。どれも切れ味はそれほどでもない、所詮『模造』にすぎん。鎖帷子だって女の子が使えるような軽く薄いやつだ。戦闘用つつつても気休めみてえなもんヨ」「し、しかしだな」

「それに、あいつらは信用出来る。あいつらの眼をみりゃ分かる」

「……恥ずかしいと思わないのか？」

「……ちよつとだけ」

でへへと気色悪く頭を掻く剣堂さんに毒気を吐かれてしまったようで、俺はため息を吐くしかなかった。

どうせ何の理由もない直感というやつなのだろうが……まあ、こういった職人の勘は中々馬鹿に出来るものでもないかもしれない。

というか今の稲羽市は何かと物騒だというのに、あおの八高生たちはあんな物を買ってどうする気なのだろうか。

確かジュネスと言っていたような……ジュネス？ 武器防具をジュネスに？

「……意味が分からん」

「藪から棒に何言ってるんだ？」

結局これ以上考えても仕方がないと判断し、適当に世間話をして剣堂さんとは別れた。

話の話題が坂崎の恋話だったり、俺の母親が美人だということだったり、尚紀の野郎をぶっ飛ばしに行くだったり、どうしようもない話ばかりだったが、それなりに楽しくはあった。

ちよつどだいだら・を出た頃には帰宅するにちよつどいい時間帯。遠くに見える夕焼け空が、とても美しいものに思えた帰り道だった。

### 【同日・愚者】

「……………おや？」

「……………どうしたんですか？」

工藤洸征がだいだら・脇の壁に佇む瀬多を観察している時、彼の意識は青に彩られたベンツのような車内にあつた。

少々大仰な椅子に腰かけた彼の目の前にいるのは、化け物染みた長い鼻を持つ一人の老人。そしてその脇で鼻長の助手をしている美麗な女性。

一つ言えるのは、このような状況が現世ではあり得ないということだろうか。

瀬多総司はしばし沈黙が続く空気に少しばかりの居心地の悪さを感じながら、何かを感じ取るように視線を遠くに彷徨わせている鼻長の言葉を待っていた。

「これは……随分と珍しい方もおられるのですな」

「何の話ですか？」

「ああ、これは申し訳ありません。少々現世の方で瀬多様に気付いていた方がおられました」

「……………」

その言葉の意味を説明した鼻長　イゴールによれば、現世からこの空間　ベルベツトルームに意識を飛ばした瀬多の姿は一般人に見えないらしく、彼の近くを人が通ったとしても、瀬多の存在には誰も気付かないのだという。

まるで自分が影の薄くなったような扱いを受けていることに、瀬多は力なく笑った。

「瀬多様と長く言葉を交わすことも私にとっては至福の時なのですが、それでは現世で貴方が一人茫然と立ち続けることになってしまいますからな」

「気配を希薄化させることに対してデメリットのようなものはありません。一時的な処置のようなものですので、御心配になられることはありません」

イゴールの説明に付け足す様に甘い声で囁く助手　マーガレットの言葉に、瀬多は一つゆつくりと頷いた。実のところあまり興味がない話だったのかもしれない。しかし、手を一つ顎の下で組みなおしたイゴールは想いを馳せる様に言葉を連ねていった。

「……………ひよつとすれば、素質のあるものなのか。それとも運命に連なるものなのか。フフフ……………本当に瀬多様は面白い客人だ」

【4月18日・月曜日・晴れ・工藤洸征】

さすがに一週間も学校に通えば、授業や周りの雰囲気について違和感を感じるようなことはなくなっていた。勿論事件について話す輩は後を絶たないが、それでも仕方がないと許容できる余裕は既に取り戻している。

これからはゆっくりゆっくりと進むだけだ。まあ、存外、この高校を卒業するビジョンも見えてはいるのだが。学校生活というのは本当にあつというまのものだから。

徐々に慣れてきた自分に一つ胸を撫で下ろせば、朝のホームルームで担任の近藤先生が言っていた言葉を思い出した。

部活動、のこと。

どうしようか、と思うところはある。

実のところ俺が経験していた陸上部というのも小学の頃だけの話。中学になればスケジュールや大会出場の都合は勿論コーチか部長によって決められてしまう。それは確かに一つの部活として当たり前

の形なのだが、俺にはどうも合わない。

何せ元々の理由がスタミナを付けるだとか、痩せるためだとかで熱血を謳うには幾分不純な動機だ。そういった冷めた目的と周りの熱意が合うわけもない。

まあ、自業自得というか、因果応報というか。周りに合わないのは当然である。

故に中学では所謂帰宅部というものだったのだが、これでも俺は生徒会の類には所属していたのだ。自ら生徒会長に立候補することはなかったために、そのような重職に着いた経験はないのだが……まあ、実際会長の肩代わりのようなことは幾度も経験してきた。あれは会長に悪い事をしたと後悔するばかりである。名ばかりの生徒会長になっていたからな。

そして高校。

運動部も文化部もそれぞれ本格的になっており、その気があるのならば、所属した部活の種類に関係ある大学へ進学する道も見えてくる。当然茨の道ではあるのだが。

「で、結局どうすんの？ 綾音は」

「ん、つとね……やっぱり吹奏楽なんて、どうかな？」

「何で私に聞くのよ」

「え？ えーと……なんでだろ」

パンを貪る坂崎となんだか自信なさ気に答える松永を眺めながら、俺も食堂に売っていたジャムパンを齧る。まずい。

放課後、二人に学校の屋上へと呼ばれた時は何の用かと思っただが、どうやら所属する部活動について悩んでいるのだとか。主に松永が。実際の所、彼女が言うように吹奏楽に興味はあるものの、中々決断



することが出来ないらしい。

「松永が望むのならば問題ないとは思うが」

「あんたねえ、もうちよつとケンセツテキな意見出せないの？」

「む、無理して相談に乗ってくれなくても……」

「あゝ！！ 綾音はねえ、一度決めたら覆さない頑固者の癖に決めるまでが遅いのよっ！」

「……口元にチヨコが付いているぞ」

何故に坂崎の食っているチヨコロネというのは、あんなにバランスの悪い食い物なんだろうな。いや、成分の話ではなく中身の話だが。

声を荒げる坂崎とひたすら謝る松永の様子は、傍から見ればいじめっ子といじめられっ子のそれだが、友人故の過度な心配というやつか。

「はつきり言えば、これだと運命的に思えるような部活などそうあるわけもない。入ってから徐々に魅力に気付き始めるというのもあるのだろう」

「……で？」

「つまり、だ。松永はまだ吹奏楽が好きな段階ではないのだろうか？ それなのに好きでなければ入ってはいけない、というような概念に捉われているようにも見える」

「あ……ちよつと、それはあるかも。工藤くんの言っている通りちよつと楽しそうかなって思ってるだけだし」

「最初は誰しもそんなものだろう。例え好きだろうが何だろうが、興味を持つと言う事は入る資格に十分だと俺は思うが」

俺の言葉の一句一句に頷く松永に少々不安のようなものを覚えるが、背中を押すきっかけになつてくれたのなら嬉しい限りだ。

そもそも合わないと感じれば退部するという選択もあり得るのだ。まあ、松永の性格上、他人の迷惑がどうかで選びそうもない選択肢だが。

我ながら建設的な意見を出せたことに満足していれば、坂崎は俺を胡散臭いものを見るような目で見ていた。

「……………何か？」

「そうは言うけどあんたが興味持ってる部活はないわけ？」

「それは私も聞きたいな。あ、えと、参考とかってわけじゃないけど、聞いてみたくて」

松永の単純な好奇心は構わないのだが、坂崎の俺を真つすぐ射止める視線には違う思いが込められている様に見える。おそらくは、俺の根幹に関わることを懸念しているのだろう。多少の食い違いはあるかもしれないが、この坂崎舞という女は察しのいいところがある。

さて、どう答えていいものか。興味のある部活はないと言った所で坂崎のがっかりする光景が容易に思い浮かぶというから厄介だ。

……………純粹に心配してくれていることには感謝しているが。

「まだ部活動の見学もしてないのだ。それに運動部は明日から所属できるらしいが文化部はまだだろうか？ ゆっくり考えるさ」

「……………逃げたな」

「何の話やら」

「????？」

のらりくらり。俺と坂崎の間で首を傾げる綾音が一瞬小動物のように見える。

情けない話だが未だに俺が真面目に、本当に真面目に取り組めそうな部活は、物事は見つかっていない。

一度だけオカルト研究会なるものに興味が惹かれたが、いくらなんでもそれは止めておいた。オカルトの興味は昨日のマヨナカテレビに関すること一件のみであるし、そもそもあのおどろおどろしい雰囲気は好きじゃない。

活動場所としている部室のドアにでかかど張られた『黒魔術』の文字が痛々しさを増していた。

「で、君は確か手芸部だったか？」

「……まあ、アートにおける装飾品的な器用さが求められるには丁度いい部活だしね」

「どうだ、松永。このように完全に踏み台として部活を選ぶ者もいる」

「……舞ちゃん」

松永と揃って白い目を向ければ、そんなこと気にしないと云わんばかりに胸を張る坂崎。この自分の夢に対する妥協の無さは敬意を払うべき彼女の美点だ。そして俺が見習うべき生き方。

本当に……笑ってしまうほどの苛烈な夢への情熱。それを心の底で馬鹿にする度に、工藤洸征は惨めになる。

「何？ またくだらない自己嫌悪とかしてるわけ？ そんなの今時流行らないって」

ふふん、と鼻で笑う坂崎に俺はなんとか苦笑を返すことしかできなかった。

おろおろとし始めた松永もまた夢を傾けるものに触れ始め、俺の周りの人間はどんどん俺を追い越していく。

だが、今は卑屈にならずに、松永の吹奏楽部入りを喜ぶことにした。何でも彼女の希望はフルートらしいのだが、家にトロンボーンしか

ないという問題も抱えているらしい。

ならばジュネスでのアルバイトはどうかと勧めてみた。そうすれば親に金を借りてでもフルーツを買う事くらいできるだろう。

少々商店街の人間からのやつかみが気にはなつたが、あれは早紀さんが運悪く酒屋の娘という話があったからだ。普通の高校生がバイトするのなら問題はない。

というかこの高校がバイトを認めているということに驚いたが。

まあ、何にせよもう少し先の話だ。

高校生活は始まったばかりだからな。

## 第九棒 苦言なき逃避（後書き）

高校生活は始まったばかりだからな（キリッ

ということで大体の序盤のイベントは終わりました。言わば第一部完、みたいなものです。

さて、これより色々主人公君がやらかすわけですが、今までのように一日一日を細かく描写していくと、ネタも尽きるわめんどいわで作者が息切れしてしまのが正直なところ。

なので露骨に時間を飛ばしながら小説を続けていこうかと思えます。あ、当然原作のイベントをなぞるだけでなく、オリジナルの話も混ぜていくのでご勘弁を。

そういうことで、それぞれの段落において表記されている日付が時間の流れにおいて重要な部分になるでしょう。

全イベントを網羅している方は愚者メンバーとのニアミスなどをニヤヤしながら見るのもよし、そこまで原作日程を覚えていない方はwikiと照らし合わせながら主人公を罵倒するもよし。

イベントに関しては3、4話ほど費やさねばならないでしょうし、そもそも原作事態が非常に長いゲームであります故、ここら辺の露骨な省略にはご理解頂ければ幸いです。

ちなみにまともに書いたプロットでは全部で487話になりました。アホだよねえ、作者。

気力が続く限り現在の更新間隔を維持したいと思えますので、これからも応援よろしくお願いします。

もちろん書かれた感想や評価してくださった方も有難うございます。

やっぱり嬉しいよね。

といつことで作者のへほまでした。

## 第十棒 踏み外す一歩目

【4月19日・火曜日・晴れ/曇り・工藤洸征】

今日も今日とてやることは変わらない。いつも通り個性的過ぎる教師たちの授業を受け、夕陽が見える時間まで学校で過す。まあ、やっていることは中学の時よりたいして変わっていないから今更というやつだ。

授業の話ではあるが、普通に教科書の内容を進めるだけならばあまり受ける意味のない授業だと判断して、担当教師に隠れながら違う教科を自習するのもよかった。

しかし何故か八高の教師たちは本当によく授業の本筋から脱線する。歴史の授業では重箱の隅を突くようなトリビア、数学では何故か生々しい社会の仕組み、国語では単純におもしろい古典の成り立ちなど、スルーするにはもったいない内容が跋扈している。

いや、まあ、そんな細かい知識をテストに出すと言うのはさすがにどうかと思うのだが、そういった雑学的な話をする教師には好感が持てる。それに比例して教師の個性が斜め上にぶっ飛んでいるのが困りものだが。

あのツタンカーメンの被り物は一体どこに売っているというのやら。

閉話休題。

担任の近藤先生の話によると、今日から運動部への入学が可能になるらしい。

田舎町の高校といっても部の種類だけは様々なものが存在しており、

基本のバスケットやサッカーなどの球技、剣道や柔道などの屋内スポーツ、トライアスロンやらボディビル部などの濃いものまで。

なんだかおかしいものが含まれているような気がするが気にしない。といつてもやはり田舎ということか、残念ながらそれぞれのレベルが高いとは言えず、大会で上位に食い込んだという話はここ数年ないらしい。

そもそも何かのスポーツを推奨している学校でもない八高だ。そういった結果を残す方が珍しいのかもしれない。

と、色々と運動部のことを話したものの、俺が何かに入るつもりは今のところない。実のところこれより三年間の内で運動部に入ろうと思っっていることなんて微塵もない。

何故かと問われれば、性に合わないからと今は答えるしかない。どうにも勉強に注ぎ込んできた人生からか、必要以上の運動を取ることが億劫になってきているのだ。

勿論太らない程度の運動は重要だと理解しているが。

ということならば文化部という話になるのだが、どうしたものやら。完二と部活動のことについて話をしていれば、彼は坂崎と同じ手芸部の部室をちらちらと見ながら俺の話に答えていた。

……不器用な奴め。



【4月20日・水曜日・曇り・工藤洗征】

結局運動部に入ることなく無所属であることを決めた俺だったが、やはりというか坂崎に詰られた。少々鬱陶しい奴だと思いつつも、もはや長年の付き合いであるあいつを突き放すようなことはしない。というか中学の頃に夢云々の話をしたときに、壮絶な剣幕で俺に詰め寄ってきた過去がある。幼少の頃の出会い、それが彼女にこれほど影響していたとは驚きだが……まあ、詮無い話だ。

さて、学校生活に慣れてくれば自ずと身の回りの噂話から離れた話題も聞こえてくる。

例えばこの高校の名物だとか、有名な生徒の話だとか、胡散臭い七不思議だとか。

まあそういったもののあるのかとクラスメイトと話をしていれば、その中で出てきた話題の中に思い出したくないことが一つあった。

天城雪子の話。

もはや彼女の話が出る度に自分の無様な姿が頭に浮かび、嫌な気分になるのだが自業自得に過ぎない俺は我慢するしかない。頬筋をヒクつかせながら聞いたその話は、『天城越え』という八高では有名な話だった。

そもそも街単位で有名な天城屋旅館の若女将である彼女の名が知られるのは仕方ない話かもしれない。さらに言えば俺の父の鼻を伸

ばす大和撫子。自ずと人の眼と耳に留まるのは当然の帰結だった。そしてその彼女に恋する漢が多いのも仕方のない話。下世話な話であるが。

だが『天城越え』と呼ばれる所以はこの恋愛沙汰に関係している。何故ならば、硬派なのか天然なのかは知らないが、告白してくる男たちをにべもなく切り捨てているらしい。話すら聞いてくれないその様は、確かに高根の花の如く、といつてところなのだとか。その高過ぎるハードルを揶揄して『天城越え』。当然それを突破したものはいないようだ。

ならば、あのマヨナカテレビのナンパは                      そこで俺は思考を止めた。

どちらにしても彼女はこの学校でもかなりの有名人、ということだ。話聞く彼女は窓際に咲く花のごとく静かな人物であり、自分から表に出るような積極的な性格ではないとのこと。成程、確かに一歩引いたところから微笑む大和撫子に違いない。

知名度に優劣を付けるはずもなく、そして有名なことがいいという話でもない。だが俺もまた名を知られるという点では同じだろう。幼少より大人びており、今なお周りの若者たちより物分かりがいい青年。いつでも頼りがいがあり、いつでも微笑む好男子。全国でも上位に食い込む天才。

重ね続けたメツキ、偽り続けた人生、小賢しい思考。その評価など一度として嬉しいと思ったことはなく、むしろ疎ましいと思う事もある。

……結局は自業自得であり、自ら選んだ選択だ。  
浅ましいにもほどがある。

天城雪子の話から発展して俺のことを話始めるクラスメイトを見ながら、俺は歪んだ苦笑を浮かべるしかなかった。

【4月21日・木曜日・雨／曇り・工藤洗征】

せつかく天候も最近は何回復しだしたというのに、またもや雨雲が空にはかかっている。此処最近は何曇りや通り雨といったはつきりしない天気が多く、どうにも気が滅入る。

それに重ねて俺の気を落とさせるのは、ここ最近稲羽市一帯に多発している濃霧の話である。どうやら雨が2、3日降った次の日の夜から朝にかけて尋常じゃないほど濃い霧がこの町を包むのである。俺の記憶を探ってみても、すぐ目の前が見えなくなるほどの霧がかかったことなど片手で数えるほどのものだったのだが、一体どういうことなのやら。

その濃霧によって事故が発生することも多く、市で注意を呼び掛けているらしい。

というよりもその霧の発生理由が、市の調査でもはっきりしていないという話も出てきているのが現状だ。  
別に霧が発生するのはオカルト的な話ではなく、きちんと気象学で解明できる現象なはずであるが……中々不思議なこともあるものだ。

【4月24日・日曜日・晴れ・工藤洸征】

時間は飛んで日曜日。

休日に晴れというのも、まあ気持ちがいいと言えばいいのだが、どうせなら外に出る機会がある日に晴れてほしい。  
つまり今日は一日家でごろごろするということ。

どうせ暇であるだろう完二でも誘って飯でも食いにいくとかも思ったが、面倒なので止めた。基本的に休日のノリなど計画性のない思いつきで過すのが丁度いい。

それと……尚紀の話ではあるが。

あの事件が起こってから一週間弱が過ぎた今でも、彼の周りは随分

とごたごたしているらしい。何しろニュースでも報道されているように、早紀さんの死因やら何やらが何一つわかっていないのだそうだ。怪事件として知られ始めているこの事件の裏で最も割を食らうのは、勿論被害者の家族なのだろう。しかも第一発見者が殺されたという事実から、小西家に張り込む警察官やら、幾度も自重聴取に訪れる刑事のおかげで、心休まる日がほとんどないらしい。

携帯越しに暗い声を落とす尚紀に、俺は掛ける声を無くしていた。

それ以上に彼が鬱陶しいと声を荒げるのは、近所の輩のことらしい。事ある度に痛ましそうな顔を浮かべながら野次馬根性で近寄ってくる大人たち。部外者である癖にいちいち家族の問題に軽々しく入ってくる大人たち。身内が殺されてから一週間立たずに『頑張れ』と声を掛ける大人たち。

空気が、読めていない。

なぜにそつとしておくということが出来ないというのだろうか。いや、俺とて、俺の周りの友人とて被害者の家族である尚紀に近寄りたいと思っていたこともあった。そう考えれば周りの反応は当たり前のようにも思えてしまう。だが、憤りを感じずにはいられない。

尚紀と話した数分の間、俺はただ尚紀の話を聞くことだけに努めていた。

何を言った所で、俺の言葉など周りの空気の読めない大人たちと同じように思えたから。

ままならない。

本当に、ままならない。

【4月25日・月曜日・晴れ・工藤洸征】

文化部の入部が許可される日。

別に何も考えずにその日を迎えてしまったわけだが、やはり坂崎の言葉は俺の心に棘のようなものを残している。

いや、この期に及んでまだ突っかかってくるというわけではないのだが、昔から熱意を持って何かに打ち込めるものを探すことを口酸っぱく俺に言い続けてきた影響があるのかもしれない。

周りが様々な部活動に所属していく様を見ると、どうにも居心地の悪さを感じるようになってしまっている。帰宅部。ただその一言に對して何故か忌避感のようなものを感じてしまう。

坂崎には余計なことを、と怒るべきか。それとも感謝するべきか。もし感謝するというのなら何かやることを見つけてからということだろう。

当の本人は宣言通り手芸部に所属。どうせ周りが裁縫やら何やらと

細々しい活動をしている中で、空気を読まずにゴツゴツとした無骨なアートとやらに没頭するのだろうか。

本当にそういったところはどっしりしようもない奴だ。

そして松永。彼女もまた望み通り吹奏楽に入り、初めての吹奏楽に四苦八苦しながら周りに溶け込もうとしているらしい。彼女は演奏の実力云々よりも引つ込み思案の性格で苦労しそうではあるが。

そういえば、彼女が言っていたフルートの件であるが、どうやら親を説得してフルートを購入することに成功したらしい。まあ、入ってから違つ楽器を強制されれば目も当てられない事態になるのだが。

完二は当然の如く帰宅部。尚紀は事件の関係で学校にもまだ来られていないため不明。

となれば俺は、ということになる。

周りのクラスメイトから色々な話を聞いているのだが、やはりピンと来るものはなく、そこに損得勘定のようなものを含めてしまう自分がいる。

これは将来役に立つのだろうか。俺が時間を浪費するに値する活動なのだろうか。

部活動はそういう意味で決めていいものではないというのに。

やはり俺はまだ変わることが出来ていない。

続々と今日一日の授業が終わった教室からそれぞれの部活動に赴く知り合いを見送りながら、俺は深々とため息を吐いた。

その時、1年1組の生徒ではない眼鏡を掛けた男子生徒が、俺の方に近づいてきた。

その姿と顔に覚えはない。周りのクラスメイトたちも彼のことは知らないらしく、遠巻きに首を傾げながらこっちを観察している様

見えた。

「えっと……工藤洸征くん、だよね？」

「そうですか」

「ちよつと話があるんだけどいいかな？ あ、俺の名前は原章文つていうんだ」

「原さん、ですか。別に構いませんが、此处で？」

原と名乗った男、恐らくは同級生ではなく先輩らしい彼は、此方を観察するような、見定めるような目を向けながら話し掛けてきた。上級生より声を掛けられる理由など見当たらないが、別に物々しい雰囲気を漂わせているわけではない。何か頼みごとのようなものなのだろうか。

どちらにしても込み入った話をするには、周りの注目が集まり過ぎで少しばかり居心地が悪い。此方を観察しているクラスメイトたちに目をやりながら場所の移動を提案すれば、原さんは申し訳なさそうな顔を浮かべながら教室から出ることを促すのだった。

「生徒会、ですか」

「うん。工藤くんが中学時代に生徒会に入ってたつてことは知ってるし、経験的にも能力的にも資格はあると思うんだ」

俺が原さんに案内されたのは、生徒会室。中に入れば四角形に囲ま



れた長テーブルやら、ロッカーにごちゃごちゃと押し込められた書類など、珍しくもない生徒会の様相。

他の役員の姿はなかったのだが、原さんと一対一で話した内容は、生徒会への勧誘だった。

「そう簡単に役員の独断で勧誘してもいいことなので？」

「うちの校風は知ってるでしょ？ そんなに厳しいわけでもないし、やっぱり自分からやりたいって人は少なくってね。それに、学年代表になってくれて言ってるわけでもないし」

「……ならば俺には何の役目を？」

「お、興味ある？」

「まずは詳細を教えていただかなければ、興味の持ちようもありません」

少々ぞんざいな言い方だっただろうか。俺の言葉に一度苦笑した原さんは一つ一つ言葉を選ぶように語りだした。

先ほど原さん自らが言ったように、八高生徒会に入ろうとする生徒が中々に集まらないらしく、だとしても素行の悪い生徒を入れるわけにはいかない。

現生徒会はそれぞれのクラスの担任から推薦できる生徒を聞き、生徒会として働くことのできる人材を探していたらしい。

確かに校風として縛られることが少ない八高とはいえ、全てにおいて自由というわけでもなく風紀委員も存在している。それでなくとも全校集会の取りまとめやら学校行事の進行、生徒集会の運営などやることは無数にある。

まあ、簡単に言ってしまうえば人手不足なのであり、そしてその補充として俺が眼にとまったということ。

確かに生徒会が欲しい人材としては、工藤洸征はそれなりに価値のある生徒だと自覚している。自惚れではある、のだが自分を過小評価するつもりはない。

「で、どう？ 入ってくれる？」

「俺を評価してくれるのは嬉しく思います。ですが入ったばかりの1年に任せるには少々大仰すぎやしないかと」

「いやいや、最初から大仕事をやらせる気はないよ。多分雑務担当というのが一番最初に宛がわれる役職かもね。溜まった書類を纏めたりとか」

「ますます俺である必要などありませんが」

にべもなく原さんの要望を否定してはみるものの、実のところ少しばかり興味はあった。確かに面倒なことであるかもしれないが、雑務であるというのなら全校生徒の前に引きずり出されるようなことはない。

それに、あれだ。内申も稼げる。生々しい。

どうしても頼むと頭まで下げ始めた原さんを見ると、それほどまでに人材を求めているのかと少々可哀そうになってくるという心情もあったのかもしれない。

情けで入るといには厄介な話であるが、まあ、それだけではない。此方としても利用できる価値があるのならばやぶさかではない。

ひよっとすれば、無意識的に何か役割のようなものを欲していたのかもしれない。

やはり帰宅部という響きが俺を急かしていた。

「まあ、構いませんよ。しかし2学年になった時にどうなっているかは分かりませんが」

俺の両手を力強く握りながら頭を下げる原さんを見てると、なんだか居た堪れない気持ちになる俺だった。

【4月28日・木曜日・雨・工藤洸征】

生徒会に入ること了承して数日。どうやら生徒会の活動は木曜放課後であるらしく、俺が活動に参加し始めるのも、俺の顔見せになるのも今日までずれこんでしまった。別に顔見せくらい次の日でもよかったというのに。

あのごちゃごちゃとした生徒会室に集まった人数は20数人と言った所、おそらく各学年のまとめ役やら書記やら風紀委員やらだったりするのだろう。

俺を好奇の目で見てくるのは普通の生徒と変わらないが、妙に貪欲に切り込んでいないだけまだマシということかもしれない。さすがは優等生集まる生徒会といったところだろうか。

後は適度に自己紹介やらをしながら互いの仕事について説明を受け

てみたり、今月の生徒会活動の予定を決めたりといったところ。ここまでは中学の頃に所属していた生徒会と変わらず、俺も多少は胸を撫で下ろして安堵していたのだが、生徒会顧問である矢崎教頭がわけのわからないことを言い始めた。

「えーこれより約一カ月後の5月24日に、沖奈高校の生徒会と連合組織を開く会合があります。主な内容は互いの学区内で発生する未成年者犯罪防止に呼びかけや、学区内での美化活動についての話し合いですね」

その話だけならば、別段俺が啞然とする理由など何一つなかった。こういった他校との連合は珍しいことでもなく、中学の時から一年に一度ほどこういった会合があることは知っていた。が、その先に続いた言葉が問題だった。

「えーこちらからも何人が会合に参加してもらいますが、そうですねえ……出来れば工藤さんに頼みたいのですがいいですか？」

「は？」

「いえね、こちらも人手が足りないのは知っていますでしょう？ それに中学の頃から生徒会を経験してきたあなたならば問題ないと思うんですけどねえ」

鬱陶しいほどに纏わり付くような声で俺に無理難題を押し付けようとする教頭の言葉。いや、別段無理難題というわけではない。やろうと思えば出来るだろうし、それが苦になるというわけでもない。しかし、生徒会に入ったばかりの一年を起用するのはどう考えても異常だろうに。しかも原さんが言っていたこととも違い過ぎる。

つい目を細めたままに周りにいる役員たちを見回せば、その大体が俺から視線を逸らしていた。どういうことだ。まさか騙したという

わけではないだろうな。

もはや睨むまでに強めた視線で原さんを捉えれば、彼は口パクで「後で話す」とだけ答えただけだった。

「説明、してもらいましょうか」

「ごめんっ！ こっちとしても予想外だったんだよ」

原さんの他に生徒会長の新田さんまで俺に向かって頭を下げる有様に、俺はただただ息を吐くしかなかった。もはや諦めのため息とも言える。

話を聞くとところによると、俺が生徒会に入る旨を聞いた矢崎教頭はたいそう喜んだらしく、他校との会合において俺のネームバリューを利用しようと企んだらしい。

何しろ毎年毎年行われるこのような会合において、八高生徒会が向かう人員はいつもぎりぎりであり、そのことから顧問である矢崎教頭と他校の顧問との間にくだらない優劣がついていたらしい。

あれだ、つまりは、田舎町で生徒会の人員も確保できない八高と、ある程度都会で人員も立場も高い冲奈高校との間に出来た格差のよくなものだ。

そこへそれなりに有名な工藤洸征が来たというのだから、矢崎教諭は喜んだ。

何しろその会合の様子をインタビューする地元放送局も来るという

話もあるらしい。つまりは俺をパンダのような扱いにするという」と。

「話し合いとかは俺達がやるから、だから、その、あれだ。居てくれるだけでも」

「……………」

「やっぱり、怒ってる？」

「それは、まあ。ですがこれはみなさんの責任というか矢崎教頭の責任でしょうし、怒りを向ける方向が違いますよ」

「マジでスマン。そう言ってくれだけでもありがたい」

本当に申し訳ないような表情を浮かべる新田会長と原さんもある意味被害者なのだろう。

しかし、5月24日か。

確かに居てくれるだけでいいかもしれないが、会合に参加するということは意見を求められる機会もあるだろうに。俺も色々と考えねばならないらしい。

しかも地元放送局というのが、また、面倒で仕方がない。

どうにも厄介なことになったものだ。

## 第十一棒 ままならない

【4月30日・土曜日・晴れ・工藤洸征】

三日間続いた雨もようやく止み、空に広がる青空を久々に感じるこ  
とができて中々に清々しい一日だった。

まあ稲羽市の常というところか、先日の夜中から今日の朝までは街  
全体が濃い霧で包まれていた。偶然にも朝早く目が覚めた俺は、薄  
明かりの自室の窓から外を眺め見てみたのだが、あれは酷い。事故  
が多発するのも仕方がないほどの濃さであった。

といってもそんな陰鬱な天候が再び訪れるのはこれより一週間は先  
の話。母も洗濯物が溜まったなどと朝食の席でばやくことも梅雨の  
時期が来るまではなさそうだ。

そんな朝食の席で父の口から少しだけ気になる話題が出た。アルバ  
イトの話である。

松永にジュネスのバイトを進めた話や、早紀さんがバイトをしてい  
たという話から分かる様に、八高では生徒のバイトが認められてお  
り、ジュネスの他にも様々なところで高校生然りといった若者が働  
いているところを見ることが出来る。

さすがにいかかわしい店やら工事現場などの危険な仕事に就くこと  
は出来ないが、スーパーマーケットでのパート勤務や、児童保育の  
バイトなど軽いものであれば高校が認めてくれるそうだ。

そんなバイトの話が父の口から出たと思えば、お前はバイトをしな  
いのか、とのこと。

転生の話は既に通してある故に、そういった自己の責任が問われる

ものに対する俺への干渉は、父も母もほとんどない。工藤家の一人息子として扱いながらも俺の精神を認めてくれるところが非常に面白い。

それでもやはり母は色々と世話を焼きたがるのだが。

さて、父の話ではあるが、少しばかり悩んでいるというのが本当のところだろうか。

単純な話、自分で金が稼ぐことが出来るのは高校生という立場において魅力的であるし、そういった社会の仕事に触れるのも必要だろう。

ああいった世知辛い労働者の立場を前世で理解しているとはいえ、所詮前世だ。もはやそんな跡形もないくらいに不安定な俺が、今更それを当てにできるわけもなく。ならば今一度社会勉強とやらに勤しむのもいいだろう。

ならば、どのバイトをしてみるか、という話になる。

ネットで調べるにしても、この稲羽市という狭い地域では出てこない可能性が高いだろう。

事実、地方新聞に挟まれたチラシや市のコミュニティ新聞やらに記載する方法で募集されることの方が多いだろう。

トーストを齧りつつそんな話を父と話せば、母が商店街の掲示板に様々なバイトの募集要項が書かれていたということを教えてくれた。通常の勤務型バイトでなく、内職のような種類のバイトも記載されているのだとか。

まだバイトをすると決めただけでもなく、どんなバイトがいいのかという希望もないが、ちょっとだけ見てみるのもいいかもしれない。



【5月2日・月曜日・雨・工藤洸征】

一週間先まで雨が降ることはない、などと言っていたのだが、何の冗談かその情報の出所であった母が天気予報を見間違えていたらしい。やはりそういった情報は自分で確認するべきだった。

といっても別に俺のスケジュールにおいて雨が降ると困るような用事は特にない。

どす黒い曇天と家屋を打つ雨音にうんざりするものの、所詮一時的な話。学校で一日の半分を過ごす高校生にはあまり意味のないものだ。

まあ、体育の授業が潰れてしまうのが困った話ではあるが。担当の近藤先生もテスト範囲が終わらないと愚痴っていた。

テスト範囲。つまりは、中間テストである。

高校入学より約一カ月。最初の方こそは各教科の授業も様子見程度の速度で進んでいたが、もはやこの時期になるとノルマに追われる会社員のようにどんどん先へ進んでいく。

中学の頃よりの慣れが治っていないのか、稀に授業を中断させるような態度を取るクラスメイトもいるのが、授業を遅らせている要因

かもしれない。

しかし授業中にお喋りをしたくなる気持ちは分かる。一般的に勉強を好む輩は多くないが故。

そしてそんな遅々として進まない授業を強引に進めてしまう時期が、テストを一週間後に迫ったこの期間。お喋りをする生徒などお構いなしにそれぞれの担当教師たちは黙々と授業を進めていくのだ。試験範囲を終わらせるために。

八高一学期の中間テストは今日より一週間後の5月9日。それより一週間かけて全教科のテストを俺たちは受けるのだが、その試験範囲というのも実のところアバウトである。

俺が授業で書き留めているノートを見て見れば、所々に散見される『注釈』の文字。

そう、個性溢れる先生たちがまれに話す脱線話のことである。

これをテスト範囲に含めるといふのだから、さすがの俺も油断できない。

単純な学力であれば95%は確実に取れるのだが、雑学染みたものを問題として出されれば、さすがに答えることが難しくなってしまう。

たかが一問や二問ほど逃したところで構わない、というのも一理あるのだが……ここまで来たというなら満点を目指したくなるというのもまた人間だろう。

ちなみに一般高校でも見られるように、八高でもテスト一週間前は部活動禁止である。そして部活動に所属している輩ほどテスト直前になって慌て始めると言うのも一つの風物詩である。

そこらへんは仕方がないとも言えるし、自業自得とも言える。文武両道を口で言うのは簡単だが実践するのは難しい。まあ、実際部活

動をしていようがしてなかるうが、勉強が出来ない者は出来ない。

俺の前で手を合わせる、巽完二という男と坂崎舞という女のようにはつきり言おう。こいつらは俗に言う『馬鹿』という種類の人間に分別される輩である。

隣に女性がいる状況でも俺に一心不乱に頭を下げる完二と、いつもの小生意気な態度も消え失せて下手に出る坂崎。

ここまで来ると恥も外聞も何もなりふり構っていられないという状況がひしひしと伝わってきて、俺は呆れざるを得なくなってしまう。

巽完二の場合。

よくこういう追い込まれた状況における定例句として『やれば出来る』という言葉があるが、この言葉は残念ながら彼には通じない。この巽完二という人間はもはや遣伝子レベルで『勉学との相性の悪さ』が固定されているらしく、高校受験において俺が教えた様々な知識は既に消え、高校になってから覚える知識も授業をよくポイントする彼に蓄積されるわけもない。

言っては悪いが、この男は筋金入りの馬鹿である。

坂崎舞の場合。

正直な話、試験範囲の教授を俺に乞うほど切羽詰まっていたという事実には俺は驚いていた。

確かに彼女は其処らの若者と同じように勉学を嫌うきらいはあったが、テストのような試験を疎かにするほど怠けるような人物ではない。元々土台がしっかりとしていない学力ではあったが、だからといって赤点を目前にしてしまうレベルではなかった。

ならば何が此処まで彼女を墮落させたかと言えば、それはある程度義務教育の期間より自由が利く高校生活に移行したせいだろう。一気に難しくなる授業のレベル、高校生ということで広がる遊戯への興味、そして彼女自身本格的になってきたアートへの没頭。ありとあらゆる要因が重なって彼女の許容範囲を越えてしまったのだ。

平均点くらいには留まる程度の勉強が彼女のスタイルであり、そのままのスタンスで高校生活の授業を受け、残りの自由時間は自分の趣味やノリに費やしてしまったということ。

まあ、簡単に言えば計画性がなかったということだ。

「工藤先公っ！ よろしく頼む！」

「構わん。だが先公は止める。それは一般的な教師の呼び名ではない」

「工藤先生様っ！ 私が作ったアートを譲るから！」

「構わん。だがガラクタはいらん」

所々二人の態度には突っ込むべきところが見られるが、別段此処で頼みを無下にする意味はない。俺の口からは既に何回目か分からないため息が漏れ出ていた。

後に助手として松永も呼んで、4人で勉強会を開くことになった。

俺は完二に。松永は坂崎に。

手伝ってくれた松永には後で礼を言わねばならないな。

【5月3日・火曜日・曇り/晴れ・工藤洗征】

すっかり忘れていたのだがそういえば今日からゴールデンウィークだった。いや、本当に忘れていた。

何せ休みの日と言ってもうちの家族はどこかに旅行へ行こうというような両親でもなく、そして俺の友人たちも連休だからといってはしゃぐような輩でも無い。というか知り合いのほとんどはテスト勉強に息巻いている状況だ。苦労しているとも言える。

つまり俺は暇なわけであるのだが、そんな時に俺の携帯にある人物から連絡が入ったのだ。

小西尚紀からのメール。

商店街にある愛屋で飯を食わないか、という誘いだっただ。

「ランチAセット。半ラーで  
「坦々麺で」

ゴールデンウィークだと言うのにこの『中華料理店・愛屋』には俺

と尚紀以外の姿がなく、どこか平日の夕方時より幾分寂れた雰囲気  
が漂ってきている。  
連休中だからこそ昼時から少し経った今の時間帯では客が来ないの  
かもしれない。

俺たち二人の注文に「アイヤー」という胡散臭い中国人然りといっ  
た返事で返した愛屋の店長に、少々白い目を向けながらその調理の  
様をカウンター席からぼんやりと眺めていた。

俺の隣にはメニューをパラパラと流し読みしながらお冷を一息つい  
た尚紀がいて、なんだか妙な空気が俺と彼の間には流れていた。

中華料理屋では珍しくもない材料を炒める弾ける音と香ばしい匂い  
を感じながら、俺はひとまずどう話し掛けてよいか考えていた。

どんなに綺麗な言葉で取り繕ってみても小西尚紀は殺人事件にあつ  
た被害者の弟。世間的に見れば彼は憐れみを受ける立場であり、そ  
して周りの人間が彼に向ける視線もそういった同情の類のものだ。

しかし前に彼と携帯で話した時に、尚紀はそれを疎ましく思ってい  
る節があつた。

故に、どう声をかけたものか。

どのように声を掛けても俺の言葉が薄っぺらくなってしまふ気がす  
るが、だからといって言葉を選んで会話するのは彼の友人の態度で  
はない気がする。

気がする。気がする。気がする。

声を一つ掛けることにすら戸惑う俺は、自嘲のため息を一つ吐いて  
沈黙が続く彼との間に声を掛けた。

「……………難しいな」

「……………あー……………」

「小西尚紀には小西尚紀の立場があり、工藤洸征には工藤洸征の立場がある。そんな互いの状況を考えれば考えるほど、言葉を選んでしまっ」

「まあ……正直に話してもらえると楽だけどさ……お前、ひでーな少しばかりたどたどしい口調で俺の想いを吐露すれば、尚紀は暗く笑いながら俺を詰った。

しかしどのように切り出せばいいか。何を話していいかとまどっていたのは彼も同じ。顔を見合わせた俺たちは、ただ唇を吊り上げて静かに笑い合っしかなかった。

「連休明け、学校に復帰することになってさ」

「そうか……テスト直前とは、何とも間の悪い話ではあるが」

「ところがどっこい。学校側からテスト免除って言われている。あれだ、まあ、休んでたし」

「……透けて見えるな。どうにも」

「まあな。授業受けてねーからっていうより、精神的に辛そうだからとか思われてる」

眉を顰め、どこか学校側の対応を咎めるように吐き捨てた尚紀だが、そのように言うのであれば、彼は辛くないのだろうか。

そんなくだらない考えなど一瞬にして頭の外に放り投げた。身内が死んで辛いかわけがない。頭を振る様にして邪念を振り払った俺が尚紀を見やれば、彼はどことなく思い悩んだような目でじっと俺の方を見ていた。

「あの、さ」

「どっした？」

「お前なら正直に答えると思って聞くけど……俺って可哀そうか？」

「……世間的に見れば確実に『可哀そう』ではある」

答えるのに躊躇し彼がその問いを俺に投げ掛けた意味を考えようとしたが、それよりも彼が俺の答えを欲している方が大事だと思い、ただ受け答えするだけの機械のように俺はゆっくりと答えた。心が軋む。心に傷を負ったであろう人間には優しさの欠片もない答えだった。

「……俺も正直なこと言っただいい？」

「ああ」

「可哀そうとか思われるの……滅茶苦茶うぜえ」

「……」

ポツリ。呟くようにした言葉でも、それに彼が込めたのは気をただ吐くような呆れではなかった。そんな扱いを受けることに怒りを抱いているような。

正直な話、彼がそのような感情を抱くのもどこか理解出来る。

そう、俺が口酸っぱく坂崎や松永に言っていた『部外者』ということについてだ。

だが、その考えに至った理由やら、だからどうしたと聞くにはこの場には似つかわしくない。じっくりと話をするには、目の前で俺たちの頼んだランチが出来上がり掛けているこの状況は合わない。だから。

「……」

「……この後、空いてるか？」

「空いてる」

「……まずは喰うか」

「おっ」



どこか上の空で返事をする尚紀と、どこまでも平淡な声を出すことに注意している俺。

どちらも、込み入った話をするには距離を測りかねていた。

「今まで話したこともないような奴がさ、姉ちゃんが死んでからやけに俺に話しかけてくる。頑張れだとか、両親と仲良くだとか、しかもいかにも可哀そうな目で」

「そんなこと、当人の俺と両親が一番分かっているに決まっているじゃん。家族の一人が殺されて、母さんたちは夜な夜な泣いて、俺は家族の中で話の合う姉ちゃんを失って、そんな馬鹿みてーな状況でも頑張ろうと必死で、それでも前を向こうと必死で」

「俺なんか泣けてもねーんだぜ？ 意味わかんねーもん、身内が殺されるとか。何すりゃいいわけ？ 泣けばいい？ 犯人に復讐とか？ それとも漫画とかアニメみてーに笑って気丈に振る舞えばいいのか？」

「どいつもこいつも同情って理由でスカズカ入り込んでくる……マジうぜえ」

辰姫神社の境内。賽銭箱の奥の階段に腰を下ろした俺たちは、ただ誰も来ない静寂の中で時を過ごしていた。

鳥の声も、遠くに聞こえる車の音も聞こえなくなった時、尚紀は堰

を切ったかのように次々に心の内を吐き捨て始めた。

周りの人間は、部外者でいられない。その癖、自分を偽善で塗り固めるのは忘れない。

同情、悲哀、憤り。誰にでも分かりやすい表情を貼り付けて、ただ『興味』に走らされるまま土足で入り込む。

結局は自己満足。長閑な街で起こった珍しい殺人事件に関わった話を聞くことで、興味を満たすことだけを求める。

そんな身の回りの反応全てを、尚紀は嫌っていた。いや、呪っていたといつても過言ではないだろう。

姉が突然殺されたという事実には、少年の心はそれを真実とする余裕などあるわけもなく、その残酷な事実を実感させられる前に、周りの有象無象が次々に彼に干渉し始めた。

悲しいの？ 怒ってる？ 恨んでる？ 何て思ったの？

頑張らないとね？ 挫けないでね？ 許せないよね？ これからどうする？

疑問の体裁を取りながら、実のところ有象無象が放つ言葉はどれもこれも感情の強制だった。

殺されたなら悲しいだろう？ 殺されたなら怒っているだろう？

悲しいことがあったから頑張るべきだろう？ 悲しい事があったから前を向くべきだろう？

故に、尚紀は自分の本当の感情を心の底に沈めるしかなかった。

「学校に行くのとかマジで面倒くさい。だってさ、事件あったのとか入学してすぐだぜ？ 知り合いなんて中学からの奴とかしかいね

ーし」

「しかも今までと同じように知り合いでもない奴らが事件について話し掛けてくるんじゃない？ そっちの方がうぜえ気もするけど。感情隠すの洗征みたいに上手い奴いねーから、興味津々な感じを隠そうともせず沸いてくるだろうし」

「マジで、うぜえ」

歯を食いしばりながら絞り出す様に言った言葉は、彼の本心だった。そしてその一部始終を俺はただ黙って聞いてやるしかなかった。どれもこれも俺が口を出すには遅すぎであり、そしてすぐさま解決できる問題ではなかった。

既に俺は、そんなどうしようもない周りの声が現実であると解釈してしまっている。それがどんなにえげつない反応だとしても、当たり前だと理解してしまっている。

だからこそ周りを咎めるよりも、尚紀に変わることに、耐えることを強いてしまっただろう。

それは、友人として、最悪なことだ。

だからこそ、俺は何も言わなかった。言えなかった。

「……悪い。やっぱり、ストレス溜まってるし」

「いや、話を聞けただけでも良かった。俺も……色々考えさせられた」

「普通さー、こういう場合って慰めるとかじゃねーの？」

「すまん……俺はただ聞くだけしか出来ん」

「……………あれだな」

さすがに何も役に立たない俺に愛想でも尽かしたのだろうか。

もしも坂崎なら全身全霊を込めて尚紀を慰めに掛かるだろう。もしも完二なら懸命に言葉を運びながら不器用に励ますだろう。もしも

松永なら……いや、正直あいつは期待できない。  
どちらにせよ、俺は彼に何もしてやれていない。  
目を閉じたまま尚紀の言葉を待てば。

「一番楽かもしんない。ありがとな、マジで助かった」

「……何かしてやれたとは思えんのだが」

「ま、確かにどうしようもないくらい駄目な聞き手だったかもしれねーけどな。それでもあれだ……あー、っと……気が楽になった」

おそらく、彼自身もどうしてそう思ったのか分からないのかもしれない。それでも俺の拙い聞き手でも彼の心の平穩にいくらか助けになったというのなら幸いだった。

むしろそんな言葉を掛けられて、俺こそが無力感から救われていた。

果たして、俺は真実周りの人間よりも経験が豊富な高校生なのだろうか。

老練した対応をすることもできず、経験に即したアドバイスを送ることも出来ず、ただ尚紀の吐露にあたふたとするばかり。

むしろ半端に様々なものを知っているせいで、どっちつかずの状況に陥っているようにも思う。

(こんな状況でも自分のことか)

無理やりに笑って見せる尚紀を笑顔を受けて、俺は彼の友人を名乗ることなど出来そうにない気がした。

第十一梓 ままならない（後書き）

そろそろ主人公のネガティブマインドが鬱陶しくなってきた今日この頃。

さっさと「ペルソナァー！」言わせて覚醒させたい。

## 第十二棒 マウルマワレ

【5月5日・木曜日・晴れ・工藤洗征】

ゴールデンウィーク最後の日ではあるが、別に特別なことをやるつもりも予定もない。強いて言うのであれば、完二の学力アップを兼ねて彼の家にお邪魔しているくらいか。

染物屋でもある彼の家の所々にも、巽屋として有名な工芸品が並んでおり、その中でも繊細な彩りが施された染物は天城屋旅館のお土産として取引されることも多いのだとか。

巽さんにそういった話を聞く機会があると、さすがに裁縫関連の知識には疎い俺に完二がよくちよく注釈を入れながら説明してくれる。やはり不良という形をしていながらもそういったものを好むところは小学の頃から変わっていない。

はたして彼がそういった趣味にきちんと向き合えるのはいつの話になるのだろうか。

さて、一応勉強という名目でこの家にお邪魔しているわけだが、俺の思った通り完二とやる勉強ははかどらない。何せすぐに菓子を喰い始めるだとか漫画を読み始めるだとかで彼は勉強を中断したがるのだ。

さすがに長い付き合いが故に、そういった彼のどうしようもない所は許容出来ているとはいえ、俺たちの目的はテスト勉強。何のために俺がここに来たのか分からなくなる。

そんな俺の叱咤と彼の怠慢が繰り返されていく内に、ふと彼がぼやき始めた。

何やら殺人事件の発生から二週間くらい経った頃から、再び幹線道路の方で暴走族が騒音をまき散らし始めたらしい。勿論のことその近場にあるこの家にも被害は及び、結果巽さんが夜に安心して寝られないとのこと。

全くもって一年前の事件の成り行きと一緒にである。

巽完二暴走族壊滅事件再び、といったところだろうか。

しかし今回ばかりは大立ち回りをしようとする彼を止めなければいけない。何せ義務教育の期間を既に終えている彼に温情の処置が与えられるとは思えないし、そもそも次に事を起こせば二回目だ。さすがに停学、ひよっとすれば退学にまで届くかもしれない。

その旨を彼に分かりやすく説明してやったのだが、何故か彼の結論は「やり過ぎず、ばれずに」の二つに収まってしまった。何故に此处で「やらない」という選択肢が出ないのか理解できないが、彼の鬱憤もそれなりに溜まっているらしい。いくら俺が止めてもそんなリミッターが役目を果たすことも出来ないだろう。

故に俺はただ「やり過ぎるな」と釘を刺すしかないのだ。

連続殺人事件の犯人も捕まっていない今、あまり表で騒動を起こすのは止めるべきだとは思うのだが……暴走族の対処に稲羽署が動いていない所を見ると、子供の火遊びに構っている暇はないのだろうか。

なんとも、悪循環が生まれているような気がして仕方がない。

【5月8日・日曜日・曇り・工藤洸征】

テスト前日に控えた最後の休日。

別段追い込まれた様に机に向かうでもなく、だからといって一日を無為に過ごすでもなく丁度いいくらいにテストへの準備は出来ていると思う。

そもそも高校最初の間試験だ。おそらくはこれから幾度も受けることになる試験の中で、最も難易度の低いような内容だろう。ここは90オーバーと言わずに満点を目指すくらいに貪欲にいてもいいだろう。

そうなるとテストに関係する不安というのは微塵も俺には無いのだが、一つだけどうにも気に掛かることがある。

そう、生徒会に入った時に押し付けられた沖奈高校との会合の話である。

何せそれを聞いた時はまだ一カ月もあるのかと胸を撫で下ろしたわけなのだが、連休やテスト期間の影響で生徒会会議を開く回数が極端なまでに少ないのだ。

勿論一度もしていないわけではないのだが、それでも放送局まで来ると言う本格的な会合の割には此方の意見はまるで纏められていないようにも思う。



毎年こうなのだろうかと思えば、矢崎教頭がこの会合の度に此方の現状を罵られているという話を思い出した。  
成程、確かにこの体たらくでは馬鹿にされるのも仕方がない。

そもそも自由な校風と言えば聞こえはいいのかもしれないが、服装や髪形、果てにはバイトの許可などの事実を並べていくと、どうにも真面目な学校とは言いつらい。

むしろ風紀の悪い学校として受け取られない現状が八高にはある。まあ、だからといってそれを直すほど学校に貢献するつもりなど欠片もないが。

たかだか隣町に罵られただけで、工藤洸征という一人の若造を表にたてる矢崎教頭の器も知れる。どうせ学校のために、というわけでもないだろう。

あれでは今まで生徒会で活動してきた生徒も苦勞しているだろうに。

愚痴と罵倒を繰り返すのはここまで。

おそらくは会合当日も意見の纏まらない八高側のせいであんなになつてしまう可能性も高いだろう。

さすがにそうなればパンダとしてただ椅子に座っているのは忍びない。

色々と明確な意見を考えておかねばな……。

まったく、面倒なことだ。

【5月9日・月曜日・曇り/晴れ・工藤洸征】

テスト初日。科目は体育と世界史。  
世界史の方は所々重箱の隅をつつくような問題もあったが、特に焦ることなく答える。  
その日の帰り際、肩を落として顔を青ざめさせている坂崎を見掛ける。  
どうやらヤマ勘が全て外れたらしい。阿呆め。

【5月10日・火曜日・曇り・工藤洸征】

テスト2日目。科目は数学と国語。  
数学は俺の得意科目であり、何一つ問題は無し。むしろ満点といっ

てもいい出来だろう。

国語は学力云々よりも文章への理解度が求められる。少しばかり手古摺ったが懸念はない。

周りで意気消沈するクラスメイトを見ていると少しだけ鼻が高くなる気がする。

【5月11日・水曜日・晴れ/曇り・工藤洸征】

テスト3日目。科目は倫理と地理。

どちらも暗記科目故、満点が期待される。30分掛からずにテストを終わらせてしまうとさすがに暇だ。無論見直しは怠らないが。

なお、倫理のテスト内容を決めたのは諸岡金四郎先生。校内での評価に変わらず、結構意地汚いような問題が多かった気がする。

【5月12日・木曜日・曇り・工藤洗征】

テスト最終日。

これで最後だと気を抜く輩もいれば、最後の追い込みだと気を引き締める輩もいる。こちら辺に成績の差が出てくるのだろうなと、クラス的光景を眺めながら俺は考え込んでいた。

そんな俺がひたすら机に向かって筆を走らせていたのは、生徒会会合に関する意見書。

果たしてどこまで通るのかは分からないが、きちんと自分の意見を整えておけば焦る必要はないだろう。

今日のテストが終わった放課後にある生徒会に提出してはみるが、会長はどう思っつものやら。

そんなこんなで中間テストは全て終了。テスト期間という重圧から逃れた様に安堵し始めるクラスメイトたち。そんな光景はいくら年を重ねても変わらないのだろう。

小学、中学、高校になってもテスト終わりは晴れ晴れとした表情を浮かべる人で溢れ返るのが当たり前前の光景だ。

坂崎はようやくアートの打ち込めることに歓喜し、松永は吹奏楽への情熱を燃やし始め、完二は家に帰って爆睡し始めるのだろう。

そういえば完二と話をしたときに、やけに彼が俺を避けているような気がした。何か隠し事でもしているような。

まったく……今度は何をしでかしたのやら。

そういえばテスト期間中にも一度話を聞いたり探したりはしたものの、尚紀の姿は無かった。さすがにテストを免除されている身で登校しても、別段やることなど見つかりはしないか。

その事実で関する周りの意見は二つ。同情と羨望。あるいは非難か。何にしても不愉快な話だ。

【5月13日・金曜日・曇り・工藤洸征】

テスト期間が終わり、周りの生活リズムも通常に戻ろうかという空気のなか、俺はうんざりとした感情を隠すことなくだれていた。これからの遊びの予定などを飄々として相談するクラスメイトを見るのが億劫になるくらいに。

何故か。それは勿論生徒会の話である。それ以外に俺が今抱えている問題はない。

テスト期間中にも関わらずに纏めた俺の意見を先日の子徒会に提出してみたのだが、何を思ったのか誰ひとりそれを推敲せずに賛同の意を取り始めたのだ。

俺が纏めの意見を述べ上げていく度に、暗い表情を一変させていく生徒会役員一同。それを見た時点で嫌な予感がしていたのだが。

それでいいと思うよ。工藤君の意見を参考にして。さすが工藤洸征。何一つ疑問を抱くことなく俺の意見に集ってくる様相に、俺は心底吐き気がした。確かに突っ込みどころを極力減らした建設的な意見だとは自負しているが、だからといって一人の若造の意見を鵜呑みにするのは早すぎるだろうに。

果たして彼らは自分で生徒会に入った人間なのだろうか。

むしろ何かの罰で嫌々入れられたような印象を受けてしまう。例えば停学やら内申点やらと引き換えにといった具合に。

内申点の場合は俺も表だって糾弾出来る立場にはいないのだが。

そして結局は俺の意見をそのまま会合に反映させることに決定。文章を読み上げたりするのは会長だが、果たして予想だにしない突っ込みなどを入れられた場合に反論、または訂正したりできるのだろうか。

まるで俺の存在が便利道具扱いされているようで、いや、事実そう扱う扱いなだろう。

どちらにしても不愉快極まりない。

そんな機嫌の悪いということも相まって、誰かに奴当たりしてしまう前にさっさと家に帰ったのだが、その後の夕食の席でテレビに映った映像に俺は再びげんなりさせられた。

二ユーヌの特番として組まれたのはここ最近で稲羽市周辺を脅かす暴走族の特集。けたたましく響くエンジン音やらクラクションを鳴らすその姿に呆れざるを得ないのだが、そんな中に取材班が撮ったと思われる暴走族のメンバーの姿が映し出されていた。

どう見ても、巽完二だった。

目下だけをモザイクで隠されており、声と容姿を丸ごと隠す処理は一切なし。知る者が見れば声を合わせて完二だと証言するであろうお粗末な匿名性に、正直な話怒りを抱いてしまうほどだった。というよりも、あんなに忠告しておいたというのに間抜けにすっぱ抜かれた完二の方にも腹が立つ。

どうせ小うるさい蠅を叩き落とすかのように暴走族をシメに行ったところを撮られたのだろう。そのまま彼を暴走族として扱うテレビ側には怒りすら感じるが、それ以上にあれだけ忠告したにも関わらずこうやって表ざたになった完二にも腹が立つ。

成程、俺をあいつが避けていたのはこらが理由か。

それが映ったテレビを見て苦笑いを浮かべる両親にも気付かず、俺は即座にテレビの電源を落とし、黙々と夕食を口に運んでいた。全くもって今日という一日は不愉快である。

【同日・愚者】

工藤家と比べるとどうしても貧相なコンビニ弁当が並んでいる堂島家の食卓。

瀬多が下宿している家に元々住んでいた家族は家主の堂島遼太郎とその娘の堂島菜々子のみ。口下手な堂島と事あるごとに我慢を強いられた菜々子の二人だけでは仕方がない話であるが、瀬多がこの家に来てからは大分食事の席が明るくなることも多くなっていた。

特に兄としての役割を担ってくれる瀬多の影響は、小さい頃に母を亡くし一人で過すことが多かった菜々子にとって大きなものなのかもしれない。

テスト期間が終わったことで瀬多が菜々子と遊んでやれる時間も戻り、夕食の後は双方の話題が切れることもなく延々と微笑ましい会話のやり取りを繰り返していた。

珍しく早めに仕事を切り上げてきた堂島もその光景をソファに背を預けて、のんびりと眺めている。

どこにでもある幸福な家族の光景。

無くしたものもすれ違いも多い凸凹な家庭ではあったが、この瞬間だけは何一つ欠けていない幸せな家族なのだ。

下宿として世話になり始めてから一カ月。どうにもギスギスとした空気が漂っていた堂島家だったが、瀬多のお陰で大分本来の明るさを取り戻していた。

そんなゆったりとした雰囲気の中、茶の間のテレビが映し出したの



は工藤をうんざりとさせた暴走族の番組。単純な好奇心として菜々は暴走族の意味を瀬多に問えば、彼は少しだけ困ったように笑いながら説明し始めていた。

一方堂島はニュースの内容を少しだけ気にかけていた。何せ彼の職業は稲羽市に勤務する刑事。先月に起こった連続殺人事件が彼の担当とはいえ、公僕についている身でそういった話題を流すわけにはいかない。

そうやって厳しい目つきで見ているのであれば、テレビに映ったのは申し訳程度にぼかされた少年の姿。それを見るなり堂島は頭を掻きながら息を吐いた。

「あいつ……まだやってんのか」

「お父さん、しりあい？」

堂島の零した言葉に菜々が気付いたらしく、目を丸くして首を傾げる彼女に、堂島は言葉を選びながら説明していった。

曰く、仕事の知り合い。

それだけで瀬多は、画面に映る白髪の少年が警察の厄介になったことのある人物だと予想できた。

「巽完二……たかだか中3でここいらの暴走族をシメてたんだが…

…」

「……？ 他に何か？」

「ほら、お前と同じ高校に通ってる工藤洗征って一年生知ってるか？ 結構有名な奴だから噂くらいは知ってると思うんだが」

「優等生の、ですか？」

おう、とそっけなく返事をする堂島に、瀬多はその工藤洗征という生徒の話を思い出していた。

モロキンが事あることに比較の対象として持ちだしていた優等生、

テストや試験といった話題になると必ず出てくる生徒、千枝が頭脳を分けてほしいと言っていた。

大体にして彼の頭に浮かんだのはこんな話だった。

「そいつが巽完二と友人やってるって話なんだが……一年ほど前に完二が暴走族を潰したってのも工藤が命令したって話が一時期出たな」

「黒幕みたいなの……」

「ま、結局は工藤のことを妬む輩が流した噂だったんだが……どちらにしても巽完二の裏には常に工藤洸征がいて、工藤洸征の裏には巽完二がいるってくらいに仲がいいんだ」

「油と水、みたいな関係ではなさそうですね」

「ななこもきいたことあるよ。がっこうの先生がいった」

それまで二人の話を黙って聞いていた菜々子が、テーブルから乗り出す様にして割り込んだ。彼女の話によると、彼女が通っている小学校にも工藤が通っていたらしく、読書感想文やらの学校で受け取る賞状が展示されている所に、工藤洸征の名前がたくさん載っているらしい。

やはり子供頃からの優等生がいるのか、などと既にCMに入ってしまったテレビを眺めながら思っていた瀬多であるが、実際の話、彼も工藤に負けず劣らずの優等生である。

無論それを彼がはつきりと自覚しているわけでもない故に、瀬多はただ単純に工藤のことを凄い子だと評価しているに過ぎなかった。

【5月16日・月曜日・曇り・愚者の集い】

工藤がいつも通りの生活を続けつつ生徒会に失望のようなものを感じている頃、瀬多が率いる特別捜査隊は2年2組の教室にて密談を交わしていた。

特別捜査隊、と名乗る彼らの目的は、稲羽市で発生した連続殺人事件の真相を突き止め、そして犯人を捕まえること。ただ高校生がそれを目的にするにはあまりに火遊びが過ぎる話ではあるが、彼らはその資格を持ち得ている者たちであった。

マヨナカテレビ。シャドウ。そしてペルソナ。

この世の常識では測ることのできない異常に触れ、それを知り、真実を暴く力を持った彼らにこそ、この事件の解決には相応しい。

故にこうして事件の影を見つけては作戦を練るということを繰り返している。

そんな彼らの指針の一つになっているのは、マヨナカテレビに映る人間がテレビの中に放り込まれ、シャドウに殺されてしまうということに他ならない。

そしてつい先日、マヨナカテレビに映ったのはテレビの特集で取り上げられた異完二だった。

常の如く巽完二を保護すべく動きだした捜査隊ではあったが、当人である巽完二は八高内でもよく知られる伝説の不良。どれほど嘘の尾鰭をひっ付けたのかは不明だが、何にしてもテレビに特集を組まされるほどの相手に、メンバーである里中千枝や花村陽介は腰が引けていた。

そんな中、もう一人のメンバーである天城雪子が口を開いた。

「完二君と話すのは無理かもしれないけど、彼の実家の染物屋さんには話を聞けるかも。旅館の付き合いで完二くんのお母さんと今でも付き合いあるし」

「マジで！？ うお〜……それ本人に聞くよりも安全じゃね？」

「ていうかこれから守んなきゃいけないのが、その不良君なんだけどね」

天城の言葉に隠すことなく自分のヘタレ具合を晒す花村に、先ほどまで一緒に腰が引けていたことなど忘れてジト目を向ける里中。

しかしいきなり本人に接触するよりも周りから色々聞き込みをしていく方が、無駄な刺激を与えずに済む。

天城の提案にしばし考え込む瀬多であったが、そこでふと、先日堂島から聞いた話を思い出した。

「確か、一年生の工藤くんが友達だったって聞いたけど」

「工藤って、工藤洗征？」

「あー、それどっかで聞いたことあるかも。稲羽の七不思議みたいな」

「でも、私が染物屋さんに行った時に完二くんと遊んでる場に出くわしたことはなかったけど……運が悪かったただけなのかな」

なんにしても、巽完二という人物について調べる選択肢がまた一つ増えたわけである。

完二の母から情報を得に染物屋に向かうか、それとも友人と噂される工藤に話を危機に行くか。

工藤であれば同じ学校ということもあり、すぐに話を聞くことが出来るだろう。その点商店街まで足を伸ばさなければならぬが、身内である完二の母から聞ける情報は、誰よりも濃いものだろう。

二つの選択肢を前に、瀬多は顎に手を置いてしばし考え込んだ。そこへ里中の一声。

「どつちもいけばいいんじゃない？」

正鵠を射ることに關してはこれ以上ないほどに正確な里中だった。まずは近場である工藤洗征に話を聞きに行くことにした特別捜査隊。名前も知らぬ上級生が4人も一度に訪れるのはどうなのだろうか、などと密かに瀬多は思っていた。

「えーっと、工藤洗征くん、だよね？」

「……そうですが、あなた方は？」

初対面の人間に声を返るのは誰であれただどしくなってしまうもの。

工藤洗征に話し掛けた里中は、あからさまに不審者を見る目をした工藤に苦笑いを浮かべた。

校内で工藤の居場所を聞いて回った捜査隊は、すぐに彼が生徒会室にいることを突き止めた。最初は生徒会の会議でもやっているのかと思ひ出直そうとしたのだが、どうやら一人で何やら書き物をしているのだという話。

それを邪魔するのも気が引ける捜査隊の面々だったが、彼らが背負うのは一人の命。多少はまだ余裕があるとはいえ、ここで次の日を改めるには少々億劫だった。

そして相対する捜査隊の4人と工藤洸征。

工藤にとっては生徒会室に入ってきてまで自分のことを尋ねる集団に、どこか気味の悪いものを感じ、そして嫌な予感をも感じていた。彼の記憶に新しいのは生徒会勧誘として現れた原という男とのやり取り。

無意識に不機嫌になってしまふ工藤だった。

「巽完二さんと知り合いだね？」

「まあ」

「そのことでちょっと聞きたいことがあってさ。ちょっとだけ時間取らせてもらっていいか？」

「……構いませんが」

相も変わらずぶっつきら棒な答え方に、「ひよっとすれば嫌われてる？」などという不安を里中と花村の二人は感じていた。何せこちらは急に友人のことを教えると詰めかける集団である。

そしてそれ以上に相手が噂の優等生であるということへの緊張のようなものがあつた。

「最近、完二くんの様子がおかしいとかそんな話聞いてない？」

「様子？ ……少々質問の意図を理解しかねるのですが」

（あれ、怒らせた？）

「友人である君から見て、なんだか最近変わったな、って思ったことはないか？ 妙にそわそわしているだとか、誰かに呼び出しを受けたとか」

「……………」

目に見えてテンパリ始めた二人を放って問いかけた瀬多の言葉に、工藤はやや考え込むように顔を俯けた。

工藤の一挙手一投足にいちいちビクビクとする花村里中のコンビにはきちんと理由がある。何せ相手は一般人とは土俵が違う天才、さらに言えば空気の読めないと評判の花村でさえ分かるほど、工藤は見た目不機嫌であった。

その上、実のところ工藤はそれなりに長身の男である。183を越える完二ほどがたいがいわけではないが、それでも瀬多と同じくらいの身長ではある。

さらにいえばインテリ然りといった眼鏡を掛けた彼の顔は基本的に大人びて見える。それこそミステリアスな雰囲気醸し出すとして評判な瀬多と同じくらいには。

そんな見た目からすれば、何故か年上である里中と花村にしても何だかビクついてしまう。

ちなみに天城は特にそんなことを思っていない。天然である。

「いえ、ありませんね。変わったというより呆れたことならば、テレビに暴走族として報道されたことでしょうか」

「そっ、か。じゃあさ、完二君の身の回りでおかしなことがあったとかってない？」

「……………何が目的ですか」

「え」

いくらなんでも不用意に彼らは深く聞き過ぎた。

さすがにここまで自分の友人のことを事細かに調べようとする集団を前にすれば、工藤でなくても不信心は募る。

今の彼はそんな不審な行動を受け入れる余裕も幼さもあるわけがなく、むしろ4人の有様に物騒なものを感じるくらいには気が立っていた。

長テーブルに座ったまま話を続けていた工藤が徐に立ち上がり、眼鏡を一度上げて視線を細める。完璧なまでに怒っていた。

「ただ興味を持ったというにはあなた方の質問は少々不可思議だ……そして一般的には不良として知られる人間のことを探るにしては、あなた方の目的が不明瞭過ぎる」

「そりゃ、そうかもしれないけど……」

「友人である俺にも告げられぬ目的があるのであれば、完二本人にも告げずにそうやって周りを嗅ぎ回るのですか？ ……普通に考えれば不愉快以外の何ものでもないでしょうに」

(きつー……)

正論ではある。しかしちょっと聞き込みをしたくらいでここまで怒りを露わにするには少々器が小さい行為だった。

困惑するようにして黙ってしまった4人の手前、工藤がやれやれと言った様に息を吐き、再び椅子に座りなおした。

「いや、すみません。少々虫の居所が悪くて」

「ううん。ちょっと私たちも強引だったかもしれないし。ごめんね」

「そ、そうだよ。工藤君が謝ることないって！」

「ああ、いや……とにかく悪人というわけではなさそうですね」

冷静さを取り戻したように苦笑する工藤に、露骨なまでに胸を撫で



下ろす特捜隊ギャグ担当二人。

どちらにしても空気が少しだけ軟化した中で再び思案する工藤だったが、やはり巽完二の周りで何か変化があったという事実には思い当たらなかつたようだった。

「すみません、どうやらお力になれなかつたようで」

「いや、いいんだ。話を聞けただけでもよかつたよ」

「……しつこく聞いて申し訳ありませんが、何か彼に対する悪事を企んでいるということではないのですね？」

「信じてくれるっていうのはハズいかもしんねーけどさ、心配すんなって」

軟化した工藤の態度に安心したのか、花村がいかにも頼もしそうな笑みを浮かべ、そしてその笑みにまた工藤もどこか安心していているような節を見せた。

とはいってもそれ以上込み入った話をする余裕もなく、元々忙しい身であった工藤に礼を言つて、特捜隊の4人は生徒会室を後にするのだった。

「なんか緊張したな……」

「高校の面接以来かもしんない……」

「ちよつとだけ短慮すぎたかもしんないな。さすがに友人の周りを嗅ぎまわられては機嫌も損ねるだろうし」

「これからちよつと気を付けなきゃね。あ、そういえば次に完二く

んの家に行くんだよね？」

「そうだな」

「つーことは商店街だったか？ おー……ちょっとどっかで飲み物買ってこうぜ。やけに喉乾いちまった」

「あの空間重かったもんねー……本当にあの子うちの一個下なわけ？」

「そりゃ里中が強引に聞き出したからじゃねーの？」

「なっ、花村だって……あんたほとんど質問してなかったじゃんか！ 私が緊張に押し潰されながら頑張っただけ聞いてたのに！」

「はぁ？ あれはお前が勝手に先走っただけだろうが！」

「……じゃ、いごっか」

「いいのか？ 放っておいて」

「当分終わらないと思う」

### 【同日・工藤洸征】

完二のことを詳しく聞きたいなどという珍しい人たちに会ったこの日。

そんな珍奇な人間などあの4人組だけかと思っていたのだが、学校

からの帰り道の途中、俺はまたもやそんな珍奇な人間に話しかけられることになっていた。

「工藤洸征くん、ですね？」

「……そうだが」

夕陽を背に受けて俺の前に立つのは、深い青一色の衣服に身を包んだ小柄な人物。頭に浅く被った帽子も青に統一されているが、夕陽の赤を受けて見えるそれは深い黒にしか見えない。

何だか今日はやけに見知らぬ人に話しかけられると思っていたのだが、問われる内容まで同じとは思わなかった。

「探偵をしている白鐘直斗と申します。少々巽完二君についてお聞きしたいことがあるのですが、時間を借りてもよろしいでしょうか？」

……どうにも、厄介事に巻き込まれているらしいな、完二。

## 第十二梓 マフルマワレ（後書き）

諸連絡。

次回更新時にタイトルを変えますので、現タイトルの『ペルソナ  
ー！』で検索している方はお気を付けください。  
無論、タイトル変更後も元の題名はしばらく残しておきますが。

### 第十三章 義憤、あるいは楔

【5月16日・月曜日・曇り・工藤洗征】

「探偵、ですか？」

「ええ。それでお話を窺いたくて来たのですが……時間的に大丈夫でしょうか？」

「いや……別に構いませんが」

探偵、と名乗った白鐘さんを前にして、さすがに俺も焦りを隠すことに必死できちんと受け答えすることには手古摺った。

何せ完二のことを聞きに来た人間がこうも続き、しかもこうやって訪ねてきた一人は探偵という職業に就く者だ。いくらなんでも話が物騒な方向に向かっていっているようで不安になる。

「巽完二くんの身の回りでおかしなことが起こっていないか聞いていませんか？ 具体的な話でも抽象的な話でも構いません」

「特にそういったことはありませんが……彼が何か法に触れることでも仕出かしたのでしょうか？」

「ああ、そういうわけではありませんよ。ちょっとした捜査の足しになればと思っただけで、彼自身に関して僕が関わることはないでしょう」

とは言ってくれるものの。さすがにそれを鵜呑みにするにはどうにも信用できない。

急に探偵である白鐘さんだけが来たのなら、そういうこともあるのだらう、というだけで流すこともできる。

というか、『僕』？

いや、まあ、先ほど俺の前に現れた4人組のせいで、どこか俺の知らない何かがあるような気がしてならない。

というか、こうなるとあの4人組が一番『怪しい』気がしてしょうがない。何に対して怪しいかなど分からないし、どのように怪しいかなども分からないのだが。

一体何が起きているのだ？ あのテレビに映ったことが発端なのか？

ぐるぐると思考が行場をなくして彷徨う内に、俺は一人深い思考に陥っていた。

俺のことを不思議そうに見つめたままの白鐘さんに気付き、すぐさま謝る。

「すみません、少し考え事を」

「何か気になる点でも？」

さすがに探偵を名乗っているせいか、そうですか、と流してはくれなかった。

俺が気になる点。そんなものははっきりと言って、このように完二のことを嗅ぎ回る人間の方が気になっている。

しかし信用度を考えてしまえば、訳の分からない理由で接触してきた4人組よりも探偵であることを明かした白鐘さんの方が信用出来るか？

「一つ気になるといえば、白鐘さんのように完二のことを聞きに来た人たちがいますが……」

「僕以外に？ ……それは、同じ八十神高校の4人組だったりしますか？」

「ええ。ということとは」

「いや、無論彼らも何か大それたことをやっているつもりはないでしょう。あまりお気になさらずに」

こちらの予想を言う前に苦笑するようにして俺の言葉を遮る白鐘さん。

彼女もどうやら4人組のことは知っていたらしい。ならばますます完二が嗅ぎまわられる意味が分からない。本当に、意味が分からない。

「しかし……」

「不安を煽るようなことをしたようで申し訳ありません。しかし本当に彼が何かに巻き込まれているということや、彼自身が何かをしたということはありません」

「……………」

真つすぐに此方を見据え、本心を吐露するかのように語る白鐘さんの態度に、俺は何も言えなくなった。何せ俺の抱く不安も結局は根拠のないもの。立て続けに同じようなことがあったが故に、大分冷静さをなくしていたのかもしれない。

俺は大きく息を吐き、頭を振って彼女の視線を受け止めることにした。何やら白鐘さんには面倒をかけてしまったようで気恥かしい。

「いや、そこまで言うのなら俺の不安も邪推のようなものでしょう。すみません、あまり力になれずに」

「いえ、こちらこそ急な申し出に答えて頂き、有難うございます…」

…それと、一ついいでしょうか？」

「はい？」

「別に無理に敬語を使わなくて構いませんよ。一応、同い年のようですし」

は？

「同い年、って……未成年、ですか？」

「え、あの、成人していると思っただのですか？」

「いや、未成年で探偵の職業に就くなど空想上のことだと思っ  
ていましたし……ああ、いや、どちらにしても、それは凄いな」

「い、いえ……しかしこの形で成人と勘違いされるのも初めてです  
ね」

「ということは、あれか？ 彼女は……いや、彼は男だったのだから？

これは酷い。俺はどうやら酷い勘違いをしていたらしい。

そもそも白鐘さん、いや、白鐘を成人だと思っただのは探偵と彼が名  
乗ったからだ。いくらなんでも現実にそんな『少年探偵』がいると  
は思えなかった。

しかも成人と決めつけていた俺は、成人と言う前提条件における彼  
の背丈と容姿と声から、完全に女だと思いこんでしまっていたのだ。

「あ、ああ、その、だな、最初は女性の探偵だと思っていたのだが  
……すまない」

「じよっ……ち、違いますよっ！」

「本当にすまない」

さきほどまで冷静沈着然りだった彼が急に声を荒げてしまった。さ  
すがに男であるのに女などと言われれば怒りも沸くか。

さすがにこの件に関しては此方が全面的に悪いと頭を下げざるを得  
ない。

誠意をもって謝れば彼もなんとか落ち着いたらしいのだが、帽子を  
深く被りなおしながら、足早に去って行ってしまった。



これはまずい。さすがに失礼が過ぎた勘違いだったようだ。早足で遠くなつていく彼の後ろ姿を見ながら、俺は完二に関する不安などとうに吹き飛んでいることに今更ながら気がついた。

……なんだか、今日は幾度も調子を崩されているような気がする。

ならば俺の感じていた懸念も勘違いによるものなのだろうか。

さっさと早めに頭を冷やす必要もあるのかもしれない。

【5月17日・火曜日・晴れ/曇り・工藤洸征】

頭を冷やす、とは言ったものの、やはり完二の周りで起こっている妙な違和感が気になつてしょうがない。むしろ一日経って冷静な思考が戻ってくると、余計に怪しく思えてきてしょうがない。

今日も今日とて学校には行くものの、どうにも授業の声も耳に残らず、黒板に書かれる文字の羅列も頭には残らない。

考える。

そもそも巽完二という男が興味を持たれる点と言えば、やはりそのらの不良とは一線を画する『超不良』であるということくらいだ。別段精神的な意味ではなく、喧嘩の強さを揶揄して彼を不良と断ずるが、そんな細かい事情は周りに伝わっていないだろう。

しかし彼に関して知りたがるうとする輩はそんなに多くない。何せ暴走族を一人でしばき上げる豪傑。むしろ関わりたくないというのが一般的な考えだろう。

そして何より、彼らが完二のことを嗅ぎ回り始めたタイミングが一番気になる。

まあ、おそらくテレビに特集として報道された、ということがカギであるのは間違いないだろうが、だとしても興味を抱くほどの内容だったか？

誤報ではあるものの、あの報道が流す影響は『巽完二は怖い男』という印象でしかない。

そこに邪推を挟むほどの情報などなかったはずだが。

そう、もはや完二が嗅ぎまわられているという事実疑問を挟む意味はない。

俺が知りたいのは、何の出来ごとが巽完二という男を興味の対象としてのし上げる要因となったのか、ということ。

本当にあの報道が4人組と白鐘を動かす要因になったのか？

あの4人組はまだ高校生という立場であるが故に、ただの好奇心だと捨て置くこともできるのだが、さすがに探偵という名前を出されてはその奥にあるものまで探ってしまう。

というか誰も彼も質問の内容があやふや過ぎる。

何だ？ おかしなことが起こってないか、などという疑問は。

まるでこれから完二がおかしなことに巻き込まれると言ってい

るみたいではないか。そもそもおかしいこと、とは一体なんなの？  
何かの隠語でもあるまいし。

「わけが分からん」

無意識に零れた言葉に、俺の周りに座るクラスメイトの方が首を傾げていた。

どれほどまでに俺は思考に没頭していたというのだ。いくら授業中とはいえ独り言を零してしまうのは悩み過ぎである。

ここまで悩むというのならば、完二に直接聞いた方が早いのかもしれない。

俺は未だ午前も終わらぬ授業の中で、ひとまずこの話を脇に置いておくことにした。

そして放課後。完二より詳しい話を聞こうと彼の教室へ向かったのだが、何やらそわそわとして物事に手に付かない様子のまま、学校が終わるなりそそくさとどこかへ行ってしまったらしい。  
どこかに急ぐようにして昇降口から出ていく様子を松永や坂崎も見えていたらしい。

「……彼もおかしい、のか？」

「何？　なんかあったわけ？」

「いや、そういうことではないのだが……」

「煮え切らないわね。どうせいつもみたいに深く考え過ぎてんじゃないの？」

部活前に暇を持て余していた坂崎と話をしてみるものの、どうにも俺が考え過ぎだと言って取り合ってはくれなかった。まあ、彼女の言が一番正しい気もするのだが、そうなると探られる意味がやはり不明のままだ。

ならばこちらも考える方向を変えてみる。

完二が興味を持たれる要因を探る、となれば様々な人より完二に関する噂を聞くのがいいだろう。まずは坂崎に。

「一つ聞きたいのだが、完二について悪い噂やおかしな噂を聞いたことはないか？」

「はあ？ あいつが妙に陰口叩かれてるのはいつものことじゃん」「いや、最近になってその陰口の内容が変化したりしたことはなかったのか？ あいつが不良だと裏で言われているのはもはや様式美のようなものだ」

「……中々酷いこと言うわね。まあ、間違っていないけど」

互いに彼をけなすようなことを言っではいるが、残念なことに事実である。

俺の質問に呆れたようにため息をつきながら、しばし思索してくれる坂崎の言葉を待つ。はたして答えが見つかるのだろうかと思えば、彼女はふと思いついたように手を叩いた。リアクションが古いところには突っ込まない。

「確か、マヨナカテレビで見たってやつがいたわね。運命の人が完二だなんてー、って号泣してたわよ、その娘」

「……………その娘だけか？」

「いんや。他にも最近マヨナカテレビを試した奴の中に完二の姿を見たって奴はいるみたい。全くどうなってるのかって話よね。ま、あんな噂に頼ってる時点で運命の人なんて見つかるわけもないけど！」

「マヨナカテレビ……馬鹿らしい、とは思うが」

それなりの期待を以っていた俺は、坂崎の話にどこか肩すかしのよ  
うなものを食らっていた。

何せ一晩頭捻りながら悩み続けた結果が、オカルトにより興味。そんなもの予想できるはずもなく、そしてそんなものに興味を惹かれて動く輩の考えも理解できない。

ということとは白鐘もまたそんなオカルト話に乗って動いているのか？ 探偵の白鐘が？

どうにも彼の印象を考えると、そのような荒唐無稽な話を信じる人間とも思えない。

……なんだか逆に話がこじれているような気がしてしょうがない。

「ま、どっちにしてもそんなに気にすることないと思っつわよ？ 何を悩んでるのか知らないけど」

「む」

「話をややこしくして悩むのはアンタの専売特許だけだね」

「言っている」

吐き捨てるように応えるが、確かに彼女の言葉は俺を上手く表わしているのだろう。どうやら部活に行く時間を過ぎていたようで、時間を確認するなり俺に手を振りながら廊下の向こうに坂崎は走り去っていつてしまった。

一人残され、虚空に視線を彷徨わす。

本当に、俺の勘違いなのか？ 俺の激しい思いこみに過ぎないのか？

俺はこの時、坂崎の言われるがままに自分の不安を無意味なものだと捨て去ってしまった。

もしも、俺が疑問を捨て去ることなく考えておけば、あのようなことになどならなかっただろう。

その日は結局家に帰り、そのまま眠りについたその次の日。

巽完二の行方が分からなくなったという情報が、俺の下に伝わってきたのだった。

【5月18日・水曜日・晴れ・患者の集い】

平日の夕暮れには大型ショッピングモールのジュネスにも多くの客がやってくる。学校を終えて制服のまま暇を潰す学生たち。夕食の献立を浮かべながら食品売り場を練り歩く主婦たち。あるいは仕事を早めに切り上げたスーツ姿の会社員か。

兎にも角にも多くの客の需要を満たしてくれるジュネスは、いつも

と変わらず繁盛の様相を衰えさせる様子はない。

そんなジュネスの屋上に広がるフードコートには、神妙な面持ちを並べて唸る4人の八高生の姿があった。

言わずもがな、瀬多率いる特別捜査隊の面々である。

ちなみフードコートの一角を彼らは特捜本部と名付けており、彼らの捜査が行き詰ったり推理を発展させる時は大抵此处に集まることになっている。

連続殺人事件の次なる犠牲者を救う時にも、此处に彼らは集う。

テレビの中の世界。シャドウが具現化し人を襲うという事実。マヨナカテレビとの関連性。

どれもこれもペルソナ能力に気付かなければ分からない事であり、ペルソナがなければ悲劇を止めることすら出来やしない。

工藤が前に見掛けたいだら・での武具購入も、実のところ彼らの救済に必要なものであった。そして工藤に巽完二のことを聞いたことも、救済に必要なこと。

万全とはいかないながらも、彼らは次なる犠牲者を止めるために奔走したはずだった。

しかし、先日のマヨナカテレビに映ったのは、抑えつけた本心を暴走させて狂ってしまった巽完二の姿。

犯人も方法も時期すらもはっきりとしない。しかし、巽完二が殺人事件の犯人によってテレビの中に入れられてしまったというのは純然たる事実だった。

努力の甲斐なくそれを許してしまったことに、彼ら捜査隊の面々は気を落としてしまっていた。

何せ次のターゲットを予測し、そして当人も情報を集めるということまでいったというのに、凶行を止めることができなかつたのだから。

外付けの丸テーブルを囲む4人の顔は暗く、そして空気は重い。それだけ完二の救済に必死だったという証でもあるのだが、これより救出に向かうという時においてその精神状態はよろしくない。メンバーの一人の花村が頭を一度大きく振って声を上げた。

「過ぎちまつたもんはしょうがねーよ。まだ手遅れになつたわけじゃないんだ」

「うん……そうだね。雪子の時みたいに、まだあたしたちで助けられる」

「今度は、私も戦うから……絶対に救つて見せる」

三者三様の言葉ではあるが、その意気込みは異口同音の決意に違くない。

リーダーである瀬多も、見た目冷静そうに一つ頷くだけだったが、その胸に秘めた思いは誰よりも力強いものだった。

彼らがこれより向かうのはジュネス電化製品売り場の大型テレビ。何の変哲もない日常の一角である其処こそが、彼らの戦場へと繋がっているのだ。

制服の下に隠した装備の確認、ダンジョンに持ち込むアイテムの整理、そして最大の武器となる『ペルソナ』の確認。

どれもこれもゲームの中でしかあり得ないような準備であったが、これこそが彼らの現実。

一通り確認し終え、それぞれが丸テーブルより席を立ったその時、彼らの下に近づいていく一人の八高生の姿があつた。



その男子生徒は救済に息巻く捜査隊に近寄ると、何一つ迷うことなく話し掛けた。

「……少し、よろしいでしょうか？」

「え……あれ？ 工藤くん？」

「お、おおう、どうしたんだよ、こんなところで」

彼らの背後に立っていたのは工藤洸征。学校帰りなのか鞆を手に提げたまま4人の方をじつと見つめていた。

氣勢を削がれた4人それぞれが工藤の突然の訪問に少しばかり慌てれば、そんな彼らの態度に反して工藤の視線はどこまでも冷たい。巽完二の尾行がばれた時に投げ掛けられた怒号とぎらつくような視線とは違い、どこまでも見通してやろうという黒く沈んだ瞳。花村は人知れず冷や汗を垂らしていた。

「今度はこちらから聞きたいことがあって窺ったのですが、時間の方はよろしいでしょうか？」

「うえっ？ い、いいけど」

「巽完二のことで、です。少々厄介事がありましたね。彼についての噂やら評判やらを聞きたいのですが……そういった情報を持っていませんか？ どうやらあなた方はそれに関する情報を掻き集めていたらしいと聞いていますが」

「じよ、情報って……別にあたしたちはそんな……」

工藤が言う質問の主題はそんなことではない。捜査隊の4人はそれを確認するでもなく工藤の発する剣呑な空気から読み取っていた。相手の失言を引き出すような言葉の羅列と、不自然なほどに緩慢な口調。眉を日顰めてしまいそんな態度ではあるが、それを向けられた彼らにはそうされる心当たりがあった。

「……巽完二が失踪したという話、勿論知っていますよね？」

「……ああ」

「彼は、確かに世間的に不良と言われる人間ですが、その実、親や友人に心配を掛けるような男ではない。それなのに、彼の母にも連絡を寄こさず、俺にも他の友人にも言伝はなく、そして携帯すらも通じない」

「それは……」

独白のように語っていく工藤の言葉に、天城は彼の言う巽完二の人物像に心当たりがあった。彼女が子供の頃、まだ完二と多少なりとも話すことができていた時、彼は話の通りに漢気の本筋の通った不器用な少年であった。

そして、そんなことは工藤洗征も知り得ている。

いよいよもって彼の疑惑は全て自分たちに向けられていることを理解した。

「分かりますよね、俺の言いたいこと」

「失踪には俺たちが関わっている、と？」

誰しもが選ぶべき言葉を無くしている中、瀬多総司ただ一人だけが工藤の視線を受け止めていた。受け止める覚悟が出来ていた。

ひよっとすれば、このような状況になることを瀬多は予想していたのかもしれない。工藤がこういつた行動に出る理由も、そしてそれに行きつく頭の良さを持ち得ている。

まずい、と瀬多は顔を顰めるしかなかった。

すれ違いであると声を大きくして言いたいところだが、工藤から見る捜査隊の行動はどれもこれもこれも怪しいものにしか成り得ない。

ごくり、と。

唾を飲み込む音を立てたのは一体誰だったのだろうか。その後を語

らずに瞳を黒く光らせるだけで留めた工藤と捜査隊の間には、恐ろしいほどに重たい空気が流れていた。

誤解である。ただその一言を言う事が出来れば何一つすれ違いなく穏便に事態を終息させることが出来ると言うのに、彼らは秘匿すべきことが多過ぎた。

自分たちにしか使えない救済の鍵。あまりにも常識から外れた異常な真実。そしてその存在。

その事実を並べ上げ、それで納得しろと言われて納得する者がどこにいるのだろうか。

数秒が数時間にも錯覚してしまう中、天城雪子が少しだけ震える唇を開いた。

「多分、なんて言い訳しても説明しても納得できないかもしれないけど……私たちは、完二君を助けない」

「おいっ天城！」

「……助ける、ですか」

いきなり自分たちが秘匿していることに近い事実を吐露する彼女の行動に、声に出さずして目を見開く瀬多と里中、そしてそれに焦る花村。

工藤はただ彼女の言葉を噛み締めるようにして繰り返した。

「今度は、私が助ける」

「何が原因で、誰に、どうやって、そして彼の現状すら説明もなしに、ただ助けるという言葉信じると？ あなたはそう言うのですか？」

「ごめん」

もはや其処には、工藤の来訪に狼狽した4人はいなかった。誰もがその瞳に力を込め、そんな笑ってしまいそうなほど無責任な天城の言葉を誰もが無言で認めていた。未だ、工藤の疑念の視線は絶えず。遠くに聞こえるジュネスの放送だけが、場にそぐわなかった。

「なあ、工藤。お前から見れば俺たちなんて馬鹿の集まりだし、言ってることも分けわかんねーと思うけどさ……本気で、完二を助きたいって思ってるんだ。そして、その方法も俺たちは持つてる」

「……………」  
「遊びとか、悪ふざけじゃねーんだ。頼む、信じてくれ」

誰よりも彼の失踪に、いや、ここ最近の稲羽市における失踪事件に心血を注いでいるのは、そう言って頭を下げた花村であった。彼の胸の奥に抱くその心こそが、彼ら特捜隊のきっかけだったのだから。

沈黙の中、工藤はただゆっくりと口を開いた。

「……………彼は、完二は、戻ってきますか？」  
「勿論だ」

「何一つ失くすことなく、彼は戻ってきますか？」  
「俺たちが、失くさせない」

瀬多の言葉を受けて、工藤はしばし空を見上げていた。此処で4人を問い詰めることに意味がないと悟ったのか、それとも話の通じない英雄気取りの若造に苛立ちを覚えたのか。ただ、4人はそれを見つめるだけだった。

「心配しているのは、俺だけじゃありません。むしろ彼の母親の方

が心を削っています。遊び半分なのか、頭のイカれた狂人の言葉なのかは知りません。ですが、軽々しく助けるなどと言った責任は果たして下さい」

「狂人て……」

「あなたたちの言葉を信じるわけもなく、信じるに値する理由もなく。ですがあなた方の行動を咎めるつもりはありません。百歩譲ってそれが真実だと言うのなら……完二を、よろしく頼む」

「工藤くん……まっかせてよ！ 絶対助けるから！」

未だ工藤の4人に対する認識は胡散臭いものにしか過ぎない。彼らの行動は全てにおいて信用を傾けることができるものではない。

しかし、彼らの語るその決意だけは本物であった。本物であると、工藤は理解した。

少しばかり信用に値する言葉を吐いただけで張り切る里中の姿に、工藤も毒気を抜かれるように呆けるしかない。

苦笑を浮かべるのか、それとも眉を顰めればよかったのか反応に困るうちに、なんだか馬鹿馬鹿しくなった工藤は、そのまま不愉快そうにして4人に背中を向けて去っていくのだった。

「よっし！ もう絶対ぜーったい助けてやるんだから！」

「いや〜でも冷や冷やしたぜ……ま、ちよつとでも期待されてるんなら張り切っちゃうぜ、俺」

「期待、されてるのかな……でも、頑張らなきゃね」

「ああ」

工藤が訪れた時こそはどうなるかも冷や冷やした彼らだが、どうにかそれを取り切ったことで余計に気合いが入ったようだ。里中の張り切る声に続く様にしてそれぞれが決意を新たにしていた。

まだ憂いは数えきれないほどにある。そして不安もまた。それでも連続殺人事件の阻止を続けてきて初めて、メンバー以外からの意思を託された彼らに留まる理由などありはしない。一段と仲間との結束を感じた瀬多は、彼らを伴ってテレビの中へと力強い一歩を踏み出すのだった。

といつても、彼らが見つけた完二のダンジョンの有様はむさくるしい漢の声が溢れ、蒸れるような大浴場。そして禪一丁で危ないことを口走るオネエ言葉の完二のシャドウ。

早くも撤退の2文字を頭に浮かべてしまった彼らは、工藤の言葉を戒めのように思い出しながら先へ進んでいくのだった。

### 第十三棒 義憤、あるいは楔（後書き）

題名変更完了。

少しここで読者のみなさんに質問が。

どうやら主人公くん、覚醒するペルソナの方で原作にないことをいろいろやらかすようです。

例えばオリジナルスキル。例えばオリジナルペルソナ。

まあ、大体の読者のみなさんは予想できていると思うので、もったいぶる意味はあまりないと思い、白状させていただきました。

で、そういったオリ設定まみれのペルソナは、こういった二次小説を読むにあたって許容できるでしょうか？

現実転生、設定捏造を謳っているので、今更感が漂うのですが、ここで一つみなさんにお聞きしたくここにあとがきに書かせていただきました。

オリジナルスキル。オリジナルペルソナ。許容できます？

レシピとしては。

- 1、そんなにチートでもない（作者基準）
- 2、他アトラス作品よりスキルを引用（ちょっとだけ改変してる）
- 3、作者はそれなりに考えている（当然の話）

以下のようになっております。

オリジナルペルソナの方は意地でも登場させたいとは思っています  
が、さすがにスキルの方は作者自身、首を傾げざるを得ないところ。

様々な意見、お待ちしております。



## 第十四卷 疾風怒濤

【5月18日・水曜日・晴れ・愚者の集い】

「邪魔だあ！」

気合い一閃とも言うべきか。花村のペルソナによって放たれた烈風は、斬撃の効果を以ってシャドウたちを切り裂いてゆく。

勿論花村だけではない。里中の足さばきはいつもよりも増してキレがよくなっており、間抜けにも呆けたシャドウを遥か遠くに突き飛ばしたのはこれで何回目だろうか。

その点、天城はやはりとも言うべきか、戦いにおいて少々ぎこちないものを残している気配がある。一度力試しと称して此处とは別のダンジョンで力試しをした経験こそあるものの、未だ一騎当千と評されるほどに力を振るうことは慣れていないようだった。

「ユキちゃん素敵ー！」

足手纏いなのではないか。

苛烈とも言える火焰でシャドウを屠った彼女の心には、自信の無さによる不安がちらりとい見え隠れしている。だが、そんな不安も仲間と一緒に吹き飛ばせる。

奮戦する4人の背後。何だか場違いとも言えるようなヌイグルミから飛ばされた賞賛に、天城はにつこりと笑って答えた。

完二の心象風景を映し出したようなダンジョンであるせいか、此处にはやたらと大型で脳筋然りといったようなシャドウが現れている。

例えばプロレスラーのような大男。例えば贅肉に覆われているがら身体を中心に穴を開けた異形。例えば鉄球を引きずる百獣の王。どれもこれもが真つ向からの物理スキル使用を連想させるような出で立ち。

背後から彼らのバックアップを務めるヌイグルミ、クマから情報を信じるならば、こちらも物理スキルを用いて対抗するのは少々頭の悪いやり方である。

「陽介っ！ テンタラフーだ！」

「任せろ、相棒！」

殴りかかってきた真つ黒な体色の男 闘魂のギガス の攻撃をひらりと避けた瀬多は、間髪いれずに手の空いていた花村に声を上げた。

敵と認識した者全てに混乱効果を与える花村のペルソナススキル。星が回るようにしてギガスたちの周りに纏わり付けば、ギガスたちは揃って訳の分からない行動を取り始めた。

「花村やるじゃん！」

「へへっ……うお、あいつ金ばら撒いてんぞ」

「……拾っちゃおうか？」

「まあ、油断しないようにな」

仲間割れをするか、その場で狂ったように踊りだすか、それとも金をばら撒くか。

何にしても一応は無力化できたシャドウ達の前で、4人はそれぞれ余裕のある表情を浮かべていた。

「くおらー！ 油断しちゃ駄目クマよー」

「分かってるって！ んじゃ花村、ダウンよろしくっ」

「……なんか消耗激しいんだけど、俺」

「それじゃあ、代わりに俺が ティーターニア！」

少しだけ苦い顔をした花村に瀨多は頼もしく笑いかけ、そしてどこからともなく現れた青く光るカードを力強く握りつぶした。

ペルソナの覚醒、もしくは発動のキーとなるカードの破壊。それが果たして本当にキーとなり得る行動なのか、それとも他に意味があるのか。

未だ自分たちの使う力も、そしてそれを向ける敵の正体も不明ではあるが、幾らかの戦いを経験してきた彼らには、そこに挟む疑問はなかった。

瀨多の背後に浮かぶ女神のペルソナは、一切の容赦もない嵐をシャドウたちに放った。

マハガル。疾風系スキルの中では最下級の全体攻撃ではあったが、それまでの攻防とテナトラフーの影響で同士討ちを繰り返していたシャドウたちを一瞬で消し去るには十分だった。

「お疲れさん！ しっかし疾風弱点の敵が多いな、今回」

「やっぱサウナだから、とかそんな話？ あたし的には蹴ってた方が楽だけど」

「いやいや、暑い場所って言ったら普通氷結スキルだろ。炎の弱点は氷みてーな」

「ということは、私、いらない子？」

「ヨースケエ……ユキちゃんをいらない子扱いなんて見損なったクマ！」

「い！？ そんなこと言ってるねーって！ あれだよ、回復役がいなきゃ俺らなんてとっくにくたばってるって、なあ、相棒？」

「誰が欠けても此処までは来れないさ。それにまだ先があるようだ」

し……気を引き締めて行こうか」

戦場において緊張感の欠片のない会話を繰り返す、若干高校生の若者たち。

覚悟が足りないのではないか。彼らの様子だけを注視すれば、そんな身も蓋もない批判が出てしまうのも仕方がないのかもしれない。だがしかし、少しばかりの軽口の後には瀬多の言葉を受けた彼らは、既に戦う者として相応しい貌を浮かべている。

個々の力も高く、ペルソナとシャドウがぶつかり合う事実を受け止め、その上協力し合うことを是とする。

彼らは限りなく理想的な『チーム』であった。

「にしても今日はセンセイたち気合い入ってるクマねー。気合いムンムンクマねー」

「ムンムン言うな。このダンジョンでムンムンは禁句」

「……同感」

戦闘を終え、先へと進んでいく4人と一匹。

そんな中、ポテポテとコミカルな足音を立てながら歩いてゆくクマが唐突に振りかえり、唐突に抱いていた疑問を投げかけた。しかしいちいち余計なことを付け足すクマの言葉に、花村も里中も身震いするようにして肩をすくめた。

クマからしてみれば、彼らがテレビの中へやってきてから、そんな風な気合いの入った雰囲気を感じていた。

里中はしきりと屈伸運動やらステップを踏んだりで準備を欠かさず、花村も新しく手に入れた熟練スパナを黙って見つめ、天城の貌には恐れよりも決意の方が濃く表れている。

リーダーの瀬多に至っては、テレビの中の広場の端にてペルソナの

選出に集中しているせいかな、かなりの時間をただ立つたまま微動だにせずにはいた。

気合いが入っている。

クマの先導を受けながら、瀬多はその言葉の意味を噛み締めていた。気合いが入っているとは言うものの、そんなもの天城を救出する時として滾る位の気合いに溢れていたはずだ。

だが、それに比べても自分たちの気合いの入りようは、いつも以上に遅く思えるほどだ。

コミュニティ。果たして工藤洗征とそれを結べたからなのか。それともより一層特別捜査隊の絆が深まったのか。

どちらにせよ悪くない。あるのかもしれないのか微妙な首を傾げるクマに、瀬多は胸を張りながら笑みを浮かべた。

「助けてい、って思ってる人が俺達だけじゃない……そんなこと当たり前かもしれないけど、やっぱり面と向かってそれを知ることが出来たから、かな？」

「ほえー？ センセイの言うことは難しいクマ……」

「俺達以外にも戦ってる人がいるってこと」

「ホントクマか？ ……………どこにもいないクマよ」

わざとらしく見えるほどに周りをキョロキョロと見まわしたクマの行動に、瀬多も他の者たちも笑って返す。

いちいち分かりやすく自分の喜怒哀楽を身体で表し、常にユーモアを忘れない彼の存在にはメンバーも幾度となく助けられてきただろう。勿論戦闘中のナビもまた戦うには非常に大切なバックアップ。

もはや彼らを止められる敵は存在せず、そして彼らが立ち止まる理

由も今はない。

どどん進んでいく中で前方にシャドウの群れを発見した彼らは、  
気負い一つない頼もしい表情を浮かべながら武器を構えるのだった。

男らしい

ダンジョンの深いところを探索するにつれて聞こえてくる完二の声は、  
大体にしてそんな意味合いに近いことを繰り返して叫び続けた。

勿論その声はごつい巽完二が出すにはあまりに合わないオネエ  
声であり、そしてその言動の根底には『危ない関係』を匂わせる発  
言が多い。

男らしい。男気。男のプライド。

終始して男であることを強調する完二の声に、花村はしきりに首を  
傾げ、そして妙な危機感に身体を震わせていた。

(これのどこが男らしいって言うんだよ……)

もしも本心で男らしくあることを感じ望んでいるというのならば、  
ある意味オカマのように振る舞う彼のシャドウは矛盾している。

男らしくあることを望みながら、抑圧から解放されたシャドウは反  
対の趣向に走っている。まるで彼の心の声と合致しない。

ダンジョンを探索し続け、辿り着いたのは七の湯。階段を降りはじめ、6回目という所。

その一室には今まで出会ったシャドウよりもさらに強い波動を放つ、黒色の体色をしたプロレスラーが待ちかまえていた。

闘魂のギガスをそのまま巨大化させたようなそれをお供に連れ、完二のシャドウは瀬多たちへそれをけしかける。

中ボスとでも言えばいいのだろうか。

熾烈な争いを予感したメンバーは人知れず手に持ったそれぞれの武器を握りしめて迎え撃つ。

しかしその戦いの中でも花村は、やはり完二の態度には疑問を抱かざるを得なかった。

「陽介っ！ デカジャだ！」

「お？ おうっ！」

少しばかり思考に落ちかけたと言う時、リーダーである瀬多から放たれた声に引き戻された花村は、勢いよくカードを斬り壊した。

闘魂のギガスが試みたのはチャージ、リベリオン、タルカジャの補助スキル。瀬多たちに攻められている間も気にせず自己の強化に励み続けたその蓄積は、花村のスキルによって水泡に帰した。

無論、チャージ効果までは消し去ることは出来ない。

しかし露骨なまでの自己強化は、物理スキルの宣言をするようなもの。クマのナビと瀬多の指示で一斉に防御に入った彼らには無駄なことだった。

シングルショット。それなりのリスクを冒して強化されたはずであった闘魂のギガスの攻撃は、その対象であった瀬多を少しばかりの

衝撃で仰け反らせただけ。

歯を食いしばる様にしてそれに耐えた瀬多には、既に獯猛なまでの笑みが戻っていた。

ペルソナチェンジ・ラクシャーサ。カウンタスキル持ちであり、なお且つ物理攻撃に耐性を持つそれを装備していた彼には、ギガス渾身の攻撃でも効果は薄い。

「我は汝……来てっ！ コノハナサクヤ！」

そして時間を掛けておきながら攻撃の対象を瀕死にも出来なかったツケは此処で払わされる。天城の放った強烈な火焰の奔流 アギラオ は確かにギガスをよるめかせ、それに追隨するようにして次々と彼らの猛攻は繰り返された。

そうやって終わってみれば特に疲弊も少なく戦いは終わり、その癖にはそれなりの経験値を持った中ボスとの戦いだったらしく、メンバーのそれぞれはペルソナの成長を噛み締めていた。そうしていれば再び蒸れた室内に響く完二の声。

『ウツホホ、これはこれは素晴らしいファイトでしたねえん。もしかすればもしかすると、彼らはボクの求める愛に応えてくれるナイスガイ達なのでしょうか？ もっとボクを追いかけて、求めて、奥まで……待ってまあす！』

その言葉に誰もがいろんな意味で胆を冷やすしかなかった。

果たしてこのダンジョンに入り込んでから流れる汗は、このダンジョン特有の蒸れるような霧のせいなのか。それとも本能に語りかける危険信号による冷や汗の類なのか。

どちらにしてもいい気分では決してない。彼らは先ほどの完二の声を忘れる様にして頭を振った。



「……もうちょっとつて所かな」

「ボスつばいの倒したしな。さっさと行こうぜ。まだまだ余裕はあるんだし」

「お城のダンジョンで特訓したお陰かもね。敵もそんなに強くないし」

「……早く、助けてあげなくちゃ」

一種の逃避とも言えるとはいえ、此処で気を引き締めることには異論のないメンバーだった。

「……完二くんってホントにこんなこと考えてるのかな」

ふと、誰しもが話題から避けていたことを里中がぼつりと零した。それに過剰なまでの反応を示すメンバー。だが何か言葉を告げようとするものはいなかった。

苦笑うようにして目を逸らすか、それとも気まずい様にして頬を掻くか。

「前の、天城ん時もそうだったけど……やっぱり完全に本心ってわけじゃないと思う。タチ悪く暴走しちまつてるって言うか、すっげー強引に解釈されたっていうか」

「シヤドウってというのはそういうものみたいだからな……陽介も時も、千枝の時も、雪子の時も、あれだけが本心ってわけじゃないだ

るっ?」

「あ、当たり前だよっ! ……うん、『あれだけじゃない』ってこと」

「いろんな完二がいる中で、ああいった方向性の心が暴走したのが今のシャドウ。多分、男の子が好きだけとか、そういう意味ではないんだと思う」

ダンジョン内に響く瀬多の声に、誰もがそれぞれ考え込むようにして沈黙を貫いた。

確かに完二のシャドウはあまりにインパクトが大きく、そして腰を引かせるには十分な性格をしていた。

あそこで気持ち悪いと切り捨ててしまうのも一つの反応だろう。というよりも特殊な趣向を持たない限りはその反応が当たり前でもある。

しかし、彼らはあれが全てでないことは知っている。

故に、いくら突き抜けた性格をしていようと、あのシャドウ奥にある巽完二の本心を深く考えてしまうのだ。

「男らしいっていうけどさ」

「ん?」

「普通に考えれば完二の奴って傍から見れば男らしい奴じゃん。暴走族をぶっ飛ばす強さとか、容姿とか、口調とか。ああいうものに男らしさって奴を感じる人も多いんじゃない?」

「確か、青い服の男の子が言ってたんだよね? コンプレックスがあるかもしれないって」

顎に人差し指を当てて考え込んでいた天城は、ふと思いついたように瀬多に問いかけた。

「男らしいの、嫌だったのかな……」

「で、それがこんな状況に？ いやあ、さすがシャドウ。暴走し過ぎだろ……」

「まあ、まずは彼を助けることが先決だな。悩むのはそれからで、そして彼の持つている悩みだ」

少々深読みするには早すぎたのかもしれない。

この階層の敵を粗方排除したからといっても、考え事をしながら徘徊するのはあまりに拙い。

瀬多の提案に力強く頷いた彼らは、ひとまずその思考を頭の隅に置いておくことにした。

「ぐぬぬ……クマがのけ者にされてるクマ……」

そして真面目な話にはあまり付いていけないクマだった。

「クマ？」

「むむむ……匂う、匂うクマよ……こっちクマ！」

奥深く探索していくほどにクマのナビゲートは困難を極めていた。ダンジョン内に漂う熱気のせいか、それとも誰にも見られたくないほどに完二の心が他者を拒否しているのか。

完二を見つげるためにはクマの先導が必要不可欠である。故に全神経を鼻に集中させて居場所を探るクマの様子に、メンバーは固唾を

のんで見守っていた。

そうしていれば、ようやくにして完二の足取りを掴んだのか、クマは率先してメンバーを先導し始めた。

そして辿り着いたのは、ひと際大きな扉の前。通路の横に漂う青白い蝶は広場へと戻るワープゾーンのようなもの。天城を救出する際に城のダンジョン最奥にあったものと同じであった。

「見つけた、けどどうしよっか？ もし戦いになるんだとしたら、ちよつとだけ今の私たちじゃ消耗が激しいかも」

「まあ、ほとんどノンストップだったからなあ……体力は大丈夫だけど、スキルを使うにはどうにもな」

「リーダー。あたしはキミに任せるよ。どうする？」

彼らの言う通り、少しばかり蓄積した疲労は無視できるものでもなく、そして消耗した精神力、すなわちSPも少ないというのが現状だった。

一日でも早く完二を助ける。その重要性は理解しているが、土壇場になって自分たちが倒れれば意味がない。

自分たちだけが巽完二を助ける術を持ち得ているのだから。

このまま撤退し、万全の準備を整えて完二の救出に向かうか。

それとも一日でも早く助けることに主眼を置いて、今向かうか。

マヨナカテレビに放り込まれた人間が暴走したシャドウによって殺されてしまうのは、外の世界に霧が立ち込める日。つまりは雨の日の後。

外すことのないと評判の天気予報に全幅の信頼を預けるのであれば、6月4日までの余裕はある。

だがしかし、その間にも完二は衰弱し続け、一人このダンジョンの中に取り残され苦しむことになる。何より瀬多の脳裏に浮かぶのは、フードコートで接触してきた工藤と、そして彼の言った言葉であった。

彼の母親が心を削っている

余裕をもって救う。確かにそれはいい言葉ではあるが、それにかまけて無駄に時間を費やすことは愚かということに違いない。救うべきは完二。そしてその救いによって救われる者は多くいるはずだ。完二の母。そして彼のことを心配している工藤洗征。

そういつた考えがぐるぐると頭の中を回っていくうちに、瀬多はあつことを思いついた。

「キツネ……」

「……？ キツネさんがどうかしたの？」

彼の零したキツネとは、マヨナカテレビで戦う彼らに協力を申し出た不思議なキツネの事だった。

辰姫神社を囁とし、まるで人の言葉を解しているように振る舞い、そしてそのキツネが持つてくる葉っぱには疲労回復とSP回復の効果があるという不思議な葉っぱだった。

その分、少々高校生にはきつい金額を要求されるが、彼（彼女？）は随分とがめつい。

「キツネくん、つてあれでしょ？ 広場にいる」

「もしかして総司……あいつに回復してもらって今日中に終わらせちゃおうって算段？」

「でもキツネさん、つて物凄い値段を要求してたような……」

どちらかと言えば難色を示すメンバーたちであったが、それは今日中に終わらせるということについての懸念ではなかった。

彼らがそれに賛同できない理由は、回復に必要な料金が高過ぎるということだった。

何せ此方の消耗具合によって料金が変わるとはいえ、基本的に4万から5万もの大金が吹き飛ぶのである。

マヨナカテレビ探索における資金は、ほとんど瀬多の手によって管理されているのだが、勿論その全てが彼の自腹によってやりくりされているわけではない。

むしろ軍資金の元は、ダンジョン内で襲ってくるシャドウが『何故か』落とす金なのだ。

故に、一度ダンジョンを隅から隅まで探索し、出会うシャドウを片っぱしから薙ぎ払っていけば、およそ回復可能な料金くらいは溜まる。

そして、今回は中々に順調なペースで探索できたせいか、それくらいの資金は溜まっている。

「どうする？」

「どうしよっか？」

「やっっちゃっ？」

しかし、たった1日で完二を救えるというのなら、それくらいの資金が一気に無くなってしまふは、まあ、悪くない。

人の命を救うという現状においては、なんとも間抜けな相談ではあったが、瀬多は決心したようにして、端で飛びまわっている蝶に眼を向けていた。

「いた！」

「完二！！！」

大きな扉を開けるなり彼らの視界に入り込んだのは、自分自身のシャドウを前にして茫然と立ち尽くす巽完二本人であった。

大浴場をモデルとしておきながらまっすぐに伸びた赤絨毯の最奥で、禪一丁のままメンバーの来訪にやおらテンションが上がるシャドウ。眼の前の現実を理解することなく惑う完二を無視して、シャドウはひと際大きな嬌声を上げた。

「来た！ 来てくれたよ、ボクの、キミの望んだ人たちが！！」

「お、俺あ……………」

「もう分かつてるでしょ？ 人を騙して、他人を騙して、嘘を重ねて。嫌いだろ？ そういうの。やりたいことやって何が悪いの？」

「そ、それと、これとは……………」

まるでシャドウの語りは、瀬多たちという観客を待ってましたと言わんばかりの執拗さが込められていた。

意地でも認めようとせずに怒号を上げる完二を嘲笑うかのように金色の瞳を輝かせる。それは、花村の、里中の、天城の時のそれと全くの一緒。

そして完二が否定の声を上げれば上げるほどに、シャドウはその顔を醜く歪めて嗤うのだった。

「女は、嫌いだよなあ……………」

「なっ……………お、お前……………」

「偉そうで、我儘で、怒れば泣く……………陰口は言うチクる試す化けるっ！ 気持ち悪いようにしてボクを……………変人……………変人ってさあ！」

貌だけは醜く歪んでいるというのに、そうやって吠える声は何よりも感情の籠った真に迫るものだった。たとえシャドウだとしても。拳に握り締めるように声を荒げ、そのまま睨みつけるように虚空を見上げたシャドウは、固唾を飲んで見守るメンバーたちに眼を向けた。

「ボクさ……………裁縫が好きなんだ……………絵を書くのも好きなんだ。どう思う？ その怖い女」

「こ、怖いって……………あたしのこと!？」

「どうせこう思ってるんでしょ……………絵を書くななんて気持ち悪い……………裁縫好きなんて気持ち悪いっ……………って」

急に話を振られた里中が慌てふためるのを意に介さず、シャドウはただ気を落としたようにして言葉を連ねるだけだった。

完二は、何も言わない。何も言えない。そして。

「男のくせに……………男のくせにっ……………男のくせにい!?!」

ただその言葉を、完二は痛々しい顔で受け止めるだけだった。いや、受け止めることさえ出来なかった。

本心であり、自分の弱さであり、そして認めたくはない真実だったから。

「男って何だ……………？ 男らしいって何なんだよっ!」



「……………」  
「女は、怖いよなあ……………」  
「こっ、怖くなんかねえ」

強がりだった。

いつものドスの効いた完二の声は形を顰め、ただ駄々を捏ねる子供のように否定するだけ。

まるで耳を塞いで喚く赤子のようだった。

「そうさ……………男がいい……………彼らなら、ボクのことを分かってくれ。洗征みたいに」

「お、お前……………」

「だってそうだろう？ 彼は誰よりもボクを知っていて、ボクを理解してくれて、ボクを認めてくれる。彼の前では、自分の弱さなんて見なくていい」

「ざっ……………けんな！ テメエ、人と同じ顔してふざけやがって……………！」

にたり、と。

一部始終を見ていた瀬多たちが眉を顰めてしまつほどに邪悪な貌で、シヤドウは嗤ってみせた。

そして必死なほどにそれを否定する完二の顔は、誰よりも、何よりも認めたくない一心で歪んでいた。

「キミはボク……………ボクはキミだよ。分かってるだろ？」

「違っっ……………違っ違っ違っ！！」

今にも殴りかからんとするほどの怒りを込めて吠える完二に、後ろで控える者たちの誰しもが、まずい、と感じた。

今にも口を開き、制止の言葉を叫ぼうと思ったのは誰だったのだから

うか。

ただ瀬多だけが、手に携えた居合刀を握り締めた。

「テメエみてえなのが……俺なもんかよ!!」

否定。

故に、シャドウは、解き放たれた。

「ふふ、ふふうふふ……ボクはキミ、キミさあああ!!」

身に纏う瘴気のような黒い霧が濃さを増し、狂乱するかのようにシャドウは声を響かせるのみ。

そしてありとあらゆるシャドウの気配が一点に集まった時、ただ立ち尽くして否定を繰り返していた完二は、操り糸が切れた人形のようにその場に倒れ伏した。

「来るぞ！」

叫んだのはただ一人、どうにもならない戦闘の予感を感じていた瀬多の声だった。

完二がシャドウを否定する様子を抑えるには、此処にいる誰もが完二のことを詳しく知りはない。制止の声にありきたりな説得を添えたところで、シャドウの否定は止まるものじゃない。止めていいものじゃない。

どす黒い霧が爆散し、その中心に佇むのは自我を得た完二のシャドウ。

闘魂のギガス以上に筋肉質な肉体を誇らしげに見せ、そしてその両脇にも似たような姿の大男を従えたその有様は、女という一切を拒絶する心の表れ。

露骨なまでに危ないイメージを加速させる薔薇の装飾が、やけに眼にとまる。

「これが……ううん！ そんなことない」

「これだけが完二の心なわけあるかよっ！ ……あるわけない、うん。そうじゃなきゃ俺が困る」

「花村っ！ 馬鹿なこと言っただけで構える！」

「みんなー、構えー、クマ！」

それぞれが武器を構え、相対するシャドウと4人。そして一匹。

それを見るなり完二のシャドウは憤怒の表情を浮かべて吼えるのだった。

「我は影……真なる我……ボクはジブんに正直なんだよ。だからさ

……さっさとボクの前から消えてもらおうよ！！」

正念場。

瀬多はただ、決意の瞳で見返すのみだった。

#### 第十四梓 疾風怒濤（後書き）

前話でのあとがきで募集したペルソナへ様々な意見、有難うございます。

ここで締め切り、というわけではありませんが、現段階での読者様の意見を尊重して進めていきたいと思います。

そしてまた一つお知らせ。

これより一週間前後、更新をお休みさせていただきます。

まあ、私生活が忙しいとかそういう話ですね。

ご了承下さいませ。

にしても主人公が出ないと鬱度が一気に下がりますね。はたして主人公くん、原作メンバーの空気に馴染めるのか？

## 第十五章 進む、退く

【5月18日・水曜日・晴れ・工藤洸征】

気に入らない。

ぶつける場所の知らない苛立ちが脳を焼き、視界を鈍くさせる。

フードコートから足早に離れ、商品の立ち並ぶジュネスの店内を通りすぎていく。

品選びに気を取られる主婦、声を大きく笑いあう学校帰りの学生、時折俺の足元を通りすぎていく子供。

そのどれもこれもが、俺を腹立たせる。

触れるもの皆傷つける、だったか。

自分が癩癩持ちなどと思ったことはなかったのだが、どうにも俺が今抱いている感情を鑑みれば、そんな厄介な気も俺にはあったのかもしれないと心細くなる。

前を向いているだけで無数の光景が俺の視界に入ってくる。  
不愉快だ。

俺が完二の失踪を知ったのは、彼の母である巽さんから連絡を寄せられたのがきっかけだった。

登録してもいない番号が携帯に浮かび、それに出てみればどこかで聞いたような女性の声。それを巽さんだと知ったのは彼女が丁寧に名乗り出たから。

俺はあまりにも唐突な、何よりも予想だにできなかった人物からの連絡に少しばかり言葉を失っていた。

そして巽さんから語られた、完二がいなくなったという事実。

たまにこういうこともあるから、などと自分を納得させる物言いをする巽さんの声はいつも通り穏やかそうに聞こえて、その実、震えていた。

それは決して軽々しく流してはいけないことだと、その時俺は確信したのだ。

それから俺のとった行動は、そこまで悪手というものでもなかったとは思う。

可能な限りの現状把握を巽さんから聞いた情報によって整え、そして彼に近い者から詳細を聞いていく。

坂崎、松永、そして尚紀。さらには彼のクラスの者にも話を聞くべく俺は駆け回った。

そうやって出てきた話とえば、マヨナカテレビに完二が映った話と、テレビの特集に取り上げられたと言う話。そして白鐘とあの4人の影だった。

どれもこれも真新しい意見は見つからない。

しかし、さらに深い情報を探っていく内に、俺はそれなりに完二に失踪に関係しているであろう人物に当たりを付けることが出来るようにはなっていた。

完二のクラスメイトに聞いた時に出た、あの4人組が完二についてかなり深いところまで聞きまわっていたと言う事実。

それこそ、完二が思い悩んでいることについてだったり、もしくは完二が抱くコンプレックスであったり。悪趣味にもほどがある。

俺はいつの間にかあの4人組みに嫌悪感のようなものを浮かべるよ

うになつていた。

そして、結局は直接話を聞くことが一番早いと考え、彼らの居場所を突き止めればこの様だ。

助けたい？ 悪ふざけじゃない？ でも、詳しいことは言えない？

「巫山戯るな……………」

気付けば俺はジュネスの入口付近で立ち竦んでいた。

大型ショッピングモールであるせいか、多くある出入り口の中でもあまり人の通りが少ない西側出入り口。

ただ一人憤怒の表情を浮かべて拳を握りしめる工藤洸征の姿は、さぞかし滑稽なものだろう。

だが、そうせずにはいられない。

救う？ お前たちは勇者ごっこでもやっているつもりか。

悪ふざけじゃない？ 人が失踪した事実を秘匿して好き勝手動いている奴が何を言う。

ごめんなさい？ ……何に対して謝っているかも説明せずにか？

彼らは、おそらく完二が失踪したという事件の真相に近いところにいる。

犯人、ではない。

彼らの行動も言動も全てが人を嘗めきつたものだが……その意気込みだけは真に迫っていた。そしてそれを、俺は理解してしまった。

失踪したというのなら、何故警察に言わない。

正論だと自負はする。しかし、たかが学生の失踪で警察が即座に動いてくれる保証はない。しかもその対象は警察に眼を付けられてい

る完二だ。望みは薄い。

最低、あのガキ共が助けるとしても、だ。何故に秘匿する？  
被害者は完二で？ 加害者として犯人がいて？ そしてその企みを  
あのガキ共が阻止して？

（それで全てが上手く収まると思っているのか……？）

どれだけ巽さんが心を擦り減らしたと思っている。どれだけ俺が心配していると思っっている。それだけじゃない。完二の失踪に顔を曇らせる人間は少なくない。

話せない訳でもあるのか？ 被害者の家族や親友を差し置いて？

「出しゃばるなよ……ガキの分際で……」

心の内に溜まる黒いものをぶちまけるように吐き捨てた。

俺の知る誰かに会う事も、俺の知らない誰かに会うことも億劫だった。

俺の視界に人間が映るだけで、俺は眉を顰めてしまうほどに。ストレスが溜まっていたり、どうにも許容出来ない物事にぶつかった時に現れる、俺の悪い癖。一種の奴当たりのような感情。

故にそういった気分陥った時は誰にも会わずに家に籠るか、それ



とも人に会うこともない場所に逃げ込むか。  
そんな自分のどうしようもない感情に対処すべく俺が見つけたのは、  
辰姫神社だった。

この神社の管理をされている方には申し訳ないが、辰姫神社は特別な催し事がない限りは誰も近寄らない寂れた場所であり、時折キツネのような鳴き声が響くくらい静かな場所だ。  
気分をすっきりさせるか、それとも思考をクリアにするには丁度良い場所である。

そういえば尚紀と話をした時も、工藤洸征として自己を見つめなおります時も此処に引き籠っていた気がする。  
となれば空っぽの賽銭に金を投げ入れたほうがいいかもしれない。  
俺は長年この神社に世話になっている。

「……………」

神社の弊殿に腰を掛け、組んだ両手で顔を隠す。  
正直な話、顔から火が出るほどの行いだった。

心を律することなくただ意のままに毒を吐き、あまつさえ口から音をもつて吐き捨てるとは……言つていいこと悪い事があるとは言つが、さすがにガキと罵るなど大人気なさすぎた。  
いくら彼らの行動に理が伴っていないとしても、ここで俺が腹を立てたところで何一つ解決するわけもなく。

(やはり、疲れているのだろうか……)

眉を顰め、しばし考え込む。

最近の俺はどうにも自分の思い通りにならないことにいちいち腹を

立て、その度に我慢することなく表に機嫌の悪さを出してしまっている。  
幼少の頃はいくら子供のくだらない悪ふざけを前にしても笑ってられる余裕があったというのに。

例えば生徒会、例えば完二のテレビ、例えば彼ら4人の行動も少し冷静に事に当たる必要があるのではないだろうか。

「……………」

そこまで考えて、俺は深く深く息を吐いた。

坂崎が俺を評するように、俺は自分の中で様々なことを深刻化させる癖がある。さらにはその思考も堂々巡りになって答えが見つからなくなることも。

考えればすぐに答えが出るという便利な頭では決していない。

ならば他のことを考えてみようと思っても、やはり浮かんでくるのは完二の失踪とあの4人組のこと。

そういえばあの4人組、最近までは名前さえ知らなかったが、それぞれ中々に有名な人物らしい。花村陽介、里中千枝、天城雪子、そして瀬多総司、だったか。

花村さんはジュネス稲羽店店長の息子として知られ、天城さんは当然のごとく有名人。瀬多さんは今年から2年2組に転向してきた生徒。ただ一人里中さんはあまり目立った噂を聞いてはいないが……まあ、何にせよそれなりに有名な4人組、と言ったところだろうか。

そういえば完二のことについてはいろいろと探ったものの、失踪の手掛かりではつきりとした物を得ることができたのは、彼ら4人組みとの話で得た情報くらい。

しかもその情報もなんだかわけのわからない主張で塗り固められたもの。俺の調べは事実、彼らと話したことで停滞したようなものだ。ならばこれからどうする？

完二のことについて調べても、これ以上まともな情報が手に入るとは限らない。そもそもあの4人組がおそらくは失踪の真実の到達地点のようなものなのだ。アレ以上明確な情報は入らないだろう。

ならば俺の出来ることと言えば……彼らのことをもつと詳しく調べることだろうか。

あの場は彼らの熱意に引いてみせたとはいえ、彼らへの不信感が失せたわけではない。

あの4人組は一体どのような方法で完二を助けるのか、どういった関係を持っているのか、彼らはどういう評判を得ているのか。

それを調べてみるのもいいのかもしれない。

花村、里中、天城。

それぞれのシャドウが暴走した時も、今回のように大型の強力なシャドウが瀬多たちの前に立ちふさがっていた。

自己の否定によって生まれたそれは有象無象のシャドウとは一線を隔し、そのどれもが瀬多たちを苦しめてきた。しかしそのどれもが基本的には一体だけである。

「うおっ……こりゃ強烈だ」

果たして花村の弱気は、現れたシャドウの数に反応してのものか。それとも嫌なものを連想させる筋肉質な姿に反応してか。

どちらにしても戦う彼らにとっては厄介なものには違いない。

しかも今回の相手は三匹のシャドウと言う初めての戦闘。

そのどれもが強力な相手なれば、当然戦い方も変わってくる。

どのように攻めていくべきか。リーダーとしての判断が試される瀬多は、ただじつと相手側の出方を窺っていた。

身体の縦半分は白黒で分けられた筋肉質な男型シャドウ　ナイスガイ・タフガイ　は、常にボディビルダーのようにマッスルポーズを決め、それに挟まれるようにして佇む完二のシャドウは、手に持った男性記号のような物体を両手に持ったままこちらを窺っている。

(……居心地が悪いな)

相手が此方に攻撃を仕掛けてくる敵で、自分たちは相手に攻撃を仕掛ける敵。戦場での敵味方という観点において、その居心地の悪さ

は当然の話だったが、どうにも瀬多は違った意味での居心地の悪さを感じてしまう。

彼が顔を歪めた時、ナイスガイが雄たけびを上げながら自分のマッスルポーズを誇示し始めた。

ヒートライザ

ナイスガイから放たれた補助スキルは、元々巨大な完二のシャドウをさらに巨大に錯覚させるほどの効果を持っていた。

陶醉するようにして笑みを浮かべるシャドウの顔に、瀬多たちは顔を顰めた。

「あー……クマー……クマー？」

「あのシャドウが今、めっさ強くなってるクマ！」

「陽介、デカジャね」

クマの言葉を受けて瀬多はさらりと指示を飛ばしてみせた。

もはやデカジャ係になっているのではないかと自分の立ち位置に疑問を浮かべる花村だったが、彼の役割は重要だ。何せ相手の補助強化スキルの効果を一度に全て元に戻してしまうのがデカジャなのだから。

「おそらくはあの、ナイスガイが補助だ。あつちを先に倒す」

「分かった！ うおーし、蹴りまくっちゃうかねー！」

「回復と補助は俺と陽介で、雪子と千枝がアタッカーだ。頼んだ」

「おっしやー任せろ相棒！」

「うん！」

たった一度でも相手の傾向に見切りが付けば、それからの彼らの行動は早かった。

それぞれに適した役割を与えられ、それぞれが依って立つよう  
して動きまわる。

## チャージ

一斉に加速する戦闘の中、完二のシャドウが嬌声を上げながら露骨に力を溜め始めた。

「次の攻撃に注意するクマよー！ 危なくなったら注意クマ！」

クマのナビも冴え渡る。

しばし攻防を続けていけば早々に三体それぞれの属性の相性を調べ上げ、前衛で激しく攻撃を繰り返している女子二人に声をかけていた。

途中途中にセクハラめいたジョークを入れるのも御愛嬌。それに反応するくらいには前衛二人も余裕が出始めていた。

相手が何体であろうとも、チームとしての連携ならば瀬多達が一歩も二歩も先を行く。

まるで詰将棋のようにしてシャドウたちが劣勢になる中、完二のシャドウは憤怒の表情を浮かべて彼らに叫んだ。

「自分らだって『変』って思ったクセにつ……心の底じゃ、認めてないクセにつ！！！」

徐々に最初の覇気も失いつつあり、もはや勇ましいポーズすらとることが出来なくなっていた完二のシャドウが、最後の氣勢を吐くとも言わんばかりに叫んだ。

「絶対負けるかあ！！」

その言葉を聞き、瀬多たちは心の底でそれぞれ謝罪の言葉を繰り返していた。

完二の心に巢食うもの。彼らが敵にしているのはそういったものにも他ならない。

だがしかし、完全に敵と認めているわけではない。

何せ、あれもまた完二の心の一つなのだから。

故にシャドウが何を叫ぼうとも、何を語ろうとも、彼らにそれを糾弾する資格はない。そそしてその言葉を抑えつけてはならない。

それは本人が、完二こそが乗り越えなければならぬ自分の弱さ。故に彼がそれを認めなければ、そこに口を挟んではいけない。

ひよっとしたら暗黙の了解のようなものなのかもしれない。

決まって瀬多たちはシャドウとその本人が相對する場では言葉を失う。

それは彼ら自身がその経験者であるが故。いくら外野から正論を投げ掛けられたところで、自分の心の底に抑えつけた感情を目の前にしては、それを正しく受け取る余裕などありはしない。

だからこそ、彼らはただ戦うことによって、受け入れる場を用意する。

暴走したシャドウを鎮め、現実をきちんと認識した本人にその場を任せ、ただ見守る。

彼ら本人、それしか出来ない現状を歯痒く思っているのかもしれない。だがしかし、今はそれしか解決の方法が見つからないのだ。

「来いっ……ペルソナッ！」

瀬多が召喚したのは、キングフロスト。

真っ白な身体を揺らして放たれた吹雪は、瞬く間に完二のシャドウを凍りつかせていく。

身体が氷漬けになっていく中で完二のシャドウが浮かべた表情は、どこまでも悲惨な泣き顔。

ただその最後の顔を見届けた瀬多は一度目を伏せると、まるで最後を見取るような形で武器を振り下ろすのだった。

氷が弾け、崩れ落ちるようにして完二のシャドウは、その身体に纏った黒の霧を霧散させた。

「ち……くしよっ……」

「完二くん！」

倒れ伏した完二のシャドウを見据えたまま戦闘態勢を解かない瀬多たちの後ろ。クマに守られるようにして倒れていた完二が歯を食いしばる様にして起き上がった。



どうやらシャドウが倒れたことによつて目を覚ましたらしい。  
立ちあがる様子も未だふらふらとしていて危ないが、意識を取り戻したことに捜査隊の面々はほつと撫で下ろした。

「待て、天城！ 何か様子がおかしい」

そんな完二の様子に気が向いて駆け寄つた天城に、花村は未だシャドウから目を離さなぬままに声を荒げた。

今までの経験からすれば、こうして打ち倒されたシャドウは暴れることを止め、本人の言葉を聞いて心を受け入れて貰おうと静かになるはずだった。

しかし花村たちの前で立ちあがる完二のシャドウは、未だ生ぬるい笑みを浮かべながら彼らをじつと見据えるばかり。  
誰もが嫌な予感が頭を走つた。

「情熱的なアプローチだなあ……………」

「ま、まだ向かつてくるクマ！ よつぽど強く拒絶されてるクマか？」

にやりと笑うシャドウの様子に対するクマの予想に、誰も再び起こる戦闘の予感に武器を構えた。

が、そんなことを繰り返してもシャドウは止まらない。完二本人が認めてやらなければ、問題は解決しないのだ。

「まあ、こんなにギャラリーいるしな……………」

「ふふふ。見てくれたのは、キミ達だろう……………」

「は？」

「3人とも、素敵なカレになつてくれそうだ」

3人とは果たして誰のことだろうか。  
大きな臉を何度も開け閉めして現実から逃避しようとするクマか。  
それとも自分の発言で妙な展開になったと焦る花村か。さらには眼  
を逸らし始めた瀬多か。  
何にしても、戦闘という緊張感を突きぬけてとても『ヤバいこと』  
が行われようとしていることに、捜査隊の誰もが腰を引いた。

「や、めろ……何、勝手言っただ、テメエ」  
「誰かボクを受け入れて……」

ただ一人、完二だけがその様を苦々しく見続け、シャドウの心から  
の声に言葉を返していた。  
見た目も言動もおかしなことになっていても、その実、彼の心の内  
にあった本心とは。

「ボクを受け入れてよおおお!!」

シャドウの叫びに、完二はただなりふり構わずに駆けだした。  
どうしていいかわからずにあたふたとする捜査隊を押しつけ、力の  
ままに自分のシャドウを殴りつけた。

「情けねえ……こんなんがオレん中にいると思うとよ」  
「完二、お前……」

絞り出したような声だった。  
眼の前で醜態を晒し、それでもなお他人に対して自分の望みを強要  
する様。見てくれがどうかさうい話ではない。男らしいかどう  
かという話でもない。ただ完二自身が思う、人として誇れる行動と  
はまるでかけ離れた姿。

目の前で倒れ伏す自分のシャドウを見下ろしながら、彼は拳を鳴らしながら次々に自分の想いを吐き捨てて行った。

「知ってただよ。テメエみてえなのがオレん中にあることくらいな！」

「男だ女だっというんじゃねえ……拒絶されんのが怖くて、ビビってよ……」

「自分から嫌われようとしてるチキン野郎だ！」

自分で自分を叱咤する。完二の浮かべる怒りや無念といった感情は、何一つ嘘のない本音だった。

名前も知らぬ人間達に自分の弱さを知られ、そして眼の前に突きつけられ、それでも彼は認めぬままにしていることが我慢ならなかった。

「そんなんじゃ、あいつに、洗征に、顔向けできねえだろうが……！」

「ガキん頃からビビってる俺を認めてくれて、見守ってくれて……このままへタレなまままでいらねえ」

「オラ、立てよ……巽完二ともあるう男が、こんくらいでへばってんじゃねえ！！」

どこまでも勇ましく吼えた。

ひよっとすればそうやることでギリギリ眼の前の現実を認めることができるのかもしれない。

ゆっくりと起き上ったシャドウは満足したように頷き、そして光を

放ちながら消えていく。  
そして完二の目の前に現れたのは、瀬多たちが目覚めたペルソナと同じ。自分の弱さを受け入れ、困難に立ち向かうためのもう一人の自分。  
自分の目の前に現れた屈強な姿をしたペルソナを見届けると、完二はそのまま倒れ込んだ。

「完二くん……大丈夫？」

場所はジュネス電化製品売り場の大型テレビ前。  
完二の消耗もあってか即座にテレビの世界より脱出した5人。自分のシャドウを殴り倒すということを仕出かした完二とはいえ、肩を上下させて息をする様は相当疲弊しているようにしか見えない。

天城の心配そうな声を受けて、完二は疲れたように自分を取り囲む人間に眼を向けた。

「じゅんぐらい、どつってこたあ……」

などと強がってはみるものの、もはや顔を上げることすら満足にできない。そのやせ我慢とも言える反応に花村と瀬多は安心したように息を吐き、それからの行動を話し合うのだった。

基本的にここまで疲弊した完二に失踪事件のことを問い質すのはよ

ろしくない。彼はそのまま花村の手によって自宅まで送っていくことに決まり、完二の回復を待つて特捜隊の活動はここでいったん解散することとなった。

相変わらず心配そうに完二の顔色を窺う里中と天城、そして完二の肩を背負ったまま顔を少しだけ歪ませた花村。どうやら重いらしい。何にしても特捜隊のリーダーとして指示してやれるのはここまで。瀬多はようやく安心できたようでゆっくりと息を吐いた。

「おい……」

「あ？ なんだよ、あんま無理すんなって」

今にもそれぞれが帰宅の途に戻ろうとした時、完二が最後の力を振り絞るようにして声を上げた。

「あいつは……洗征の奴は……」

「あーそういえばあいつ、お前のことすんげー心配してたな」

「どうする？ 連絡した方が……あ、あたしたち連絡先知らないし」

「いや、いい。後で、自分で、いれる」

果たして完二は何が聞きたかったのか。

それきり会話することさえ難しくなった完二に問い返す空気でも無く、兎にも角にも事件が未遂に終わったことで安心する特捜隊のメンバーだった。

## 第十五章 進む、退く（後書き）

完二戦はさらっと終了。

物足りないかもしれませんが、まあ、主人公の外の出来事ですので。

なんだか見ないうちに登録数とか評価ポイントとかとんでもないことになっていきますけど、どうやらこの小説を紹介してくれた方がいるようです。

心より感謝いたします。

期待に応えられるよう精進していきますので、これからも応援のほど、よろしく願いたします。

## 第十六棒 終わらない

【5月19日・木曜日・晴れ・工藤洸征】

一晩かけて頭を冷やし、もう少しだけ現状を冷静に見てみようと試みたものの、やはり完二が失踪したという事実は頭の奥深くに重く残っている。

当たり前だ。何せ大事な友人の一人が行方をくらましたというのだから。

果たして、瀬多さんたちはあの妄言を現実に変えるつもりなのだろうか。

変えるつもりなのだろうか。

故にその真実の一端すら明かさないと、腹立たしく思ってしまった。

俺には、何も出来ることがないのだろうか？

そんな憂鬱とも不安とも取れる精神状態で学校に行けば、朝早くより教室の前に佇む男子生徒の姿が見えた。同学年の生徒全てを認識しているわけではないが、その男子生徒は遠目から見ても俺の記憶にない人物。

ふと、彼と俺の眼が合った時に、俺は急速に自分の頭が覚醒しているのを感じていた。

瀬多総司。昨日の、ジュネスのフードコートで対峙した男。

俺は彼をはつきりと認識するなり瀬多さんのところへ駆け寄った。

果たして、完二は。

胸の鼓動がやけに早くなることを鬱陶しく思いながら彼に声を掛けて見れば、どうやらあちらも俺に用があったらしく、傍から見ても冷静ではない俺を落ち着かせるようにして肩を叩いた。

何を、バカな。落ち着いていられるわけもないだろう。

などと少しばかり顔を歪めて見れば、彼から聞かされたのは完二の無事。

俺は、足腰に力が入らなくなる自分の身体を必死に留めるようにして、彼の話が朝礼が鳴るまで聞いていた。

本当に、身体から力が抜けるなんてものじゃない。

どうやら完二の身柄を確保した後に彼の自宅へきちんと送ってやったらしく、瀬多さんの言葉を信じるなら今日か明日にも俺の携帯へ完二から連絡が入るだろうとのこと。

本当なら即座に此方から連絡をとりたいのだが、完二は酷く疲弊しているらしく、あちらの体力の回復を待った方がいいだろうとのこと。

ほっと胸を撫で下ろす一方、俺はやはり彼らの……瀬多さん達の行動に疑問を寄せてしまう。

助けた方法も秘匿。失踪という事態の詳細も秘匿。何もかも秘匿。何故、彼らはこうにも秘匿するのだろうか？

完二の救出には二心なく感謝の念を感じている。だが、そこまで至る経緯に関しては、何一つ信用を傾ける理由が見つからない。疑問の視線を投げ掛けたまま黙る俺に瀬多さんはただ一言。

すまない、と。



表だけの謝罪ではなく、本当に心から思っているだろうその謝罪は、俺の問い縋る意思を折る。頭を下げ、此方から声を掛けるまで脳天を俺に見せたまま動かないその様を見せられては、まるで此方が悪人のようなもの。

いや、おそらくは俺も、そして彼らも悪人などではない。

どちらも完二の無事を願う行動に移した者。無意味にいがみ合う必要はない。

どうすればよいのだ。

上っ面の心では彼らの行動を許し、ただ完二の無事に諸手を上げて喜ぶ自分がある。

だがその奥底では、彼らへの不信感は留まるところを知らずに渦巻いている。そして、何一つ説明をよこさない彼らへの不信感は正しいものだ……と思う。

ならばどうするのだ。

これ以上彼らに噛みついて？ 真実の提示を執拗に迫って？ 他者の秘密を追い回して？

それで満たされるのは いや、違う。

なんだ、これは。

まるで俺は、彼らが完二を救ったことが認められないような、完二が彼らに手によって救われなければよかったと思っているような。

俺は苛立っている様を見せぬように、早々に瀬多さんとの会話を切り上げた。

何もかもが意味不明だ。

……まずは完二からの連絡を待とう。

「で、身体はもう大丈夫なのか？」

『おう、わりいな……あれだ、その、心配かけちゃった』

「……いや、いい」

やっと完二より連絡が入ったのは、学校が終わり家に帰る道中のことだった。

遠くに見える夕焼けが道路脇に広がる田んぼを鮮やかに照らす、なんとも電話に耳を傾けるには似つかわしくない田舎の風景の一部に俺はいた。

唐突に制服ズボンを震わせる携帯に気付きその画面を見やれば、何日ぶりかの『巽完二』の文字。いや、数日ごとに連絡を取り合うほどべったりなわけでもなく、そして完二自身携帯の扱いに疎いのでそう気にするわけでもないのだが。

しかし俺は、その画面に映った文字にらしくもなく心を躍らせてしまったのだ。

やはり、どこかで瀬多さんの語った無事という言葉を信じていない俺がいる。

故に俺はこんなにも喜んでしまったのだろうか。

「しかし、事の次第が俺には見えていないのだ。何があった？」

『あー……………』

「言いづらいことならば……まあ、不本意であるが」  
『いや、ちげえ。そういう、わけじゃなくてな』

携帯の向こう側で妙にたどたどしくなった完二に、俺は無意識に首を傾げた。

少々の沈黙の中、ただ俺が地面を叩く靴の音が響く。  
遠く、車の走る音が俺の耳に届いた。

「……何だ、何があった」

『……すまん。言えそうにもねえ』

幾度、その言葉を繰り返し返し聞いてきたのであろうか。

初めは生徒会室での瀬多さんたち、次は学校帰りの白鐘、再びフー  
ドコートでの瀬多さんたち。そして、今しがた聞いた巽完二の言葉。

どいつも、こいつも      どいつも……こいつも。

露骨なまでに吐いたため息は、携帯の向こうにも届いていたらしく、  
それを聞くなり完二は慌てながら言葉を取り繕った。

『あ、いや、洗征が俺のことを心配してたっていうのは、あいつら  
から聞いているっつーか』

「あいつら……？      ああ、瀬多さん達のことか。一応言っておくが  
彼らは先輩だぞ？」

『マ、マジでかつ？      そ、そうか……先輩だったのか……』  
「何だ、罪悪感を抱くほどに世話になったのか？」

俺の問いに、完二は黙るのみ。どうやら世話になったらしい。

ということ彼らが完二を助けるといふ決意は本物で、助けたとい  
う話は真実だったらしい。ならば隠すことなくそう言えばいいもの

を。

果たして俺は、黙る完二と隠す瀬多さん達のどちらに苛立っているのだろうか。

……まあ、どちらもだろうな。

再び吐いたため息は、さきほどよりも重く、そして濃いものだった。

「君がいない間、一応君のことは単なる家出ということとで処理されている。巽さんには……親御さんには何と言ったのだ？」

『いや、うちのババアは……』

「阿呆が。俺よりも君を心配していたのは親御さんだ。理由を話す話さないにしろ、きちんと謝るなり何なりしておけ」

『……おう、分かった』

少々怒気を込めて吐いた言葉に、完二の方も何か思う事があったのか、戸惑うこともなく了承してくれた。

というよりも俺の言葉に反発していないのがやけに新鮮に感じられる。完二は良くも悪くも自分の価値観だけでものを考える人種だ。俺の言葉に多少なりとも正論染みたものが混じっているとはいえ、ここまで素直に従う男だっただろうか。

未だ彼の姿は見え、顔色も知らず、ただ耳に聞こえる彼の低い声が聞こえるのみ。

ただそれだけで『彼が変わった』などと思う理由など薄過ぎるのだが……どうにも違和感が拭えない。

「何があつたかは聞かない。聞かぬままでいてやる。だが筋は通せ。俺以外にも心配している者はいる」

『お前以外……？』

「尚紀に坂崎、松永。女性に礼を言うなど君の柄じゃないかもしれ

ないが、せめて尚紀にくらいは連絡を入れてやれ。いいな？」  
『あいつらが……いや、あつ……と。坂崎達にも、礼は言う』

その言葉が俺に齎した驚愕は如何ほどのものだったのか。完二が途切れ途切れに、そしてごく小さく呟いた一言に俺は足を止めざるを得なかった。

あの完二が、坂崎達に、女性へ感謝の念を。もう一度聞き返したかったが、止めた。彼は二言を好む男ではない。

故に、彼と俺の間で妙な沈黙が続いてしまった。

どうにも居心地の悪い空気。所詮携帯越しの話であるというのに。

「あー……いや、それでいいだろう」

『お、おっつ！』

気恥かしさを誤魔化すためか、携帯越しの返事はやけにはりきっているようにも聞こえた。

なんだか、調子が狂う。此処は彼の安否を確認しただけに留めるべきだったか。

俺は完二に問い質したい多くの疑問を飲み込み、そのまま会話を終わらせようと口を開きかけた。

そして、再び完二の言葉に遮られる。

『あ、あと、あれだっ！ その……ありがとうな』

「はっ？」

『き、聞くなよ！ テメエはただ黙って受けてりゃいいんだっつもの』

「……………切るぞ」

そのまま俺は携帯の電源を静かに切った。途中で携帯越しに怒鳴る

声が聞こえた気がしたが、聞こえない振りをして適当に切ってた。

足を止めたまま道路の脇で立ち竦む俺の頭に浮かぶのは、ただ純粋な疑問。身の回りで連

続して起こる不可思議なことへついての、単純な疑問。

何が起きているのか、何一つ見当もつかない。

完二の変化と失踪に因果関係はあるのか？

自分の領域外で起こる変化は、気に入らない。

全ての真実を手の上に置こうなどと思うほど傲慢ではないと……思うのだが。

思うの、だが。

心は晴れない。

まるで蚊帳の外に放り出されたような気分、俺はただただ拳を震わせるのみ。

完二は彼らに救われた。重要なのはその一つだけ。

なのに、俺の心に渦巻くものは

【5月21日・土曜日・曇り・工藤洸征】

完二の無事が確認され、変わりなく忙しい日常に俺の心も次第に荒れることが少なくなっていく。

友人の失踪、という事件を目の当たりして平静を保てるほどに俺は頑丈ではなく、そして無関心を気取れるほど人でなしでなかったということだろうか。

どちらにしても一般人である俺の心を乱すにはあまりに大き過ぎる事件だ。

故に、その反動も大きい。

完二の無事によって気が抜けたのか、俺は自分のスケジュールやら何やらをすっかり頭の外へ放り投げてしまっていた。

例えば、生徒会における他校合同の会議についての準備だとか、先週の間テスト発表における俺の成績だとか。

成績なんぞは特に注視するところもなく、当然のように学年でトップを取れた。これはいい。別に今更喜ぶことでも自惚れることでもない。

しかし生徒会の方はさすがに気を抜き過ぎた。何せ会議が行われる日は今より4日後の24日。草案の大体は出来上がっているとはいえ、それで全てを会長に委ねてしまうには少々危険極まりない。

それに気付いた今日は生徒会が開かれる木曜日。不幸中の幸とでも言うべきか、最後の話し合いにおいて生徒会長と色々話しておかな

くてはならない。

相も変わらず会合に直接関わり合いのないその他大勢は、日和見の体勢で俺の草案に全幅の信頼を預けているが、所詮対岸の火くらいにしか思っていない輩の評価など顧みる意味などない。

そこらへんを会長の新田さんはきちんと考えることができる人であり、周りのぬるま湯のような言葉に揺れることなく草案の推敲に付き合ってくれた。さすがに生徒会長である人間はあのように墮落するような人物ではないか。

結局のところ会合に参加するのは書記の原さんと会長の新田さん。そして副会長の藤堂さんに……まあ、それなりに人数はいるのだが、どうにも矢表に立つのは生徒会長の新田さんくらいらしい。

さて、そんなやわな会議で終わればいいのだが。世間の高校生がこういった行事の参加に意欲的でないことなど知っているが、だとしても今回は放送局も来るとい話。カメラを向けられて怠惰に取り組む輩などそうはいないだろう。

どうしようもなく、面倒だ……が、自ら生徒会に入った故に致し方なし。

これは俺が負うべき責任だろう。





ばおかしな事件だ。

最初の山野真由美然り、次の早紀さん然り、電柱にぶら下げるといふ時点で犯人の異常性がよくわかる。なんらかの見せしめ的な意味があるのか、それとも殺害方法に関係があるのか。

どちらにしても殺人を犯す狂人の思考など俺が読めるわけもなく、そもそも早紀さんの死んだ原因とて第一発見者故の口封じと信じられていますが、果たして本当なのかどうか。

そもそも、現実問題として電柱の上に人をぶら下げられるものなのか？

周りに足場があるマンションのベランダやら屋上の手すりなどにはぶら下げられるかもしれないが、足場など何一つない電柱だぞ？

電柱自体を一人担いだ人間が登り、そしててっぺんに人をぶら下げる？

どこの超人だ、それは。

いや、被害者が女性ということを考えれば不可能でも無いのか？

……所詮片手間の推理が事件の真相に行き届くわけでもなく、俺はくだらない思考をすぐさまシャットダウンさせた。無意味な思考だ。

そもそもこのような番組を見るから余計なことを考えてしまう。

暴論とも勝手な持論とも言えぬものを展開するコメンテーターの番組から、リモコンを1、2度押してチャンネルを変える。

そうやっていけば、やけに軽快な音楽がテレビより流れてきた。

時価ネットたかた。

妙に中毒性のあるテーマソングで有名な昼時の通販番組であるが、

つい前に見た時はどうにも一般向けではないコアな商品を取り扱っていたような気がする。

まるでいただたら・で売られる物騒な武器に類するものや、どう考えても身体に悪そうな名前のサプリメントやら。

テーマソングも怪しい。オネエ言葉を喋る司会の田中社長も怪しい。商品も怪しい。

怪しいづくめの番組ではあるが、何気に商品を紹介する度に注文が殺到する人気番組らしい。怪しい物に眼がない視聴者でもいるのだろうか。

今回紹介された商品は『アディオスシューズ、ダイエットフード・真を2つ』と『緊急医療セット、傷薬を4つ』らしい。前者は単純に商品の正体が不明。後者はいちいち通販で販売する意義が問われるような商品。

本当によくわからん番組である。

無論、注文などするわけもない。

確かに田中社長の語り口は購入欲を沸かせる素晴らしいものがあるとは思っのだが。

そもそもアディオスシューズとは何だ。何にアディオスするのだ。

【5月23日・月曜日・雨／曇り・患者の集い】

「う、ういーっス」

雲ひとつない青空、とは言えない曇天が頭上に広がる八十神高校屋上。午前中に少々雨が降ったためかそこにはところどころ水たまりのようなものも見え、外壁を囲む金網には水滴のようなものもちらほらと。

しかし人が腰かけるにはちょうどよい足場のようなところの水気は大分乾いているらしく、実際にそこへ腰を下ろしている人物もいる。

例えば、特別捜査隊の面々と巽完二など。

巽完二がテレビの中へ放り込まれてから一週間も経っていないのだが、彼は元々体力のある人間でもあり、工藤が急かしたせいもあってか今回の救出劇に掛かった日数は僅か一日のみ。

そういった面でも考えれば、彼の回復がいつもより早かったのは当然なのかもしれない。

となれば、捜査隊の面々も彼の回復には喜び、そして新たな情報を得られるのではないかなどとも期待した。

確かに彼の救出はその命を救うためにとという理由もあるのだが、それ以上に事件についての情報を集めたいという望みも多分にある。

誘拐時の状況。それに準ずる心当たり。または犯人の顔など。

実際に被害に遭っている天城雪子からの情報があやふやであったために、おそらくは同じ方法で誘拐された彼から得られる情報は少な

いのかもしれない。それでも捜査隊はほんの僅かの情報でさえも欲していた。

しかし結局のところあまり有力な手掛かりは見つからず。完二の話もテレビという異様な空間に放り込まれた影響なのかはっきりとした発言が少なくなく、どれもこれもはっきりとした証拠とするのは難しい。

というよりも完二にとってはその過程で自分を見つめなおしたことが重要である。自ら弱い部分を見つめ、それを受け入れる。望まぬ融解によって得られた機会ではあったが、それを瀬多たちに隠すことなく話していく様は非常に清々しいものがあった。

「あーと。もしかして先輩ら、探偵みてーなことやるうっての？」

完二と捜査隊の面々が言葉を交わしていく中で、完二の疑問は当然の帰結とも言えた。

所々彼らの会話の中に含まれる連続殺人事件に関する考察めいたものや、はっきりとした手掛かりが得られないことへのもやもやとした苛立ちは、普通の高校生が抱くものとしては真に迫り過ぎている。

完二の質問に否定することなくあっさりと答えた里中の言葉に、完二はふつつつと燃え上がる何かを感じていた。

「なら、オレも頭数に入れてくれないスか？」

何一つ気後れなく捜査への協力を申し出る完二に驚く瀬多たちではあったものの、実際に考えればペルソナ使用でもあり、単純な戦闘力でも期待出来る彼の参入は非常に嬉しいものであった。

事件に巻き込まれた借りを返すと意気込む完二の目的は、助けてくれた瀬多達には恩を、誘拐などという舐めたことをしてやった奴に

は鉄拳を、と言ったところだろうか。  
どちらにしても彼の義理固い心根に走らされた結果なのだろう。

完二の参入に捜査隊の面々は喜び勇んで歓迎し、此処で新たなメンバーが加わることとなった。

が、しかし。

そこでふと天城が顔を曇らせたままに口を開いた。

「あ、でも……洗征くんのこと、大丈夫かな？」

「洗征？ あいつが何かしたんスか？」

「うーん、とね」

天城の懸念は、工藤に自分たちの活動の一端を話してしまったという事。そもそもその発言の発端も天貝自身によるものであり、彼女も少しばかりそれを気にしていたようだった。

徐々にその一連の流れを説明される完二の顔にも苦いものが浮かび、どうしてよいか悩み始める捜査隊。

何がそんなに悩ませているかというところ、工藤洗征が、捜査隊の活動に並々ならぬ不信感を抱いているという事実である。

確かに完二を助けることは出来た。だがその際に彼に話してしまった情報はともすれば事件に巻き込まないとは言えないもの。そして、完二が厄介事に首を突っ込んでいると知れば、友人である彼はそれにいい顔をしないだろう。

「工藤くんの様子、どうだった？」

「やっぱり信用とは程遠い、かな。完二のことを助けたって知らせに行った時も、結構きつい眼で見られてたような気もするし」

「まあ、分からなくてもないな。殺人事件捜査隊ーなんて傍から見た

ら危なつかしく見てらんないだろうし」

「の割にはあたしたち、結構人目も気にしないで自由にやってるけどねー……」

善意での行動である、というのが彼らの悩みどころである。

そして捜査隊から見た工藤の評価も世間のそれと変わりなく、彼の察しの良さは恐るべきものがある。このまま隠して行動するとなれば、何かと不都合が起きてしまうだろう。

「少し……考えてみるべきなのかもしれないな」

「私たちだけじゃなくて、他の誰かに教えるってこと？」

「外部の協力者、ということになるかもな。さすがに警察とか大きな組織にテレビのことを言っても信じて貰えないし、実際ペルソナがなきゃ対処しきれないだろう」

「そう考えると дай なら、の親父さんって特別かもしんねーな。武器とかいっぱい買ってたのになんとも言わねーし」

「結構少ないよね。あたしたちのやってることをわかってくれて協力もしてくれそうなの人って」

腕を組んでみたり、顔を顰めてみたり、それぞれ考え込むようして悩み始める面々に、完二は決心したようにして口を開いた。

2年生4人が頭を悩ませていることも重要だが、やはり完二には工藤のことの方が重要である。

そも、この問題は自分自身がどうにかしなければいけないことであるという責任感のようなものが完二にはあったのかも知れない。

「オレがなんとか説得してみるツス。あいつは、そんなに頭の固い奴でもねえし」

「いや、頭が固いとかってレベルの問題じゃあないと思うぜ？俺らのやってることって、それなりに危ないことだし」

「それに、完二君が工藤君を説得つていうのも……」

「だからって親友を巻き込めねえ……心配しなくて大丈夫っスよ。絶対説得して見せるっスから」

何気に酷いことを言いかけた天城であったが、完二の意気込みようを見ているとそれ以上他者が入り込んではいけない何かを感じてしまふのだった。

どちらにせよ、不信感を持たれている捜査隊の面々が説得にいったところで効果が表れる可能性は低い。ならば親友と誇る完二自身に任せるのは妥当な判断である。

力強くガッツポーズを見せる完二に一抹の不安を抱えてしまふ4人ではあったが、今は新たな仲間の参入を喜ぶべきである。

そんなこんなで特捜本部へと招待された完二は、戦いの渦に飛びこんでいくこととなった。

【5月24日・火曜日・曇り/晴れ・愚者】

「ただいまー！」



暗くなつた堂島家に菜々子の嬉々とした声が響く。彼女が普段よりも一段と明るく、そして機嫌がいい理由は玄関に入ってくる二人の男の姿を見れば分かるだろう。

堂島と瀬多の手にはジュネスと大きく書かれたビニール袋が両手に二つ。どうやら今日は3人一緒に買い物に行つてきたらしい。

「ごはん！ ごはんたべよー！」

久々にお父さんとお兄ちゃんとの外出ですつかり機嫌をよくしてしまつたのか、既に帰つてきているというのにはしゃぎ回ることを止めない菜々子の姿に、瀬多と堂島は苦笑しながら顔を見合わせた。

堂島家の家訓なのかどうかは微妙なところだが、一度に大量の買い物をして冷蔵庫に詰め込むのはいつものこと。久々に惣菜ではなく瀬多の手によつて振るわれた夕飯に、堂島も菜々子も顔を綻ばせた。メニューはヒラメのムニエル。菜々子が好きな魚の料理ではあるが、果たして普通の高校生に作れる料理なのか。瀬多総司、工藤洸征に負けず劣らずの規格外であつた。

そして夕飯の終わった休憩時、ソファアに座つたまま盛大にげっぷをする堂島に注意する菜々子の姿を眺めながら笑う瀬多の耳に、どこかで聞いたことのあるような声が聞こえてきた。

彼が振り向いた先にあつたのは堂島がなんとはなしに見ていた地方のニュース番組。

『確かにこの会合が価値あるものであつたことは確かですが、これによつて決められた物事に取り組むのは、我ら高校生全体に関わることです。話し合いだけに留まらずきちんと行動に移すこともまた大事なことでしょ』

何とも堅苦しいことを言う、などと一時の考えをもった瀬多であったが、その画面に映る男を見て目を見張った。そこに映っていたのは、瀬多たち捜査隊とは妙に確執ある関係となってしまう工藤洸征の姿だった。

『無論私もこれだけに満足せずに地域発展に貢献できればと思っています。とはいえ、それに注視するあまり学業を疎かにするわけにもいきませんが……どちらにせよ、小さなことからでも取り組みむことが大切であると考えています』

インタビューの途中から目を向けたためか、それきり彼についての放送は終わってしまった。そういえば、と瀬多は、八高の生徒会がいろいろと今回の事について動きまわっていたことを思い出した。

しかし、それにしてもテレビに映った工藤の姿はなんというか、辛辣なことばかりを言う姿を見てきた瀬多にとっては新鮮な姿だった。とはいっても本来ならばあれこそが優等生たる工藤洸征の本来の姿。彼の凜とした受け答えに内心賞賛の声を上げながら、瀬多は背後から投げ掛けられた声に振り返った。

「さすがに優等生ってところか……なんとも胡散臭い気もするが」

「工藤洸征、ですか」

「おう。ほら、覚えていないか？ ……いや、まあ、いいか」

「……覚えていますが、直接話をしたわけではありませんしね」

堂島の問いかけの本当のところは、工藤と瀬多が初めて互いの姿を見たであろう場面のこと。

一カ月も前、山野真由美殺人事件の現場となった場所で仕事をしてきた堂島と、そこを通りかかった工藤の話であり、その後瀬多もま

たそこを通りかかっている。

無論夕飯を終えた後のひと時であるここで殺人事件がどうだの言うのはさすがに空気を悪くしてしまう。

二人の妙な会話に首を傾げる菜々子のこともあってか、二人は慎重に言葉を選んでいった。

「まあ、評判に違わずって奴だろう。どうだ？ 学校でもあいつは有名な奴だろう？」

「ええ。中間テストでも学年断トツのトップを取ったとか、生徒会に直接勧誘されたとか」

「ははは。テストでいい成績を取ったのはお前もだろう？ 聞いているぞ、学年10番に入ったとか」

「ホント！？ おにいちゃんすごい！」

手放して喜んでくれる菜々子の言葉に、瀬多は恥ずかしそうに頭を掻きながら笑った。

さらに、その結果に対してご褒美ということで堂島から2万円もの大金を押し付けられて狼狽する瀬多の姿あったり、次にまたいい結果を出すことが出来れば菜々子がプレゼントを作ると張り切っていたり。

傍から見れば、その困らんはどこから見ても暖かなものに見えるだろう。

だがしかし、工藤がテレビに映った辺りからずっと瀬多の顔は強張ったままだった。

完二が特捜隊に入ることを宣言してからジュネスのフードコートで行った情報の整理。その話し合いの中で出た一つの確信的な見解は、瀬多に濃い影を落としている。

犯人が狙うのは、テレビに取り上げられた人物

完二の救出が完了してからたった4日しか経っておらず、その上体調の回復した完二が今日学校に来たばかりだ。

もしも事が起こるといふのならば、あまりに事件の展開が早すぎる。

既に堂島によって電源を消されたテレビの画面。

灰色の中に映る自分の強張った顔を見ながら、瀬多は嫌な予感を胸に抱えていた。

## 第十七章 閉じた瞳を

【5月25日・水曜日・晴れ／雨・愚者の集い】

「うつす!!」

「ちょ、うるさいっての！ 人の目とか考えなさいよ……」

「あ、スンマセン」

少々張り切り過ぎた完二の挨拶に顔を顰めたのは里中。花村はうんざりとしたように首を振り、天城は困ったように苦笑して、ただ瀬多だけはさも当たり前のように挨拶を返す。

なんだかそれぞれの性格が出ているようにも見える受け答えであった。

時は学校の授業も終わった帰り時。場所は瀬多達の所属する2年2組の教室。

彼ら以外の生徒は下校時間も相まってかそう多くもないが、それでも完二の声に反応して彼らを奇異の目で見る者は多い。

クラス内でも特に怖がりの女子生徒が、妙な十字架をポケットより取り出しているのがちらりと見えた。

そんな居心地の悪さにおどおどしながら口を尖らせる里中に、完二はただへこへここと平謝りするだけ。どうにも彼の常識は世間のそれは大分離れてしまっているらしい。

さて、いくら特捜隊としてチームを組んでいる彼らでも、やるべきことを成し遂げ、次に繋がる情報や動きを待っている間はただの高校生である。

くだらない世間話や遊びに没頭することもあるし、高校生らしい悩みに直面することも多い。

例えば。

「スンマセン！　ここ一週間追試試験で時間取れねえっス」

「あー……お前見るからにアホそつだもんな」

「ぐっ、うっせえ！」

「駄目だよ完二くん？　ちゃんと勉強はしなきゃね」

「あれ、千枝も追試なかつたっけ？」

「あ、あるわけないじゃん！　今回はギリギリ大丈夫だったって」

首を傾げた天城に胸を張って返す里中だったが、瀬多や花村から見てもそれは自分のことを盛大に棚に上げた発言に変わりない。この特捜隊、何気にメンバーの勉強に対する格差が酷いのだ。

上は天城と瀬多。下は完二と里中とギリギリで花村。いや、花村は平均的というべきか。

なんにしても、完二が受ける追試によってこれから一週間の放課後が潰れることになってしまう。確かに自業自得の話とはいえ、彼が瀬多たちに頭を下げる理由は他にある。

放課後が潰れることによって、テレビの中へ行くことができないという事である。

彼ら特捜隊がテレビの探索に行く時間帯はほとんど学校終わりの放課後と決まっている。いくら事件のために動いているとはいえ、所詮は秘密裏に行われること。それを理由に学校を休むことなど出来る訳もない。

故に彼らがテレビに行くことのできる時間帯はそこしかないのだ。

といつても完二を救出し、その刻限ともなっていた霧続きの日にはまだまだ時間がある。完二を救出したことによってこれからどう事態が動くのか不明であるが、わざわざテレビの中に行く必要があるのだろうか。

あるにはある。簡単に言ってしまうえば、完二の腕試しのようなものだ。

いくら伝説を作り上げた巽完二といえど、彼らが常に相手をしているのは人間の理解が及ばない異形の群れ。シャドウ。さらに言えばペルソナという手段にも慣れる必要がある。

「ま、今すぐってわけじゃねーから急がなくてもいいしな」

「んじゃこれから一週間はテレビ禁止ってことかー。クマくん寂しがるかもね」

「クマ公がどうかしたんすか？」

「クマさん、テレビから出れないからみんなに会えないって」

昨日の放課後に完二の新しい眼鏡を貰いにテレビの中へ入ったとはいえ、そんなに深い事もしていないし、深い事も話していない。

完二がクマに抱いた印象は、ふさふさが気持ちよさそうだ、くらいのものである。

天城がクマのことを思っただけ顔を曇らせるのを見た完二は、なんだから悪そうな気がしてもう一度頭を上げた。

無論クマが可哀そうだとかそういう意味ではなく、天城が痛ましそうな顔をしたからであるが。

そこでふと瀬多は、自分たちにとって最も重要な話が、まるで拳が配がないことに気付いた。

昨日の夕方の地方テレビに映った、工藤の話。

特捜隊の中で今一番信憑性の高い『テレビに取り上げられた人物が狙われる』という条件に一致していると言うのに、その話が花村や里中から何一つ上がらないのだ。

「一つ、いいか？」

「ん？ どしたよ」

「昨日の夕方、洗征がテレビに映ったんだが、誰も知らないのか？」  
「は？」

恐る恐る、といった風に切り出した瀬多の話に、その場にいた誰もが揃って茫然としたまま言葉を失った。

どうやら、その瀬多以外の誰もがそれを知らなかったらしい。

「ど、どの番組だよ!？」

「夕方時に放送される地方ニュースがあるだろう？ あれに他校交流会合について報道されていたんだ」

「地方ニュースって……さすがにそれは見てねーな。つか今までの……天城のも完二のもそういう系の番組じゃなくね？」

焦る花村の言う通りに、工藤が報道されたそれは本当に小さい規模で行われたインタビューのみ。天城の温泉旅館についての報道や、完二の暴走族がらみの報道も、それなりに大きなインタビューとして取り上げられていた。

連続殺人事件について一向に新しい事実を取り上げられない報道局が、せめてもの場凌ぎとして取り上げたのが、天城と完二のそれである。

故に規模を考えれば工藤のそれと他二人のそれはまるで違う。だからこそ人の眼に止まる数も少なかった。



「なんていうか、普通に考えればテレビに映る人っていっぱいいるよね……」

「でも、稲羽市の人で、って条件が付けば大分絞られると思う。私の方も完二君の時も、結局はそれなりに目立つちゃうような番組だったけど、映ったってこと自体は工藤君と変わらないし」

「え、っーことは、マジで洗征が狙われんの？」

「可能性は高い、とも思う」

先ほどの和気あいあいとした空気は反転し、5人の間にはこれ以上ない緊迫した空気が流れ始めた。

それぞれが意見を交わし合う中、工藤が狙われるという事実茫然として止まったままだった完二がはっとして口を開いた。

「マ、マジでアイツが狙われるんスか……？」

「でも当分は雨も降らないらしいし、マヨナカテレビで判断してからでも……」

否定してくれと言わんばかりに唇を震わせる完二の問いかけに、瀬多はただ首を振りながら答えるしかない。

これからの行動も兼ねて説明しようとした瀬多は、何やら教室の窓の向こう側とその周りにいる生徒達の声を聞いて口を閉じた。

ざわざわと喧騒の広がる生徒間の声と、窓から見えるのはパラパラと降り始めた小雨。

果たして今日の予報は晴れのはずだったのだが、どうにもその予報ははずれてしまったらしい。

窓を見つめる瀬多につられるようにして4人もそちらを眺めれば、自然と彼らは交わすべき言葉を見失っていた。

「雨がもし夜まで続くっていうなら」

「……うん。マヨナカテレビだね」

「完二。悪いけど追試は休むしかなさそうだぞ」

「……当然だ。絶対洗征を誘拐なんざさせはしねえ」

握りこぶしに力を込めて瞳を鋭くさせる完二の言葉に、瀬多たちは揃って頷いたのだった。

【5月25日・水曜日・晴れ/雨・工藤洗征】

早めに学校を出てよかったというべきか。

少しだけ肌へばり付いた髪の毛と、まだまだ水滴を弾くくらいには新しい制服を脱ぎながらそう思う。

あまり外れることがないと評判の天気予報でも、所詮予報。たまに外れてしまうのも仕方がないことだ。

朝の段階では雲を少しだけ浮かべた青空が広がるばかりだったが、少々風が強かったせいもあるのか、俺が帰宅した頃にはこの有様。屋根を叩く雨の音は此処最近でもそれなりに激しい方であり、未だ学校に残ったままの生徒たちを気の毒に思う。

こんな天気では傘を持ってくる生徒など多くはあるまい。

湿った髪を簡単にタオルで拭きながら自室へと向かう。

ただ頭を手で掻き回すだけだというのに、それすらも鬱陶しく思っ  
てしまうほどに気だるい気がするが、ひよつとすれば風邪でも引い  
たか？

いや、生徒会のごたごたが終わったことで疲れが表に出たのかもし  
れない。

昨日の夕方に放送された俺のインタビューではあるが、ローカルの  
な番組であったということもあってか、それを見た知り合いは多く  
はなかった。

まあ、うちの両親はそれを録画したりとどうにも気恥かしいことを  
しているのだが。

どちらにせよ、別に大きなことをしたわけでもなく、インタビュー  
と言ってもそれなりに大衆が好みそうなことを上辺だけで喋っただ  
けだ。

面倒なことになることはないだろう。

しかし……本当に身体がどうしようもなく重い。

俺の自室は二階にあるのだが、そこに辿りつくまでの階段すらも一  
段一段が辛く感じてしまう。

熱を測った方がいいだろうか？ いや、別にそこまで気にする必要  
もないか。

とはいえ一応のために半分が優しさで出来ている薬を飲んでおく。  
視界がぼやけ足取りがおぼつかないといったような重度の風邪では  
ないが、やはり用心しておくことに損はない。

なんだか自分の思考が二転三転しているようで気味が悪い。

これはよっぽど疲れが溜まっていたりするのだろうか？

母に断りを入れて夕食を頂かずにそのまま寝させてもらうと伝えれば、母は困ったように笑うだけだった。

母のいる台所に見えたのは、味付けされた鳥肉のようなもの。

成程、今日は俺の好物の唐揚げを作ってくれる予定だったらしい。なんだか悪いことをしてしまった。

どこまでも自分の思考が遠くに見えるような違和感のままに自室に辿りつけば、そのままうつ伏せに布団へと倒れ込んだ。

ポフリと大きな音を立てたものの、そんなに安いわけではないベッドは衝撃をほどよく吸収してくれる。

一度でいいから高級羽毛布団やウォーターベッドのようなもので寝てみたいものだ。

くだらないことを考えるうちにどんどん睡魔が襲ってくる。やはり風邪というよりは疲れだったのかもしれない。

暗い部屋の中で徐々に瞼が落ち始め、ドアの隙間から漏れる光すら視界から消えていく。

その時、聞き覚えのある呼び出し音をけたたましく慣らしながら震える携帯に気がついた。

## 異完二の文字。

なんだか最近では彼とばかり連絡を取り合っている気がする。

まるで いや、それ以上は頭に浮かべる事も憚られる言葉だ。

マヨナカテレビの噂で完二に危ない噂が付いて回っている今でこそその考えは捨てなければならぬ。

まあ、完二が同性愛者などという噂など、微塵も信じていないのだが。

緩慢な動きで携帯を耳に翳せば、その向こう側からはとても一人とは思えぬ騒音を伴いながら完二の声が聞こえてきた。

車の行きかう野外か、それとも雨によって立ち往生を食らっている生徒がいる学校か。

どちらにしても俺に何か用があるのだろうか？

『洗征かつ!?!?』

「……いきなり何だ。耳元で怒鳴るような真似までして」

『あ、いや、すまねえ』

「はあ……何があつた？」

完二の声の向こう側から聞こえるざわめきもあまり気持ちのいいものではなかったが、さすがに彼の大声には頭を痛くさせられる。

しかしうんざりとしたのは一瞬。彼の緊迫した声に、またもや問題事に巻き込まれたのかと意識を覚醒させられた。

『お前、今どこにいる?』

「は? いや、既に帰宅して家にはいるが」

『お、おお……そうか』

「……? 一体何が言いたいのだ?」

まるで話すべき内容を整理せずにただ考えなしに電話を掛けてきた完二の様子に、俺は体調の悪さも相まってか苛々させられた。時折会話の途中途中で他の誰かと会話を、まるで話すべき内容を相談しているような印象さえ聞いてとれる。

完二が誰かと話し合いながら俺に連絡を。ただそれだけでも面倒なことをいろいろ連想させられるのだが、生憎今の俺はそこまで頭が回るほど調子のよい状態じゃない。

もはや彼の声を聞くことさえ鬱陶しくなった俺は、もごもごと相変わらず言葉を探そうとしている完二との会話を切り上げようとした。

「悪いが今、体調が悪くてな。用も定まってないというのに電話を掛けられても困る」

『い、いや！ ああ、もう、面倒くせエな……』

「……面倒なのはこっちの」

『いいか！？ あんまり外うるつくんじゃねえぞ！？』

さすがに彼の態度はいただけないと思った矢先に、子供の夜遊びを叱りつけるようにして放たれた言葉に、俺はしばし呆けるだけだった。

本当に意味が分からない。いきなり電話を入れてきたかと思えば、その会話の節々には行き当たりばったりの行動が見て取れ、そして極め付けには意味の分からない警告染みた言葉。

彼の頭が悪い行動には慣れているが、いくらなんでも今回のことは意味不明が過ぎる。

デジャヴ。

つい最近、こんな風に自分の外で物事が展開し、そして終息していく出来事に遭遇したような気がする。

考えることすら億劫になつて、結末を見届けずに頭の中から放り投げた腹立たしい出来事。  
あれは、確か。

瞬間、俺の頭は沸騰したかのように熱くなるのを感じた。

「……………完二、一つ聞かせろ」

『あ？ な、何だよ』

「君は、今、瀬多さんと一緒にいるのか？」

『なっ……………いや、一緒になんていてねえよっ！』

こいつ……………こいつは。

お前の無事が確認され、多少の変化はあつたにせよ、俺たちは変わらない日常を続けている。続けられている。  
だというのに、何故、そいつらと共にいる。

すこぶる悪かった体調の事などどこかへ吹き飛んだ。気だるかった身体も今は怒りが突き動かしている。暗がりの中で携帯の光がぼんやりと光る中、俺はギチギチと手に持った携帯を握りしめていた。

「関わるな」

『あ？』

「彼らと関わるな。いいな？」

『ちよ、ちよっと待てよ！ 何でデメエがっ……………』

当然だろうが。人の失踪などというものに秘密裏ながら関わり、そしてただ救うだけで完結させようとする輩などに関わる意味がどこにある。

正義のヒーロー気取りか。それとも真実を掘り起こすことに捉われた患者たちか。どちらにせよ、普通の日常を送りたいというのなら

関わっていい人間ではない。

何故、それがわからない。

「遊びか何かは知らんが、くだらんことに首を突っ込んでないで今すぐ手を切れ」

『おい、ちよつと待てよ』

「洗脳でもされたか？ そういえば君の様子は最近……」  
『ちよつと待てって言ってるんだろ！』

最初に放たれた俺の名を呼ぶ声。あれには此方を心配するような必死さがあった。

だが、今彼から向けられた声は、曇りのない怒りに満ちた声。まるでお前は何も分かっていないとでも言いたそうな、反抗の声。

遊びじゃないとでも？ 真剣なんだとでも？ 義務感に駆られているとでも？

反抗。反抗。反抗。

気に、いらぬ。

「いいから……お前は俺の言う事を聞いていればいいだろうがっ！

『こ、洗征……』

「くだらん事に関わろうとするな！ ……切るぞ」

『お、おいつ！ ちよ……』

尚も俺の話を理解しないまま制止の声を上げる完二など、もはや聞く気すらなかった。

携帯越しに聞こえる声をそのままに、携帯の電源を切る。



そして、俺は布団の上へと倒れ込んだ。

どいつも、こいつも。

分かっていない。

面倒な奴ばかりで嫌になる。

### 【同日・愚者】

堂島家自室のソファ―に背を預けながら、瀬多は盛大にため息をついた。

今も尚耳に届く雨の音は、深夜においてマヨナカテレビに何か映ることを嫌でも予感させられる。

結局のところ自分達の行ったことは裏目裏目に出ってしまった。完二の説得によって工藤の安全を確かめようとしたところ、やはりとも言うべきか彼に自分達の行おうとしている行動を察せられてし

まった。

完二が少しだけ携帯越しに話をしたただけだというのに。

瀬多は思う。

もしもこの現状で謝るべきなのは自分達に違いはないのだと。

特捜隊が掲げた目標としては、何一つ引くべきものはない。確かに幼稚な正義感や独占欲もあるだろう。しかし自分たちが事件の解決を求めているのは、ただ純粹にそれを阻止し、平和を取り戻したいという善の心からなる物だ。

だが、方法と行動があまりにも自分たちだけで完結している。

確かにペルソナ能力やテレビの中の話など他人に言っても信じて貰えないだろうし、さらに危険度的なことを言えば自分達以外には任せられない。

そう、任せられることが出来ないのだ。

実際にあの場所の脅威を思い知り、そしてそれによって苦しんでいた仲間の行程も瀬多は理解している。どれだけそれらが激闘だったのかも。

もしも関係のない人間や協力的な人間をあそこに案内したとして、そして内心に巢食う抑圧された心と対面させられて。

瀬多がそういった狭い考え方をしてしまうのには理由がある。

それはまだペルソナ能力に覚醒していない里中を、天城救出に連れて行ってしまった時の話だ。

あの時は里中の熱意に負けて彼女を丸腰のままに連れて行ってしまい、結局は危機に陥らせることになってしまった。

確かに里中の行動は考えなしのものだったのかもしれない。

しかし彼女の胸にある想いと、おそらくは工藤の中にある想いは一緒なのだ。故に、瀬多は工藤の行動に里中の結末を重ねてしまった。あの時は運よく里中を救う事が出来たが、今回もまた上手くいくとは限らない。

ペルソナ能力に覚醒していない、普通の一般人を巻き込む危険性。それを良く知るからこそ、工藤も、そして最近瀬多に不審な目を向けてくる堂島にも、瀬多は真実を話すことができなかった。

дайだら・の親父のように、自分たちの行動をただ黙認してくれる善意の者が少ない。

堂島は自分たちにはあまりに近過ぎる人物であり、しかも大人の責任を果たさなければいけない自分の保護者であり、しかも刑事。

工藤に至っては同じ高校生の立場に立つ者であり、単純に事件解決に巻き込める人間ではない。

そこまで考えて瀬多は一つ息を吐いた。

どう考えても、悪いのは自分たちである。

しかし、言えない。言えないのだ。

そこまで考えると瀬多は、ふと、携帯に映る時刻表記へと目を向けた。

0が4つ並ぶにはあと少し。部屋の明かりを消し、窓から見える雨の様子をきちんと確認する。

確かにマヨナカテレビが映るには条件が整った夜だった。

あと1分、あと30秒。刻一刻と迫るマヨナカテレビの時間。灰色の画面を目の前にして、瀬多は緊張したかのように喉を鳴らした。彼らの予想が当たれば、ここには薄らと工藤の姿が映るかもしれない。

い。

だが、それは予想でしかなく。

ついに時計の針は12を指し、携帯の画面には0が並んだ。

そして、ぼんやりとノイズを浮かべながら映るマヨナカテレビ。

ただ、其処に映る眼鏡を掛けたような少年の八高生の姿に、瀬多は強く歯を食いしばった。

そこに映っているのは、確かに工藤洸征の姿と同じであった。

【5月26日・木曜日・雨/曇り・愚者の集い】

いつもは運動部の一条康や長瀬大輔が屯している二年二組の教室前の廊下。

まだ全生徒が揃うには早い朝方であるせいか、登校してきた生徒たちが頻繁に行き交い少々騒がしい。

そしてそんな騒がしい場所にとある一団の姿があった。勿論特捜隊の5人組である。

いつもは登校時間の遅い花村や完二も既に揃い、集まる彼らの浮かべる表情は、どれもこれも深刻な顰め面。完二の挙動は特におかしく、腕を組んだままイラついたように何度も足踏みしていた。

通りすぎる生徒も触らぬ祟りになんとやらと言わんばかりにそそくさと自分の教室へと向かっていく。

何故に彼らが、などというのは愚問だろう。

「どうよ？ もう一回かけてみ？」

「あ、ああ……………」

「どう？ やっぱり出ない？」

「……………あー、クソッ！ 全然出ねえ」

花村に言われて制服のポケットから携帯を取り出した完二は、先ほどから何度も繰り返しているようにリダイヤルの欄から工藤洗征を選んだ。

騒がしい校内の中でも完二の耳に響く呼び出し音はやけに鮮明だ。

しかし一度二度呼び出し音を鳴らした後で聞こえるのは、電源が入っていないという旨の機械的な声。

いまにもその携帯を床に叩きつけてしまいそうなほどに苛立つ完二を、瀬多がやんわりと止めた。

結局、彼らは何度も同じことを繰り返していた。

工藤の姿がマヨナカテレビに映った事実を受けて、特捜隊の誰もが連絡を取り合いながらこうして早めに登校してきたのだが、一番初めに来ていた完二によって告げられた事実には、メンバーの誰もが嫌な予感を抱いた。

いくら工藤の携帯にかけても、彼が出ないのだ。

「やっぱり、昨日のでうんざりしてるとかじゃないよね？」  
「いや、いくらなんでもあいつはそんなめんどくせえ真似しねえ」  
「じゃ、なんで出ねーんだ？ もしもとつくに誘拐されてるっつー  
んならいくらなんでも早すぎねーか？」  
「それは……」

花村の質問に完二はただ口ごもって痛ましそうな顔をするだけだった。

特捜隊が現段階で誘拐されるだろう者を判断しているのは、テレビに取り上げられた者であり、そしてその後マヨナカテレビに予兆として映された者である。

しかし、もしも既に工藤がテレビの中に入れられているというのならば、花村の言う通り本当に展開が早すぎるのだ。

彼がテレビに取り上げられたのは一昨日の夕方24日。そしてマヨナカテレビに映ったのは昨日の深夜25日。そして今日の朝には既に連絡が取れていない。

「まさかマヨナカテレビって関係ないのかな……だって携帯が繋がらなくなっただって昨日の夜くらいからずっとなんでしょ？ その時点で攫われてるんだったら……アレ？」

「もしも昨日の夕方に攫われてテレビの中に入れられてるんだったら、昨日のマヨナカテレビに映るのは気味悪い番組みたいなものはずだ。でも昨日のは単にぼやけて洗征の姿が見えただけ」

「ということはまだ攫われてない？」

「じゃあなんで携帯に出ねーんすか！」

まだ攫われていない。ただ携帯の電源をたまたまオフしているだけ。瀬多の推理こそが的を得ているはずだというのに、完二はどう

してもそれを認めることが出来ない。

工藤が狙われているという危機が、どうしても完二を焦らせてしま  
うのだ。氣勢を吐く完二の様子に、4人も少ない可能性を考えてし  
まう始末。

話を無意味に深刻化させているような気がした瀬多は、一度大きく  
深呼吸して自分を落ち着かせた。今回の守るべき相手が自分たちに  
非協力的なこともあってか、彼もまた肩に力が入っていた。

落ち着こう。ただゆっくりと吐いた言葉に、特捜隊の面々も次第に  
冷静さを取り戻していく。

そう、彼らこそが最後の砦なのだ。

最悪工藤がテレビの中に放り込まれてしまっても、彼らならば助け  
だすことができる。故に冷静でなければならぬ。

「本当にただ連絡が付かない可能性だってあるんだ。それに、普通  
に考えてみれば彼はそろそろ登校してくるはずだろう？」

「あ」

「……………完二君、ちょっと焦り過ぎだよ」

「め、面目ねえっス……………」

天城にジト目を向けられて、呆ける様にして瀬多の言葉を聞いてい  
た完二が頭を掻いた。

本当に瀬多の言う通り、まだ焦るには早すぎる段階である。

「ま、相棒の言う通りに落ち着かなきゃな、完二い？ 親友のこと  
だからってテンパンなよ？」

「だっ、誰がんなこと」

「テンパってたよね？」

「テンパってたな」

天城と瀬多の追いつちにぐうの音も出なくなってしまうた完二であった。

「なーんだ。結局風邪だったってわけ？」

少しだけくたびれたように吐き捨てた里中に、完二以外の誰もが安心したような気が抜けたような反応していた。

朝の時点であれば大騒ぎしていた彼らであったが、その後には工藤の担任である近藤先生に詳しいことを聞いてみれば、どうやら工藤は風邪をこじらせて欠席しているということ。

それを聞くなり完二も、そういえば、などと昨日の会話を思い出しながら呟いていた。

風邪で欠席するという旨も、どうやら本人によって伝えられたらしく、それを受け取った近藤先生によると、それなりに辛そうな声だったのこと。

誘拐されていないという事実安心してみた特捜隊であったが、風邪自体はまるで歓迎出来ない状況であることに気付いた。

「で、今からお見舞いに行くと」

「絶対歓迎されねーよな」

「……………」



「完二君、心配してるのは分かるけど……」

朝方の雨が止んでできた水たまりを避けるようにしてぞろぞろと道を歩く特捜隊の先頭を、完二が気まずそうにまま歩いてきた。

里中の言う通りに偵察も兼ねて工藤の家に行くことを提案した完二だったが、やはりというべきかその行動はあまり褒められたものではなかった。

いや、風邪の見舞いに行くという行為に関しては何一つ問題のない善意の行動であるが、今の彼らと工藤の間には深い溝が出来上がってしまっている。

彼の安全を鑑みてみればそんな少しの衝突など気にはいられないが、そういった開き直りが出来る集団でも無い。

順調に工藤の家へと近づいていく中で、彼らの中にはふつつつと緊張感が否が応でも沸いて来ている。

一番緊張しているのは無言のままに4人を案内する完二だろう。

何せ昨日は電話越しに盛大に怒鳴られたのだから。

「こじっす」

小さく、低く。完二のか細い声を向けられた家は特に目立った所もない普通の民家。

曇天の下に見えるその何でもない民家だというのに、何故かそれを見上げた彼らの中に渦巻くのは妙な緊張感。

何故にこうなってしまったのだろうか。完二がインターホンを鳴らす様子を見ながら、瀬多は内心で大きく息を吐いた。

「はい……あれ？ 完二君？」

「うっす、ご無沙汰してます」

中から出てきたのはエプロンを付けたまま、一見して主婦だと分かる格好した黒髪ロングの女性。一般の高校生の母親よりは大分若々しく見え、10人の内に7、8人は美人だと言うであろう工藤の母親、工藤亜季。

互いに初めて会う瀬多たちに対して一度首を傾げ、彼女は完二に友達？ などと問いかけていた。

そして、口早に要件だけを済まそうと本題に入り始めた完二の言葉に、彼女は顔を曇らせたまま答えた。

「こーちゃん？ ……それがねえ、ついさっき外に出かけるっていったきり帰ってきてないのよね」

「は？ い、いや、風邪じゃねえんすか？」

「うふふ、本当のことを完二くんには言っちゃうけどね、実は仮病なのよ」

「はあ!？」

困ったようにして笑う彼女に、たまらず完二は眼を丸くした。

およそ彼の知る工藤洗征という男の中には、そのようにくだらない理由で学校を休むことなどあり得ない。

「最近疲れてるっていうか、なんだか機嫌悪いみたいだね……完二くん知ってる？」

「あ、いや、それは……」

ちよつとだけ寂しそうな顔をした彼女に、完二も、そして後に控える瀬多たちは何も言うことが出来なかった。

おそらく、工藤の機嫌が悪い理由は自分たちにある。

妙な雰囲気になりかけていたことを察したのか、工藤の母は一つ手

を叩いて励ます様にして完二に声を掛けた。

「こーちゃん、滅多に悩みとか話さないから、もしもどこかで泣いてたらお願いね。あの子、本当に泣かなくて、意地っ張りだから」

「……………オス」

「帰ってきたら私も完二君が心配してたって言っておくから」

「うえ！？ あ、ハイ、オネガイシマス……………」

うふふと笑いながら彼女の言った最後の言葉は、さすがに完二も声を濁らせざるを得ない。

結局工藤がいなのであれば、彼らの目的も果たすことができるわけもない。そのまま工藤の家より離れた彼らは、帰り道の途中でこれからの行動を相談していた。

彼の母から聞いた情報を考えると、やはり誘拐されたかもしれないという予感がどうしても頭を過る。

仮病やら、家を出た理由やら、そういったものを理解できる立場にあるだけに、彼らは現状を『誘拐された』と決めつけることが出来ない。

「ジユネス行ってみるか？」

「クマさんに来たかどうか尋ねてみるの？」

「……………」

「完二？」

これからの行動を決めあぐねている中で、完二が一人表情に影を落としていた。

「いや、何かあいつに悪い事しかしてねえな、と思っ……………」

「……………きっと分かる時が来る。だから今はとにかく事件を止めるこ

とに全力を注ごう」

瀬多の励ましにも、完二は力なく頷くだけだった。

その日の特捜隊の行動は結局工藤の足取りを掴むことが出来ず、今日のマヨナカテレビを見てどうするか判断することに決まった。工藤の連絡先を知っている完二には未だ携帯に連絡を入れ続けているが、繋がったという連絡は瀬多の下には来ていない。

既に深夜に近い時間帯になって工藤の行方も何もかもが不明瞭な現状に、瀬多は一人眉を顰めて虚空を見上げる。

今日一日を過ごしてみても、瀬多の抱く嫌な予感が晴れることは決してなかった。

いつものように緊迫した中にある余裕のようなものも特捜隊の中には見られない。

（焦っている、のか）

自分の掌を握り、そして開いてみてはその感触を確かめる。

テレビの中で戦う時に幾度も繰り返してきたカードの破壊。もしかすると、今回も工藤の誘拐を阻止することが出来ずに結局それをする事になるのかもしれない。

シリシリとノイズが走り始めた深夜0時のマヨナカテレビ。

徐々にそのノイズが少なくなっていく、ついには明瞭な画面を晒した時、瀬多は覚悟を決めるかのように唇を真一文字に引き締めた。

「あー……工藤、洗征だ。分かるだろう？ 今回はお前らのような阿呆共のために、俺が特別に知恵を授けてやろう。馬鹿面晒したままによく見ておけ……ま、俺のような天才様の有難い講義みたいなものだ。じゃ、講堂に移動だ。お前らは黙って俺の言うことを聞くくらいの価値しかないのだから……せいぜい頭を下げていろ」

## 第十七梓 閉じた瞳を（後書き）

いきなりですが先に謝罪を。

なんだか主人公が原作に関わり始めるに当たり、一話への時間のかけ方がひどいことになりつつあります。

簡単に言うと更新がちと遅れるかもです。ごめんなさい。

あ、あと余談ではありますが、主人公の外見はアトラス制作ゲーム・カドウケウスシリーズの主人公『月森孝介』か、週刊少年ジャンプ連載・銀魂の『伊東鴨太郎』をイメージしております。

やっぱ、高校生には見えねー……

## 第十八章 工藤高等学校・東棟

【5月27日・金曜日・曇り・患者の集い】

放課後。すでに学校は終わり、生徒たちがそれぞれの家路に着く頃、瀬多たち特別捜査隊は揃ってジュネスのフードコートに集まっていた。

無論目的は昨晚マヨナカテレビにはつきりと映ってしまったことによつて、誘拐されたということが明らかになつた工藤洗征の救出。

曇り空の下、フードコートの下に集つた彼らは既にテレビの中へ入る準備を終えていた。前回の完二の救出において新たに集まつたレアメタルやら不可思議な素材を用いて作られた武器を制服の下に纏い、四六商店に買い込んだ医薬品も不足はない。

ただ一人複数のペルソナを扱える瀬多も、既にその選定は終わっている。

しかし、もはや恒例となつてしまったテレビ内への探索だがその実、喜べる事態では決してない。

例えばそこに入れられた人間を救う術が彼らにあるとしても、捜査隊が目的としているのは犯人の特定とその企みの阻止。テレビに入れられた時点でその目的を果たすことができなかつたようなものなのだ。

さらに言えば、テレビに取り上げられる人物が狙われるという一つの共通点を導きだしたと言つのに、今回の工藤の誘拐について彼らは何もできなかつた。

工藤本人に注意を呼び掛けることも出来ず、彼の護衛に着くことも

出来ず、あつという間に誘拐されてしまった。

丸テーブルを囲む彼らの表情に明るさなどはあるわけもない。何もできなかったことに歯を食いしばり、既にテレビへ入れられてしまったことを後悔し、ただ懺悔するかのように両手を組んで顔を隠す者もいる。

それほどの落胆を示すほど、彼らは何一つ成し遂げることができなかったのだ。

「……………うし！ もう止め止め。落ち込んでたつてしょうがねーだろ？ いい加減気持ち切り替えようぜ」

「うん、わかってるんだけど、ね……………やっぱり悔しいよ」

「あのね……………ホントはあたし、ちょっと手抜いてたかもしれない」

やはりこのような時に空気を一番に読むのは花村であった。いつもは地雷原を踏んで駆け回るがごとく空気を読めない人間だというのに、ここぞというところでチームを率いるのはいつも彼の言葉でもあった。

しかし、その言葉も天城と里中にとっては追い風にならず。里中に至っては唐突に泣きそうな顔をしながら妙なことを白状し始めた。

「だってさ、あたしたちはあたしたちでちゃんと頑張ってたじゃん？ でも、工藤くん、全然認めてくれないし、むしろなんていうか……………」

「千枝……………」

「ごめん……………あたし、浮かれてた。雪子も完二くんのこともちゃんと助けることができたからって、あたしたちは何でも大丈夫の正義のヒーローだと思ってた」

「……………」



涙は流さなかった。懸命にそれを流すことに耐えて、里中は心の中に芽生えつつあった黒いものを吐きだす様にして、一つ一つしっかりと言葉にしていく。

そして無言のままにそれを聞いていた完二に深く頭を下げた。

「完二くん、ごめんね。親友がピンチだったのに、勝手に粹がってて、工藤くんのことを悪く思ってたみたい……だから、お詫びってわけじゃないけど、その、絶対今回も助けるから」

「……いや、んなこと言ったら俺が元々悪かったんす。最初っからあいつのことを説得してればこんな俺らもあいつも気分悪いようなことにはならなかったんだ」

「……うおおおいつ！ あーもー、反省会はまだはえーって言うてんだろーが！ 俺たちがやることってそういうんじゃねーだろ！？ そういうのは洗征の奴をちゃんと助けてから愛屋のラーメン啜りながら言う事なの！」

髪をぐしゃぐしゃにかき混ぜながら、花村はいい加減にしろと言わんばかりにテーブルを強くどついた。ガタリと揺れたそれに完二も里中も申し訳なそうに肩を竦めてはぼそりと謝る。

ため息が重なったのは花村と、その一部始終を眺めていた瀬多の二人。

そう、彼らのやることは落ち込むことではない。

今は一刻も早く工藤をテレビの中から救いだし、彼を再び平穏な日常へと送り返してやることなのだ。

しかし眼の前の救出に全力を傾けている花村と違い、瀬多はその先のこととも考えてしまう。

今まで自分たちの行動を否定していた工藤がテレビの中という不可思議を知った後にどうするのか？ 既に確定しているであろう抑圧

された自己との対面に、彼は一体何を思っただろうか？

救うと言っても、やはり重要なのは彼自身が自分のシャドウを受け入れることができるかどうかにかんがわれているようなものだ。

自分たちは、ほとんどその場を作るお膳立て程度の役目しか負えられない。

それでも自分たちはやるしかないのだ。

ようやく花村の叱咤でいつもの調子を取り戻し始めた特捜隊のメンバーを率い、瀬多は電化製品売り場へと向かっていくのだった。

「クマー！」

いつもように客の視線が集まらないうちに颯爽とテレビの中へ入り込んでいく特捜隊の面々。傍から見れば随分とシユールな光景ではあるが、今のところクマがいる安全な広場へ辿り着く方法はそれしかない。

「おおー、待ってたクマよー。また誰かがこっちの世界にいるみたいクマ」

「ああ……工藤洸征っていう俺のダチなんだ。周りからは頭いい奴って思われて……」

ポテポテとファンシーな足音を立ててやってきたクマに、完二は次

々と自分の知る工藤洗征のことを伝え始める。  
テレビに入れられた人物の居場所を特定するには、クマの嗅覚というなんとも原始的な能力に頼ることになっているのだが、その嗅覚は対象の情報が多ければ多いほどに精度を増す。

ここ最近はどうにもクマ自身の嗅覚が鈍ってきていることもあつたか、それを花村辺りに詰られてやさぐれることもあつたクマであったが、完二が知る工藤洗征の情報はそれを補うに十分な量がある。耳が痛いくらいに必死に工藤のことを伝える完二を鬱陶しそうしながらも、どうやらクマは工藤の居場所を突き止めたらしい。

「もう分かってるっちゅーの！ センセイ！ カンジがしつこいクマ」

「なっ……しつこいとはなんだデメエ！」

「完二、落ち着けてもう。気合い入ってんのと焦ってんのはまるで違うんだぜ？」

「……はあ……スンマセンでした」

自分の行動の危うさに気が付いてか、完二は一度頭垂れる様にして頭を下げた。

しかし彼の焦りもまた仕方がないとも言えるのだ。何せ彼はこのテレビの世界で戦うのは初めて。あまりにも早すぎる事件の展開によってペルソナ能力に慣れる時間すらとれずに、今こつやって初陣の時を迎えてしまっている。

花村には謝ったが自分には謝って無い、などと駄々を捏ねるクマを宥めながら、初めて5人で戦うことに不安を感じているのは瀬多も同じ。

戦力が増えたのはいいことだが、増えれば増えるほどに自分の為すべきことも増え、そしてその重要性もまた高くなっていく。

それでも、瀬多は思うのだ。

「力を合わせれば洗征のことも無事に助けられるはずさ。だから、クマ。案内を頼むよ」

まるで自分に言い聞かせるようにして告げた言葉に誰もが力強く頷き、クマの先導につき従って濃い霧の中へと足を進めていくのだった。

少しばかり歩いて辿り着いたその先。テレビの中に入れられた人間がダンジョンを作り上げてしまう常と変わらず、彼らの目の前には見たこともない様な新しい建物が聳え立っていた。

遠くに見える気持が悪くなるような赤と黒の渦の景色には、所々高層ビルのような残骸が立ち並び、稲羽周辺の光景というよりも都会の景色をそのまま映し出したような景観。

そして彼らを招き入れる様にして開いた道路の先には、立派な校門が供えられた学園のような建物。

八十神高校と比べ物にならないほどに都会的なその建物は、里中や天城といった根っからの田舎者を啞然とさせ、花村や瀬多といった都会に見識のある者には懐かしさを覚えさせる。

高校、というよりも大学のような。

ふと、どこかの豪邸に備え付けられた門にも見える校門の柱を見てみれば、そこに彫られてあったのは『工藤高等学校』という文字。さすがシャドウが作り上げたダンジョンというわけか、自らの名を高校の名にしてしまう所業に、瀬多は少々呆れるように息を吐いた。

「……ねえ、完二君。工藤君って、元々都会で暮らしてたりするの？」

「へ？ いや、そんなことねっすけど」

「うーん……都会に憧れてたってわけじゃないよね……」

天城の質問にただ脊髄反射のように応えた完二の記憶に、工藤が稲羽市から出たという話などはなく、そうなればこのダンジョンを創り出した工藤の心というものもよくわからないものだ。

しかしダンジョンがどうであれ、彼らがやることは変わらない。

ただシャドウを蹴散らしながら工藤を助けるのみ。

ダンジョンそのものへの疑問などすぐに頭の外へ放り出し、クマの先導を頼りにしてその工藤高校とやらに入り込めば、やはり中も学校然りといって光景。

等間隔に区切られた教室。タイルで敷き詰められた廊下の途中途中には掲示板のようなものが備え付けられている。

「学校、だね」

「学校だな」

きよろきよろと辺りを見回す様にして零した里中の声に、花村も無意識のままに同意を漏らす。今までのダンジョンと比べれば別段驚くべきものなど何もない、本当に没個人的なダンジョンであった。

未だシャドウと遭遇する気配はなく、武器を下ろしたままで中を探索する5人と一匹であったが、唐突に彼らの頭上から拡声器のようなものでばやけた声が降ってきた。

声の場所は、学校では珍しくもない放送やベルが鳴らされるスピーカー。

しかし、そこから聞こえてくる声は確かに工藤洸征のものであった。

『あー……さつさと講堂に集まれと俺は言ったはずだが？ どうやら未だ席に着くことも理解していない阿呆共がいるらしい。愚かな職員達よ、お前達愚図共の仕事だ……さつさとそのガキ共を学校より放り出してしまえ。俺の言う事を聞かない生徒は必要ないのでな』  
なんとという傲慢な。

だがしかしこのダンジョンというものの中において、このような暴走したシャドウが戯言を抜かすのはいつものこと。

一語一句を逃さぬようにして聞き入っていた特捜隊の面々は、終わりのベルによって工藤の放送が終わったことを理解すると、互いに顔を見合わせていた。

「ガキ共って……あたしたち、だよな？」

「じゃあ職員って誰よ？」

いの一番に思ったことを口に出してしまうのは里中と花村の悪い癖。しかし二人の疑問に誰かが答えるわけもなく、終わりのベルが木霊するかのようには音を残していくような静寂の中を、クマの声が切り裂いた。

「う、うおあー！ シャドウの気配がいっぱいクマー！？ ど、ど、どこから現れたクマか？」

クマに言われるまでもなく、自分たちの周りにどす黒い気配を濃くしたシャドウがうつろつき始めていることを察した瀬多たち。素早く戦闘態勢に移り始め、ただ黒い物体であるだけのシャドウはそれぞれの身体に変化させながら襲いかかってくる。

初めての戦闘である完二を気遣うようにしてその傍に立ち位置を決めた瀬多であったが、彼から見える完二の横顔は気負っていることを感じさせぬほどに燃えに燃えていた。

手にぶら下げた鉄板を一度ぐるりと回して、シャドウたちを睨みつける。

「先輩、いいっすね？」

「……………ああ、行って来い！」

あまり頼もしいその有様に自然と瀬多の声も大きくなる。リーダーの言葉を受けて獰猛な笑みをその顔に浮かべた完二は、ただ烈火のごとくシャドウたちの前へと躍り出た。

「碎け！ タケミカツチ！！」

【まどろみの中】

工藤洸征。

1995年10月15日、早朝04:32に工藤洸一、工藤亜季の子として生まれ落ちた。

ただ転生という枷を背負っていたものの……果たしてどうなんだろうな。

。

だってそうだろう？ 転生なんてわけのわからないものに取りつかれても仕方がない。

いや、実際生まれながら10歳を迎えるまでは転生というオカルトについて可能な限りの情報を集めてきた。

だがそのどれもが子供の妄想を形にしたようなくだらない理論ばかり。理論と言うのもおこがましいものだったかもしれないな。

。

気にはしていない、などと強がり言うつもりはない。

事実、転生という事実になんか少しばかりか心を病んだ時もあった。

でも、今は違うだろう？

。

この世で生きて、この世に生まれた意味を探し、この世で生きる意味を見つめる。

今はまだその答えの欠片すら見つけてもいないが、大丈夫だ。

じきに見つかる。



。

.....ならば、今は？

。

、

、

。

大丈夫、大丈夫に決まっている。

俺は、工藤洗征としてこの世にきちんと生きている。  
こじやって、生きている。

【同日・愚者の集い】

工藤のシャドウが生み出した学園内の探索は、完二というアタッカーが入ったこともあってかスムーズに進むことが出来ていた。確かにテレビの中で蔓延るシャドウたちは回を重ねるごとにその強さを増し、時に瀬多たちを窮地に立たせるような苛烈さを以って襲いかかってくる。  
しかしそれ以上に彼らは成長しているのだ。

現状、彼ら5人の連携は前にも増してキレイのよいものを見せている。シャドウとの戦闘が初めてだという完二を引き連れているにも拘らず、である。

ある種、精神的な部分もあってか、完二のペルソナ能力は通常よりも力を増しているのだろう。

今でもペルソナのことなど何一つ明らかになっではないが、その力が人の心によって現れているということには違いない。

根性、気合い、決意、覚悟。そんな青臭いことこそが自分達の戦いに重要なのではないのだろうか？

「来い アレス！」

「守って トモエ！」

里中と共に繰り出した全体物理スキル 暴れまくり によって  
眼前のシャドウたちを塵のように吹き飛ばす。

総攻撃を仕掛けるまでもなく黒い霧となって消えていくシャドウを注意深く見ながらも、瀬多の脳裏には精神的な強さを考えさせるものがあつた。

瀬多の隣で力強くガッツポーズを決める完二を見れば、その心の強さというものがどれほどのものなのか分かるだろう。

いくら不良としていくらか『戦い』というものに慣れているとはいえ、既に瀬多たちと対等に戦えているのは異常という他ない。

花村も、里中也、天城も、そして何より瀬多自身もまた、最初はペルソナ能力というものを使いきれずに苦労したものだっただから。

「おっと、雪子サンキューね」

「あんまり無理しちや駄目だよ？ 物理スキルは消耗が激しいんだから」

「前衛でボコス力暴れる奴が増えたからな」

「だってよ、瀬多先輩！ あんま無理しない方がいいっすよ？」

天城の回復スキルに癒されながら笑う里中と、案にお前のことだと言っている花村の意図に気付かず瀬多の背中を叩く完二。

…………… 順調だ。

少しばかり強く叩かれたことによるめいた瀬多は、苦笑を洩らしながら探索が上手くいっていることを実感していた。

とりあえずはシャドウ達との小競り合いも一段落し、クマのナビによつて工藤を探すことに集中し始めた一向。

戦いと探索を同時に進めるのはやはり難しい。新入りである完二の奮闘につられたのか、クマもまた張り切つて工藤の匂いを嗅ごうと鼻を動かしている。

ぞろぞろと相も変わらず学校の景観をしている廊下を歩いていけば、何かに釣られるようにしてクマは一つの扉の前で立ち止まった。今まで見てきた扉とは違い、まるで映画館の大きな扉を連想させるかのような引き扉。

「ん？ んー……………ここからコーセーの匂いがするクマ」

「なんか自身なさ気だな？」

「たぶん、コーセーじゃなくてコーセーのシャドウかもしれないクマよ」

「……………何か知っているかもしれないな」

クマの懸念はもつともであった。

大抵にしてダンジョンの途中で彼ら特捜隊を惑わすのはそれを作り

上げたシャドウ。しかしその残滓を負うようにして本人に辿り着くのも特捜隊の常でもある。

心配そうな顔をするクマを宥める様にして一度力強く頷いた瀬多は、その扉に手を掛けて勢いよく開いた。

「何だ？ まだ駆逐されていないガキ共がいたのか」

開けた先で辛辣な言葉を飛ばしてきたのは、身体に青黒い靄のようなもの纏った工藤洸征。いや、彼のシャドウであった。

金色に光る不気味な瞳を瀬多たちに向け、吐き捨てる様にして放たれた言葉は何一つ遠慮のない傲慢な物言い。

彼がいた部屋は、それこそ講堂のようにして多くの長テーブルが彼のいる壇上を囲むようにして広がっており、彼の背後には大きな黒板がたて掛けられている。

今まで瀬多が見てきた教室よりも随分と広いその講堂の中心で、ただ工藤のシャドウは唾っていたのだ。

「テムエ……洸征のシャドウとやらだな？ アイツは何処にいる！？」

武器を手にし、間合いを取る様にして相對した瀬多たちの中で真っ先にシャドウに叫んだのは完二であった。

今にも殴りかかりそうなほどに睨みつけ、握りしめた鉄板には力が籠っている。

しかし、それを聞いたシャドウはただ呆れたようにしてため息を吐くだけだった。

「ククク……講義に遅刻しておいて真っ先に言う言葉がそれか。愚かだな、だが愚かだからこそ俺の糧には丁度良い」

「糧？」

「要らぬ詮索をするな、愚物が。だが残念だ。お前らは校則すら守れない規則違反の生徒共だ。ならば、分かるだろう？」

「なっ……」

芝居染みた語り口調と共に指を鳴らした工藤のシャドウの隣に、ダンジョン中に漂う霧が渦を巻くようにして集まっていく。

それに驚く瀬多たちなど気にもせず、その光景を満足したようにして眺める工藤のシャドウは、瀬多たちを一瞥するとにやりと笑みを浮かべて講堂の奥へと消えていった。

黒い霧を纏って現れたのは、今までのダンジョンでも幾度も経験してきた中ボス扱いのような強力なシャドウ。名は傲慢のマリア。

その姿は完二のダンジョンで見かけた雑魚シャドウと同じなれど、その身から滾る気配はクマでなくとも察知できるほど激しいもの。

しかしこれに敗れるようでは工藤の下になど辿りつけない。

勝手に消えて行った工藤のシャドウに舌打ちを鳴らしながらも、完二はただ邪魔だと言わんばかりに眼の前で漂うマリアへと鉄板を振り上げた。

ただその戦いの中で、どこからか聞こえる工藤のシャドウの声が講堂内に響き渡っていた。

「風紀委員か、それとも生徒会役員か。どちらにせよお前たちを罰するには丁度良い人形だろう？　せいぜい戯れの中で果てるがいい」

【まどろみの中】

俺の周りが、工藤洸征と同じ時を生きる子供たちが愚かなのは仕方がないことだろう。

彼ら彼女らは子供であり……そう、子供なのだ。

その一点だけで説明できる。

。

別に導こうなどと思ったこともない。

俺はそこまでお節介な人間でも高潔な人間でも無ければ、それをやるほどの暇もない。

だから、今もなお、友としていてくれる者との縁も、偶然にすぎない。

？

ひょっとすればそう思いこんでいるだけなのかもしれないがな。

いくら自分と交友を深めている人間が、実際の俺が生きてきた年数の半分にも満たない未熟な者たちだとしても、やはり共にいるのは楽しく、そして嬉しい。

。

そう、俺の周りにいる人間は等しく未熟で、そして魅力的だ。  
こんな俺にはもつたないほどの子供達。

まるで大人と子供の狭間にいるような俺には、それがとても眩しい  
……。

？

彼らには彼らの答えがある。生きることに対する漠然とした答えが。  
ただ今は、そんな大それたことを考える様な立場に彼らはなく、そ  
してそれ以上に重要なことが現実には散らばっているだけ。

苦しみ、悲しみ、そして笑いあいながらも生きていく、人間。

。

それを見ると、俺はどうしようもない不安に駆られてしまう。  
不完全で、不安定で、中途半端な工藤洸征。

。

早く、生きる意味を見つけ出さねば。  
生きる理由を探し出さねば。

。

こんな無様な姿……誰にも見せることが出来るわけもない。

。

存在する、理由を。

## 第十九章 工藤高等学校・西棟

【5月27日・金曜日・曇り・愚者の集い】

ペルソナ能力と一言で言うものの、それはただ魔法のような現象を起こしたり物理スキルのような強力な攻撃を敵に与えるだけではない。

確かにそれが瀬多たちにおける戦いの要であることは否定しようもない事実なのだが、それ以上に彼らの戦力を底上げしているのは、身体能力の向上だろう。

例えば瀬多の振るう両手剣。例えば花村の小刀二刀流。

どちらの例も普通の高校生が軽々それを振るって立ち回するには、必要とする筋力も技術も足りなさすぎる。

しかし、彼らはそれを主要武器としてシャドウに立ち向かうのだ。

力、魔、耐、速、運。

単純なまでに簡略化された個人のパラメータとも言える身体能力は、各自が纏うペルソナの補助を受けて強化される。

里中はトモエという前衛物理型ペルソナによって力や速さが強化され、天城はコノハナサクヤという後衛魔法型ペルソナとして魔や速さが強化される。

ペルソナとは心の奥底にあるもう一人の自分、というわけではあるが、むしろその有様は奥底を表しているというよりもその人となりを表すようなものが多い。

格闘技に精通している里中、前面で立ち振る舞うような性格ではない天城、完二に至っては力と耐が超強化された完全前衛型である。



まるでゲームのようだ、とは花村の言葉。

一定のシャドウを倒せばペルソナの能力値やスキルが変化し、まるでその様はレベルアップ。自分の成長が数値として現れるのは分かりやすいことなのであるが、いかんせん真面目な戦いをしている中でそういうものを目の当たりにすると、どうにも遊びのような気がして仕方がない特捜隊の面子。

今でこそレベルが上がる度にはしゃぐ有様ではあるが、あまりにも『ゲーム過ぎる』その有様は一株の不安を落とすこともあった。

頭の中で数値化される自分の能力、弱点、そしてスキル。現実と二次元がごちゃ混ぜになるようなその感覚は、決して慣れていいものでもないだろう。

工藤のシャドウが後にしたダンジョン内講堂。

彼が瀬多たちに差し向けた強力なシャドウは、一切の加減なく特捜隊のメンバーに襲いかかっていく。

魔法スキル、物理スキル。どちらにしても普通の人間では対処しきれないような恐ろしい攻撃ばかり。特にジオ系の雷などどう考えても目視して避ける様な攻撃ではない。

しかし、彼らなら出来る。

事実、その強力なシャドウ　傲慢のマリア　が放ったマハジオングを、花村は半歩ずれるようにして華麗に避ける。雷属性弱点である彼を狙った攻撃ではあったのだが、スクカジャで回避率を上げた彼には通らない。

脳天より落とされるその雷は、どう考えても致命傷を負わせるであろう苛烈な攻撃。

しかし、それをまともを受けた天城と里中はすぐさま瀬多の回復スキルによって治癒され、何事もなかったかのようにシャドウに攻撃を加えていく。

完全に直撃したはずの完二などは、自身のペルソナ耐性もあってかどこ吹く風というように笑みを浮かべている。

現状、ここで見られる全ての光景は、現実に溢れているあらゆる常識を覆すことばかり。

しかし彼らの間ではそれが常識。テレビの中では、これが常識。

細身の体では到底扱えきれないような鈍重な両手剣、ツヴァイハンダーを大きく振りかぶりながら、瀬多はそれをシャドウへと叩き下ろした。

数値化された能力値。設定された自分たちの体力値。

それ以外にも、ダンジョン内に設置された宝箱などはあまりに露骨すぎる仕様だ。

テレビの中だからこそ、そこで繰り広げられる戦いもゲームのようなものに近くなるのではないだろうか？

確かな手ごたえを感じた瀬多は、纏まりきらない『テレビの中の仕様』を頭の片隅に感じながら、目の前で苦痛な表情を浮かべるシャドウから目を離さずにいた。

「どこ行きやがった！ 出てきやがれ！！」

傲慢のマリアを黒い霧状に消し飛ばし、静寂が広がった講堂に完二の怒鳴り声が木霊を伴いながら響いていく。勿論工藤のシャドウはそれに答えるはずもなく、既にダンジョンの奥深くへと向かってしまっている。

それを知りつつも叫ばずにはいらなかったのか。完二は自分以外の声が聞こえない講堂の有様に一つ舌打ちをすると、まるで一仕事終えたかのように腕をぐるぐると回し始めた。

先ほどの戦闘で少しばかり張り切ってしまった弊害だろうか。彼の体力も他のメンバーと比べると少々消耗が激しい。

「完二ー、大丈夫クマか？」

「……こんなんで、へこたれてたまるかってんだ」

心配そうに完二の顔を覗き込むクマに、完二は勇ましいほどの鋭い目を晒したままに笑ってみせる。ちょっとだけその剣幕に引いてしまったクマだったが、それをからかう気にはならなかった。

彼が今回の救出にかける情熱は、他のメンバーと比べてもあまりに大きい。

いくら今回がダンジョン探索において初めてだったとしても、完二のその有様は、他の面々にとっても頼もしいことではあるが、やはり心配でもある。

「完二……何度も言ってるけどよ」

「分かってるっす。分かってるんすよ」

その自分の状態を顧みない有様を心配したのか、それとも何回言っても聞かない彼に呆れたのか。ため息と共に花村は完二に声を掛け

るが、彼は自分にも言い聞かせるようにして答えるのみ。  
その目は、花村の方など見てはいない。

花村以外もそんな彼の様子にいくら何でも、と考え始めた時、彼が誰に言うでもなくぼそりぼそりと話し始めた。

「いつもあいつには迷惑かけてばかりなんスよ。馬鹿やってたガキ頃も、アホだった中坊の頃も……高校に入ってからも」

「……幼馴染、なんだね」

「いや、ダチですらなかったかもしれねえ。俺は洗征の足ばかり引っ張ってて、他にあんまりダチがいなかった俺はよくアイツにひつついてて。あいつがいなかったら、多分、俺はどうしようもねえほどに腐ってた」

「完二……」

誰にその言葉を吐いているのか。それすらあやふやな中でただ完二は口を開く。

「あいつが誘拐されるかもって思った瞬間、頭が真っ白になって、俺が助けなきゃって思って……そしたら、俺、あいつに何もしてやれてねえ、って気付いたんス」

「……」

「ちよつと前に初めて、その、あいつに礼を言ったんスけど、それすらちゃんと言つことも出来なくて……俺は、あいつにまだ何もしてやれてねーんスよ」

後悔が顔に滲むように苦々しく吐き捨てる完二を、誰もが黙って見守っていた。

「しかもペルソナ能力なんて手に入れて、自分と向き合えたから強

くなつたんじゃねーかって自惚れたら、結局あいつを怒らせて」

「完二」

「だから、ちつとだけ、今回は無理させてくれないスか？　お願いしますっ！！」

完二の決意に溢れた声が響き渡る講堂で、頭を深々と下げた彼を見やりながら、誰もが　笑みを浮かべていた。

蛮勇と人は罵るかもしれない。無謀だと人は蔑むかもしれない。

だがそれ以上に完二の態度は気持ちよいほどに漢気に溢れ、何よりも工藤のことを誰よりも強く想っているものだった。

そこに冷静な思考を挟むほど彼らは大人ではなく、彼の態度を冷めた目で見るほど醜くもない。

それがいいことなのか、それとも悪い事なのか。

ただ、一つの正義感によって動く彼らにとって、完二の態度は何よりも歓迎すべきものであり、そして認めることが出来る心の有様であった。

神妙な面持ちを下げたまま動かない完二に、特捜隊の面々は一度苦笑を漏らしたまま講堂の奥、シャドウが消えて行った方へと歩いてゆく。

一人一人が、彼の肩を叩くようにして完二の横を通りすぎてゆく。

「まあ、後輩の面倒を見るのは先輩の役目ってな」

「うつしゃー、進むぞー！」

「ふふふ……大丈夫だよ、完二君」

「うおー！　クマの鼻もフルドライブクマー！！」

頭上から落とされる柔らかかな、そして頼もしい言葉の数々に、完二

ははつとしたようにその頭を上げる。  
明るさを伴いながら背後に消えていく花村たちの声を聞きながら、彼の目の前に立っているのは毅然とした様子で視線を向ける瀬多の姿。

やはり戦闘におけるリーダーはいつでも冷静でいなければならないのか。

ただ一人言葉を発してくれない彼に、完二はごくりと唾を飲み込んだ。

そして、それを見ながら微笑む瀬多。

「援護は任せろ」

一つ、肩を叩く。

ただそれだけで、完二はもう一度頭を深く下げたのだった。

【まどろみの中】

生きる意味を探す。傍から見れば随分と大仰な、そして愚かな目的

ではないのだろうか。

前世においてそのような高尚な目的を持ったまま生きた覚えなどない。

そんなくだらないことを考えるよりも、前世で生きた時間は苦しく、そして楽しく、希望に満ち溢れていた。

。

愚かだったと言っても過言ではないだろう。

現実を知らない子供だった俺は、時に世間を斜めに見つめ、時に現実から目を背け、目の前の快樂にばかり目を向けていた気がする。そしてそれは、一般の高校生として当たり前前の在り方であった。

。

だが、今は違う。

。

多少なりとも俺は賢しくなり、現実を見据える重要性を知り、妥協することが如何に大事なのかを思い知った。そしてそれは、大人としてごく普通の在り方だった。

？

ならば『大人』らしく生きていけば、それでよかったのかもしれない。

『 』 だった時と同じようにして賢しらに生きていけばよかった。

だが、それは……………。

惨めだった。

ただ自分の価値を高める様にして勉学に励み、それらしい人柄を装って世間を生き、その実、確かな目標すら決めていない自分が。前世より何一つ変わっていない自分が。

。

虚無。まるで空っぽだった俺を埋める様にして、俺は自己を高めようと動き始める。

しかし、愚かだった俺が出来たのは、工藤洸征としての地位を盤石にしようとするだけ。

無論新しいものに挑戦する度胸もなく、新たな高みに向かうほどの勇気もなく。

。

焦れば焦るほどに自分が無様極まりない人間であることを思い知らされる。

世間に知られている工藤洸征と、ただ自分だけが知り得る工藤洸征の姿が、徐々に乖離し始める。

俺は……あんなにも人に褒められるような人間ではない……。

。

何も無い。

だが、空っぽは嫌だ。

何も無い。



だが、空っぽは嫌だ。

何もない。

何もない。

何もない。

何か、ないのか？

？

！

俺が誇れる、何かはないのか？

。

一つだけ、ある。

。

ははは………一つだけあったぞ。

特捜隊によるダンジョンの探索は徐々にその深い所まで到達しつつあった。ダンジョンの仕組みから考えるのであれば、深いと言うよりは階段を上へ上へ上がっているため、高い所へといった具合ではあるが。

基本的に一つのダンジョン内の景観はほぼ変わらない。何度階段を上ろうとも彼らの前に広がるのは学校内の廊下と華奢な戸によって区切られた教室だけ。

何度も似たような光景を目にするために自分の居場所がわからなくなることもあるのだが、そこをはっきりさせるのはクマのナビ。

彼の嗅覚が工藤のシャドウを捉えれば、自ずとどれだけ自分たちが進んでいるか確認することもでき、相対的に現在位置も知ることができるだろう。

戦闘の度になんとも不釣り合いな声を上げる彼ではあるが、クマの役割は見た目以上に重要なのだ。

もう一つ言えば。

『何だ……こんなところまで来たのか。いい加減俺の言う事を聞かない奴には消えて貰いたいのだがな』

廊下の柱に取り付けられたスピーカーから聞こえてくる、シャドウの纏わり付くような声。

彼らが工藤の下へ近づけば近づくほどにシャドウの負け惜しみ染みだした声が彼らに届き、それは一種の確認のようにもなっていた。

無論それを聞けば聞くほどに特捜隊の面々は顔を顰め、完二はその声に心を痛める。

しかしそれが聞こえると言う事は、徐々に工藤の下へ近づいていると言う事。

前回の完二の時然り、天城の時然り。シャドウはまるで実況かなにかのように瀬多たちにちよくちよく声を掛けてくるのだ。

それが何の意味を齎しているのかは、誰も知らない。

『ああ、鬱陶しい。俺のためにならない奴は鬱陶しいだけだ』

吐き捨てる様に呟くシャドウの言葉に、完二はただ拳を握りしめるだけで抑える。

今すぐその言葉に怒鳴り声を上げてやりたい。今すぐその傲慢な物言いを否定してやりたい。しかし、あの有様もまた、工藤洗征が抑えつけていたもの。

工藤のシャドウの言葉に同調するようにして襲いかかってくる雑魚シャドウを屠りながらも、完二の顔は優れない。

まるで奴当たりの様にして雑魚への攻撃は高めるために、一概に悪いとは言えない傾向でもあるのだが……どちらにせよ、工藤を良く知る完二の心は酷く揺らされる。

あんな一面が洗征に？

あんな一面を抑えつけていた？

あれに、気付けなかった？

後悔と怒りのままに、ペルソナでシャドウを殴りつける。

塵芥のようにして消えていくシャドウを前にしても、完二の心は晴れない。

元々彼ら捜索隊のダンジョン探索は、たった一日で完遂されるものではない。

稲羽市が霧で包まれる日をリミットとし、その期限までであれば万全の準備をして救出に挑む。ペルソナ能力の向上、武具の強化、回復剤の補充。

何せダンジョンの最奥で戦うことになるだろうシャドウはどれもこれも強力な個体ばかり。準備を怠れば確実に痛い目を見るだろう。

しかし今回の工藤救出にせよ、前回の完二救出にせよ、どちらの時もやけに特捜隊はその救出を急ぐ立場に立ってしまっている。工藤のことを心配して先走る完二。完二の失踪に関して疑念を持っていた工藤。その影響もあってかこの二件に対する対応は異様なまでに迅速だった。

既に彼らの目の前には工藤の気配を漂わせる大きな扉が聳え立ち、その通路の脇には広場に戻るための蝶が舞っている。

強引なまでの完二の突破力を用いて奥へ奥へと進んでいけば、既に彼らは救出の一手手前まで来ていたのだ。

「ふう〜……うし、怪我ねーよな？」

「うん、大丈夫」

「けっこーシャドウとかスルーしたしね」

「その分クマにすごい負担掛かったクマ！ シャドウのいない道を選ぶのだったー苦労クマよ」

まだまだ彼らの声には余裕が残っており、切羽詰まっている状況とは言い難い。

むしろ目の前の扉を前にして完二は静かに闘志を溜めこんでいるように、今更準備運動を始めてみたり拳をかち合わせてみたり。既に後退という言葉は彼の頭から抜けてしまっているらしい。

勿論彼が先ほど表した決意にメンバーの全員が理解と協力を決め込んでおり、今すぐ扉の奥に突入すると瀬多が言っても誰ひとり反対する人間はいないだろう。

しかし彼はリーダーである。最後まで冷静さを持ってしてメンバーを率いなければならぬリーダーなのである。

ならば此処は一度引いて、万全の状態を持ってして挑むのではないのだろうか。瀬多の心の中に湧く、一抹の不安からの撤退案。

そもそも急ぐ理由など自分や完二の気持ちの問題であって、常識的に考えればここで一旦退くのが定石なのだろう。

そこまで考えて瀬多は首を振るった。

何を今更。自分たちの行動は須らくそのような効率や常識とはかけ離れたものによって突き動かされている。

そして、それこそが自分たちの誇る青い想いである。

過信ではない。リーダーとして皆を信じ、それに応えてくれる力が彼らにはある。

自分の言葉を待つようにしてしばし身体を休ませているメンバーを見やり、その有様にたのもしさを感じる瀬多。目の前に強力なシャドウがいるというのに、誰一人絶望に暮れるような表情をしていない。

ただ一人瀬多の言葉を無言のままじっと待っている完二に、瀬多は

一つ頷くとメンバーに突入の合図を送った。

「冨征ッ！！」

「……………完二」

大部屋のドアを突き飛ばす様に蹴り破った完二の視界の先に佇むのは、茫然としたまま此方を眺める工藤冨征の姿だった。

虚ろな瞳、か細い声、そして疲れ切ったような表情。およそ巽完二が知る工藤の姿とは、どれもこれも一致しない草臥れた姿だった。完二の後を追って続々と現れた特捜隊のメンバーも工藤の姿が眼に入る。

付き合いの薄いであろう彼らから見たそれも、とても工藤冨征とは思えない様相だった。

「ハハハ……………どうだ。馬鹿な奴らのお出ましって奴だ。どうする工藤冨征？」

「どうする、とは……………？」

「フ……………フハハハハハ！！ お前は、この期に及んで気付かない振りでもする気か！？ いくらなんでも無様すぎるだろう？」

「……………」

まるで同じだ。

抑圧されたもう一人の自己が自我を持ち、その持ち主を排除しようとする光景。捜査隊に面々にとってはこれで何回目のことだろうか。

やはり、といったように顔を歪める者と、その光景に歯を噛み締める者。

誰もが戦闘の予感を感じていた。

「工藤洸征……お前はそこにいるガキ共みたいに馬鹿じゃないだろう？ 馬鹿じゃないと思っっているだろう？ だから理解出来るはずだ」

「馬鹿などとは……」

「わけのわからない景色！ 意味不明な空間！ そして目の前には一寸変わらぬ自分がいる！ 分かっているだろう？ 夢じゃないと」

「……だから、どうした」

「ハ、ハハハ……強がるなよ、お前の嫌いなガキ共が後ろにいても」

言葉一つ一つを吐き捨てるように零す工藤に、ただシャドウは嘲笑の表情を以って返すだけ。ただ工藤洸征の容姿を持ちながら、手振り身振りで自分の感情を表すその姿は、異様と言う他なかった。

その光景を前にして工藤はただ顔を強張らせ、それでも口から吐く言葉の意味は強気で。

いくらシャドウの行いとはいえ、工藤洸征を誰よりも知っていると思っていた完二には、あまりに衝撃的な光景だった。

「洸征、お前……」

「……いや、どうせ下らない戯言だ。そうだ、君が来たということはこのふざけた場所から出られるのか？」

「……洸征」

「おいおいおい！ 一丁前に馬鹿が心配してやがる。そんなもの要らないと否定してやれよ！」

完二と工藤の間に流れたちぐはぐな空気。ただ工藤は目の前の事実

から逃れる様に口を回らせ、ただ完二は工藤洗征のもう一人の姿に愕然としていた。

それは、工藤洗征があのような汚らしい一面を持っていたという事実にはない。その一面にすら気付くことが出来なかった自分が許せなかったから。

完二は工藤と友達でいられることが一つの誇りだった。頭の良さも性格の違いも越えて、それでも工藤洗征という人間と『親友』になれたのは、誰にも譲ることの出来ない誇りだったのだ。

だから、誰よりも、彼のことを知っている、理解していると思っ  
ていた。

自分のことを、彼は理解してくれていたというのに。

「……俺と同じ顔で出鱈目を言うな。何だお前は。何なんだお前は」  
「認めたくないだろうなあ？ 何せお前は！ お前が友人と信じる者も！ お前が大切だと信じる輩も！ その他の全ても！ ……見下しているのだからなあ！？」

「それ以上口を開くなと言っている！！」

顔に片手を当て狂ったように唾うシャドウに、工藤は叫ぶようにして声を上げた。

今にも泣きそうなほどにしゃがれた声。

震え、震え、震え。工藤は強張った身体を無理やり動かす様にして、目の前のナニカの言葉を否定する。

「認めるよ。夢もなく？ 希望もなく？ 願いも見つけられず？  
そうやって出来上がったお前に何がある？ ……自分より馬鹿なクソガキ共の心を否定する度胸もない。一緒になって愚かになる勇氣もない。その癖自分の虚無感を満たそうと必死だ」



「な、何を……」

「夢え！？ 希望う！？ 願いだあ！？ 必死だなあ。ホント、びっくりするくらい必死だよお前。もつとあるだろう？ 分かりやすく自分の虚無感を満たす方法が……」

「……………」

まるで演説台で熱を上げ、そのまま自分の言葉に酔うくだらない人間のよう、シャドウは言葉を連ね続けた。

力なく言葉を返していた工藤の口は真一文字に閉じられ、ただぶら下がったままの拳が固く握りしめられていた。

「工藤洸征はいい子だ……工藤洸征は天才い……工藤洸征は優等生っ！ もうサイッコの気分だなあ……自分よりも馬鹿でくだらない奴らが俺に頭を下げて、しかもひっきりなしに讚え始めて……最高の茶番だよ……」

「お前はっ……それ以上……」

「自分には何もない屑人間と自覚しながら、その一方では夢や希望なんてものに溢れたクソガキが俺を慕う！ 夢や希望に破れてクソつまらない人生に堕ちた大人が俺を崇める……」

今にも殺してやろうと言わんばかりに肩を震わせ激昂する工藤だが、決してその手で眼の前のシャドウを殴りつけようとはしない。

出来るはずもなかった。誰よりも勇気のない彼には。

「それで！？ お前に今残っているものとは何だ！？ いつになっても空っぽのお前が最後の最後で縋りついたのは何だ！？」

「だ、黙れっ！」

「その空っぽな自分を優越感で埋め、自尊心を必死に高め、自分もさも『素晴らしい人間』だと思ひこむ！ ……だから何だかんだ言っつてこの立場を捨てられないのだろう？ だからこの程度の低い田

舎町に籠ったのだろうか？　ここにいれば俺は天才だ」

「……………つ……………そ、それは……………」

「そこで馬鹿面下げの巽完二も！！　結局は自尊心を保つための道具だ！」

「違っつ！」

「ハハハ……………何だ！？　今度縋りつくのは麗しき友情ということかあ！？　もっと上手く立ち廻れよ。俺が表に出て、もっと空っぽなお前を満たしてやるって言ってるのだよ！　友情！？　良識！？　現実、夢え！？　もっと自由に動こうじゃないか」

気がつけば工藤は、後ずさりながら犬のように喚きちらすだけだった。

自分と全く同じ顔をした物体が世界を嘲り、友を嘲り、そして自分を嘲る。そこに彼が抱いたのは怒りでも何でもない、ただの恐怖。何故お前がそれを言う。何故お前がそれを知っている。何故お前はそんなことを言う。

「分かってるだろう？　お前ではその優越感に浸ることが出来るのも限界なのだよ。蓄えたはずの知識は周りのガキ共に追いつかれ始め、しかも夢や希望にまで満ち溢れ輝き始めている」

「……………るな……………それ以上っ……………」

「ククク……………このままではっ！　お前が唯一頼りしてきたその醜い心も保てまいっ！？　お前という存在理由も、既に枯渇し始めているのだよ！」

工藤はただ必死だった。  
必死だったただけだった。

「俺ではないお前が、それ以上俺を語るなあ！！」

慟哭。

「ハハハ……ハハハハハハ！　そうだ、俺はお前じゃない……俺は俺だっ！！」

崩れ落ちるように工藤はその場に倒れ、シャドウは黒の気配を纏っただけ。

それを眺めていた捜査隊のメンバーは、眺めることしか出来なかったメンバーは、ゆっくりと武器を持ちあげ口を紡いだ。

ただ完二だけが、肩を震わせたまま、歯を食いしばるだけ。

そしてその黒の霧の中で、シャドウの声が響くのだった。

「我は影……真なる我……生などに、意味などないと知るがいい……  
… 答えなど！　どこにもないと泣くがいいっ！！」

## 第二十棒 我は汝 汝は我

【5月27日・金曜日・曇り・愚者の集い】

「完二い！ ボケつとしてんな！ 来んぞっ！」

「……分かつてるっス」

花村から飛ばされた檄に、完二は手に持った鉄板を引きずりながら静かに答えた。

クマを後方に控え、前に飛び出たのは花村と里中の二人。そこに前衛として加わるべきだった完二は、ただ工藤の有様に惑い、一歩遅れてしまった。

彼らの目の前に立ちはだかるのは自己の否定を受けて力を増した工藤のシャドウ。

黒い霧が晴れた場所にいたのは、ミノタウロス然りといった牛頭を持つ巨漢の異形。ただしその手に持っているのは大斧でもなく異様な光を放つ一冊の書物。牛の頭には白黒の学者帽が乗せられ、その身に纏っているのは昔の時代で見られるようなくすんだ色の着物。

そして何より異様を放っていたのは、シャドウの周りに浮かぶ幾つもの靈魂だった。人魂と言ってもいいそれは、ひっきりなしにシャドウの周りを忙しなく漂い、まるで敵である瀬多たちを威嚇しているようだった。

「ハハハハハ！ 何だお前らは。まさか俺に刃向かう気か！？ 馬鹿は馬鹿なりに地に這いつくばっていればいいものを」

牛頭の下卑た口元から発せられた嘲笑は部屋中に響き、瀬多たちは眉を顰めざるを得ない。

まるで人としては好かれる要素もない性格をそのままにし、罵倒することを止めないそれは傲慢という言葉そのもの。

だがしかし、彼らはその醜い心が真実ではないことを知っている。それだけが真実ではないことを知っている。

「……受け止めるっ……来やがれ！！ ガチで殴り飛ばしてやんよ  
」

絶えぬ嘲笑が続く中、完二が勢いよく吼えた。

瀬多たちがシャドウと戦う中で一種のセオリーとしていたのは、クマから送られる情報によって相手の弱点を突くという戦法だろう。次々にシャドウをダウンさせていき、隙だらけになった敵に総攻撃を掛ける。それが彼らの必勝パターンであった。

しかし今回の相手は、こういった強力なシャドウを相手にする場合、はさすがにセオリー通りというわけにはいかない。分かりやすい弱点も早々見破れるわけもなく、そこらの雑魚と比べればあまりにその戦力は違う。

当然の話ではあるが。

前回の完二のシャドウの時もそうであった。

確かに戦法自体はギガスのそれと同じく自己強化と物理スキルの繰り返しとはいえ、それが3人という複数で行われるだけでも大分効率が変わる。

故に瀬多は補助行動を繰り返す行うシャドウの従僕から排除しようと試みたのだ。

(どう来る？　クマからのナビは……まだないか)

チラリと瀬多が後方を見やれば、クマは集中するようにして眼を閉じていた。彼がどのようにして敵の情報を感じ取っているのかわからない。ああしている状態では未だはつきりとした情報は得られていない。

「ククッ……足りない頭なんて使っている場合かっ!？」

攻めあぐねるメンバーを余所に、牛頭のシャドウは周りに漂う靈魂の一つを掲げ上げ、そのまま連続してスキルを発動させた。繰り返すシャドウの前に現れる半透明の鏡。いや、一種の壁のようにも見える。

テトラカーン

マカラカーン

「なっ……」

「さあ来いよ！　馬鹿みたいにな！」

一気に全ての攻撃に対する反射効果を得たシャドウは、狼狽する瀬多たちをその醜い牛顔で覗き込んで低く嗤った。

「ひ、卑怯クマー！」

「相棒っ！ あれだ、テトラなんとか持ってねーの!？」

「すまない、今は……」

「ヒャハハハハハ！」

絶えず嗤い続けるシャドウに、誰もが嫌悪感を隠さずして顔を顰めた。

が、それも一瞬。ただ完二が大きく鉄板を振り上げた。

そして当然の如くその攻撃は見えない壁のようなものに弾かれ、完二は体制を崩したままに吹き飛ばされた。

「ちっ……」

「か、完二くん!？」

「たかがテメエのが跳ね返されたくらいでへこたれるかよ！ 里中先輩、追撃頼むっス！」

跳ね返されたダメージを気負うことなく叫んだ完二に、今は力押しでいくしかないと悟った瀬多が、それぞれの確に指示を繰り返した。魔法反射はなるべく跳ね返されても影響の少ないペルソナで試み、物理反射は前回から引き継いで装備しているラクシャーサで受ける。まるで消耗戦のようにじりじりと一進一退が繰り返される中で、シヤドウは面白くもなさそうに鼻で笑った。

「はっ……馬鹿みたいに引っ込んでいればいいものを……」

「うるせえ！ ここで引けるかよ！」

マハジオンガ

マハラギオン

花村の声にシャドウはつまらなそうにして手に持った書物を捲っていく。まるで風に吹かれた本の様に勢いよく捲られていくそれは、シャドウがにたりと笑うと共に禍々しく光った。光と共に放たれる苛烈な雷と炎。相性の問題でか、たまらず里中と花村が膝を着いた。

「わわわっ、ヨースケとチエチャンがピンチクマー!!!」  
「なっ、回復を……」

クマが眼を丸くして悲鳴を上げ、それに天城が焦るようにしてカードを払い壊した。

## メディア

二人の体力を万端にするにはまるで足りない雀の涙の如き治癒。自らも回復に回るべく急いで装備したペルソナを変えようと瀬多が意識を込めると、それを見ながらシャドウは心底つまらなさそうにため息を吐いた。

「分かる？ 所詮お前らも俺の糧。馬鹿なお前らが俺に勝てるわけもないだろう？ ちよっと本気を出せばこの有様。いい加減諦めれば？」

油断、それとも傲慢な有様が為せる見下しの視線。シャドウの周りを漂う靈魂がケラケラと嗤っていた。

このままとどめを刺すことも出来るというのに、シャドウはそれをしていない。どこまでも瀬多たちを嘗めきつた態度だが、彼らの有様を見ればそれも真実だった。

たかが一手で壊滅一歩手前まで追い込まれる。



工藤のシャドウは、今までのものと比べてもまるでレベルの違う手ごわさだった。

マカラカーン

テトラカーン

「また!？」

「ちっ……セコいことしやがって……」

そう吐き捨てるものの、完二の額には冷や汗が流れている。

ジリ貧であった。

反射魔法でじりじりと此方の体力を削り、そして自分の体勢が整った時に打たれる全体魔法スキル。今はまだ耐えることが出来る状態であるが、このままでは確実の此方の方が先に倒れる。

「まだまだあ!!」

色即是空

シャドウが大きく吼えると同時に、部屋全体に立ちこめる黒い霧。異様な気配と予感に構えた瀬多たちを襲ったのは、唐突な虚脱感だった。

衰弱、老化、毒、魔封。

それぞれ全くのバラバラにバッドステータスを付与された状況に、クマが溜まらず悲鳴を上げた。

「ど、毒と、えーと、老化と……ウガァー!! ゴチャゴチャして分からんクマー!!」

衰弱によって視界がぼやける中、瀬多は『全滅』という二文字が頭

の中にちらつくのを否が応でも理解させられていた。

【同日・工藤洸征】

真っ黒になった視界の中。

俺は自分の身体に何一つ力が入らないことに気付いた。

眠気によってか。それとも疲れによってか。ひよっとすれば病気が何かか。

嗤ってしまうほど自分の状態を冷静に見ようとしている自分がいる。

しかしその思考もすぐに失せた。

ここはどこだ？

眼が開いていないせいなのか、視界の全てが黒に塗りつぶされている。

やはり俺は寝ているのか？

しかしその思考もすぐに失せた。

俺は、何をしているのだろうか？  
俺は、何をしているのだろうか？  
俺は、何をしているのだろうか？

俺は、何のために。

ふと唐突に、思い出す。

という男の名前だ。

今より35、6年ほど前の話であったか。

という男は、特に目立った話もない普通の家庭の普通の子供として生まれ、そして育ち、極々当たり前の価値観を持ち得ていた。

父親の方は特別話すこともない一介のサラリーマン。母親は少々ふくよか過ぎる容姿をした胆っ玉母ちゃん。

そして佐伯明人もまた、特に顕著なものを持たない少年だった。

そんな少年が波乱万丈の人生を送るわけもなく、普通に小学校を過ごし、普通に中学校を過ごし、普通に高校を過ごしたのちに社会に送り出された。

高卒の社会人、という奴だろうか。

それが俺、だった。

後に転生者として生まれ、工藤洸征の名を貰うことになった男のこ

とだった。

そんな、別に強くもなく弱くもない、没個性な俺が転生という状況に置かれ、どのように生きるのかを悩むのはごく当然の成り行きだった。

それが当然だろうか？

転生者の例など……知りはないから、そう思い込むしかない……。

ここで気付くべきだったのかもしれない。

俺は……自分で生き方を模索出来るような人間ではないと。

そこらに転がる有象無象と同じように、誰かの通ったレールをなぞりながら現実に馴染んでいく人種だと。

必死だった。

本当に血反吐を吐くというのがただの揶揄ではないかのように、俺は必死だった。

生まれた意味も生きる意味も流してしまうにはあまりに特殊な生まれで、そして参考になる例もあるわけがない。

そして何より、俺は欲張ることが出来る位置にいた。

それはそうだろう。

いくら言い方を変えた所で、元々持っていた知識を子供の頃から利用できた俺には、それこそ無限の可能性が広がっている。

夢だったものも上手く立ちまわれば叶えられるだろうし、高い希望もきちんと計画を練ることが出来れば実現する。

別にテレビに取り上げられるような天才児を望めと言っているわけではない。

もうちょっとうまく転生という利を扱い、詰将棋のように人生計画

を練ることだって可能だったはずだ。

なぜ、俺はそれをしなかったのか。

なぜ、俺は欲張らなかったのか。

それはそうだ。頭だけがよくても意味がない。

知識だけが誇れても仕方がない。

俺は、器が小さい。

それを理解したのはいつだったろうか。

前世で味わった凡愚な人生と価値観に縛られ、一歩踏み出すことさえ慎重でなければ我慢ならない。周りの価値観に影響を受けることすら怖くて、どこまでも現実に縋りついた。その現実すら打破する意地もなく、流れるままに生きるだけ。

そしてやっとのことで自分の危うさに気付いてみれば、工藤洸征が持っているものなど何一つ存在しなかった。

ただ一つ誇ることができたのは、工藤洸征が長年張り続けていた優良人種というメッキ。田舎町という小さな世界で育て上げた自尊心。

周りの子供が、俺よりも知的的に劣っているという理由で。ただ自尊心だけが膨れ上がった。

それも、どうしようもなく貧弱な。

実際に考えてみれば分かる。

例えば生徒会の話。幼少から受けてきた評価によって押し付けられた役目は、俺の精神や日常を圧迫するまでの重しになっている。

たかが高校生の話し合い程度の事態に、だ。

例えば完二の話。彼が失踪を境に変わった様に、俺は素直に喜べなかった。

今までただ愚かであつた彼に、いや、愚かと見下すしかできなかった俺を、彼はたやすく心の強さで飛び越えようとしている。そして、それを認められない俺。

友人の成長を歓迎する余裕など、既に俺にはない。

ああ、そうか。今、気付いた。

何故俺が瀬多さん達の行動にあれほどまでの怒りを覚えていたのか。あれは、ただの嫉妬だ。

別に大人の道理や、世間の常識を考えているわけではなかった。

ただ、俺に出来ないことを彼らが行うのを、認めることができなかっただけ。

自尊心を満たすために完二の失踪に関わり、そして何一つ力にならない俺の無力を知り、彼らがそれを為し得ることが許せなかっただけ。

。

愚者が万能な書物を持ち、それを盾にして世間を騙し続けた。

万能な書物とは、すなわち前世での知識。

枯渇することなど当然の、際限ある知識。

そもそも出発点から俺は間違えていた。

こんな、どうしようもなく、ただ他人より先に行くだけの知識に、

しがみ付いて。

無様。

真っ黒な視界さえ無色に消えていく中、俺は絶望とも言える心の内に、沈んでいく。

その時、何か、懐かしい声が聞こえた。

耳をつんざくような悲鳴を遠くに聞き、徐々に光を取り戻していく黒の視界。

それがぼやけたまま真っ白になった時、俺の視界に広がっていたのは異様な光景だった。

牛頭の異形。武器を持って構える瀬多さん達。そしてその後ろで何やら喚いているヌイグルミ、のようなもの。

そして、相対するようにして睨みあう瀬多さん達と異形の間で叫び声を上げる、完一。

「負けられねえ……負けてたまるかよっ!!」

ああ、相も変わらず暑苦しい奴だな。

俺はただ情けなく寝転がったままに眺めていた。

身体は、動かない。

ここまでの大立ち回りを見やり、そしてどうやらその中心に俺がいることを認識すれば、この異常な状況も少しだけは理解出来る。

あの異形は、俺から出た化け物で。

そして彼らは、それを排除する力を持ち、そして俺を助けてきてくれた者で。

おそらく完二も失踪した時にこんなわけのわからないことに巻き込まれたのだろう。

ということは、完二は、おそらく。

多分、だとか。おそらくだとか。

未だ情報の少ない俺にははっきりとしたことは分からない。だが、時折彼らの背後に浮かぶ霊のようなものを見れば、なんとなくそれがあの牛頭と同じもののような気がした。

多分、完二も俺と同じように自分の嫌な部分を見せられ、そして彼らに助けられて。

そして、それを……乗り越えて。

あれを、力にして。

その時、俺の胸中に浮かんだのは、悔りだった。嫉妬でもある。

あの完二が乗り越えたのか、などという浅ましい心。

ははは……こんな俺では、自分の心など乗り越えることなど出来そうもない。

今の俺に残っているのは、あの異形が言っているように汚らしい自尊心だ。ひたすらに無様を見せずにいようとすることでない意地しか残っていない。

そう考えれば、この15年間もの間、ただひたすらに執拗にメッキを張り続けた根気だけは誇れるのかもしれない。



もう一度閉じかけた瞳の先、妙な光が閃光のように迸った。  
気だるさを感じながらもぼやけて見える薄明かりの先、完二の声が  
聞こえた。

「負けられねえって言うてんだろっ！ あいつが、本心だとか、嘘  
吐いてるとかじゃねえ！！ 俺はあいつに救ってもらったのは変  
わらねえ！ 人に受け入れられねえって愚痴ってた時に救ってくれ  
たのはあいつなんだ」

「そんなものただのポーズだと言っているだろう？ そうやってい  
れば素晴らしい人間だと崇められるからなあ！」

「んなもん知らねえつつつてんだろっ！ 俺は救われたんだよ！  
これだけは変わらねえ……なのに、俺は何も出来てねーだろーが！  
！」

果たして、それは本当なのだろうか。

俺の抱いていた彼に対する親切心も、先を導くような父性に似た関  
係も、所詮は自分の自尊心を満たすための行動だったのではな  
いだろうか？

身体は、動かない。

「尚紀の奴が言うてたなあ……あいつは調子に乗らねえように我慢  
してるって。それがどんだけつれえか俺は知ってる！！ 言つとく  
が俺の裁縫スキルは最大級なんだよっ。ペルソナのスキルに入れて  
もいいんじゃないかってくらいにな！」

「はあ？ お前は、何を言うて……」

「その癖誰も認めてくれねえ、周りにいる知り合いくらいしか認め  
てくれねえ。分かるか？ 褒めてもらいてーんだよっ！！ 自尊心  
？ んなもん人間だったら持つて当然だろーが！ それをテメエ、  
15年間だぞ！？」

「……………」  
「誰よりも我慢してきたあいつが、ちょっとくらい調子こいて何が悪いっつーんだ、ゴラァ!!!」

違う。違うのだ。完二。

それは所詮俺の自業自得なだけだ。俺の引き起こしたものだ。俺はお前と繋げた絆だって、ただの餌として見ていただけだ。

身体はまだ、動かせない。

「バカみてーに嗤ってるテメエには負けられねえ。無様晒したまんまキャンキャン吠える奴には負けられねえ……………あいつはな！もつと格好いい部分だってあんだよコノヤローがつ!!!」

否定。否定。否定。

際限なく俺の耳に響く完二の声を、俺はただ口だけで否定していた。心のうちでは、そんな俺もいるのだと胸を張りたい自分もいる。

俺は　もつ。

「無様だっつーんなら！そのまま満足すんのかよっ!？格好悪いままで満足するなんてどこのバカがやることかよ……………男じゃねえ……………俺のダチなら、根性見せるよお!!!」

ダチ、と呼ぶ。

ただ、その響きが、俺は誇らしかった。そして、裏切りたくないとも。

工藤洗征。

聞け。

このままで、いいのか？

このまま失意の内に溺れ、命を落とし、あまつさえ自分を助けに来た友人を巻き込む。

義務感？ 正義感？ そんなものではない。

そんな、難しいものではない。

工藤洸征は、無様である。

その上で、工藤洸征は誰よりも無様を晒すことを嫌う。

なんと笑える話だろうか。滑稽を通りすぎて失笑モノだ。

だが、今、ようやく俺は気付くことができたのかもしれない。

無様であることは認めた。

そんな汚らしい有様が俺の本性であることは理解した。ならば、あの異形のように理解したまま溺れるのか？

許せるのか？

無様なままでいいと、諦めるのか？

許せるものか。

意地。

だから、動け。

【同日・愚者の集い】

喉が焼けるほどの完二の叫びに、果たして何の意味があったのだろうか。

心行くまで自分の思いの丈を叫び、そしてそれを聞く者にどのような影響があったのだろうか。ただシャドウはうんざりしたように首を振り、完二は肩で息をしながらシャドウを睨みつける。

そしてその背後では、負けられないとばかりに弱った身体を奮い立たせる瀬多たちもいた。

今まで何度も事件を阻止してきて、今まで何度も武器を振るい、何度も痛い目に合いながら彼らは進んできた。

あまり声高には叫べない不純な想いもあるのだろう。事件阻止に対する英雄気取り、テレビの中という神秘への興味。そして、独占欲にも似た特別な力。

そんな想いがあるのは誰ひとり否定しないだろう。だが、それだけではない。

そう。シャドウについても同じだ。

それだけじゃない。

自分たちの中には犯罪を繰り返す真犯人に対する憤りがあり、人が傷つくことの悲しさを知り、凶行を阻止するための正義感もある。故に、ここで倒れるわけにはいかない。

歯を食いしばる様に立ちあがった瀬多は、勢いよくカードを握り潰した。

### メデイラマ

ペルソナチェンジ・プリンシパリティ。

魔術師アルカナチャンスによってメディアから変化した回復スキル。瀬多たちを癒すには十分なほどではあるが、現状を打開するには至らない。

何せ一度に放ってくる全体魔法スキルが、花村と里中の弱点に合致してしまっている。

「もう飽き飽きなのだよ……」

失望したように漏らすシャドウに、誰しもが厄介な雰囲気を感じ取っていた。

だが、その時、ナビに回っていたクマが、素っ頓狂な声を上げた。場の緊迫感に合わない、どこまでも間抜けな響きだった。

「コ、コーサー……？」

クマが声を投げ掛けた方向を彼らが一斉に見やれば、そこには気絶して倒れたままだったはずの工藤洗征が、ふらふらと足元がおぼつかないままに立っていた。

顔には未だ疲れの表情が見え、ところどころ肩で息をしているよう

にも見える。  
ただ瞳だけが、光を失っていないかった。

「こっ、洗征!? 何でだ? 今までは……」

「んなもん後でいいでしょ!? 洗征くん、無理しないで!」

「せ、センセイ?」

「クマッ! 洗征を頼む!!」

瀬多の指示はこの状況において適切だった。

戦うメンバーの中から彼の守護に回すには、あまりに自分たちの状況は切羽詰まっております、そして守護を回さないという選択肢も取れなかった。

自然と舌打ちを返す花村と瀬多。確かに目が覚めたのはいいことかもしれないが、現状が現状だけに喜べない。

「完二君?」

「……………」

その中で天城の声にも返事をせずに、完二はただ黙って立ちつくす工藤を見つめていた。

そしてクマがおそろおそろ工藤の下へ近寄った時、彼はゆっくりとシャドウの方へと動き出した。

「ま、待って! 洗征君!?!」

「何だ? 今更目を覚まして何をするつもりだ?」

「……………」

天城の制止の言葉にも、シャドウのねめつける様な言葉にも返答はない。

ただ無言のままに牛男姿のシャドウへと歩いていくのみ。  
戦闘の真つ最中だと言つのに、誰も彼もが彼の行動に眼を囚われていた。

ゆらゆらと流れる様に歩き、そのままシャドウの目の前に立つ工藤。俯き加減なままに影を背負った顔が、ふとシャドウを見上げるようにして薄い光に照らされた。どこまでも見通すような鋭い眼を湛えた工藤の顔が、そこにはあった。

「お前は、俺か」

「はっ……今更遅い。さっさと寝ている」

「いや、それも、な」

その凜々しい瞳の割には、彼の口から漏れる声は小さい。やはりダンジョン内に漂う霧に体力を奪われているのか、どちらにしても瀬多たちが黙って見ていられる状況でも無かった。

引きとめようとする瀬多たちを放って、それでも工藤は言葉を連ねることを止めない。

「どこまでも無様だな」

「そうとも、そしてその無様を認められない男なのだよ、お前はあ  
！」

「そつだ。どうしようもなく無様な生き方をする空っぽの俺を埋める何か欲しかった。だから、俺は腐った」

異形を前にして、ただ静かに語る工藤の姿は、どこか止めてはならない雰囲気があった。

完二は、それをなんとなく理解していたのかもしれない。

彼だけは工藤の行動を止めなかったから。

「そつだ。俺には、無様を隠そうとする弱い心しかないのかもしれ  
ない」

「……………」  
「ならば工藤洸征に聞く。お前は、何をやっている」  
「あ？」

牛男のままの顔で、シャドウは呆けたように首を傾げた。  
ただ、工藤がその鋭い瞳でシャドウを射ぬいていた。

「無様に喚き、誰かを傲慢にも見下し、そして拳を振るう」

「あ？ あ？」

「ああ、俺は無様だよ……………そしてそれは、何よりも唾棄すべきこと  
だ。俺にとつて」

「なっ……………」

誰に告げるでもなく、いつそ清々しいまでに笑いながら語る工藤。

彼は、そう言い終わると、握りしめた拳を力のままに牛頭の顔へと  
振りぬいた。

鈍い音を立てながらよろけるシャドウと、右手を赤くする工藤。

ただ見守っていた瀬多たちは、その行動に啞然とするしかなかった。  
そして、何事もなかったかのようにして工藤は完二の方へ視線を向  
けた。

「面倒をかけた」

「気にすんな」

「……………」

「いいから、行けよ」

「……………ありがとう」

頼もしいくらいに笑いあう二人を前にして、殴りつけられたシャド



ウは狂ったようにその様子を睨みつけていた。

先ほどまでは感情豊かだった行動も既になく、そこらに蔓延る雑魚シャドウたちのように、暴を振るうことしか考えていない。

「オオオオオオオオ！」

獣のように吠える牛頭の顔は所々がガラスのようにひび割れ、手に持った書物も枯れていくようにしてばらばらになっていく。

ただ周りに漂っている靈魂だけが暴風のように暴れ回っていた。

どこまでも無様を晒すシャドウを前にして、工藤は心の底より思う。このような醜いものに気付かぬままに生きてきた自分が恥ずかしいと。

人は誰しも心の中に人に見せられない汚い感情を抱え、生きている。そこに疑問を挟む余地などなく、そして工藤自身もその理屈は知っていたはずだった。

だが、その唾棄すべき感情のことさえよく知らないまま、自分は生きてきた。

眼の前でただ獣のように暴れ回り、理性さえ持たず叫び声を上げる醜い自分だったモノ。

それをじつと見据え、砕けんばかりに歯を食いしばった工藤の手の中には、既に青白く光るカードが揺らめいている。

自分の為すべき事とは、今、心の底から願っていることとは。

手で揺らぐカードを目の前に翳すと、工藤は獰猛な笑みを浮かべながら吼えた。

「認めてやる……無様なままに、弱いままに。だからこそ、此処でお前をつ！俺を、叩き潰さずにはいられない……意地を張らせてもらっぞ、工藤洗征っ！！」

ただその決意を表すために。

応えろ、カライテンジン

第二十梓 我は汝 汝は我（後書き）

山場ですが、次回は更新が遅れます。  
期待してくれる方、申し訳ない。

## 第二十一棒 最端より手を伸ばす

【5月27日・金曜日・曇り・工藤洸征】

限界値を振りきれんばかりの高揚感が俺の身体を包んでいく。ガラスの欠片のように飛び散るカードの破片を尻目に、俺は背後に浮かぶナニカに意識を集中させた。まるで覇気を実際に目にしたかのように俺の周りには青白い靄が浮かぶ。ひよつとしたらこれを夢見がちな人はオーラなどとも呼んで喜ぶのかもしれない。

不可解。不可解。不可解。

俺の身に起きていることも、俺の目の前で崩れかける牛頭の化け物も、そして俺の様子に眼を丸くする瀬多さんのことも、俺は何一つ理解できていない。

だが、自然と笑みが零れるのを止められない。今すぐにも全力で駆け抜けて行きたくなるようなほどに魂が震え、おかしなまでの充足感に身体が踊る。

不自然なまでの変化だが、俺は首を傾げるつもりなど欠片もなかった。

眼の前で無様にも吠え散らす俺の分身から視線は離さず、ソレが狂乱するかのように暴れば暴れるほどに、俺はソレを叩きつぶしたくなる感情に逸らせられる。

「洸征っ！」

歓喜か。不安か。それとも俺の異常なまでの高揚感に同調したのか。背後から飛ばされた完二の声は、戸惑いながらも嬉々としたものを含んでいるようにも聞こえる。それが、何よりも心強い。

ふと、頭上を見上げる。そこには青白いオーラを纏いながら俺と同じように眼の前の異形を睨みつける力の奔流があった。

その頭は異形と変わらぬ牛頭。しかしそれは知性に溢れ、油断ならない鋭い瞳を輝かせている。身に纏うのは歴史書にでも見られるような高位の者が羽織る着物。右手に持つ書物はどこまでも輝きを放ち、左手に持つ球体状の光は常に雷を走らせている。

カライテンジン。

名の意味が、俺と言う存在にどのような関係しているのかは知らない。何故このような形をしたモノが俺の分身であるのかは分からない。

だが、その戦い方は分かる。これをどのようにして行使するのも分かる。俺が今から何をせねばならないのかも分かる。もはや迷いなど無かった。

マハジオンガ

歯を食いしばる様にして力を込めれば、攻撃方法の名が頭に浮かぶと共に、眼の前の異形に眩いばかりの雷撃が幾つも落とされた。

唸り声のような低い声を上げながら苦しみに身体を擦らせる異形。俺の背後から息を飲むような音が聞こえた。

「工藤、くん？」

「……………戦えます」

「大丈夫か？」

「戦わねばならない時ですから」

心配するかのような、啞然としたかのような呆ける里中さんに、惑うことなく告げる。

俺の行動がこういった荒事に慣れているはずの瀬多さんたちにも、俺の行動は予想外のことだったらしい。

……いや、それもそうか。さきほどまで寝転がっていた者が気張るにはあまりにも無茶な行為だ。

しかし瀬多さんの凜とした声だけは、変わらなかった。

目まぐるしく変わっていつているのだろう場の流れに迷うことなく、俺の行動を容認し、そして先へ繋げようと試みている。

チラリと彼らの方を見やれば、瀬多さんの指示に頷き始めた面々の姿がそこにあった。

強いなと。単純に思った。

だが譲れない。譲ることなどあり得はしない。

再び眼の前の異形に視線を戻せば、その醜悪な顔から黒い霧状の瘴気が漏れ出ていた。アレの仕組みなど分かりはしないが、兎に角攻撃を加えていけばそのうち倒れ伏すだろう。

などと考えていけば、俺の放ったものとは質の違う雷撃が再び異形へと落とされた。

「手助けくらいはいいいよな？」

「拒む道理などないさ。だがトドメは譲らん」

「へっ……負ける気がしねえな」

「ああ！」

腕をぐるぐると回しながら俺と肩を並べた完二が猛々しい声を上げながら笑う。

応えないわけにはいかない。彼のを、続々と俺の周りに集まってくる瀬多さんたちの声を聞くたびに心が震える。

「しょうがねえなあ……花を持たせてやるとすっかね！」

「よっし！ まだまだあ！」

「無理は禁物だからね？」

「あわわ……だ、大丈夫クマかー？」

大丈夫さ。

大丈夫じゃないわけがない。

### 【同日・愚者の集い】

工藤が自分のシャドウを、弱い心を受け入れた影響で、既に牛頭の異形は正常な形を保つことすら叶わない状態になっていた。

そもそもシャドウが否定されることによって得られる暴走化の力も、そのシャドウを核として周りの雑魚シャドウ達を取り込むことによ

って起きるものである。

つまりは、工藤達の前で知性の陰りすら見せずに暴れる牛頭の異形は、既に工藤のシャドウという核を無くして揺らぐ雑魚シャドウの塊でしかない。

もはや瀬多たち相手に叶うような力など持っていないのだ。

マハジオンガ

しかし腐ってもその身は幾つものシャドウが集まった集合体。油断を以って相手することは出来ない。

部屋中に響く雄たけびと共に放たれた魔法スキルは、瀬多たちチームを遍く飲み込むようにして放たれた。

「させんっ！」

しかしそれに氣勢を上げるのは工藤洸征。

魔法全体スキルとして放たれたソレに、超絶的なまでの反応でペルソナを発動させた。

マカラカーン

工藤の脳内でのみ理解できているそのスキルは、発動と共に花村の目の前に透明な壁を作り上げる。

果たして工藤が戦闘におけるペルソナ能力の仕組みを正しく理解できていたのだろうか。雷撃属性に弱点を持つ花村をピンポイントで守ってみせ、自らはシャドウの放った攻撃を真っ向から受け止めた。

「洸征っ！？」

「構いません！ そのまま攻撃を！」



驚いたのは花村か。ちよつとだけ後ろの方でクマもまた驚いていた。双方のスキルによつて体力が減らされるが、たかが一度の全体魔法スキル。即座に天城が回復スキルを発動し、残るメンバーがここぞとばかりに攻め立てる。

「オオオオオオオオオオオオ!!!」

再び猛るシャドウの叫び。

瀬多たちによつて苛烈に攻め立てられたことへの苦しみか、それとも自ら手も足も出せない現状への怒りか。どちらにしても、瀬多たちの眼に油断はない。

マハラギオン

そして叫んだところで攻撃の手が休まることなどあるはずがない。無様に吠えるシャドウのことなどおかまいなく、工藤は再び眼の前に浮かんだカードを砕く。もはややりすぎではないかとも思われるほどの灼熱の炎に、叫び声を上げることなく煙を上げるシャドウ。だが工藤はまだ視線を外さない。

「やったか!？」

花村の言葉に、里中や瀬多辺りが顔を歪めた。曰くお約束か、それともフラグと言うべきか。地雷を踏むことには容赦のない彼の言葉に、その場の流れが決まったようなものだった。

「ウオオオ……オオオオオオオオオッ!!!」

ぐらりと揺らめきながら炎の中で立ち上がるシャドウに再び武器を構える面々。

しかし、万全の体制で構える瀬多たちのことなど眼中にないかのように、牛頭のシャドウはがむしゃらに工藤へと突進していった。

「工藤君っ！ 危ない！」

天城が咄嗟に上げた金切り声に、工藤はその顔を強張らせることすらしなかった。ただ愚直にその巨体をぶつけてくるシャドウを前にして、静かに佇むのみ。

散り散りに敗れたシャドウの持つ書物も炎で消えた。

周りに漂う靈魂も雷によって光の中に消えていった。

荒事には向いていないなどでも言うかのような着物など、すでに瀬多たちの猛攻でボロボロだ。

そんなシャドウが最後に試みたのが、何一つ思考など残さない獣のような突撃。人の心を乱すかのようなシャドウの傲慢な有様など、戦う内に瀬多たちの頭からは消えかかっている。どこまでも、無様な工藤のシャドウだったモノ。

工藤の湛えた瞳に容赦などない。  
あるわけもない。

だが、そうやって身に纏う全てが灰と消え、ただ喚くようにして暴れるしかないその姿は、工藤洗征という人間にとって

#### テトラカーン

ただ佇む工藤と、襲いかかるシャドウの間に現れる透明の壁。

獣同然の突進などその壁の前ではあまりに無力で。愚かにも加減な

くそれに突撃したシャドウは、そっくりそのまま返された衝撃に吹き飛ばされると、そのままピクリとも動かなくなってしまった。

「本当に……どこまでも無様だ……」

工藤の漏らした言葉は、果たして誰に向けたものか。

倒れ伏したシャドウから漏れ出る黒の霧を眺めながら、工藤は一息を吐くだけだった。

### 【同日・工藤洸征】

戦いの終わり。果たしてどこまでが戦いで、どこからが俺たちの勝利だったのかは分からない。ただ目の前で倒れ伏し、徐々にその邪悪な気配を弱めていく異形を眺めていれば、なんだかどつと疲れが出たようで少しだけよろめいた。

「お、おいつ！」

「いや、大丈夫だ」

肩を持つようにして心配してくれる完二に弱弱しく笑いかけながらも、やはりあの異形の残滓とも取れる黒の塊から目を離せない。霞みそうになる視界の中でそれだけをしっかりと見届ける様に意識を集中させていけば、黒い霧が晴れ切ったそこにいたのは、俺の……もう一人の俺の姿だった。

「シャドウ……」

そう零したのは瀬多さんだった。成程、確かにあれはシャドウと呼ばれるに相応しいのかもしれない。

呼び方がどうであれ、目の前でこちらを無表情なまま見つめる存在は俺の内より生まれ出たものだ。シャドウであれ何であれ、このまま叩きつぶしたままでいられるものでもないのだろう。

「完二、少し離してくれ」

「……おう」

渋々といった感じが如実に表れた声だったが、俺の申し出を感じは受け入れてくれた。

一步、一步。足を引きずる様にしてもう一人の俺に近づいていく。なんとというか、俺の背中に突き刺さる視線と不安気な空気が苦々しい。まあ、心配してくれるのは嬉しいのだが……やはり見られたくないものだ。

「見て見ぬふりなど、許されるわけもなかったな」

シャドウは、頷く。

「立ち向かうのではなく、逃げることなど許されるわけもないな」

シャドウは、頷く。

「……やり直せる、だろうか」

つい心細くなれば、目の前の工藤洗征は頷かなかった。

しかし、首を横に振りもしなかった。

それもそうか。

「そうだな……まずは、認めねばならない」

シャドウは、頷く。

「他者を見下し、自分の弱さを認めようとしなかった。自らの弱さを隠すために、身の回りの全てを糧に変えた。無様であることを認めなかった」

シャドウは、頷く。

「……………お前は、俺だ」

その言葉を、その事実を声に出すことに、どれほどの時を必要としたのだろうか。

変わらぬ虚脱感に身体を蝕まれながらも、それだけはごまかすことなど出来なかった。

だが、それを言えば、目の前の工藤洗征は、力強く頷いてくれた。

黒の霧が青白い光へと変わっていき、再び異形の……ペルソナの形を以って俺の目の前に現れれば、次第に充足感に満たされていくことに気がついた。

どこか懐かしい、こそばゆい感情。

自分で、自分を褒めることが出来たような気がした。

果たしてあの異形と戦っていた時の高揚感はどこにいったのだろうか。完二に肩を抱えられる形で一步一步進める足すらも鉛のように重く、視界も霧がかかったようにぼやけて霞む。いや、先ほどまでの空間はそれこそ霧にかかっていたのだが。

朦朧とする意識の中でも瀬多さん達の声は不自然なほど明瞭に聞こえていた。

早くテレビの中から出た方がいいだの、寂しいからたまにはこっちに来てクマだの、予想できそうな会話の流れ。

テレビの中から出た方がいい、などという物言いにはさすがに首を捻りかけたが、勝手知ったるが如く俺の歩を補助してくれる完二に従えば問題はないのだろう。

そうしてしばらくの間重い足を引きずれば、俺の視界には眩いばかりの光源と電子音の激しい騒音が耳に入ってきた。

「此処は……」

つい零してしまった疑問に、誰かが答えてくれる間もなく此処がジュネスの電化製品コーナーだと気付いた。

俺の声に気付いて丁寧に答えられる完二に苦笑いを零しながらも、

俺は現状を正しく把握しようと鈍い頭を働かせていく。

テレビ。異空間。異形。瀬多さんたちの行動。

……駄目だな。どれも推測に域を出ないあやふやなものばかりだ。さらに言ってしまうえば、疲労のような気だるさで頭がうまく回らない。

「ちょっと客の視線がきついな……」

「特捜本部に一旦避難しよっか？」

「工藤君、もうちょっと歩ける？」

「……なんとか」

天城さんの気遣う声に言葉通りになんとか返しておく。というか特捜本部とは何だ？

まさか、彼らは、警察機構か何かに属している身なのか？ 彼らの行動の意味はそれ故に？

まさか、そんなもの空想の世界でしかあり得ないはず……いや、そうなれば先ほどの異空間こそが……。

などと無意味な思考を回しながら完二に運ばれた先は、ジュネスのフードコート。

一人啞然とすればいいのか呆ればいいのか戸惑う俺など放っておいて、瀬多さんたちはひとまず大丈夫だと言わんばかりに胸を撫で下ろしていた。

「うっし……洗征、ちょっと座つとけ」

「あ、ああ……」

そのままフードコート内にある屋根付き長椅子の一角に座らせられた俺は、妙な羞恥心を伴いながら彼らを見ていた。いくら格好を付

けたとはいえ、彼らには隠すところなく自分の醜い自分を見られ、そして青臭いような感情で吠えてしまった。

まるで漫画の1ページをなぞったような戦闘に違和感なく没頭していたことにも、少しだけ似たような感情が込み上げてきてしまう。

「あの、世界は……」

「ん？」

聞きだそうとも思ったが、実のところある程度は予測が付いているのだ。

一般的に考えれば頭がおかしくなったのではないかと考えられる事態の連続。おかしな幻影でも見ているのではないかと考えはしたが、それ以上にあの異空間で起こった出来事は俺にとって生々し過ぎる。

成程。これを防ぐために彼らは秘密裏に動いていたのかと思う。が、それ以上に何故俺がこんな目にあっただけ？　そも、ということとは完二も同じ目に合っていたということ、ならば原因は……誘拐？

同様に考えれば、俺も誘拐されたということだ。

「なあ、洸征。ちょっと聞きたいことがあんだけど」

「……誘拐、のことですか？」

「お、やっぱ話があーな。ちょっと辛いかもしれないけど、誘拐された時のこと教えてくれないか？」

此方の体調を気遣いながらも、事の真相こそが本意である様にも見える花村さんの質問に、しばし頭を捻らせる。

誘拐？　俺が？　いつだ？

記憶が、飛んでいる？



ちよつと、待て……俺はあの時、いや、今は何日だ？

「花村先輩、さすがに今日は勘弁して貰えないツスカ？ 洗征もきつと思つんで」

「あ、やっぱりそつだよな……ごめんな、洗征」

混濁する記憶に眩暈が出始めてきた時、完二の言葉によってその思考は遮られた。

俺とて彼らに聞きたいことは多くあり、そして彼らもまた俺と同様だ。

しかし、完二の言う通りに今は俺の体調がそれを邪魔するだろう。

頭を下げる花村さんに手を振りつつ、そのまま俺は完二に引きずられるようにして帰宅することになった。

ジュネスから自宅までの道のり。徒歩にして20分前後と遠いか近いかよく分からない距離ではあるが、いつもならば別段苦になるようなものではない。

しかし、体調がすこぶる良くない現状ではその距離を歩くのも中々に苦しい。

母か父を呼んで自動車で送ってもらつ事も考えた。しかし道中の完二から詳しい話を聞いていけば、俺の行方が分からなくなったのは

つい昨日の出来事であり、丸一日俺は誰とも接触せずにあの異空間の中にいたことになる。

フードコートを出てから真っ先に思いついたのは家族への連絡であった。元々完二達が俺の失踪を察知できなかった理由だと言っ携帯の電源を入れ、即座に自宅へと電話を掛ければ、出たのは母だった。

安堵した声。やや怒りの含んだ声。戸惑う声。

果たして、俺はどのようにしてこの空白の一日を説明すればよいのだろうか。隠すことなく異変に巻き込まれたと言えはいいのだろうか。

おそらくは、今俺が感じているこの感情こそが、瀬多さん達が抱えていたもの。

結局俺は詳細を話すことなく、今すぐ帰る旨を話して携帯を切った。

たかが一日。

高校生が夜遊びか家出で費やすには十分な時間だろう。しかし俺はそれをするような人間として生きてきたつもりはなく……などと家族への説明を考えているうちに思い出した。

「そっいえば、仮病だったな……」

「あ？」

既に完二に肩を担がれてはいない。確かに体中に気だるさを感じてはいるが、いつまでも彼の肩を借りるわけにはいかない。そもそも人通りの中で男二人が肩を担ぐ光景というのは、どう考えてもおかしいだろう。

やんわりとそれを指摘すれば、完二は渋々ながらも承知してくれた。

「いや、そもそも発端だろう……俺が携帯の電源を切ったまま」「洗征は悪くねーだろ！ ぶっ飛ばさなきゃなんねーのはお前をテレビに放り込んだ犯人だろーが」

俄かには信じがたい、テレビと誘拐の関連性。

まだ詳しい話は一つ聞いていない。予測と完二から零された単語から推測すれば、完二や俺のように誘拐され、テレビに入れられると、あの訳の分からぬ空間に辿り着くということ。

『事件』だということをはっきりと分かる。

化け物と武器を持って戦うという不思議極まりない『コレ』に、瀬多さん達も秘匿を以って戦う理由があることも理解出来る。納得出来るかと言われれば とうだろうな。

そこまで考えて俺は帰り道の途中に聳え立つ電信柱の灯りを見上げた。

既に7時を回り、電灯の周りには小さな虫が塊を作る様に群がっている。

止めにしよう。今考えても仕方がない。

「完二」

「あ？」

いつもと変わらぬ乱暴で、ぶつきら棒な返答に、唇が震えた。

事件がどうだとか、両親への説明がどうだとか、そんなことは俺の頭の中にある不安を塗り潰すことなんて出来なかった。

結局は道中黙り込んで思案した多くの事も、体裁を保つだけの問題。それよりも今、何より俺が聞きたくて仕方がないのは。

「完二」

「なんだよ」

君は、俺の、あの  
心に浮かぶ言葉が、乱れる。

「いや……」

「なんだよ……」

聞く勇気さえ出てこない俺には、ただその場の空気を乱すことしか  
できなかった。

口ごもってしまう俺に、彼は本当に、本当に何でもなかったかのよ  
うに、正直に不満を漏らす。

言いたいことはないのか？

聞きたいことはないのか？

拳を振り上げたいとも思わないのか？

君には、完二には、その資格があるはずだ。

ただ傲慢そのものであった本性を隠し続け、騙し続けた俺を裁く権  
利が。

「……………」

「……………」

それきり俺たちの会話はしばらくの間沈黙を保つだけだった。

居心地が悪いと感じながらも、俺にはそれを打破する勇気がなく、  
その沈黙を打ち消すかのように遠くに聞こえる車の音や自分の足音  
を拾い続けていた。

気付く。

俺は、完二から話題に出してくれることを期待している。  
俺は、ただ詰られて終わることを期待している。  
俺は、さも自分を卑下することが出来る機会を欲している。

「それは、違うか……」

「ああ？ 何だよ、さっきから」

つい、自嘲してしまった俺に、完二は苛立つようにして足を止めた。  
ただ道路のから漏れる家々の灯りと、電灯によって照らされる俺と  
完二の姿。俺を救ってくれた、巽完二へと顔を向ける。  
今にも崩れてしまいそうな膝を奮い立たせ、口を開く。

「ありがとう」

「はあ？」

「くくく……いいから黙って取っておけ」

「お、おう……」

一度でも言ってしまったえば、笑いが漏れる。  
今にも腹を抱えて転げ回りたいほどに、顔が綻ぶ。  
そうか。先日完二が俺に連絡を入れた時も、こんな想いがあった  
のか。

異形の前で無様に寝転がるあのぼやけた視界の中で、完二は俺を信  
じてくれていた。

俺を見捨てずにいてくれた。

あれだけの誠意に、俺が卑屈になって返すのは最低の行為だろう。

ダチと俺を呼んでくれたのならば、応えてやらねばならない。

変われるのだろうか。  
最後の最後にもう一人の俺は言っていた。

次に縋りつくのは麗しき友情なのか

ならばこれは、縋りついているという他ないのだろうか。  
違う。全くもってこれは違う。

「完二」

「さっきから何なんだっつもの！」

「お前は、俺の誇りかもしれんな」

「なっ……」

まるで初な娘だとしても言わんばかりに顔を赤くする完二に、やはり俺は笑ってしまう。

こんなにも笑えたのは久しぶりなのかもしれない。

お前は、お前の強さは、俺の自尊心を埋めるためのものなんかじゃない。  
ない。

巽完二の強さは、越えるべき目標だ。

目の前の細事を一喝で蹴散らす剛胆さと、目の前の現実を自分の想いを以ってねじ伏せるそれは、あまりに焦がれる強さだ。

夢を持つ勇気も、現実をねじ伏せる勇気もなかった俺に必要な強さ。

いつか、俺も完二の隣に相応しい心を持てるのだろうか。  
いや、持ってみせねばな。

無様なままでいるのは好きではないのだ。

【5月28日・土曜日・晴れ・工藤洸征】

「はぁーい、それじゃ何かあったらナースコールで呼んでね？」

「分かりました」

「あ、一応キミの担当の上原小夜子ね。よろしく」

「よ、よろしくお願いします」

少しだけ恐怖を感じてしまうほどに小悪魔的な視線で話しかけてくる看護師にうろたえつつ、右腕から伸びる管を目で辿る。

ぶら下げられたパツク、車輪の付いたスタンド。それはどこからどう見ても病院用の点滴用具。

そして白系の内装で統一された部屋。空になっっているベッドやそれを仕切るカーテン、鼻につく薬品の匂い。これで病人用の水色の衣服まで着させられたとなれば、もはや疑うべくもない光景になるのだらう。

稲羽市立病院。

まあ、そもそも単純な体調不良とはいえ、もともとの原因が不可思議な事態によって引き起こされたものなのだ。

一応きちんと医者に診てもらうのはいいのかもしれない。

その結果が一週間の療養なのだが。

昨日、疲弊しきった俺を見るなり病院に連れていくと頑として聞いてくれなかった母の泣き顔を脳裏に浮かべながら、俺はいつもと感じの違う布団に頭を埋めた。

母よ。さすがに心配してくれるのは有難いが、少々過保護すぎると思ふのだ。



## 第二十一棒 最端より手を伸ばす（後書き）

一週間以内というわけにはいきませんでした。とりあえず更新。しかし前のような更新ペースには残念ながら戻せません。

申し訳ない。

## 第二十二棒 黄金を投げ捨てる

【5月29日・日曜日・曇り・工藤洸征】

昨日より入院患者の身となったわけだが、確かに俺の身体には原因不明の気だるさが未だ残っている。瀬多さんたちによるあの世界への説明はまだされておらず、その詳細も俺が回復してから話すということに決まっている。

本来であればあの世界のことやペルソナなどいった件や、さらには誘拐事件などという物騒な話についてさっさと詳しく教えて貰いたいのだが……まあ、急かそうとしても無駄か。

むしろ話してくれたからといって俺にとってそれはどんな意味があるのだろうか。

聞いたから、どうする？

当事者になった俺には聞く権利がある。だが聞くだけだ。

誘拐したという犯人に怒りを抱き、あの特捜隊とやらに加入するか？

彼らの行いを世に知らしめ、全うな組織からの介入を促すか？

それとも、関係ないと日常に戻るのか？

関係ないと突っぱねるのが、一番無難な選択なのだろう。

確かに彼らに救われたのが事実だったとはいえ、そのまま彼らに協力する流れにはなりえない。完二が彼らの仲間となっているのも、おそらくは義憤や……または借りを返すなどという直接的な想いが強いのだろう。

もしも俺が、彼らに協力するというのなら。

「……………」

軋むベッドに腰掛けながら、窓から見える稲羽市の景観をしばし眺める。

もともと入院患者の少ない病室だったのか、俺以外の患者の姿は見えず、ベッドが5つも6つもあるというのに使っているのは俺ぐらいだ。

つまりは、寂しくなってしまうほどの静寂が、この部屋内には漂っている。

(考え事をするには適当だな……………)

一人苦笑を浮かべる。

俺がああのテレビの中などと言う世界で曝け出した無様さも、こんな風に一人で悩む癖があったから噴き出たのかもしれないというのに、俺はまた一人で考え込もうとしている。

だがしかし、テレビの中で戦い、現実世界における誘拐事件に関わり、犯人を逮捕するなど誰に言えようか。

いや、勿論常識的な観点における疑問は多く残っている。

何故警察に協力を仰がないのか、とか。何故半端に秘密裏のまま行動しているのか、とか。彼らはそれをするに相応しい人間たちなのだろうか、とか。

しかしこの際においてそんなものは関係ない。

今は彼らが特捜隊などという組織を作り独自に動くことの是非を問うのではなく、俺はどうすればいいのか、ということ。

確かに先ほどは関係ないとして日常に戻ることが一番いいのだと考

えた。

しかし、それは、どうなのだろうな。

ペルソナなどという特殊な力にも覚醒し、あまつさえ事件の当事者となり、そして不可思議な世界の一端を垣間見た。

そこで戦う子供たちを知り、それによって被害を受ける可能性を知り、そしてまだ、それは終わっていないのだ。

傍観を、忘却を決め込むのはたやすい。

妥協すればいいのだから。

奮闘する彼らに向かつて無茶だけはするなよ、などと口当たりのいい言葉を吐きながらさらっと応援でもしてやればそれでいい。

(……………)

数瞬の間、そんなくだらない光景を思い浮かべては、ゆっくりと頭を振ってそれを消した。

全く纏まる気を見せない俺の思考に、少しばかり苛立ちが募る。

テレビの中で行われる犯罪に関わる、などというわけのわからぬ現状に立たされた俺には、その解決策が見つからない。

それもそうだ。転生などという事態と同じく、これに対する先人達の解決方法などあるわけもないのだから。

事例なく、問題への解決を迫られた時には、やはり俺はこうやって悩むことになる。

散々思い知らされた自分の無様さを、また再び思い知らされる。

自ら暗闇に一步踏み出す勇気が持てない。道を切り開いていく勇気が俺には足りない。

(止めにしよう)

今度は強く頭を振って問題を頭の中から放りだす。

今はまだ、体調を回復させるが一番の優先事項。この鬱陶しい気だるさがあるからこそ、俺の思考も働いてくれないのだと因縁付けることにした。

そもそも正直な話、それよりも俺がこれからどのようにして生きていくかについて悩む方が幾分重要だ。

そうやって現実逃避した矢先、一人でいるには広すぎる病室の戸を叩く音が響いた。

入院患者としてここにいるのは俺だけなのだが……母が戻ってきたのだろうか。

などと考えていれば、扉の先より顔を出したのは。

「よう」

「尚紀？」

私服に身を包んだ小西尚紀だった。

「いやあ、相当弱ってるな」

「……病人だからな」

「や、そういうんじゃない」

見舞いに友人が来てくれたとなれば、この殺風景な病室から抜け出て病院の屋上にでも向かうのがセオリーなのかもしれないが、友人とちよつとしたひと時を味わうには俺達二人以外誰もいない病室ではそれをする必要もない。

ちよつとだけ俺を心配そうに見てくれる尚紀の視線に晒されながら、俺はぎこちなく笑った。

「まあ、いいか」

来て早々俺の顔から何を読み取ったのだろうか。

やはり、長年共にいた友人からは俺の些細な悩みなどすぐに見抜かれてしまうのかもしれない。そういえば坂崎辺りにはすでに俺の本性を少しだけ見破られていたような気配もあった。

林檎やらなんやらと見舞い品としてはなんら驚くこともない籠をベツドわきの台に置いた尚紀は、一つ息を吐いたまま俺の座るベツドに腰掛けた。

なんとなく、遠慮の知らない奴である。

「どうなん？ 体調。めっちゃ腕に点滴刺してるけど」

「ちよつと疲れが溜まっていたくらいだからな。今は気だるいが、一週間もすれば治るさ」

「ふーん」

興味なさ気な返事に、まあそんなものかと俺も自然と頷く。

松永のような心優しい心根を持つ人間ならここでもう一声心配そう

に声を掛けるのだが、俺たちの仲はそんな気恥かしいものを挟むものではない。

そっけない反応ではあるが、それが普通で、そして心地良い。

「つーか完二から聞いたんだけど」

「……何を？」

「仮病で休んで、家にも帰らず、んで体調壊したとか」

「……ははは」

完二から聞いた、などと聞いた時は胆が冷えたが、その後に続けて放たれた言葉に我ながら笑ってしまった。

完二がうまくごまかしたのかどうかは知らないが、一般的な目で見れば俺の行動はそんなにも阿呆らしいことなのだろう。

優等生が学校に疲れ、ちよっと調子に乗って非行に走り、結果しつぱ返しを受けるかのように倒れた、といったところか。

「バカ」

「反論のしようもないな」

そっけなく言われた短い言葉だったが、尚紀の俺を見る目は非情にも冷たかった。

まあ、見舞いに来てくれる時点でそれだけではないと分かっているのだが、兎にも角にも俺の行動はただ単純に誰かを心配させてしまっただけの馬鹿なことだ。

「すまん」

「おう。松永とか坂崎辺りにも言っといた方がいいぞ。何だかんだであいつらもって感じだし」

「そっか」

不躰ではあるが、心配してくれたことに少しだけ胸が軽くなった。それから尚紀と交わした会話は、別段珍しくもないくだらない話ばかりだった。そもそも俺が入院してからまだ一日目。たった一日休んだだけで学校における何か之急に変わるわけでもない。

それでも工藤洸征が入院したという話はそれなりに話題になっているらしく、クラスメイトの輩が詳細を探っている姿も散見され、特に生徒会の方々は自分たちのせいではないかとおろおろしているらしい。

成程。例え工藤洸征だったとはいえ、会合の件をほとんど丸投げにしていた所業に今更ながら罪悪感を抱き始めたのか。

「新田さんも大変だろうに」

「俺らが無理させたんじゃないかねーかって。俺ん所までお前のことを聞きに来た時はさすがにねーよって思ったけどな」

「先週辺りは俺もずっと苛々していたからな。傍から見ればそういう行動を取るのも分かる」

「んじゃ今は？」

話の流れにあつていそうで、その実何一つ関係のない尚紀からの質問に、声が途切れた。

ああ、やはり彼には隠すことなど出来そうもないかと心から思う。いつも見せているだるそうな瞳はその常に非ず、詳しく聞かせると言わんばかりに鋭い瞳を晒している。

「分かるか？」

「バカにすんなつての」

「存外、誤魔化すのは下手くそらしいな」

「今更」



穴だらけのメッキでは、隠すものも隠せていなかったのか。  
バカにしたようにして首を振る尚紀に、俺は深々と息を吐いた。

「考えれば考えるほどに」

「どつぽに嵌って？」

「悩めば悩むほど」

「自分がバカに見えてきて？」

。

「腹が立つな。見透かされているというのは」

「何年俺が見てきたと思ってるの」

「……………そうか。見られていたか」

「だってお前」

楽しそうじゃねーもん。

それはいつの話なのだろうか。いつから気付かれていたのだろうか。  
これでも完二や尚紀と共に過ごす時間にはそれ相応の価値を見出し  
ていたつもりだったのだが。

どちらにせよ、確信めいた面持ちのまま此方を見ようとしてもしない尚  
紀の様子に、俺はただごまかすようにして笑うしかなかった。

果たして全てを曝け出すことは正解なのだろうか。

自分より短い人生しか過ごしていない若者に、工藤洸征の弱さを露  
呈する。例えその相手が長年苦楽を共にした友人であろうとも。

俺が隠し続けてきた醜い心。

頭の隅にささくれが出来たような不快感。これこそが俺の心根まで  
根付いてしまっている、空虚を満たそうとするくだらない自尊心。

テレビの世界で体験したものを通し、今ははっきりとこの黒い心が分かる。

「……………」  
「……………」

仲違いを起こしたわけでもないというのに、なんとなく居心地の悪い空気を感じてしまい、俺は口に出すべき言葉を失ってしまった。

ここで弱さを隠すのならば、何でもないと答えればいい。

ここで弱さを認めるならば、助けてくれと願えばいい。

「……………ま、とりあえず無事ならそれでいいか」

「……………ああ」

ギシリ。

沈めていたベッドから腰を上げ、尚紀は一つ伸びをするとそのまま病室のドアの方へと歩いていった。

帰るのか、とも俺は引きとめることも出来なかった。

渋面を作る様にして口元は歪み、眉を顰め、目は鋭くなる。

ただ妙な沈黙が二人の間に流れ、そして尚紀がドアノブに手を掛けた時、唐突に彼は俺の方に振り返って笑みを見せた。

「次来る時は教えるよ？ お前に割くくらいの時間はある。学校じや暇だからな、俺」

そしてそのまま颯爽と出て行った彼の後姿を見つめながら、俺はようやく思い出した。

彼とて、未だ姉の早紀さんを失った傷跡は大きく、学校での生活も

息苦しいものからは変わっていない。

俺の悩み事などよりも、彼はもっと苦しい立場にいる。

「……………」

しばしドアを茫然と見つめた後、まるで目の行き場を探す様にして行き着いたのは、彼の置いていった果物の見舞い品。

「……………駄目だな」

誰かを気遣う余裕なんてありもしない。

【5月30日・月曜日・曇り・工藤洸征】

転生した当初のようにして常にベッドの上で生活するのはさすがに飽きる。

まだ入院してから3日経っただけだと言うのに、既に俺の頭の中には療養などという言葉はなく、何かしらすることを探し始めてみたり、再び悩みに関心と頭を苦しめてみたり。

で、結局やることも答えも見つからずに一日が終わってしまっ。

暇を持て余すと言うか、落ち着かないというか。

よくある話としては、大き過ぎる問題にぶつかった場合は頭の中を空にして自分のしたいことにでも没頭するのが一番だというのが多

い。

簡単に言ってしまうえば気晴らしのようなものだろう。

ならば工藤洗征とは何を気晴らしにするような人間なのだろうか。

趣味。読書を少々。

自己分析など本の数秒で終わってしまうほどの薄っぺらな自分の情報に失笑してしまう。

「はい」

「ありがとう」

まだ入院患者たちが寝静まるには早すぎる午後8時。病室から見える稲羽市の風景は家々の灯によって幾分明るいが、その先に聳え立つ八十神山の向こうにも太陽は既がない。

たった一人の人間に宛がわれたせいで幾分寂しい病室には、ベッドから上半身を起こしたままの俺と、尚紀が持ってきてくれた林檎を兎型に切り分ける母。

そういえば何故に病人当ての林檎と言うとこのようにして兎型に切り分けることが多いのだろうか。林檎事態が消化にいい果物だとかで好まれるのは分かるのだが。

どちらにせよ、俺もまたこのようにして兎型にして林檎を切り分ける機会も中々に多かつた気がしないでもない。

「役割、逆になったわね」

「……ああ」

「美味しい？」

「美味い」

母が未だ病の床に伏せることが多かつた幼少時より、俺はせめても

の役割として林檎くらいは切れるようにと努力したものだ。転生前であれば幾分無骨ながらもこのように可愛らしい兎型に切ることもできたのだろうが、当時はまだ握力も拙い子供。包丁の使い方には慎重に慎重を重ねていたものだ。

無論俺なりに何かできることはないかと模索したつもりだったのだが、子供ながらにナイフを扱い俺の姿に母も父も激怒。いや、激怒というわけではないが、即座にナイフを取り上げられてしまった。小学校高学年ほどになれば、さすがに料理の手伝いやら何やらでそういうったことに口を挟まれることは無くなったが、母はまだまだいい顔をしてくれなかった気がする。

「どう？ ちよつとは体調戻った？」

「それなりに。というか元々そんなに悪かったわけでは……」

「だーめ。丁度いい機会だからちよつとくらい休みなさい」

「……………」

今にも腰に手を当てて人差し指でも立てそうな物言いで俺の言葉を遮る母に、俺は返す言葉もなく林檎を口に入れる。母と言うよりも姉のような振る舞いではある気がしたが、母の容姿的に考えてそれも似合いそうな気がするから困る。

「ん？ どうしたの？」

「いや」

つい彼女の顔を凝視していれば、母は小首を傾げる様にして俺の視線を真正面から返していた。妙な気恥かしさを誤魔化すために浅く笑い、母が頭に浮かべた疑問をあやふやにさせる。

というか、だな。

実のところ母と一緒にいるのが少々怖いのだ。

確かに体調不良として入院した俺ではあるが、その実、最も俺を蝕んでいるのは答えの見つからない悩み事のせいである。

そして尚紀でさえ見抜かれた俺の変化に、この母が気付かないわけもない。

どこか、悪事がばれないかと冷や冷やする子供のような心情に、俺は一人何とも言えないくだらなさを感じてしまう。

既に母は俺の状況など何となく察しているのだろう。しかし彼女はそれをはつきりと俺に聞きだそうとする気配がない。まるで自ら白状するのを待っているような、自ら許しを乞うことを待っているかのような。

怖い。

自らがどうしようもなく子供であると認め、それを誰かに晒すのがどうしようもなく怖い。

ああ、尚紀との会話で感じていた苛立ちのようなものも、それを紐解けばこのどうしようもない恐怖のようなものだったのかもしれない。

無様だとか、自尊心だとか、空虚だとか。

そんな小難しい言葉を持ってこなくても俺という人間は一言で表すことが出来る。

単純な話、俺はどうしようもないほどに意地っぱりなのだ。

「あー、っと……」

「なあに？」

何でも無い風に聞き返す母の優しい顔を見ても、俺は心にある恐怖

を拭う事は出来ない。

ただ母に自分は悩んでいる旨を説明し、それに対する助言でも乞えばいい。たったそれだけの話だと言つのに、俺はその一步を踏み出すことが出来ない。

そういう風に、俺は生き過ぎた。

何かを言おうとして開いた口が再び閉じる。

どう言えればいいのかも整理しておらず、何から始めればいいのかも考えていない。

ただ俺と母の間にある勝手に俺が創り出した壁が、どこまでも鬱陶しかった。

「あのね」

「……ん？」

そんな退くことも進むことも出来ずにまごつく俺に、突然母が切りだしてきた。

だらしなく置かれていた俺の手が、いつの間にか母の両手に握られていた。

「こーちゃんが転生したって言ってたじゃない？」

「あ、ああ……」

いきなり何を、と言いかけた言葉を嚙んだ。

「実はね、こーちゃんがそれを話してくれる前に知ってたの」

「……」

「ごめんね」

「……いや、そう、か……それもあるか」

母の言葉に唾然としかけたが、すぐに平静を取り戻すことは出来ていた。今この状況で話すにはいささか理解できないが、そんな可能性を考えていなかったわけではなかったから。じつと俺の顔から眼を逸らさない母の真意は、未だ分からないが。

「どうやってと聞いても？」

「パソコンの履歴に、ね」

ああ、成程。

さすがにパソコンの履歴に転生やら何やらのサイトの足跡を残しておけば、幼少の頃から知られていた異常性と照らし合わせてその答えに行き着くことは可能だったか。

なんだか思ったよりも間抜けな方法であったために、意図せず笑いが込み上げて来てしまった。

「あ、私だってパソコンくらい使えるわよ？」

「いや、そういうことじゃなくて……随分と間抜けだな、と違って」

「そこまで気が回らなかった？」

「多分」

既にパソコンで転生における問題をどうだのといったことなど記憶になく、恐らくあの頃の俺はそんなものに気付かぬほどに必死だったのだろう。

渋そうな顔をした母を窺めながら自分を卑下してみれば、それもしようがないとばかりに慰められた。

「で、何故今になってそんなことを……」

「……やっぱり、怒らないのね」

「は？」



話の流れ的にはごく当たり前の質問に、ただ母は呆れる様にして首を振るだけだった。

彼女の言っている意味も俺には理解できない。

怒る、とは。誰に対して。何のために。

疑問に首を傾げる俺と、ただ呆れる様な　悲しむような様子で首を振る母。

噛み合わない理由を必死に探そうとするものの、一向にそれは見つからない。

答えを求める様にして母の顔をじっと見れば、彼女は意を決したかのように大きく息を吐いた。

「こーちゃんが一人顔を顰めて悩んでいる時も、テストで100点を取ってちつとも喜ばない時も、周りの子供たちの中で苦笑を浮かべている時も、私は、私たちは、『何故』とは聞かなかった」

「それは、その、なんというか……自惚れでなければ俺のことを考えて」

「うっん。違うの……こーちゃんに入れ込むのが怖かった。きちんと親子として接するのが怖かった」

母は、泣く。

涙を、零す。

俺は　。

「だってね、転生なんて変な事態に私たちの子供が遭っていて、そんなの、絶対まともなことになるわけないと思ってた。それに気付いた時は10年も一緒に過ごしてて、引き返すことも出来ないし」

「……………」

「絶対に仲良くなることなんて出来ないし、その、あ、愛すること

も出来ないんじゃないかって」

苦く、苦く、母は笑う。

手で涙を拭う。

俺は。

「お父さんも私も冷めてたのかもしれない。嘘っぱい家族を演じてるような気がして。だって私達、見た目はすごくいい家族みたいじゃない?」

「……………ああ」

「本当はね。なんでこんな目に私たちが遭うんだろうって……………なんで普通の子が生まれてきてくれなかったのって!」

叫ぶ。母は、叫ぶ。

場違いながらも俺は、病院でそんなに大きな声を出していいのかわかった。

思うだけが、精いっぱいだった。

「本当はね、胃が痛くなる度に恨んだわ。お弁当を作る度に憂鬱になったもの。通信簿を見る気だつてなくなった。でもね」

「……………」

「こーちゃん、凄く、優しかった」

違う。

「お父さんも私もすごく苦しんで、何もかも投げ出したくなつて、そんな時でも、こーちゃん優しいんだもの。私が倒れる度にきちんと看病してくれて、私の作る料理を本当に嬉しそうに食べてくれて、小学校の頃の運動会だって、私たちに恥ずかしそうに笑顔を向けてくれた」

「……それは、すまな、い、としか」

「違うの。重いなんて思わなかった。自分だって苦しいはずなのに、私たちに恨み事を言うでもなく、必死に私たちの息子でいようとしてくれた」

声が、うまく、出ない。

「でも、私たちは何故とは聞かなかった。その優しさが心地よかったから。本当のことを言えば、絶対にこの家族は壊れると思ったから。見せかけかもしれないけど、歪かもしれないけど、お父さんと私は、こーちゃんに守られてた」

「……」

「中学二年の時。こーちゃんが転生の話をしてくれた時。やっぱりなって思うと同時に、これで楽しい家族ごっこも終わっちゃうんだって思った。でもね」

母は、その泣き顔を、隠さない。

ならば、俺は、何を隠している。

「鼻水と涙でぐしゃぐしゃにしながら話してくれるあなたを見て、私はようやく気付いたの。この子は、私の息子だって。私の家族だって。私たちをこんなになるまで守ってくれて、必死に一人で戦ってて」

「……」

「こんなになるまで、こんなにも私たちを想ってくれる息子を、私たちは何故守ってやらなかったんだって。何故……愛してやらなかったんだって。無償の愛なんて言うのもおこがましい。こーちゃんから与えられた物が大きかったから出来た決心かもしれないけど」

「……違う」

「うっん、違わない。違っても関係ない。ちょっとくらいおかしくても、ちょっとくらい狂ってても、あなたは私たちの息子で、そして守るべき子供で、愛すべき家族なの。そう、あの時決めたからそれが、母の想い、らしい。」

確かにそれを語る母は涙を際限なく流し、声は擦れ、時折嗚咽のようなものも響いた。その言葉がどこまでも真実であることを実感させた。

だが、何故、それを俺に言う。

この時になって、それを言おうとしたのは何故だ。

「だから、ごめんね。今までいっぱい苦しい思いさせちゃつて。何も言わずにいて、ごめんね」

「いや、それは」

ふと、ふわりと流れた柔らかな匂いに、目を見開いた。

視界は未だはつきりとしている。なのに何一つ見えはしない。

ただこの弱り切った身体を力いっぱい抱きしめる何かを感じるだけ。

耳元で聞こえる言葉が、どうしようもないほどに鮮明だった。

「全部、聞くから。何でも聞くから」

「家族だから、一緒に苦しみたいの。私たちの子供だから、一緒に悩みたいの」

「……………」

どうしていいか分からない。何を言えばいいのか分からない。

なのに、俺の口元は何一つ阻むものがないかのように、勝手に音を

発していく。  
堰をきったかのようにとめどなく流れて行く。

「……何していいか分かんないんだ」

「うん」

「というか転生って何だよ。俺に何させたいんだよ」

「うん」

「これでも必死に、必死に足掻いてきてさ。結局分かったのは俺が  
どうしようもなく無様な人間ってだけでさ」

「うん」

「……何だよ。頑張ってるじゃん、俺」

「知ってる」

「アホみたいなガキに付き合っつて、身の回りに合わせる様に気を張  
つて、それでも結果は出す様に努力して、立ち回って」

「うん、うん」

「何で、報われないんだよ……」

「大丈夫」

「大丈夫なわけあるかよ。夢だつて持つてないし、もう優等生でいることだつて無理っばいし……………」

「うん」

別に、特別なことをしていたわけじゃない。

愚痴っていただけだ。

ただ、それだけの話。

第二十二棒 黄金を投げ捨てる（後書き）

ようやく主人公が鬱とはおさらばするのかも。  
長かったね。

## 梓外 彼と彼女と彼女

【坂崎舞】

あいつが入院したとかっていうわけのわかんないことを聞いたのは尚紀からだった。

いつも通りかつたるい学校に行ったら、教室の前でそわそわしたように尚紀があたしを待っていた。その時の彼の様子はそわそわというか落ち着かないというか……なんというか、もしかしたらあたしが学校来るの待ってた！？ な〜んて勘違いをしてもおかしくない態度だっただ。

ま、そりゃあ洸征が入院だなんてことになればさすがに尚紀だって慌てるわよね。勿論あたしだってそれを聞いた時は、朝っぱらではつきりしてない頭を横から殴りつけられたような衝撃だっただ。

……いや、ちよつとだけ、ほんのちよつとだけ、なーんだ、とか思っただけ。

洸征が稲羽市立病院に入院したことについて詳しいことは、あいつの担任の近藤先生に聞くよりは親友である尚紀とか完二に聞いた方が早いのは当然なわけなんだけど、なんだか尚紀はそれを完二から聞いたらしく、完二は本人より連絡を受けたらしい。

ででで、ここにあたしはちよつとした疑問を挟んだわけなんだけど。何でか知らないけど完二の奴がやけに落ち着いてるのよね。

だって巽完二と工藤洸征って言ったら、その見た目は草食動物と肉食動物のアレだけど、実際は完二が洸征にべつたりなのよ？ そんな関係で洸征が入院っついたらねー……やっぱあいつテンパーでし



よ。常識的に考えて。

なのにどっちかかっていうと慌てるのは尚紀とかあたしとか、あ、あと綾音とかでさ。ほんつとうに疑問なんだけど完二が妙に落ち着いてんのよ。

ちよつとだけあたしたちとあいつの間に妙な反応の差が出たみたいで、ついあたしはあいつの脛を蹴り上げてしまった。

だってあたしたちが慌ててあいつがチンチャクレーサーって腹立つもん。

まあ、完二に奴当たりしたって洸征の体調不良が治るわけでもないし、何となくあたしたちは、じゃあお見舞いでも行く？ なんてことを放課後に話してたんだけだ。

尚紀は……何だか一人で考え込んでたけどね。

でもって放課後になると工藤洸征入院っ！ なんて話も校内に広がってるらしく、あいつと知り合いであるあたしにはそれなりの数の生徒が詳細を聞こうと近寄ってきていた。

で、それをあたしはちよつときつめに対応してお帰り頂いてるわけです。

これは……ちよつとしたアレルギーみたいなものかもね。

一か月前。尚紀のお姉さんが死んだ事件の話。

あの時朝礼で校長が憎たらしく明かした事件の話は、当然の如く生徒の間に様々な憶測を流していった。

事件の背景やら、死因不明の怪事件やらだとか、犯罪組織の陰謀だとか。

そんな馬鹿げた話だったらちよつとくらい流れても我慢できた。

あたしが尚紀のお姉さんと……早紀先輩と知り合いつてわけじゃないんだけど、尚紀の家族つてだけでも、何だかあたしは沸々と胸の内に嫌悪感が沸き上がっているのを感じていた。

そして、周りの話は事件の背景探しに飽きると、被害者である早紀さんについて嗅ぎ回り始めた。

彼女はこんな人間だったとか、校内や近所での評価とか……殺されるに値する人間だったとか。

特に尚紀へ近寄ってくる人間は後を絶たなかった。

痛ましそうな表情を貼り付けて、二言目には事件について深く聞き出そうとする野次馬達。あたしや完二や洸征に、綾音。まあ、綾音は性格的に無理そうだったかもしれないけど、あたしたちはそんな野次馬たちを親の敵みたいな眼で見っていた。

最初はあたしが大声を上げて野次馬達を一喝した覚えもあった。

でもその後、尚紀に怒鳴られた。

そんなんじゃ俺が惨めになるだけだろつて。

その日、あたしは家に帰って一人で泣いた。

そしてあたしが、あたしたちが決めたのは、尚紀の傍にいてやることだった。

例え不幸があつても、あたしたちだけは尚紀に変わらない眼を向けてやるんだつて決めたんだ。

……ちよつと真面目な話になりすぎたかな。

兎に角、今の話は洸征が入院したつてことに野次馬根性で近づいてくる人たちの話。

単純にあいつのことを心配してくれるクラスメイトたちにはきちんと話すけども、その中に紛れ込んでいる、何でアンタが洗征の入院に興味示してるわけ？ って思ってしまう輩には、極力冷たい視線を以ってして、ただ『さあ？』と返すことにしている。

怒るでもなく、シカトするでもなく、知らないって突っぱねてやるわけなのです。

綾音や尚紀はやりすぎじゃない？ とかって苦笑してくるけど、仕方ないじゃない。

あたしが気にいらなんだもん。

中でも露骨だったのが、洗征を中間テストの結果で恨んでいた卑屈そうな眼鏡の男。

どうやらあいつに結果で負けたのが相当ムカついてたらしく、入院の話を嬉しそうに聞いてきた。

その時は隣にいた綾音もかなり気分を損ねたみたいで、眼鏡の質問に答える前に、あたしの手を引っ張ってさっさと眼鏡から離れてしまった。

静かな奴を怒らせると怖いって話は本当みたいね。

あのも綾音はプンスカ言いながら怒ってたし。

あ、いや、怖いってより、やっぱり可愛かったかも。

そしてそんな野次馬と、心配してくれる人たちの中で、眼に止まった人たちがいた。

それは、罪悪感のようなものに塗れた表情を浮かべる、生徒会の人たちだった。

【松永綾音】

生徒会での泷征君の話は、ちょっとだけ噂程度には聞いていました。えと、一応私は彼のインタビューをテレビで見ている人間なんですけど、画面に映っていた彼はいつも以上にキリッとしていて、やっぱり生徒会に選ばれるのは泷征君みたいな人なんだなあ、としみじみ思っていた覚えがあります。

まあ、中学の頃から泷征君の活躍は知っていたから、びっくりするというわけではなかったのですけどね。

……その、高校生になってテレビに映る彼の顔が、カッコいいな、なんて思ったりもしましたけど。

えと、今はそんな話じゃなくて。

その生徒会の話なんですけど、最初は役員の方たちが広めてたんです。

泷征君が来てから会議が捗っているとか。生徒会にとって彼はかなり貴重な戦力だとか。そこらへんは舞ちゃんとかと一緒に、そりゃそうだよな、なんて言っていたのですけど、どうも当の本人である泷征君の様子を見ると、手放しで褒められてるわけではないみたいで

した。

相変わらずというか洸征君は自分の悩みとか不満を大っぴらに話す人ではなくて、それだけじゃなくて態度にも表さないような我慢の人でした。

さすがに人生の半分くらいを一緒に過ごしたこともあってか、なんとなく、『あ、今、機嫌悪いかも』なんてものを見極めるのは簡単にできちゃいますけど、それでも洸征君は表に出そうとしません。

なのに、生徒会に入ってから洸征君は露骨なまでに苛立ちを見せることが多くなりました。

これは舞ちゃんや尚紀君の間でもかなり衝撃的な事実で、尚紀君はすぐに落ち着いて、そっとしておいてやるべきだ、っていう意見に達したんですけど、舞ちゃんは意外にもおろおろしてばかりでした。

どうやら舞ちゃん、事あるごとに洸征君に発破をかけるような物言いをしては、洸征君を苦笑させていたらしいのです。

なんというか、そんな言動を取っていた理由もあいつのためなんだー、なんて青い顔をしながら言っていましたけど、ひよっとしたらそれが洸征君を苛々させている原因の一つじゃないかって不安がっているのはバレバレで。

尚紀君に後から慰められました。

役得ですね、舞ちゃん。

不安がる舞ちゃんのため息をつく尚紀君を見ると、こっちもほんわか出来るんですけど、やっぱりそれよりも重要なのは生徒会のみなさんの話なのです。

洸征君が入院したって事が広まって行く中で、生徒会長の新田先輩

や、書記長……の原先輩だったかな？ とにかくその二人が凄く必死な表情で洗征君のことを聞きに来たのが印象的でした。

一瞬だけ舞ちゃんもムツとしてましたけど、先輩たちが本当に洗征君のことを心配していたのは誰の目からも見て明らかで、私たちに入院の内容を詳しく聞いてくる先輩達には、分かる限りのことを話しました。

といっても原因と言えば体調不良だ、と言うくらいで、後は一週間くらいで退院できるくらいしか私たちも分かりません。

そんな時、尚紀君が先輩たちをいぶかしむ様な眼で見ながら口を開きました。

「……何でそんなに必死なんスか？」

きちんと心配してくれる人に失礼だよ、と尚紀君の袖を引っ張ってしまっただんですけど、気付けば舞ちゃんもきつい視線で新田会長たちを見ていました。

えと、生徒会長さんで、しかも先輩なんですけど……なんて頭の片隅を通りすぎましたけど、その疑問は私にもありました。

いや、ひよつとすれば舞ちゃんも、尚紀君も、私も。誰もが予想していたのかもしれませんが。

生徒会に入ってから苛立ちぶり。体調不良の原因。新田会長の態度。

ここまで揃ってしまえば、さすがに邪推してしまいます。

体調不良の原因は、生徒会にあるんじゃないですか、と。

【小西尚紀】

正直な話なんだけど、生徒会云々が原因で洗征がヘタレたなんていうのは全く信じてもないし、新田会長たちがそれを認めた所で俺がそれを認めることはない。確かに一般的に見れば生徒会に推薦されてそこで即戦力の期待を一身に受けるって言うのはある意味重荷になるだろうさ。

でもな。

そんな高校生が束になってあいつに期待を背負わせた程度で、あいつは凹むような奴じゃない。そりゃ重荷になるっていうのは否定しないけどよ、だからって入院まで行くってのはちょっと大げさ過ぎると思うんだ。

ま、聞いてみれば俺の予想した通りに会合云々のイベントを入ったばかりの洗征に投げっぱなしにしたらしく、草案やら何やらもあいつが単独で手配したって話だった。

新田会長やら原先輩は申し訳なさそうに頭を下げてて、それに坂崎も松永も怒ってたけど、俺としてはんなもん俺らに謝られても困る。

そもそもあんた達程度の期待があいつを潰すとか……工藤洸征舐めてんのか、と。

でも、新田先輩たちに全くの非がなかったっていうとそれも違う。確かに生徒会程度のプレッシャーなんてくだらないモノだけど、あいつが溜めこんだナニカに影響したのは確かだろう。もしくは、それが限界を迎えるきっかけだったのかも。

どっちにしろ俺の勝手な推測みたいなもんで、結局その場は新田会長と原先輩を坂崎が乱暴に追い払ってお開きになった。

坂崎の奴、基本的に考えなしに行動すんの止めてくんねーかな？リアルで脳筋とかシャレなってねーぞ。

でもってあいつが入院したって話を聞いてからの二日後。

まあ丁度良く日曜日だったということで勝手ながら俺はあいつの見舞いに行ってやることにした。

無論坂崎と松永も誘ってやったんだが、坂崎は修行で行けないだとかいうわけわからん理由で欠席。松永は単純に部活の練習で行けないって話だった。

坂崎の修行ってのは……まあ、十中八九だいだら。の話だろう。

おふくろに見舞い品は何がいいかと聞いてみれば、安直に果物を差し出され、俺は何とも言えない気持ちのままにあいつの入院する稲羽市立病院に向かった。



何故に微妙な気持ちになったかと言えば、病院まで向かう方法がチャリだったからだ。

ぎりぎりチャリ籠に入んねーくらいの籠をどうしろと。

バスで行ったとしても籠手持ちとか恥ずかしいだろ、普通。

結局見舞い品を無理やりチャリ籠に押し込めてやってきた病院。

……姉ちゃんの遺体が安置された時以来だなと病院を見上げれば、少しだけ胸が痛んだ。

まあ、病院についてから一カ月前に姉ちゃん関連で病院に来たことを思い出したんだけど。

多分、おふくろもそのことには気付かなかったはずだ。

妙な脱力感を覚えたが、今更引き返すなんて馬鹿げたことをやる意味もないし、俺は意を決するようにして病院へと足を踏み入れた。

なんつーか病人の見舞いなんて俺の記憶ではそんなになかった話で、親戚のじいちゃんやらの見舞いでは必ずおふくろか親父の誰かが付いていてくれた覚えがある。

つまりは一人で見舞いに来るなんて初めてだった話。

受付で見舞いに来たなんていうのも少しばかり腰が引けたし、病院特有の匂いは嫌な記憶を呼び起こすようで俺はすこぶる機嫌が悪くなった。

でも、まあ、特に問題はなく洗征のいる病室を聞きだすことが出来て、そもそも俺の予想していた面会には許可がいるなんてテレビ染みた話はないらしい。

そりゃそうか。あいつ、ただの体調不良だもんな。

ちよつとだけ大袈裟に考えていたことに恥ずかしくなれば、担当だとか言う看護師は妙に生々しい眼を向けながら俺を笑っていた。

名前を聞くことはなかったけど、あの悪魔みてーな笑みは中々強烈だと思う。

看護師でああいうのっていいのかも思ってしまうほどに。

で、やってきた工藤洗征というプレートがはめられた病室前。

プレートの枠は6つくらいあったのだが、どうやら入院してるやつはあいつしかいないらしい。

贅沢だな、と思いつつも、他に人がいないことに胸を撫で下ろした。理由は分からないけど。

何だか妙な緊張感を以ってしてドアを叩けば、それに戸惑うような声が上がった。

あいつの、洗征の声だった。

どうやらあいつが病室を出ているようなニアミスにならずに会えたことに安堵しつつも、そのドアを開ければ

まあ、あいつは思った通り、なんか凹んだ。

病院からの帰り道。俺はチャリに跨って風を切るでもなく、ただぼんやりと重たいそれを引きずりながら歩いていた。

確かに長話をしたといっっちゃあしたんだが、別に陽が暮れるまで話しこんだわけでもない。

太陽はどちらかと言うとまだてっぺん辺りにあり、梅雨の季節を予感させるような蒸し暑さを俺は薄らと感じていた。

病院で会ったあいつは……なんだかおかしかった。

いや、そりゃ病人だって言うんだから多少は弱弱しくなってるのは当たり前だけど、そんな意味ではなく、精神的におかしな状態にあるような気がした。

なんとというか……言葉で説明しきれないようなもどかしさがそこにはあった。

答えを見つけそうで見つけられない鬱陶しさと言っか。

答えを見つけたがどうすればいいか分からないような面倒臭さと言っか。

洗征がマゾなんじゃねーかってくらい我慢の男で、一周回ってアホなんじゃねーかってくらいネガティブ野郎だったのは別に今に始まったことじゃないんだけど、今回のあいつが見せた表情はそういうもんじゃない気がした。

実のところあいつは悩もうが苦しもうが、結局自分でなんとかするか後回しにするようなことが多い。そこら辺、あいつは友人って奴を理解してない節があるんだが……まあ、あいつの場合だと他人に悩みを打ち明けられない立場もなんとなく分かってしまう。

多分、知り合いに迷惑をかけたくないと思ってるか、それともてめーらになんて教える悩みはねーって思ってるかのどっちかだろう。

なのに、病院でのあいつは妙に素直で。

言えば正直に答える様な危ないものを見せていた。

いや、まあ、友人としてそう言ってくれるのは嬉しいんだけどよ、一体何があったっていうんだ？　いくらなんでもあの素直さという

か諦めの良さは気持ち悪いんだけど。  
なんて俺は思っていたりもする。

そしてその一方嬉しくもある。

何が原因かはさっぱり分からない。

だがあいつは、ようやくここで立ち止まることを知ったんじゃないかって。

まるで生き急いでいるかのように日々を必死に過ごし、その中で一緒に笑う事も減りつつあり、何より完二や俺が工藤洸征を『分からなくなってしまうほど』に、あいつは何も話さなくなっていた。

だからな、洸征。

もっといろんなことを話してもらえると、楽だし、何より俺も楽しい。

楽で、楽しいんだ。

ちよつと熱を入れ過ぎたのだろうか。

考え事をしながら歩いていた道は、既に活気のなくなった商店街へと入っていた。

なんというか、あれだ。

いろいろゆっくりと動き出しているような気がする。

## 第二十三棒 行こう

【5月31日・火曜日・曇り・工藤洸征】

入院期間の半分を過ぎ、ある程度は俺の体調も回復しつつある。といつてもベッドの上で生活することを余儀なくされた身にとっては、逆に運動不足を感じるように身体が鈍っている気がしてならない。別段スポーツを嗜む身ではないために、そんなオフ明けのボクサーのようなことを考える必要ではないのだが……なんというか、少しばかり身体を持って余している感がある。

そんなこんなで出来るだけ病院内でも様々な所を歩き回ってみたり、意味もなく屋上へ上がってみたりしているのだが、ガラガラと音を立てながら引きずることになる点滴のスタンドがどうしても鬱陶しい。

そつえば担当の上原看護師からもあまり動きまわるのも考えものだと言われたこともあった。

といつか、だな。

「あら、今日もここに来たの？」

「はあ、まあ……」

前述したように屋上へ足を伸ばすことが多々あるのだが、そこに行くくと結構な頻度で上原看護師と出会うのだ。昼休み時ということがか彼女もまた休憩を取っている時に俺と遭遇していると思うのだが、何故か最近では彼女がこの時間に合わせてやってくるような気がしてならない。

というか完全にこの時間を狙って来ているような気がする。

屋上の柵近くに並べられたベンチに腰を掛け、俺の姿を見るなりその憂鬱そうな顔を隠しては妖艶な笑みを向けてくる上原看護師。いやはや……なんというか、アブナイ雰囲気醸し出す人だ。

「此処がそんなにお気に入り？」

「考え事には丁度いいかと」

「ふふふ……同感」

相変わらずうるさい点滴スタンドを引きずりながら彼女の座るベンチへと近づく。すぐに彼女は自身の座るベンチの隣をポンポンと叩いて招いてくれるが、なんともすぐさま隣に座るのは少々恥ずかしい。

「ふふつ……可愛い子ねえ」

「……はあ」

一体何が楽しくて俺のような人間をからかっているのか。

俺の一挙手一投足を蛇のように見つめながら笑う彼女には、正直なところ居心地の悪さを感じる様な寒気を覚える。

いや、看護師としての仕事をこなしている時はきちんとした女性なのだが……なんだろうな。色っぽいお姉さんキャラとも言えはいいのか？

どちらにせよ、俺にとってこんな分かりやすいようで分かりにくい態度を取る人間は多くなく、記憶に古い早紀さんのことを思い出してみてもあれは方向性がまるで違う。

早紀さん。

既に過去の記憶か。

「どうしたの？」

「いえ、特に何も」

「そう」

上原看護師は、絶対に深く踏み込んでほくない。

いつもは全てを見通す立場にいても言うような甘ったるい笑みを浮かべる彼女ではあるが、母との会話で目元を腫らした俺に追求することもなければ、尚紀と話した後少しだけ落ち込んだ時にも深くは聞いてこなかった。

結局は彼女の隣に座らせてもらい、少しばかりの沈黙の中で頬を撫でていく風にただ吹かれていた。まるで時間が緩やかになったかのような陽気な昼時。

彼女が深く踏み込んでこないのもそうだが、それ以上に俺がナニ力を打ち明けるほどに彼女と親しいわけではない。

なのに何故彼女は俺と会う事を誰もいない屋上に望み、そして俺はそれを拒まずに此処に足しげく通ってしまうのだろうか。

「ねえ……」

「はい？」

「優等生くんから見ると、私ってどう見える？」

あまりにも唐突な問いだった。

相変わらずの笑みではあるが、どことなく強張ったものを浮かべながら聞いてくる彼女に、俺は間抜けにも呆けるようにして返すだけ。質問の答えよりも質問の意図そのものに頭を悩ませれば、彼女はお腹を抱えて笑い始めた。

「何でもないわ。今のは忘れて」

「……まあ、そう言うのであれば」

一体何を望んでいたのだろうか。

結局、彼女は昼休みが終わったと屋上から去ってしまい、すっきりしないものを残したままに俺は一人取り残された。全くもって意味が分からん。

もしかしたら次に彼女と会う時は気まづくなるのではと不安に思ったものの、次に点滴の確認に来た彼女はそんなこともなく、本当に何事もなかったかのように俺の入院生活は続いた。

【6月1日・水曜日・曇り・工藤洸征】

さて、このつまらない休養生活にも慣れ始めてきて早5日目。慣れしてきたとは言ってももう2、3日すればいつもの生活へと戻って行くのだろう。

そんな入院生活ではあるが、俺の見舞いとして訪ねてくれる人がそれなりにいることに少々感動を覚えていた。



転生前の人生において俺がこのような入院毎に巻き込まれたのは一度くらいだったか。あの時は喘息を起こして中学二年の夏休みをずっとベッドの中で過していた気がする。

無論、一カ月ほどの入院生活だと言つのに、俺の見舞いに来てくれた人は片手で足りるほどだった。

そういえば、たかが体調を崩したくらいでこんなにも見舞いに來る人が来てくれるというのは、嬉しくもあるが同時に気恥かしい。

前日に見舞い品を持ってきてくれた尚紀。完二は明日に訪ねてくると連絡があつた。そして今日、俺の目の前で心配そうな表情を浮かべてくれる二人。

「どうなの？ 体調は」

「無理しちゃ駄目だよ？」

坂崎舞と松永綾音。

学校帰りなのか双方共に制服姿ではあるが、無難と謙遜しながらも見舞い品を持ってきてくれた所を見ると、ひよっとすれば前から行くことと思つていてくれたのかもしれない。

いや、稲羽総合病院は八高からはそれなりに遠い。思いつきでここまで來るには少々手間がかかる。

どちらにしても彼女らが見舞いに來てくれたことには純粹に嬉しく思つた。

……ひよっとすれば女性のお見舞いなどという体験に少なからず舞い上がっていたのかもしれない。

中身の年齢がどうであれ、俺もまた男。ならばこの感情も正しい、はずだ。

「何笑つてんのよ。そんなにあたしが見舞いに來るのがおかしいわ

け？」

「いや、違う……ははは、気にしないでくれ」

「えと、洸征君、頭の病気とかじゃないよね？」

何気に酷い事を言う松永に苦笑しつつも、いつものようにつんけんしている坂崎の態度が微笑ましい。久々に会う友人の姿に俺の心も幾分安らいでいる。

しかし何を話せばいいものか。

学校での話はほとんど尚紀に聞かされているので、今更特別なことを話せるわけでもないのだが……。

「で、いつ退院？」

「週末辺りには学校に行けると思うが……まあ、無理せず休むさ」

「ホント？ あんまり無理しないでね」

松永、君はそればかりしか言わないな、などとは言わない。

多分彼女も、いや、坂崎も此処最近の俺の態度を鑑みてここまで念を押すのだろう。尚紀から聞いた話の通りだった。

新田会長や原さんとの話で懸念されているらしい、工藤洸征のストレスが溜まっているとかそういう話。それでなくても昔からつるんでいる彼女らには、俺の機嫌が最近悪かったというのはとうにばれているのだろう。

兎にも角にも、少々無様な様を見せすぎた。

ある程度は息抜きをすることも覚えねばな。

一人ため息をついて首を振れば、胡散臭いモノを見る様にして目を向ける坂崎と目が合った。

「なんか、こっ……っーん」

「ん？」

「どうしたの？」

「え、っと、んー……何でもない」

違和感を与える何かでもあったのだろうか、などと考える前にその答えに辿り着く。

俺の在り方について幾度となく発破をかけてきた彼女ならば、俺の心境の変化に何かしらの疑問を抱くのは当然なのかもしれない。

その輪郭を捉える前に自分なりに納得して見せたのだろう。隣で首を傾げる松永の視線をごまかすようにして坂崎は笑った。

ならばこちらから礼の一つでも言っただけで彼女を赤面させてやろうかとも思っただが、止めた。

どうせ言った所で彼女は気持ち悪いような半眼でこちらを見やるだけだろうし、松永に至っては余計に頭の中身を心配されかねない。

言葉にせずとも通じ合う仲というのは、やはり男の方が分かりやすいのかもしれないなどと思った。

「あーもう！ 何なのよ、さっきからニヤニヤして」

「いや、何でもない」

「気にするなとか、何でもないとか、こっちが気にするっての」

「まあまあ、舞ちゃん。洗征君も病人なんだし」

彼女らが繰り広げるそのやり取りは随分前から見ている彼女らのお約束。松永が宥め、坂崎が怒る。幾度も幾度も見ているはずのそれが酷く羨ましく思えた。

そんなこんなで日も落ちかけているということで彼女らを早々に家に帰す。

見舞いに来てくれたのは本当に嬉しいが、高校生をこんな病院の中に閉じ込めるのは気が引ける。

松永は最後まで無理しないようにと俺に釘を刺していった。いった

いどこまで信用がないのだろうか、俺は。

「んじゃ、さつさと治して学校きなさいよ？ 完二も寂しがつてるし」

「あ、ああ。分かってるさ」

「それじゃ洗征君、バイバイ」

日暮れで赤く照らされた病室から出て行く彼女らを苦い顔をしながら見送る。

待つてくれているのは嬉しいのだが、完二が寂しがつていると言うと酷く気分の悪いもののように思えてしまうのは何故だろうか。

そつえば明日、彼が見舞いに来るのだったか。

……まあ、嬉しいと言えば嬉しいか。

【6月2日・木曜日・曇りノ雨・工藤洗征】

生憎も今日は雨模様。どんよりとした重く押し掛かるような厚い雲が空を埋め尽くし、時に雷光を走らせてはけたたましい轟音を響かせる。

既に6月にも入っており、これから数週間は雨の止まない梅雨の季節に入っていくのだろう。毎年訪れるあのじめじめとした感覚が思い出されて幾分気分が落ち気味になるのも仕方のない事なのかもしれない。

言っても病院。出来ることはあまりに少なく、外を散歩しようとしてもこの天気ではいつずぶ濡れになるのかわかったものではない。病室内に設置された小型テレビをだらだらと回しながらも、午前のニュース時に映ったのは他愛のない事件や騒動、そして特集ばかり。そろそろ稲羽市で起こったあの連続殺人事件も、視聴率を取る賞味期限が過ぎたのか、滅多にテレビの中には出てこない。

「……………」

どこのコメンテーターがうだうだと映画の評論を続けている番組でチャンネルを変える手を止め、そして暫くしてテレビの電源をプツリと切る。

上半身だけ起こしていた身体をどかりとベッドに投げ出し、そのまま脇にあった携帯を弄くろうとして……止めた。

他に入院患者がいない部屋だとしても、一応は病院。特に目的も無いのに携帯を叩くのは何だか憚られてしまう。

手持無沙汰。暇。閑人。

ただ天井を眺めながらため息と瞳を瞬きさせるだけの人形と化していた俺だったが、やがて頭に浮かぶのはどうしたってテレビの中と、瀬多さん達と、事件の話。

後にしよう、後にしようとは何度思っても、あれだけインパクトの強く、そして他人事ではないものに巻き込まれると見て見ぬふりというのも不可能だ。

これからどうするのか。  
実に単純な悩みではあるのだが、その進退をざっくばらんに決めるのはあまりに愚かだ。  
そしてコレは、単純な是非で決められるものではない。  
ペルソナと呼ばれる限られた人間にしか扱えない武器があり、この世の道理が届かない場を戦場として、前例が存在しない方法で凶行を働く人間がいる。

「……………人間なのか？」

ぽつりと呟いた疑問の言葉は、やがて雨音を連れてきた曇天によってすぐさま掻き消された。

稲光を放つ空を窓越しに見やれば、窓際には松永の持ってきてくれた見舞いの花が花瓶の中で揺れている。

ありきたりな見舞い品であり、そしてそれが嬉しく、何より花は素朴なものを感じさせる松永綾音という人間には似合っているようにも思えた。

坂崎が花を持っている姿は……………悪いがガサツなようにしか見えんな。

「……………ふん」

纏まらない思考に億劫になり、馬鹿にしたように出た鼻息は誰に向けたものか。

唐突に、本当に唐突に、何故かは知らんが唐揚げが食べたい気がした。

暇を持って余し過ぎだ。

【6月3日・金曜日・雨・工藤洗征】

相も変わらず雨。既にじめじめとした嫌な感覚は例え病院であつても健在なようで、一日中をベッドの中で過す俺にとっては、あまりに布団の感触がべたついて気持ち悪い。

空調である程度はなんとかなっているものの、やはり全ての湿気を取ることは難しい。

既にこの世に生まれ落ちて、いや、前世を合わせれば30年弱。今更梅雨の時期がどうだのと文句を言つつもりはないのだが。

「……休み、だったのか？」

「まあ、そんなもんだ」

「雨で？」

「俺は現場の男だからな。建築士にとつちやこの雨じゃあ動けない」

そんなべたべたした空気の中で、男二人が病室で盛り上がる会話も無く相對する。

まあ、父のことなのだが、どうやら仕事は何らかの理由で中止になつたらしく、見舞いがてら俺の病室まで足を運んでくれたということだ。

最近の仕事が夜間にまで及ぶ彼が病院に見舞いに来るのは中々気分

的に困難なものであり、そもそも俺の病状も所詮ただの体調不良だ。過保護な母ならばともかく、ある程度はドライな父がここに来るのは珍しい。

「果物……持ってきてくれたのは嬉しいのだが、皮を剥いたりはしてくれないのか？」

「……………バナナでも食ってる」

籠に盛られた林檎を指せば、父はそっぽを向いたままに真つ黄色のバナナを俺に放り投げて寄こした。

ドサリと重みを以ってベッドに落ちるバナナの束。明日には退院するということに、あまり多くの果物を持ってきてもらっても家に持ち帰るだけだと思うのだが。

でも食べる。久々に甘いものを食べたいとは常日頃思っていた。

「うまいか？」

「ああ。有難う」

「いいからさっさと治せよ？」

「明日には家に帰れるさ」

他愛ない、本当に他愛ない会話の群れ。

少ない口数で交わされるこれをキャッチボールと呼んでいいかは分からないが、なんとも不器用そうな父の言葉は、幾分疲れた体と心に染みる。

途中途中で部屋に沈黙が続いてしまうのは、口下手な男同士の仕方がない所なのか。

……………それとも。

そういえば母とは先日の話もあってかきちんと家族になれた気はするのだが、父とは何一つそんなことについて話をするとはなかった気がする。



「どうした？」

「……………いや」

「そうか」

何でもないと首を振れば、父は追求もなくそこで会話を途切れさせてしまう。

それは言いたいことが分かってくれているからという言葉無き絆では決してない。俺の考えが自惚れでなければ、双方共に歩み寄り、とを恐れている証。

母は強し。女は強し。俺たちは、まだこんな所で足踏みを続けている。

「母さんと話をしたのだが」

「……………」

意を決して零した言葉に、父はただ黙って窓を叩き続ける雨の有様を見続けていた。テーブルに乗せられていた手が徐々に拳を形作り、その表情にあつたのは確かな強張り。

ひよっとしたら俺が家にいない間に、母と俺が色々話したその夜に、父と母は既に話し合っていたのかもしれない。

力仕事に就いている故か、丸刈りにした頭とそれなりに強面の顔から漏れる雰囲気は、こちらの覚悟を揺らがせる。

……………親という存在から向けられるその不安定な感情に、徐々に恐れというものを感じた。

「……………元々」

「ん？」

しばらく共に黙りこみ、口を開いてくれたのは父だった。

相変わらず顔はこちらを向かず、ただ外の灰色の景色を眺めるばかり。それに釣られて俺もまた別に真新しいものの何もない外の景色を眺めていた。  
眼を合わせることも出来ない、情けない二人だった。

「子育ては得意じゃないと思ってた」

「誰が？」

「俺に決まってるんだろ」

問い返せば、ムスツとした表情を浮かべながら鼻息を吐く父。そんな表情でもいいから、こっちを向いてくれればいいのに。そんな表情を、こちらから覗き込むことが出来ればいいのに。

「ほとんどを母さんに……亜季に任せて、せいぜい俺が思ったのは手の掛からない赤子でよかった、くらいのもんだ」

「……まあ、男なら分からないでもないが」

「お前、結婚してたか？」

「いや、前も一人だった」

「ふん。結婚つてのも子育てつてのも思ったよりずっと難しいんだ」

経験なく父の感覚に頷いてしまったのか、父はしたり顔で笑って見せた。どこか子供っぽいような、そしてその笑みに同感せざるを得ないような。

そういえば、前世を覚えていると吐いたことはあったが、前世でどのようなことをしていたのかということなど教えてはいなかった気がする。まあ、わざわざ俺と両親の間にある溝の原因を好き好んで話す余裕などなかったのかもしれない。

「だから……俺は、正直お前の異常さを知りつつも、その一方では助かってた。手間が掛からないからな。つまり……子育てをサボっ

てたってわけだ」

「……………そう、か」

反論はしない。

ただ父の言葉を待つ。

震える父の声を待つ。

「ツケは必ず来るんだ。楽をして、亜季に問題を押し掛けて、そうしたら、既に俺たちは機を失っていた」

「……………」

「一度、楽をするともう逃げられない。家族ごっこ、近過ぎない関係、手間のかからないガキ。その全てが心地良かったが……………罪悪感と嫌悪感はどうしても拭えなかった」

「楽……………」

「そうだ。俺たちは、亜季に全部投げ出して、好き勝手逃げてただけだ」

転生した午を吐露したあの日。一人で生きることには耐えきれなかったあの日。確かに俺は一度だけ歩み寄り、そしてそこで止まった。あそこにあつたのは家族である両親への気遣いなど欠片ほど存在しない。ただ自分を救うためだけの愚かな行為。

あれは両親と、現実と向き合うための行為ではない。楽を望み、逃げるだけのものだった。

俺と、父は、逃げたのだ。

「転生。訳が分からんな」

「……………そうだな」

「まあ、考えたって分かるわけもない。現実が変わらないのだからな」

ふ、と互いに息を吐き、緊張しかけた空気の中で肩を下ろす。

「……向き合う、と言っても……先に亜季にそれを言われてしまつてな」

「……………父さん、俺も」

「だがな、俺はあいつのように感情に任せては動けん」

初めて、俺と父の視線が真っ向から向かい合った。

鋭く細められた瞳。揺れない視線。力強いその眼と食いしぼる様に閉じられた父の口元、その表情に俺の言葉は遮られた。

「男つてのは結果や証拠、自分が納得できるもんがなければ動けない。母さんのように感情に任せて動けるのは、女だからだ」

「……………そうか？」

「じゃあ、何だ。お前は今から俺と一緒に、今すぐ仲良くなれるか？」

こちらを馬鹿にしたようで、真実自分を卑下するような父の言葉に俺は口を紡ぐしか出来なかった。

何一つ考えずに感情のままに動くことが出来れば、俺は今こんなところで寝ていることなどあり得なかったのだろう。

考えて、考えて、考えて、自分の納得できるナニカがなければ動けない。あつたとしても、歩みは遅い。

眉を顰め、しばし父に応えるべき言葉を探せば、彼はそんな迷う俺の様子に頭を振りながら笑った。

「だから、洸征。お前の前世を教えろ」

「え？」

「お前がどんな奴だったのか、どんな人生を歩んできたのか、今まで何を思ってきたのか。亜季は今と未来しか見ていない。だから俺

はお前の過去を預かる」

「……………何故」

「楔がなきゃ動けない根性無しの俺らには、それくらいのもんが必要だろう？ もしもうだつの上がない前世だったら一から教育し直してやるからな？」

子の前世を、別に知るべきではない過去を背負う。

それは必要のないことだ。俺が墓まで背負うべき真実なはずだ。そんなものがなくてもここまで話すことが出来た父なら、きっと。

刺々しいものを含みながらも、父は俺の過去を預かってくれると言ってくれた。

無意識に俺は腕で目下を拭う。涙など出てはいないのに。

「意地でも支えてやる。意地でも親として子の全てを背負ってやる

……………そうしたらいつか、俺たちはきっと」

それ以上はさすがに父も声を張り過ぎたのか、一瞬我に返っては恥ずかしそうに頭を掻いたまま押し黙ってしまった。

そしてそんな決意を言葉にしてくれた父を、俺はどこか憧れの眼差しでぼんやりと見つめていた。

彼は俺の父なのだと改めて思う事が出来た。

逃げず、現実と向き合うこと。

そして、自分の何かを誰かに背負ってくれることは、何よりも勝る幸福なのだろう。

自分のやるべきことが、見えた様な気がした。

第二十三棒 行こう (後書き)

いやあ……これは酷い。

休みすぎた。

ごめんね。

これからちよっとずつ頑張るよ。

## 第二十四棒 今日から俺も

【6月4日・土曜日・雨・工藤洸征】

パラパラと小雨程度の雨が降る田んぼ脇の道路を、傘を差しながら歩いていく。深夜から振り続けたせいで出来た水たまりを避ける様に前へ、前へ。

右手に見える灰色の町の風景と、左手に広がる薄緑の風景を眺めていけば、道行く人の中には俺と同じく学校に向かう傘の群れが見えた。

どれもこれも既に二カ月という期間で見慣れたはずのものばかり。そんな朝の光景を見ると、どこか視点がそっくり変わった様な感覚に陥る。

などと、少しあからさまだっただろうか？

ローファーマーのつま先と制服の肩を叩く雨を感じながら、俺はゆっくりと夕々の八十神高校へと足を運んでいた。

途中、入院を経て一週間ぶりともなる俺の姿に気付いた人はそう多くない。ビニール傘に顔が隠れて見えない男子高校生の姿は、どれも同じだ。

あの学校を休んだ次の日に同級生から向けられる視線というのは、何故にああも特殊なものなのだろうな、と前世から常々疑問に思っていたのだが、所詮自意識過剰に過ぎない話だったか。

「お  
「ん」



やがて八十神高校に近づくに連れて密度が増す、高校生の姿。こんな天気でも傘を差しながら自転車を漕ぐ生徒や、雨の中でも聞こえるくらいに大きい話声などが顕著になっていく中、いつのまにか並び立つようにして巽完二が横を歩いていた。

一瞬投げ掛ける言葉を選んだが、特別なことが必要なわけでもない。

「おはよう」

「おう」

簡素な挨拶を経て、俺たちはしばし無言のままに並んで歩いていた。しかし雨のせいで少し肌寒いというのに相変わらず感じは制服を肩に羽織ったような着方をしているのみで、髑髏マークの描かれたシヤツの袖から見える素肌が何ともこちらまで震えさせる。別に普通に着ればよかるうに。

「身体……大丈夫か？」

「問題ない。むしろ調子がいいくらいだ……すまんな、心配を掛けた」

「んなことねえよ。見舞い、行けなくてわりい」

交わした言葉は短いが、そこにあの出来事を経験した故に変化した仲は感じ取れない。

いつも通り、巽完二と工藤洸征の仲は気心の知れた仲のまま変わってはいない。それが何よりも嬉しく思う。

そんな心地良いものを感じる中で、完二の雰囲気には混じる強張ったもの。真剣なもの。

思い起こせばおそらくは今日という日が俺と、そして彼らにとっての重要な分岐点となるのだろう。

一体何が起こっているのか。俺に何が起きていたのか。その全てを

知る覚悟が試される。

「洗征。今日の放課後、時間あるか？」

「……瀬多さんたちも来るのか？」

「おう」

思考と重なる様に掛けられた完二の言葉に、心が引き締まるような感覚に見舞われた。

どちらにせよ、逃れられぬ、逃げてはいけないことなのだ、これは。

それから学校に着くまでの間、俺たちは言葉少なげに多少の会話を続けて別れた。

それにしても 何だか完二の様子が緊張し過ぎの様な気がするのは気のせいだろうか。こちらの一挙手一投足を鑑みて、自分の言葉を選ぶような男ではなかったはずなのだが。

事件の話とやらに一波乱ありそうで困る。

生憎も特捜隊が常に会合の場所として屯している屋上は雨のため使用できず。

工藤洸征が退院し、元気に登校していると聞いた瀬多たちはほっと胸を撫で下ろしつつも新たな情報を得られることにある程度の期待を抱いていた。

「どう思うっ？」

「どう思うって……んなもん聞いてみなきゃわかんねーじゃねーか」「そりゃそうなんだけどさ」

授業中だというのに私語を交わす花村と里中の様子に、軽く人差し指を立てて注意する瀬多と苦笑する天城であつたが、二人とも心中にあるのは花村達と同じもの。

特捜隊として動き始めてから起こつた天城・完二の誘拐事件を救出という結果で収めることは出来たが、事前に防げたわけでもない。そしてそれは洸征に至つても同じことである。

救えた、が防げたわけではない。

それは誘拐犯の逮捕を目的とした彼らにとっては痛恨の極みであり、それが『誘拐されるのは洸征』と確信した果ての結末ならばなおさら。

いくらでも誘拐を未然に防ぎ、犯人に一気に接近する方法はあつたはずだった。

(でも、事はそう単純な話ではない)

世界史担当として教壇に立つ祖父江の講義を聞きながら、瀬多は一人頭の中では単に期待するだけでは終わらないものを考えていた。今回の誘拐を防ぐことが出来なかつたのは、情報が少なかつたわけ

でも戦力が集まらなかったわけでもなく、すれ違いによるもの。

特捜隊として、高校生としてはあまりに違和感の持たれる活動を押し通してきたからこそ起こってしまった限界。

このままではいつか取り返しのつかないことを起こしてしまうのではないかという、淡い不安。

それを考えると、今日の放課後に工藤洸征に話を聞くということすら瀬多の中では悪手に思えた。

(果たして彼は……)

その先を言う事は瀬多にも憚られた。

今までが特殊だったのであり、おそらく洸征が選ぶであろう選択は一般的なものに他ならないのだから。

「まあ、今日は誰も使用しませんし此処でいいでしょう」

「お、おう」

事件の顛末、または手掛かりを求めるために洸征を呼び出した特捜隊の面々を、意外にも逆に生徒会室へと案内したのは洸征であった。初めは完二を介し話の内容を伝えようとも思った瀬多たちであったが、そんな役割に落ち着かない完二を笑いながら洸征は此処へと連れて来たのだ。

てつきり何かしらお小言を貰うのではないかとビクビクしていた完二は、洸征の笑みにもたどたどしく答えるだけだった。

「何から話せばいいのでしょうか。それともそちらの話を聞いた方が？」

「……そうしてくれると話が早いな」

それは瀬多たちにとっては渡りに船な提案であった。

花村も、里中も、天城も、そして完二もそれぞれの言葉を追うようにして自分たちの身の回りで起こる事件の関連性を話していく。

山野真由美から始まり、小西早紀、そして天城と続いていく連続殺人事件に関する話。自分達の活動理由、目的。マヨナカテレビ、さらにテレビの中の世界という不可思議について。

特捜隊の面々によって話される内容に、洸征はただ眼を閉じたまま聞き入るだけだった。

## 【同日・工藤洸征】

ひよっとしたら、予想していたことだったのかもしれない。

小西早紀さんが巻き込まれたあの殺人事件と、ここ最近稲羽市に起こる様々な異変が関係しているのかもしれない。

本来であれば鼻で笑えるほどおかしな彼らの話も、実際にあの不可思議な世界に入ったからこそ現実味が沸く。沸いてしまう。

表側は冷静に。ただ瀬多さんたちの言葉を噛み締めるように耳に通していく。だが心の内に湧き上がるのは熱をもってうねり上がるような怒りだった。

あの茫然としたまま朝会で校長の口から聞いた早紀さんの死とはまるで違う、早紀さんは死んだという真実。抱いた感情は少なくとも同じではない。

「それで、俺たちは出来ることをしようと思って……」  
「そう、ですか」

真摯な表情を浮かべ熱を帯びる花村さんの言葉に、俺はただ相槌を以って返すしかできなかった。

いろいろ、いろいろあったのだ。どのような言葉を掛けてやるべきなのだろうか。どのような選択肢がベストなのだろうか。逃げないことを決意し、現実を受け止めると覚悟したものの、変わらぬ現実はあまりにも残酷だった。

「殺しに理由を求めるつもりなどありませんが……ほとんど通り魔ですね」

「うん……テレビに出た人をあの中に入れるなんて、わけわかんないもん」

「分かりたくもありませんがね」

疲れたように生徒会室に並べられた椅子の背もたれに背を預ける。汚れた天井を見上げれば、出てくるのは向けるべき対象が見えない事で漏れ出た憎しみと怒りだけだった。

今更にして 本当に今更にして込み上げる、知人の死。その理不尽。

これを、尚紀は感じていたのだろうか

泣いたのだろうか？

「俺は小さい頃、早紀さんによく遊んでもらいましてね」

「洗征……」

「まあ、当時の俺はお世辞にも素直な少年とは言えない子供で。よく早紀さんの機嫌を損ねては尚樹に怒られていたような気がします」

まるで思い出話には関係ないはずの瀬多さんたちの前だというのに、すらすらと出てくる記憶は止まらなかった。

あまりに都合が良過ぎる自分に嫌悪しつつも、脳裏に浮かぶのは幼いながらも意地を張りたがるお姉さん気質の彼女の姿。

思い出せば思い出すほどに  
彼女が失われたのだと痛感させられる。

いけない。

これ以上亡くなった人に湧いて出たような感傷を向けるのは侮辱に他ならない。

閉じていた瞳をゆっくりと開き、黙って聞いてくれた瀬多さんたちに視線を向ければ、ふと花村さんと眼があつた気がした。

「……………こんな話が聞きたかつたわけではなかつたですね。申し訳ありません」

「いや、いいよ。それに……黙ってて悪かつた」

「謝ることはないでしょう。おそらく貴方達が選べる選択肢は少なかつた」

大きく息を付いて胸の内に淀む感情を吐きだす。

これから必要なのは過去に縋り、涙を流すことではない。

だがしかし思い出してみても俺が誘拐されたという感覚がまるでないのだ。

彼らの話した通りならば、何らかの方法で誘拐された後にテレビの中などという所に放り投げられたことになるのだが……不自然なほどにそのような覚えがない。

「あの日は学校を休み、そして気晴らしに外へ出て……」

「お前、確か仮病だったんだってな」

「……誰から聞いた？」

「オフクロサン」

ジト目を向けてきた完二をスルーしつつ……というより学校が終わった後に俺の家まで来たのか、などと何とも申し訳ない様なことをした気がする。

だがしかし、今はそんなことよりも記憶を掘り起こすことに専念する。言い訳ではない。

しかし頭を捻って掘り起こしても出てくるのは明瞭としない、まるで霧に包まれた様にあやふやなものばかり。

完二たちの前で無様を晒した光景だけは強烈に残っているというのに、重要な誘拐された前後がまるでつきりとしらない。

シヤドウとやらの部分だけ忘れられればいいものを。

「あはは……それは皆思ってる、よね？」

「やはり皆さんも？ ……ああ、天城さんのナンパはあれでしたか」

「なっ……見たの！？ ねえ！ もしかして見ちゃったの！？」

知らず口から零れ出た言葉は藪蛇、というか失言だったらしい。

おそらくは彼らの面子の中で一番はおしとやかであるう天城さんがまるで鬼のような表情を浮かべて迫ってきた。

いや、その、悪いのはこっちなのだが、こつも接近されると非常に危うい。というか怖い。



「雪子、今は重要じゃないから、それ」

「……じゃあ、完二君のもばらす」

「んなあ！？俺はカンケーねーっスよ！」

「不公平よ！」

「わけわかんねえ……」

こういう人だったのか、という感想は脇に置いておきつつも頭の中をこねくり回してみるがやはり手がかりになるような記憶は見つからない。

そもそも身体全体を潰しかかるような気だるさがテレビの中では続き、さらに眼の前に晒されるのは自分の恥部だ。正直な話、誘拐云々よりも記憶に残るものが強過ぎる。

適当な言い訳をしても彼らの役に立てなかったのは同じ。

自分の不甲斐なさに頭を下げれば、誰もが慌ててそれを否定してくれた。

「しょうがないよ。皆そうだったし、それに無事にこうしていられるだけでも本当によかったよ」

「そう言ってくれると有難い」

「ま、今回は間に合わなかったが特定は出来たんだ。これだけでも十分な強みってやつだな！」

何一つ手掛かりを得ずとも、俯く暇なく笑みを見せる特捜隊の面々に眩しいものを感じながらも、俺もまた心に決めた言葉を用意し始める。

下した決断に後悔はなく、頭の片隅に蠢く不安と妥協を弱弱い意思で捻り潰す。

彼らのような眩しい心で物事に向かえないのは残念だが、これもま

た俺の戦いなのだ。

【同日・愚者の集い】

まあ、情報が得られなかったのは仕方がないが、救うべき人を救えたのならば落ち込む意味は無い。

そんなことでじゃれ合う特捜隊メンバーの様子を椅子に座りながらじっと見つめていた冴征の姿に、瀬多は気付いた。

先ほどまでの雰囲気とはどこか違う、眼鏡を一度上に上げて晒したのは鋭い瞳。

無意識に唾を飲み込んでしまいそうなるその視線に、瀬多もまた逸らすことなくまっすぐ受け止めた。

「瀬多さん」

「悪いけど、引けない」

呼ばれた名前に返したのは、罪悪感を感じながらも退くことは出来ない拒否の言葉だった。

これだけは、どうしても。

工藤洸征に話を聞く過程で、瀬多が最も気にかけていたのはこの言葉の後に紡がれる反論しようもない正論だった。

高校生がやるべきことではない。

その通り。全くもってその通りなのだ。

さっさとペルソナ関連のことを警察にでも相談し、マヨナカテレビの関連性でも突きつければそれで特捜隊などという集団が出る必要など無いのだ。

例え信じてくれなくとも、目の前でテレビに腕でも突っ込んでみればすぐに分かる。

本気にしない、などという理由で諦めるにはあまりにお粗末な理由だった。

「確かに『大人』に任せる方法はいくらでもあった。わざわざない頭を捻って考えるよりも、本職に任せた方がひよっとしたら解決は早いのもかもしれない」

「……………では、何故？」

聞けば瀬多だけではなく、花村も、里中も、天城も完二も黙って洸征をまつすぐ見つめていた。

説明するには丁度良い言葉は見つからずとも、退くことの出来ない心だけは言葉にせずとも鮮明にその表情に表れていた。

「どう言い繕っても我儘にしかならないだろう。それは勝手な義務感なのかもしれない……………でも」

「好きな人が殺されて、友達が誘拐されて……………そんなんで知らない振りしたら、多分俺はもう立ち上がれねーよ」

「気付かせてくれたのは洸征君だよ。あたしたちは正義のヒーローなんかじゃない。でも、誰かを助けたいって気持ちは嘘じゃない」

「誰かに任せればそれはすごく楽なことなの。でもそれじゃあ、私  
たちも周りと一緒にになっちゃう。他人事で何でも済ませちゃう人と」  
眼は逸らさない。  
言葉は淀まない。  
たとえ穴だらけな想いでも、賛同されない考えでも、本心を偽ること  
との醜さを彼らは誰よりも知っている。

「なあ、洸征。俺なんか馬鹿だからよ。先輩たちに恩返ししてえっ  
つか、犯人ぶん殴りてえってだけかもしんねえ」

「……………」  
「だけど通さなきゃならねえ筋つてやつは知ってるつもりだ…………だ  
けど、その…………ああ！ 面倒くせえ！」

頭をガリガリと搔いた完二は、一度テーブルに拳を叩きつけると、  
鼻息荒く洸征に叫んでみせた。

「瀬多先輩の言う通り、引けねえんだよ…………！ ダチを傷つけた奴  
なんかには他に任せらんねえ！」

完二の言葉にシンと静まる生徒会室。

ドアを挟んだ向こう側では下校に走る生徒達の足音が遠く響き、洸  
征の口が開かれるまで妙な沈黙が長く続いた。

洸征の顔に浮かんでいたのは、どこことなくニヒルなものを残した笑  
みだった。

「一つ、言っておきますと」

特捜隊の面々は一齐に喉を鳴らし、洸征の言葉を受けるべく食い入  
るように彼の顔を見つめていた。

別に、洗征の許可が必要なわけではないというのに。

どうやら今回の洗征に関わる一件は、色々の特捜隊に考えさせるきっかけになっただけらしい。

どちらにしても、洗征にとっては緊迫した面持ちを見せる面々には内心笑わずにはいられなかった。何故なら。

「俺は元々貴方達の行動を批判しようとも思いませんよ」

「……何イ!?!」「……」

「どづいうことだ?」

腹を抱えて心底楽しそうに笑う洗征の珍しい姿に唾然としつつも、瀬多は戸惑ったように問いかけた。

天城も合わせて四人声を重ねた面々は頭上に?マークを浮かべて首を傾げるばかり。

空気が一瞬にして和らいだ。

「いえ、そもそも此方が貴方達の行動を口汚く罵る権利などないですし」

「巻きこまれる前はケータイで怒鳴りやがったじゃねーか!」

「それはそれ。これはこれ。真実を知った後ではいろいろと考えも変わるぞ」

こめかみをヒクつかせて睨みつける完二にしれっと両手を上げて勝手なことを言う洗征。

あまりにも調子のいいことを言い始めた彼に、先ほどの真面目な雰囲気がちよっと『恥ずかしい事』を叫んでしまった完二の腹は収まらない。

顔を赤らめながらも両手の指を鳴らしつつ、洗征へと近づいていった。

「じゃあ、さっきのはなんだったんだよ……？」

「俺が協力できるかどうか」

「……………あ？」

呆ける完二を置き去りにして、洸征はゆっくりと立ち上がる。そこにあつたのは不敵な笑みだった。

「真実を知る前に考えたあなた方の行動理由は多岐に渡りました。知り合いを誘拐された怒りか。不思議な力を得たが故のなし崩しのなものか。単なる好奇心か。意地か。正義の心か」

「……………」

「はっきり言えばどれでもよろしいでしょう。それほどの『異常事態』だった。異常を常識に当てはめることほど愚かなことは無いでしょう。故に貴方達の行動理念がどうであれ、俺は俺の目的のために協力したいとは思っていません」

「だから、さっきのは何だったって聞いてるんじゃないか！」

ふう、と息を吐き、洸征は真つ黒の瞳を覗かせて先を促す完二に答えた。

白状するかのように、自らの意思を示すかのように。

「俺も貴方たちと同じだという証拠が欲しかった。ただ単に自らの心の赴くままに、想いのために最善を投げ捨てるという立場であると知りたかった……生憎、一人で間違えを起こせるほど度胸はなかった」

「どう考えても臆病な俺は、妥協、最善という文字がチラつく。こんな異常な事態に最善などないというのに。警察への押し付け、見て見ぬふりの生活……もしくは貴方がたを応援するだけで止まったか」

「俺もあなた方と同じです。例え間違えと知ろうとも、身に起きたものから逃げず、ただ心のままに立ち向かいたい……『ダチ』の隣に立つべき者になりたい」

「そのためにも、まずは……知り合いを殺し、友を傷つけ、ひよつとすれば俺の無様な姿を嘲笑っていた犯人を、とっちめたいと心底思いましたね」

最後の言葉を紡いだ時、洸征が浮かべていたのは完二すら引くほどの真つ黒な笑みだった。

今にも三段階に分けて高笑いしてしまいそうに肩を上下させ、啞然とする瀬多達を放ったままに笑い続ける。

おそらくは特捜隊の中でも最も碌でもない想いで参加しようとする男の前に、誰もが欠けるべき言葉を失くしていた。

「少しだけ、俺を強がらせて下さい」

そして深々と洸征は頭を下げた。

その言葉こそが、彼の一番に求めていたものだったのかもしれない。故に、特捜隊の面々も苦笑するしかないのだ。

こんな傲岸な想いを掲げて、本当は弱虫な様を見せつけられては。

「き、協力してくれるんなら喜んで歓迎するよ！」

「天才君が入ってくれるんなら百人力だな、うん。あれ？ 天才でいいんだよね……？」

「よろしくね、洸征君」

「……………チッ」

「何だ、完二。嬉しそうだな？」

「ん、んなわけねーっスよ！」

洸征の言葉にどこか感じ入る者があったのか。恥ずかしそうに鼻の下を擦りながらそっぽを向く完二を茶化すようにして瀬多は彼の肩を叩いてみせる。

その様子にほつと息を吐いた洸征は、これこそが本題とばかりにもう一度口を開いた。

「しかし、いくら何でもこのまま我々だけで、というのは実質不利益なものしか生みません。いくら高尚な想いを抱こうとも」

「……………というところ？」

「……………絶対条件は犯人の逮捕。犠牲者を無くすること。俺たちが常識をかなぐり捨て、想いのままに勝手出来るのはペルソナという異能があるからにすぎません」

「要領を得ないな……………どうするつもりなんだ？」

腰に手を当て、さすがに洸征の言いまわしに不穏なものを感じたのか、瀬多は眉を顰めて彼の言葉を待った。

そして出てきたのは、今の今まで瀬多が避け続けていた一つの方法であった。

「マヨナカテレビこそが俺達の我儘が押し通る理由であり、現実での犯人探しはただの探偵ごっここの域を出ません。故に……………瀬多さん、少しばかり気張ってもらいます」

「絶対的に足りない『現実での捜査』を任せるべく、現時点で最も俺たちの事情を理解してくれる位置にあり、なお且つ連携を取ることとも容易。申し訳ありませんが、瀬多さんについて少々調べさせてもらいました」



「稲羽署勤務の刑事……堂島遼太郎さんに協力を仰ぎましょう。  
1000の屁理屈を並べ立てても」

## 第二十四棒 今日から俺も（後書き）

原作崩壊にドキドキ。

ちなみに地震の方ですが、特に被害もなく無事生きてます。  
もし万が一このSSを読んでいらっしやる読者の中に被災者の方が  
おられましたら、いくらか為になれたのなら幸いです。

日本にベホマ唱えられたらいいんですけどね。

## 第二十五棒 殴りこみ準備に奔走する男

【6月5日・日曜日・晴れ・愚者の集い】

「くそー……昨日のまま雨だったらスペシャル肉丼頼めたのになー」  
「……あれを頼む人がいたのか」  
「里中先輩、自他共に認める肉好きだからな……」

休日、久々に晴天の青空が広がる昼下がりに愛屋に集まった特捜隊のメンバー。

新しく入った洗征と親交を深めるには同じ飯を食うのが云々かんぬんということでの中華料理店に来たのだが、入るなり残念そうに呟いた里中の言葉に洗征は少しだけ引いた。

何せ彼女が欲するスペシャル肉丼とは、どこぞのフードファイター御用達とも思える量に、肉と米の比率が逆ではないかとも思えるほどの肉の群れ。

普通の間人間が好んで食べる様なものではない。

「俺も雨の日はたまに挑戦するけどな」

「……何のためにですか。三千円も払って」

「強くなった気がするんだよ。あれを食べると」

瀬多の物言いに完二と洗征は揃って頬をヒクつかせた。

ともかくにも今は飯。これから色々と準備を整えるために動くので腹ごしらえは重要といった所なのだろう。

テレビの中で戦うためにも怠いたら、で武器を見繕う必要はあるのだろうし、早めにテレビの中という場所を経験し見る必要もあるの

だろう。さらに言えばクマもそろそろ孤独で死にそうかもしれない。

「おや、完ちゃんに洗ちゃんじゃないの。アイヤー、二人揃って来るのも久々ね」

「顔見知りだったの？」

小首を傾げて問いかける天城に、どこかその呼び方に恥ずかしさを覚えながら頷く二人。

小学からの知り合いであるのならば、同じ商店街に住む完二との交友もあつて、この店で外食をすることもあつたのだろう。

二人に対して仇名染みた呼び名を使うエセ中国人風な店主は、皆の注文を承ると即座に調理に入っていた。

「だからだいたら、あなた達が通っていたわけですね。正直剣堂さんが模造刀を売ったと聞いた時はどれほど驚いたか」

「今じゃ普通にクナイとか偽物の刃じゃねーのも使ってるけどな」

「……それでいいのか……？」

「何落ち込んでんだ？」

肩を落とし表情に線を入れる洗征に、完二はさもそれがどうしたと言わんばかり聞いてみせるが、少なくとも洗征の常識の範囲では流してはいけないと感じていた。

が、使えるモノは使うべき。今のところ特に問題になったことはなく、そしてあの店が普通に営業出来ているというのならば。

「あ、でも、一回俺達警察署に連れて行かれたな。あの時はマジでびびったわ」

「こ、洗征君？」

「……………」

啞然として周りの音と色を失った洸征は、直に考えることを止めた。どうしようもないほど常識でおかしな状況であっても、今のところ何か問題が起こっているわけではない。無理やりにならざるを得ないと、洸征は店主に出されたお冷をグビリと喉に流し込んだ。どうやら早くも洸征は妥協してしまったようだった。諦めとも言える。

「なあ、洸征……やっぱり」

「気持ちばかりですが……」

「だが堂島さんは手強いぞ？」

「手強くないはずがないでしょう。良識ある、しかも刑事であると言っなら、俺達の行動に理解を示すはありますがありません」

ムフー、と鼻から息を吐いたままやれやれと両手を上げる洸征の態度に、瀬多も顔を歪めたまま渋るしかない。

まるで他人事のように言ってくれる彼に思うところがないわけではない瀬多だったが、洸征の提案は自分たちの『我』を通すためには最低限必要なものだったのだ。

「このまま、何度も誘拐事件を防ぎ、または被害者を救出出来ればそれはそれで御の字かもしれないませんが……」

「犯人の逮捕は難しい？」

「素人考えですけどね。やはり公的な立場の人間に関わってもらわなければほぼ無理と断っていいでしょう……ここまで凶行に走った輩が罪を認めて自首してくれるなら、まあ、話は別でしょうが」

「こんな悪趣味な事件起こす奴なんて絶対なことしねーだろうな」

カラリとお冷の中の氷を鳴らした花村が、憎たらしげに吐き捨てる。それに釣られて表情を曇らせるのは天城と完二。二人ともあらぬ姿をマヨナカテレビに晒してしまっている。

誘拐事件、果てには殺人まで犯す狂人の思考など誰ひとり理解出来るわけも無かったが、碌でもないものであるというのは分かる。

「そもそも……告訴出来るかどうかさえ」

「マジか！？……告訴って何だ？」

「簡単に言えば罪を償わせることが出来ないってことだ……みなさんも分かっていたでしょう。『テレビの中などと言っても信じてくれない』と」

「……………あー」

誰もが揃って気の抜けた様な息を吐いた。

冨征もまた苦笑するようにして皆の反応を受け止める。犯人逮捕に氣勢を上げる雰囲気壊したくないのは山々だったが、どうしても冨征の頭には『後の話』が浮かんでしまうのだ。

今は順調に被害者を減らすことが出来ているらしいが、それはいつまで続くのだろうか。一番ベターな結末とは一体どんなものなのか考えても考えても、冨征の頭に理想的な結末が浮かぶことがなかった。さらに言えばどう動いていいかさえもまるで考え付かなかったのである。

「あれですよ。現場で動くのは我々で、上で明確な対応と作戦を考える人が欲しいというわけです」

「……………犯人ふん捕まえて警察に突き出してもなー」

「誰が狙われるかっていうのは私たちでも辿りつけるけど、それからはほとんど行き当たりばったりだったもんね……………」

「……………サツか。嫌な予感しか浮かばねえな」

「無論、組織としての警察に話したところで信じてくれるわけも無く、信じたところで我々を表に出すことは無いでしょう。むしろ迷宮入りとして自然消滅させる恐れさえある。故に個人としての協力が欲しいのですよ……………正直、それでも犯人を裁きにかけるかどうか

は分からないのですが」

洗征の表情に明るいものは無い。自分で提案しておいて何だが、彼自身この作戦に正当性や現実的なものがないことは理解していた。協力して貰う、などと軽々しく言っただけはみたものの、むしろ相手が刑事であるからこそ外的な作戦であるのだろう。

真実、堂島遼太郎が毅然とした刑事であるのなら、自分達という高校生が事件に関わる事など認めるはずがない。そもそもこの異常事態を信じてもらうことすら微妙な話である。

「最後に一つ。これは一つの提案に過ぎません。実行するならば後戻りできないことを覚えておいてください」

「……堂島さんに止められたら、もう特捜隊として動くことも無理そうだな」

「一発勝負ってわけね」

「しかし刑事の、何より大人の方が自分たちの行動を理解し、そして手助けしてくれるというのならこれ以上のものはありません。現実的にも、俺たちの『我』を通すためにも、魅力的なものであるとは思っています」

握り拳をカウンターの上で造り、真つすぐな視線で周りに語りかける洗征に、誰もが同じく真剣な心で頷いた。

所詮これは一つの手段に過ぎず、捜査の進展が望まれるような確信的な一手ではない。

むしろそれぞれの心に在るしこりを、徐々に濃くなっていく影を鎮めるためのリスクな一手。

「まあ、とりあえず次に狙われる人がはっきりとするまでには余裕があります。今すぐ突撃してもなんと白状すればよいのかも微妙ですしね」

「……堂島さん、いかにも頑固そうな人だったけど家ではどうなの？」

「多分、見たままでいいと思う。たまに可愛い所も見せるけど」

「……………先輩のセンスはやっぱりわかんねえ」

まずはそれほど急ぐ話でもない。

次々に店主に運ばれてくる注文の数々に舌鼓を打ちながら、とりあえず特捜隊の皆は鳴りつつあった腹を膨れさせることにしたのだ。た。

ちなみに大盛りで頼んだ肉井をかき込む里中の姿に、洗征はその光景だけで胃もたれしたように顔を歪めていた。

「らっしやい！ ……あ？ どんな組み合わせだ？」

「久しいな、剣堂さん」

愛屋と同じ商店街に開くだいだら。の扉を開いた特捜隊メンバーの中に混ざる洗征の姿に、剣道は方眉を吊り上げながら顎鬚を摩った。ぞろぞろと店内に入ってくる洗征の様子を見ても、どうにもそこで一緒になったような雰囲気は感じさせない。

ズレ掛けた頭のねじり鉢巻きを直しながら、剣堂は洗征の顔つきを食い入る様に見つめていた。

「……………坊主、おめえ」

「武器が欲しくてね」



「あ？」

「武器が、欲しいと、言ったのだよ」

何かを言おうとした手前、剣堂の言葉を遮る様にして洸征は不敵な笑みと共に口を開いた。

まるで細かいことなど気にしなくていいと、言葉など無くともいいだろうと。

腕組みをしたまま剣堂の言葉を待つ洸征の姿はどこまでもふてぶてしく、そして。

「けっ……半人前になりやがって」

「まだ一人前にはなれていないか？」

「ようやく半人前だろおがヨ、ボケエ……」  
「たたく、もう少し早けりや舞ちゃんも……」

「剣堂さん、余計なことを言わなくてもよろしい」

かくも職人とは普通の人間の感性とは画するものを持っている人種であり。

不機嫌そうな表情の奥に噛み締める様な笑いを浮かべた剣堂の言葉に、洸征は慌てたように疑問符を浮かべる他のメンバーを誤魔化した。

瀬多らから見れば、いつも武具調達に世話になっている店の店主と洸征が知り合いというだけでも中々驚くべきことだったが。

「洸征君、知り合いだったの？」

「まあ、知り合いに何をトチ狂ったのか『アート』とやらに魅入られた奴がいますね」

「あー……坂崎の奴か」

「お、完二も知り合い？」

頬を掻きながら疲れたように呟く完二の声を目ざとく聞いたのは花村。

店内に並ぶ物騒な数々に魅力を感じるなどと、特捜隊の面々の脳裏にはまたしても店主と似たような変人の影を浮かべるのだった。ともすれば店主の様に見た目どこかゴツイ男の姿までも。

「女性ですがね」

「マジか!？」

「みなさんの後輩ですよ。まあ、会う事はないでしょうが、そういう奇特な輩もいるということだ」

「……………おめーは何にしに来たんだっつノ」

ボロクソに貶す洗征にジト目を向けながらレジ先のカウンターにて頬杖をつく剣堂。

どこか拗ねた様子に軽く謝りながらも、皆それぞれ目的を果たすために並べられた武器の類へと視線を向けた。

彼らの目的は、これより共にテレビの中で戦うことになる洗征の使用する武器についてである。

瀬多は大剣、花村は双剣、里中は足甲、天城は扇子、完二に至っては鉄板を基にした鈍器と種類は多岐に渡る。

「鉄板……………完二、お前は何故そうも」

「な、殴れりゃいいじゃねえか!」

「いや、まあ、テレビの中の物理法則もいろいろと狂っているようだし、手に似合ったものが一番いいのだろうが」

店内に並ぶ武具の類を見ていた洗征は、どれもこれも日常とはかけ離れた品々のため息を吐かざるを得なかった。

腕っ節の強い完二や、格闘技に精通する里中ならばともかく、普通の高校生であった瀬多や花村が刃の類を飄々と振りまわしている時

点でそう心配することはないのかもしれない。

そもそも彼らは技術で取りまわしているというよりも、ペルソナの身体能力ブーストで力任せに振りまわしているといった方が正しい。

「洗征。俺たちの主力はペルソナだ。そりゃ武器はあった方がいいけど、おまけってやつだからな」

「そーお？ あたしはバンバン蹴るけどね！」

「……里中先輩、問答無用でシャドウぶっ飛ばすもんな」

どうにもアドバイスとしては花村の言が一番信用できそうではある。その花村がどう考えても素人には扱いにくい二刀を使っているのがどうにも矛盾した話だが。

なんとなくカッコいいから、という理由でそれを選んだ花村に苦笑しながらも、洗征は自らの武器を探すべく視線を彷徨わせた。

刀、斧、槍、盾、鎧に足甲。中には指弾やトランクケース型仕込み武器などといった玄人過ぎるものさえある。

「武器といってもな」

「あ！ あれだぜ？ 確かにカッコいいから選んだっつーのもあるけど、俺のペルソナが双剣っばいの持ってたつていうのも理由だし」

「ペルソナと合わせるのも一つの案ですか」

「ということは洗征君のは………ボールと本？」

「………まあ、分厚い辞書とかなら鈍器になりそうだけど」

「ボウリングみたく転がすとかは？」

出てくる案はどれもこれも非効率この上ないものばかり。

天城の扇子とて似たような印象を持たせるが、鉄線や投擲武器として現実に幾らか存在するそれと比べるのはあまりに拙い。

護身具程度にしか扱えないとしても、やはり現実的な思考がどこか過ってしまう洗征には認められそうもないものばかりだった。

「ドリルとかいーんじゃないか？」

「剣堂さんは少し黙っててくれ」

「でも、ゲームじゃ仲間の内の一人くらいはゲテモノ装備しているよね！……じ、冗談だつてば、そんな目で見ないですよ」

人差し指を立てて気楽に笑顔を見せる里中に、洸征は真顔なままでしばし里中が冷や汗を垂らすまで見つめた。

しかし洸征の中にも違った意味であり他仲間と被るのは避けたところだった。

例え気休めの武器とはいえ、数少ない戦力ならばそれぞれ決まった役割を担うためには武器の差別化も重要しなくてはならないのかもしれない。

「瀬多さんがチームの中枢を担う司令塔にしてオールラウンダー」

「ん？」

「花村さんは速度を活かした攪乱と補助」

「確かに、そうだな」

「里中さんが完全前衛型の物理攻勢役」

「うん。蹴る役はあだし」

「天城さんが完全後衛型の魔法のエキスパート」

「そうだね」

「完二は……里中さんと似た役割だがどちらかというと対集団戦ではなく一点火力集中」

「おう、任せとけ」

ぶつぶつと各自の担う役割を確認していきながら、洸征は自らの胸に手を当てた。

心の内に眠るもう一人の自分。ペルソナ。

記憶を呼び起こせば自分のペルソナの傾向が担うべき役割とは一体

何なのだろうかと思索する。

もしもあの時目の前に立ちただかったシャドウと、そして高揚したまま戦った時のことを参考にするならば。

「完全補助型、か」

と、ここまでの考えに至ったのは評価できる所だったのだろう。だが武器によるものは何を選べばいいかと考える工藤の頭に浮かぶのは、拳銃やらスタンガンやあまりに現実的なものばかり。徐々に頭から煙を噴き上げ始めた工藤は、剣堂に向かって口を開いた。

「剣堂さん。適当に強力なものを頼む」

【6月5日・日曜日・晴れ・工藤洸征】

「クマはクマクマ！ よろしくなーコーセー」

「……あ、ああ。よろしく頼む」

ペルソナやらシャドウやらテレビの中といった不可思議を体験し、そう言えば転生もまた不可思議なもの一つだったと思いついてみ

れば、目の前で跳ねる物体を容易く受け入れることも出来るのではないかとも思えた。

どうやら物事はそんな単純なものではないらしく、差し出された手触りのいい毛皮の手に握手をするまでいくらか手間取ってしまう。

どごその三頭身を思わせるずんぐりむっくりの身体。青や赤を基調としたファンシーそのもののデザインに、くりくりとしたデフォルメされた大きな瞳。頭のとっぺんで天に向かって跳ねている毛が感情に反応するかのように揺れる。

語尾にクマを付ける辺り、露骨なキャラ付けを感じられてやるせない気持ちにさせるが、その一挙手一投足が見た目然りといった可愛さを感じさせる。

「……ヌイグルミが動く、か」

「ヌイグルミじゃないクマ。クマはクマクマ！」

つい零してしまった声に、クマと名乗った物体？ 生き物？

まあ、クマは随分と声を荒げて否定した。

頭部と身体を分ける部分に大きめのファスナーがあったりと、どう考えてもひとりで動くヌイグルミとしか表現できないのだが、コレは彼にとって許容できない表現らしい。

そういえば彼か彼女かすらも分からないな。

「クマは……男か？ 女か？」

「クマはクマクマ。でも綺麗なお姉さんは好きクマ！」

当分クマという言葉を聞いた時に眩暈がしてきそうな物言いに、少々げんなりもしたが彼もまた特捜隊のメンバーの一人。一体。一匹。

瀬多さん達がクマに出会った経緯はまだ聞いていないが、クマは我

々特捜隊がテレビの中を探索する際のナビゲーターを担ってくれるらしい。

瀬多さん達の案内でジュネスの家電品売り場に連れられてきたのは、ウン十万円は軽く超えている巨大なテレビの前。

成程、これほど大きな画面ならば人の身体など軽々入るだろうと観察していれば、瀬多さんが徐にその画面へ手を伸ばし、ズブズブと沼に沈むようにして身体をねじ込んでいった。

無論、あまりにシニール過ぎるその有様に俺は言葉を失わざるを得なかつた。

何の合図も無くマイペースにテレビの中に入っていった彼に、他の皆は苦笑しているが、結局その皆もためらいなく身体を画面に沈めていく。

「いや、これは、しかし」

「んだあ？ もしかしてビビってんのか？」

「それは、お前、これはどうだ？」

「いいから行けってんだよっ！！」

狼狽する俺を背後から蹴り上げ、水の中に沈んでいくような気持ちの悪い感覚に包まれれば、耳の遠くに聞こえるのは嬉々とした完二の笑い声だった。後で仕置きをせねばならんだろう。

そんなことを考えていれば直に浮遊感のようなものが身体を包み、灰色の視界の中に現れたのはまるでスタジオを思わせる霧の世界だった。

そしてその霧の世界にいたのが、クマ。

そんなわけで自己紹介も終えたのだが、クマがごそごそと身体を弄り始めて何やら眼鏡のような物を取り出した。

既に眼鏡など掛けているというのに、首を傾げて他の皆に視線を向ければ一人残らずいつのまにか眼鏡を掛けていた。

そういえば前に戦った時も眼鏡をしていたようだが。

「霧で見えにくいでしょ？ それを掛けると大分視界がくつきりすると思うよ」

「む、そういうことでしたか。しかし俺は……」

「フフーン。クマの職人技を舐めてもらっちゃいかんぜよー！ 勿論コーサーのためにちゃんと度も入ってるクマ！」

「いや、だとしても適当に度を入れてもだな」

半ばこちらの反論など許さぬようにして強引に手渡された眼鏡は驚くほどに軽く、そのデザインはシックなシルバーのメタルフレーム。良く見れば天城さんのものはレッドメタルのツーブリッジだったり、里中さんのはイエローのセルフフレームだったりとデザインに凝っているものを感じさせる。

まあ、クマが職人技と自負するのも頷けるのかもしれない。

元々掛けている眼鏡とたいしてデザインが変わらないため、ただ単にいつもの眼鏡に霧を見通す効果を付け加えただけかもしれないが。

「……………」

「どっ？ 見えるでしょ？」

「ええ……しかし、眼鏡一つで霧が見えるようになるとはどんな技術を」

「企業秘密クマ」



胸を張りつつ耳をピクピクさせるクマに、そんなことはどうでもいいと和ませられた気がした。

確かに、今更ここまで細かく気にしてもしょうがない気がする。テレビの中という世界がある。ヌイグルミが勝手に動く。　　そういえば眼鏡の度数もぴったりだ。

「で、準備はいいのか？」

「ええ　　せめて少しだけでも慣れておかないと」

「ふふん。まあ、俺たちに任せときな！」

力こぶを作る完二に苦笑しつつも頼もしさを覚え、肩に背負った武器を右手で握りしめる。

向かうは自らが造り出した忌まわしきダンジョン。

今更ながら工藤高等学校などという吐き気の催すネーミングに鳥肌が立つが、それこそ自分の造り出した負の歴史ならば踏み躪るのに躊躇は無い。

今日の目的は戦う事に慣れるということ。

自らが戦うべき相手というものはっきりと見定めること。

纏わり付くような悪寒が漂うテレビの中。

頼もしき仲間たちに囲まれた俺には、まるで恐れなど無かった。

さて、どれほど俺は戦えるのだろうか。

ゴツンと鈍い音を立てて地面を叩く俺の武器　　折り畳み式大

金槌。

まあ、いくらシャドウと言えどもこれでぶん殴られれば死ぬほど痛いだろう。



**第二十五棒 殴りこみ準備に奔走する男（後書き）**

まだだ、まだ更新は終わらんよ！

ということでは主人公の武器はハンマー。  
補助系魔法タイプで大型鈍器とかワロス。

## 梓外 初陣

【6月5日・日曜日・晴れ・工藤洗征】

浅く立ちこめる薄紅色の霧。そこら中で這いまわる黒の異形。そして何よりもこの身に宿る不可思議な力の奔流。

どれを取ってみても現実ではとても経験できない感覚に『何故』と付きつけたくなる感情を胸に抱いてしまう。しかしその疑念も長くは心の中に留まらない。

それを問うた所で答えてくれるものはなく、答えを得る意味は……  
どうだろうか。

物理法則をまるで無視するがごとく動き回るシャドウ、そして自身。ゲームの中に入り込んだかの如く認識される『強さ』という曖昧なパラメーター。そしてそれを極当然のように受け入れている自分。

僅かに残された常識が徐々に非常識に侵されていく。

そんな感覚は俺にとってはあまり愉快なものではなかった。

「洗征。気をつけるよ?」

隣に立つ瀬多さんの言葉がすんと心の底に落ち、深まりかけた思考から意識を戻し周りを見回せば、同じく頼もしい笑みを浮かべている仲間がいる。

他人でありながらも、自分自身のことのように胸を張りたくなる強い人がいる。

ただそれだけで、俺は彼らの信頼に答えたくなるほど心が奮い立つ。俺たちの目の前で今にも襲いかかろうと出鱈目な身体を揺らすのは……まあ、特捜隊からすれば雑魚と呼ばれる類の敵なのだろう。クマのナビによって明らかになっている敵の名前はキラーツインズというものだとは判明している。黒の衣に身を包んだ無表情の人型二体が、横に並んだまま針で串刺しにされている中々にユニークな姿。

まずは最初。学ぶことは多い。

例えば、相性によるペルソナスキルの有用性。

「来て、コナハナサクヤツ！」

半ば奇襲という形で放たれた天城さんのスキルは、対象を火焰によって包み攻撃する火炎属性スキル「アギラオ」。

じりじりと肌でさえ感じ取れるような炎の渦に巻き込まれたシャドウは、その不安定な二体の身体を擦っては苦しむようにして低い唸り声を上げた。

そして、それはあまりに大きな隙となり得るわけで。

「天城先輩もう一丁オ！！」

完二の嬉々とした声色の答える様にして、もう一度天城さんが自らのペルソナを具現させ、度重なる攻撃であっという間にシャドウを沈めていった。

彼女の勇敢な姿を、いや、特捜隊の闘いというものを未だ外側から見ることに徹していた俺は、直にこの世界の仕組みを理解していく。

致命傷を受けても体力が続く限り立っていることは出来ると言う、

あからさまな仕組み。  
属性相性というシステムが齎す恩恵に大きく依存した、戦闘システム。

しまいには経験値というものが存在し、敵を倒す度に眼に見えて成長する己のペルソナ。

まあ、自らのペルソナが頭の中で数値化されている時点でなんとなく思っていたことだが。

この世界は、あまりにも『ゲーム』過ぎる。

とまあ、ごちゃごちゃと考えるのだが、やはり俺には意味の分からん仕組みである。

そもそもゲームにおける一番の恩恵……体力と呼ばれる命の数値化を考えれば、逆にゲームのような分かりやすいシステムにしてもらった方がいくらか楽だ。

痛みも苦しみもあるが、下手をしなければ死ぬこともない……瀕死の重傷を負っても、それを瞬く間に回復出来る魔法スキルもあるのだとか。

テレビの中という世界が故に、ゲームという法則があるのか。

やはり答えなど瀬多さんもクマも知らないらしいが……まあ、戦いというものに親しみの全くない一般人からすれば、このような親しみ深い世界は有難いとも言える。

となれば唯一注意しなければならぬことは、この生温いようなテレビの中の世界に慣れてしまうことだろう。

例え死が遠い世界であっても、俺たちは武器を手に取り、命を掛けて戦っているのだから。

回復魔法一つで体力が全快するこの世界に、慣れてはいけない。

【同日・愚者の集い】

初めての戦闘ということは何回かはクマの隣で何やら思案しながら瀬多たちの戦闘を眺めていた洗征だったが、今日の目的は力試し。いつまでも見ているわけにもいかず、補助型後衛として徐々に本格的に参加させていくことになった。

そう、やるべき彼の役は補助である

はずだった。

「だーかーらー、てめえは俺の後ろにすっ込んでろって言ってんだろーがッ！」

「お前が考えなしに突撃するからこつちも苦労するのだからッ！お前は今までも瀬多さんたちに迷惑をかけて来たのではないのだからッ！」

「ああん！？ 新参が調子こいてんじゃねえぞ！ てめえは俺が守ってやるって言ってんだ！」

「いいや、補助させてもらう。そもそも当初の予想とは違っているのだから多少は柔軟性を持て、阿呆が！」

「だからっててめえが前に出ることあねーだろーが！ そもそも物理弱点って何だよ。貧弱すぎるんだよ！」

だが、この有様である。

瀬多たちの前では、くっつきそうなほどに、いや、頭突きするようにして憤怒の表情をぶつけ合わせ口論する工藤洗征と巽完二の姿があった。

どうにも口論の内容的に双方貶めているわけではないのだが、どちらにも引く気はないようである。

問題となったのは工藤洗征が持つペルソナ、『カライテンジン』の構成スキルである。

あんなにも散々な補助系特化と思いきんだ皆であったが、その実、洗征は他者の能力を底上げしたり、シャドウの能力を下げる様な傾向のスキルではなかったのだ。

何せ彼のスキル構成は、攻撃性補助特化だったからである。

「聞け、完二。いいか？ マカラカーンにテトラカーン、マハジオンガにデビルスマイルと俺には仲間を補助する様なスキルは持っていない」

「後ろでシコシコ反射魔法かけておけばいいだろうが。てめえ、バカみてえに攻撃仕掛けてくるシャドウを反射させて高笑いしてたじやねえか」

「確かに攻撃を反射されて倒れ伏すシャドウなど無様で傑作ものだったけど……違う！ そういう話をしているわけではない！」

「違わねえよ！ つか、てめえの戦いかた陰険なんだよ！ 敵ビビらせるわ、攻撃反射させるわでシャドウが可哀そうに見えるだろうが！ 拳句の果てには消耗激し過ぎで息切れいやがるしよあ」

「聞いたか瀬多さん？ この阿呆ついに脳味噌までイカれたのか、シャドウにまで同情し始めたぞ」

バツ、と勢いよく瀬多の方に振り向いては真に迫った表情で同意を



求める洗征に、瀬多だけでなく他の者も頬を搔いた。

そして再び始まる完二と洗征の罵り合い。もはや無現ループである。

「そもそもお前の魔力が低いから俺にも電撃魔法の役割が回ってくるのだから！ まさかペルソナまでに頭の悪さが影響しているのではないだろうな！？」

「よおし分かった、表に出やがれ！ そもそもそれを言うなら里中先輩だって氷結魔法貧弱じゃねえか！ あの人も馬鹿って言いたいのか！？」

「ハッ！ 何だ、脳筋前衛は揃って頭が悪いとでも言うつもりか。

里中さんが貴様のように馬鹿なわけがないだろうが！」

「……ねえ、千枝？」

「アレ、何だろうこの気持ち。すっごいあの二人蹴り飛ばしたい気持ち」

引きつった顔で里中に声をかけた天城は、さらに里中の据わった表情に苦笑いを浮かべた。

兎にも角にも工藤洗征、少しばかり開き直り過ぎである。

二人の口論の中心となっているのはそうギスギスとしたものではない。彼ら二人が互いを大切と思っているこそ、起きてしまうような類の喧嘩に過ぎないのである。

すぐに落ち着いてそれぞれの役割を担う事が出来る、とは思っている瀬多ではあったが……兎にも角にも最初ということで連携は上手くいかないものだった。

【同日・工藤洸征】

無事に……まあ、無事に初めて行ったテレビの中から帰還し、まずは解散ということで各自帰宅した今現在。

暗がりの自室で俺は布団の中で籠りながらひたすら今日の記憶を消し去ろうともがいていた。

(……………酷い)

いや、言い訳をしようと思えば箇条書きにしても多く並べることは出来るのだ。

例えば初めての戦闘で高揚していたのだとか、最初の戦闘だからいろいろ試したいことがあったとか、ただ単純に力を手に入れたからとか。

(いや、最後のは……最低じゃないか)

ぼすりと畳んだ布団を殴りつけ、しばし思考を放棄しようと思を閉じる。が、駄目。

思い出すのはシャドウと相対してハンマーを思っがままに振るう自分の姿だった。

いや、完二との口論はまあ、最初の戦闘だから連携もそう簡単に取り

れるわけではないと自身で納得することは出来た。  
しかしそれにしても心の向かうまま怒鳴ってしまった様な気がするし、里中さんから向けられる視線にすぐさま気付き謝罪しなかつたことも減点だろう。

だが、それ以上に自分の愚行にヘドが出る。

俺の目の前で反射魔法に掛かりふっ飛ばされて這いつくばるシャドウに三段高笑いを決めた様な気もするし、おもいきり振りかぶつた金槌がシャドウを捉えた時は、その、気持ちよかつた。

まるでピンボールのように弾け飛ぶシャドウの姿はほとんどギャグ漫画のようであり、無様であり、やはり俺は笑ってしまう。

何よりステータス異常によって恐怖で震えるシャドウを見ると……。

どうやら、タガを外し過ぎたようだ。

まさか今の今までストレスの吐きどころなく生きてきた俺が、最もその方法として選んではいけない場所を見つけてしまうとは。

降って沸いた力をストレス発散に扱うなどと、これでは前に瀬多さんたちを常識がないと糾弾していた俺は一体どこにいったのだろうか。

まるで力に溺れて自滅する三下ではないか。

慣れてはいけない。慣れてはいけない。慣れてはいけない。

何だかシャドウ云々ではなく、自分の心に巣食う軟弱な心が一番の敵の様で怖い。

ペルソナを扱う力が心に起因するとは瀬多さんたちに聞いていたが、  
こういう側面も 俺だけか。

そして俺は再び布団の中に潜っては、一人ベッドを殴りつけていた。

この歳で黒歴史など……笑いごとではない。

明日、学校で完二にも瀬多さんたちにも謝っておこう。

工藤洸征・所持ペルソナ『カライテンジン』

【初期能力値】

力	1	8
耐	1	6
魔	2	4
速	2	3
運	2	0

【耐性】

物	弱
火	耐
氷	普
雷	無
風	耐
光	普
闇	耐

【所持スキル】

初期・マハジオンガ

初期・デビルスマイル

初期・テトラカーン

初期・マカラカーン

Next Skill・亡者の嘆き

## 梓外 初陣（後書き）

覚醒とか力を手に入れて調子に乗った主人公が黒歴史を作った話。まあ、多分一緒に戦えるのが嬉しくてヒヤッホイしたんでしょうね。次からはきちんと自重するはずです。

つーかペルソナの戦闘描写難しいんだよッ!!

ということでは詳しく主人公の戦いの様子をこの梓で書こうとしましたが、作者の文才の無さのせいでカット、そしてまさかの梓外行き。

多分この小説を長らく見ていただけの方には気付かれていると思いますが、作者は戦闘描写が大の苦手。はっきりいって全部カットしたい気分です。

……ちゃんと書けるように努力しますです。はい。

でもって主人公のペルソナはこんな感じ。  
ゲームにいたら絶対に使わねーわ、こいつ。

## 第二十六棒 難題

【6月6日・月曜日・晴れ・工藤洸征】

中々に貴重な体験を経て、非日常へ足を突っ込む最初となった先日の傷跡に唸りながらも、現実には止まることなく進んでいく。

朝起きて、朝食を食べて、学校へ行く準備をして、そこまでいってようやく睡魔より覚醒し始めた俺の脳裏にあったのはやはり先日の……。

梅雨時の時期の中で久々の天気だというのに、俺の心は憂鬱の限りであり、外にすら出たくない衝動に駆られる。引きこもりそのものだらしない心情を衝動と言っているのかどうかは微妙であるが。

そんなこんなで肩を落としながら登校路をトボトボと歩けば、後ろ聞こえる澆刺とした俺の名を呼ぶ声。

猫背気味だった姿勢がビクついたようにして跳ね上がり、まるで怯えるように動いてしまう自分の身体にうんざりしつつ後ろを振り向けば……恐らくは先日において一番不愉快な思いをさせたであろう里中さんと天城さんが手を振っていた。

「あ、っと……おはようございます」

「おはよー」

「おはよう、洸征君」

朝の日差しの中で妙に映える二人の笑顔に、少しだけ気恥かしげなものを感じつつ、駆け寄ってくる彼女らを立ち止まり待つ。

それにしても入学してから今まで気付かなかったのだが、彼女らと同じ通学路を俺は歩いていたのだろうか。鮮やかな緑のジャージと真っ赤なカーディガンを着こむ二人に眼が行かないわけではないと思うのだが……。

知り合いとなり、言葉を交わし、二人と友好を深めるようになって初めてそんなことに気付くことに、少しばかり顔が苦笑に歪んでしまう。

「どしたの？」

「いえ、お二人ともいつも此処を？」

「うん。大体いつも千枝と一緒に来てるかな。冨征君も？」

「ええ……なのに互いに気付かなかったことが何だかおかしくて。

その、お二人は中々に目立つ方ですし」

「え？ そうかな？」

なんというか、テレビの中の戦い方一つ見ても真っすぐな心を感じさせる里中さんの反応に微笑ましい物を感じつつ、その横で控えめに笑う天城さんの方を見比べる。

……何だか一見性格も正反对そうに見える二人ではあるが、並んで笑うその姿が何よりも絵として完成しているように見えた。

俺と完二。傍から見ればどのように映っているかなど所詮似非客観的な想像しか浮かばないが、こうでありたいものだ。

「……それと、先日はすみません。何だか余計なことをベラベラと」「うん？ 何の事？」

謝った内容について自ら口に出すのは最も辛い。

意識的にか無意識にか、小首を重ねる里中さんの背中に真っ黒な羽が生えているようにも思えて顔が引きつる。

しかし俺自身が勝手に起こした粗相ならば、きちんと頭を下げるの



が道理。

「テレビの中で随分と、その、失礼な真似を」

「え？ あー……別にいいよ。そんなん気にしてないってば！」

「あれね。前衛は頭の悪いっていう」

「……雪子お、改めて言うともム力つくから無し！」

天城さんのわき腹を小突くようにして眉を顰める里中さんと、片目を閉じて小悪魔的に笑う二人の姿に、ほっと息を吐く。

なんだろうな……酷く自分が臆病に見えてきたような気がして困る。それでも嘘っぱちの神童として多くの虚構や虚栄を前面に貼り付けてきた見せ掛けの度胸があるつもりだったのだが。

俺の弱さをばつちりと見られてしまった人には……なんだろうな、酷く自分の感情が卑屈だ。

「ねえ洗征君」

「はい？」

「そんなに固くならなくていいよ？ もっと気楽に、さ」

「そうそう。そりゃやってることもアレだから真面目は大事だけどさ。いっつもそれじゃ肩がこっちゃんよ」

三人並び歩き続けていく中で投げ掛けられた言葉は、まあ、正論だった。

しかし、虚栄とは、虚構とは、すなわち嘘をつき続けることによつてガチガチの鎧を来ていた俺にとってはこれこそが常であり、破綻した工藤洗征を創り出した原因であった。

故に本当の俺を見た彼女らにとっては、俺の姿は酷く固く見えるのだろう。

全くもって否定しようがない事実である。

「……やはり、生き方を唐突に変えるというのも、難しくて」

「まあ、仕方ないと思う。私たちも」

「お二人も？」

「いくらペルソナって言ってもね……なんていうか、気付いただけって感じ？ まだ直したわけではないっていうか」

「ちょ、里中さん、声大きいです」

ペルソナという単語を隠すことなく普通に口に出す里中さんに慌てて口を挟むが……いや、今更か？ それこそ気にし過ぎというものなのかもしれない。

もはやこの頭の固さは性格なのだろう。もう優に三十余年を越える付き合いだというのに。

「でも気付けただけでも良かったっていうか……いや、実際はすごく気分悪かったけど」

「それには同意します」

「別に今すぐ変わらなきゃってわけでもないし、ね。それに同じ境遇の友達もいるし」

「……………」

果たして二人のペルソナとは、シャドウとは一体どのようなものだったのだろうか。

何だか特捜隊の中ではそういったシャドウのことについて追及するのが一種のタブーになっているらしく、しつこく聞いてくる完二に天城さんの平手がどうのこうのと。

……まあ、確かに黒歴史とも言えるものを何度も聞き継る奴を脳裏に浮かべれば、酷く苛々させられるような気がした。

何にせよ二人との会話で得られた言葉は、焦りにも似たものを感じる俺の肩をすつと軽くしてくれた気がする。

何だかそれが悔しくて、頼もしくて、嬉しい。

……未だ俺は他者を見下す癖があるらしい。要注意、である。

「あ、それじゃあさ。まずはその呼び方とかから始めない？」

「は？」

「あー、それはあたしも思う。洗征君さー、もっとフレンドリーになりなよ！ こう、もっと後輩オーラを出す感じで」

「い、いや、別に敬称くらいで」

「完二君を見習うべき。もっとこう、『里中先輩、うっす！』って感じで、ほら、言ってみて」

「……………う、うっす……………」

何だろうな……………俺はコミュニケーションも取れん人間のつもりはなかったのだが。

俺の慣れない口調に腹を抱えて笑う二人に、俺は疲れたようにしてため息を吐くしかなかった。

ちなみにその後は完二に適当に謝っておいた。

よくよく考えれば後に残すほど彼は狭量な男ではない。

俺は何を恐れているのやら。

【6月7日・火曜日・雨・工藤洗征】

校舎の外から聞こえてくる雨音を臆気に耳にしながら勉学に励む。体調不良を起こして休んだ話も一日もすればそれを口にするものはいなく、たまに授業の担当となった教師陣がちらりとこちらを心配そうに見てくるのみ。

少し前ならば鬱陶しそうに表情を歪めるかもしれないかった他者が俺を気にかけてくれる行動にも、素直に笑って返すことが出来ていた。そんな中でも必要以上にこちらを心配してくる人がいる。まあ、生徒会に所属する新田さんと原さんのことである。

彼らが俺の体調不良及び入院の話に勘違いの罪悪感を抱くというのも、傍から見ればそう思いこんで仕方がない事実はそれなりにある。入ったばかりの新人役員に地方テレビまで出てくる他校との合同会合を一任させ、そこまでの流れ全てを俺一人に投げた。そこに多大なストレスを感じるかどうかは人次第ではあるが……あの会合前後の俺の様子を見れば、俺は酷く繊細な少年に見えたのだろう。

実際は完二が失踪したとか、瀬多さんの活動に対してなどといった自分勝手な暴走が生んだ苛立ちだったのだが。

そんなわけで痛々しさをを感じるような必死さは見られなかったものの、しきりに俺に対して頭を下げる原さんや現在の体調を気にする新田会長には……辟易としながらもどこか申し訳ないような気がしていた。

あれは矢崎教頭が勝手に仕出かしたことであり、俺を勧誘したことに対する幾ばくかの責任はあっても、ここまで気にして貰うには少

々腰が引けてしまう。

悪いのは矢崎教頭と俺自身であって　　とまあ、長々と説明したのだが、渋い顔を彼らは浮かべるだけだった。

彼らが善人であることは間違いないのだろう。

生徒会室よりそそくさと退出し、そこで無意識に出そうになった苦笑を飲み込めば、何やら生徒会室前に見知った姿があることに俺は気付いた。

肩まで掛からない程度の長さの茶髪の上に、オレンジ色のヘッドホン。どこか落ち着きの無いような感じで足踏みをする男子生徒。

「花村さん？」

「おわっ！？ …… って洗征？」

適当に声を掛けてみれば俺の姿が目に入らないくらいに意識が埋没していたのか、花村さんは肩を跳ね上がらせて此方に素っ頓狂な悲鳴を上げた。

なんというか賑やかというか、コミカルというか。漫画やアニメに一人はいそうなその反応に少しだけ笑いそうになった。

「どうしたんですか？　こんな所で」

「こんなところって……一応ここ二階だぞ？　そんなこと言ったらお前が」

今更ながらではあるが、八十神高校は教習棟と実習棟の二つの建物に分かれており、俺達生徒が基本的に活動するのはこの教習棟である。1階が1年生であり、2階は2年生、そして3年は、と大体分かれているが……となれば2階に1年の俺がいる方が不自然なのだ

ろう。

がしかし何故か生徒会室の場所は2年1組の教室の反対側。職員室は実習棟にあるというのに、何とも面倒な場所にあるものである。

「ほら、一応生徒会役員ですし」

「あー、そつか。お前確か生徒会に入ってたな。何、なんか話し合いであったん？」

「いや、そういうわけではないのですが……」

「……？ 何か見た感じ疲れてんな、お前」

傍から見た俺は他人に察せられるほどにくたびれていたのか、首元に手をやって傾げる花村さんに今まで耐えていた苦笑がため息と共に出てしまう。

「今までのツケというか、代償というか」

「ん？ どゆこと？」

「ははは、気にしないでください。それで、花村さんは何を？」

「俺？ 俺は、あれだよ。待ち合わせってやつ」

花村さんにわざわざ気にして貰う程の悩みでも疲れでもなく、早々に話を切り替えて聞いてみればどうやらこんな廊下の真ん中で誰かと待ち合わせでもしているらしい。

1組の誰かなのかと適当にあたりを付けてみれば、花村さんの視線が俺の背中越しの向こうへ。不思議に思い振り返れば、廊下の向こう側から瀬多さんの姿が。

「成程」

「まあ、適当に一緒に帰るかーってな。洗征もどうよ？」

「……帰り道、一緒でしたっけ？」

「あ」

誘ってもらった手前申し訳ないのだが、里中さん天城さんならともかく花村さんと瀬多さんとは登校の時に一緒になった覚えはなく。そういえば特捜隊と銘を打っているものの、完二以外の皆とは携帯の連絡先のみを教えているだけで互いの家を知っているわけでは……いや、確か俺が誘拐されていた時に完二と一緒に俺の家へ来たのだったか？

「あれ？ 洗征？」

「……あ、ああ、どうも」

「珍しいな、こんなところに」

「ほら、あれだよ。洗征って生徒会役員だし」

いつのまにか後ろにまで近づいていた瀬多さんの声にうるたえながらも、横で俺については説明してくれている花村さんに任せる。何にしても、共に闘い、そして色々と見られてしまった人たちである。ある程度友好を深めておくのになんら異論はないのだろう。どちらにしても一緒に帰るといふ選択肢は残念ながら取れないが。

「じゃあさお前ら、ジュネスに行かぬ？」

「……ああ、成程ね。洗征、お腹減ってる？」

「??？ まあ、それなりにですけど」

「へへへ、じゃあ決まりな」

何だか良く分からないうちに一緒にジュネスへ行くことが決定してしまっただようだ。

夕飯ならまだしも……何故にジュネス？

何とも身近な所に大物がいたものだ、と思う。

瀬多さんと花村さんに連れられてやってきたのは、いつだったか特捜隊に喧嘩を売った

あのジュネス屋上のフードコート。白色の丸テーブルと椅子が散らばり、大型チェーン店のフードコートらしい簡素なメニューが並ぶカウンターも並んでいる。

其処をふと見回せば俺たちと同じく学校帰りの八高生らしき制服姿の集団が、大きな笑い声を上げながら談笑に耽っている。

あいにく雨ということとか客足もいつも以上に少ないらしいのが気の毒だが。

成程、確かに高校生が帰り際に一つ騒ぐには丁度良い溜まり場になっているようである。

「うーし、ジュネスフードコート特製、ウルトラヤングセットのお待たせだ！」

「お、おおー……」

「随分と奮発したな、陽介」

「へへっ、何てったって洗征の歓迎の証だからな。あ、相棒は勿論割り勘だかなー！」

「分かってるさ」

とまあ、彼らが俺を此処に連れてきた理由は簡単な歓迎の意味も込めて、だそうだ。

たこ焼きやら唐揚げやらハンバーガーやら、胃がもたれそうないか



にも若者向けのランチセットの山に顔が引きつりかけたが、ウルトラと銘打つ限りはフードコートでも一際高価な注文をしてくれた二人には単純に感謝である。

わざとらしく感嘆の息を吐く自分に嫌気が差しながらも、高校生の身ではそれなりな散在であろう食事を奢ってくれるということ嬉しく思う。

「あ、気にしなくていいからな？ 完二の奴なんて最初此処に連れて来た時たかりまくってたし」

「……アイツ」

「まあーそう怒んなって。あれだな、なんか洗征って完二の母ちゃんみてーだな」

ついで無意識に完二に当たった悪態に花村さんの言葉が耳に入り、しばし寝耳に水といったように俺は無表情のまま固まった。

母親など、そんな、馬鹿な。

俺の様子にケラケラと笑う花村さんと静かに笑う瀬多さんにため息を吐き、話を変えるべく奢ってくれることに礼を言うことにする。

味の方はまあ 推して測るべし。こつというのは雰囲気と気持ちが大大事だ。

にしても特捜隊として二か月前から此処を本拠地としている彼ららしく、瀬多さんと花村さんは此処の店員にも中々顔が知られているらしい。

どこか一階の食料品売り場でも働いていそうな中年女性が話しかけてきたり、後から同じ目的で来たのだろう八高生の視線も感じられる。

まあ、それ以上に花村陽介という人物の影響が大きいのだろうか。

何と花村さんはこのジュネス八十稲羽店を取り仕切る店長の息子で

あり、休日なども店の手伝いとして店内の様々な所で精を出していることもあるのだとか。

本人は恥ずかしそうに面倒くさそうにそれを話すのだが、どこかそれを本気で居やがっているわけではらしくある程度の充実感は覚えているようだった。

親の影響はあるとはいえ、たかが高校生が様々な売り場で働くのはどれほどの慣れと努力が必要だろうか。レジ打ち一つとて出来ない者には出来ないだろうに。

「つつてもやっぱ鬱陶しいけどなー。ほら、店長の息子だからーって」

「ああ……なんとなく分かる気がしますね。便利屋扱いというか」「前だつて相棒と一緒にここ来た時もウザったくてさあ」

「……あれはさすがに頂けないな。それでも黙って言う事を聞く陽介は偉かったけどね」

「一回シメたらどうです？ 完二曰く、ナメられたら終わりだそうですよ？」

「……あれだな、やっぱ洸征、完二のツレだわ」

聞き逃せない花村さんの言葉に適度に突っ込みを入れつつ、小雨のぱらつく曇天が徐々に暗さを増していく。

もうそろそろ帰らなければ色々と煩いことになってしまう。退院直後ということ母の声が少々いつもより大きいのだ。

何だかんだで花村さんと瀬多さんの奢りで食らった夕飯は会話の楽しさもあってか、それ本来の味よりも幾分美味しく感じられたと思う。

高校生の財布にウルトラなる注文がどれほど打撃を与えたのかは分からないが、彼らの純粋な歓迎には全力を以って応えよう。

テレビの中に連なる騒動だけでなく、一人の高校生として、後輩と

していくらか力になれたらいいと心から思った。

【6月8日・水曜日・曇り・工藤洗征】

重苦しい空気を咄嗟に感じ取れたのは、何よりも僥倖だったのだろ  
う。

授業も一通り終えあとは家に帰るだけだと昇降口に足を進めた先で、  
何やら剣呑な雰囲気を漂わせる二人の男子生徒がいた。

何の因果かどちらも髪も色素の薄い銀から白の目立つ男であり、何  
よりもどちらも知った顔であった。

下駄箱のすぐ傍でじつと片方の銀髪を睨む白髪の男子生徒は小西尚  
紀。

そんな彼の鋭い視線を真っすぐに受けて佇むのは、瀬多総司さん。  
知り合いなのかどうかもあやふやな状況にも関わらず、黙ったまま  
で互いの間に漂う空気はあまりにも重苦しいものだった。

喧嘩？ 何の因果で？ そもそも接点は？

間に入るべきか？

逆に空気を読まず、介入すべきか。

「……洗征？」

「あ」

「ん？ ああ、二人とも奇遇ですね」

自分でも思ったが酷い言い方だ。

何だか世界が変わったような空間に足を踏み込めば、俺の姿に気付いたのか双方ともに此方を振り向き、そして互いに表情を崩した。

ただ単純に俺を見つけたというばかりの瀬多さんと、見る間に表情を渋くした尚紀。

一体何があったというのやら。

「尚紀も珍しいな。既に帰ってるとは思っていたんだが」

「あ、あれだ。一応俺、保健委員だし……いつものアレで、アレだけど」

「……成程な。では瀬多さんも保健委員でしたか？」

「いや、俺は担任に頼まれてね。今日だけだよ」

スムーズに、スムーズに。

これでも周りを15年も騙し続け、空気をひたすらに読んで立ちまわった経験は無駄ではない。いくらあれな理由でも嘘を吐くスキルは伊達ではない。虚しい気もするが。

兎にも角にも二人をさっさと引き離れた方がいいだろう。声を交わすことなく睨みあっていた……いや、どうにも瀬多さんは違うようだが、この場から二人を離すべきだ。

「じゃあ尚紀、一緒に帰らないか？」

「あ？」

「瀬多さん、そう言うわけなんで、こいつを連れてっていいですか」

ね？」

「……うん、構わないよ。俺が引きとめたただけだしね」

茫然と口を開けたままの尚紀を半ば強引に一緒に帰ることを取り付け、どうやら瀬多さんもとことなく此方の思惑に気付いたらしい。苦笑するようにして彼はそのままおそらくは保健室の方に歩いていった。その間にも俺の背中に突き刺さる尚紀の視線は痛いものだったが。

「……尚紀」

「何だよ」

「時間はあるか？」

「……はっ。分かったよ。一緒に帰ればいいんだろ？」

「結構」

ようやく疲れたようなニヒル気な笑みを浮かべる尚紀に内心で胸を撫で下ろしながらも、俺は何処となく先ほどの二人が衝突する原因を考えていた。

瀬多さんと尚紀の間に何かあったのだろうか？

背後から響く学校のベルの音を聞きながら、連日の雨続きで水たまりの残った道路を二人並んで歩く。

空は相変わらずどんよとした曇天が重く続いているが、手に持ったビニール傘を開かねばならんほどの雨は降ってはいない。

どちらにしても、その曇天は歩いていく俺と尚紀の間に漂う雰囲気  
に腹が立つほどに似通っていた。

一緒に帰るとは言うものの、結局双方共に率先して口を開くような  
わけではなかった。

俺も、そして尚紀もどのようにして話を切り出せばいいのか迷って  
いる様な節さえ感じさせる。

しかし先に誘ったのが俺ならば、どんなにアレな話でも此方から聞  
くのが筋という者だろう。

一息を吐いてあるはずもない区切りを付けた俺は、意を決して何  
があつたのかを聞きだそうとした。

そして喉まで出かかった言葉を、唐突に話しかけてきた尚紀の声に  
よって遮られた。

「お前さ……二年の花村と仲良いの？」

剣呑な眼差しは、俺にも向けられていた。

第二十六梓 難題（後書き）

今年度もよろしくお願いいたします。

## 第二十七棒 とある

【6月8日・水曜日・曇り・工藤洸征】

これでも俺は声を荒げてまで誰かと取っ組み合う様な喧嘩をしたことがない。

勿論先日にも携帯越しに完二に怒鳴りつけたのは随分と久しぶりであったし、あれを喧嘩と言うにはどうもしっくりこない。

目の奥が真っ赤に成るほど叫び声を上げたのもほとんどなく、他人に対して怒りを抱くことがあっても、俺は往々にして腹に溜めこみ、自分は大人なのだとなんげも納得させていたものだった。

完二や尚紀といった友達との間でも殴り合うような口論に発展したことは一度もなかった。

そもそもこれでも世間での達振る舞いには人一倍気を付けて来たのだ。それは友である彼に対しても変わりはなく、半ばばれていたとしても『大人のような対応』を心がけてきた。

故に、ふと、尚紀から向けられた疑惑と嫌悪の視線は少々堪えた。

頭上を漂う曇天には、俺と尚紀を挟む雰囲気を表わすようにして少しだけ浅い雷光を帯び始め、尚紀の言葉の後に続いた互いの沈黙の間を小さな雷鳴が遮る。

病人とまでは言わないまでも白い肌を晒す尚紀とその顔に浮かぶ細められた瞳は、そこらの有象無象が浮かべる嫌悪の表情など比べ物にならぬほどに雄弁だった。

「……………」



「……………」

これが瀬多さん達の感じていたことか。  
これが完二の抱いていた痛みか。

これが、俺が彼らに向けていた敵意か。

じわりじわりと自分が過去に犯した独りよがりな敵意を思い出し、  
胸の内が締め付けられるような想いにこちらも瞳を絞る。

尚紀が明かした俺への僅かながらの敵意に、俺は答えなければなら  
ない。

これは親友としての、同じ過ちを犯した俺がやらねばならぬことな  
のだろう。

こんな瞬間が来るのではないのかと、俺はあの事件に巻き  
込まれていてから無意識に自覚していた。

「尚紀」

「何だよ」

「俺は、な」

境界線を探る。

此处で全ての真実を明かし、さらなる痛みを尚紀に植え付け、その  
選択を投げつけるのは容易だ。

誘拐された。テレビの中の世界がある。花村さんはその時に助けて  
くれた。

実は……………お前の姉の早紀さんも……………。

首を振る。

そんな安易な選択は、望まない。

「お前に隠し事をしている」

「そんなもん分かってる。花村とのことに関係あんのか？」

「少なからず、な」

「……………ちっ」

下校途中の何でもない住宅街の道路の一角。そんな何でもない場所で俺は選択を迫られる。

不満そうにポケットに手を突っこんだまま舌打ちを隠さずに打った尚紀の態度を、俺は痛いほどに理解出来る。

隠匿はされる方にとってはこの上なく不愉快な気持ちにさせるものだったから。

だが俺は選ばなければならない。

「これは、お前に話せないことだ。今は」

「……………今？」

「ああ。今は、無理だ」

訝しげに片方の眉を吊り上げた尚紀を真正面に、見つめて口を開く。これは俺も、そして尚紀も逃げ続けていたことだ。俺たちの間で話題に上げること avoidance、そして目を背け続けていた大事なことなのだ。

だから、この機に、俺は全てを背負う。誰でもない、今は尚紀の親友を『自称するしかない』この俺が。

「もしも俺たちが、早紀さんの死を受け止められた時、必ず話す」

「……………あ？」

「なあ、尚紀。俺たちは……………」

言うなり俺は、尚紀に殴りつけられた。

【6月9日・木曜日・曇り・工藤洸征】

昨日の雷鳴が雨に繋がることは幸運にもなかったが、今日も今日で変わらぬ灰色の雲が空を埋め尽くしている。

左頬辺りから漂う湿布の匂いに不快感を感じつつも、俺は今日も変わらず学校に通う。

そう、見事なまでに尚紀に殴りつけられたせいだった。

無論後悔もなく、彼を非難する気もなく、そしてもう少しまくやれないべきかとやっぱり後悔したりもしていた。

どうやら今日は尚紀が休んでいるらしく、それを伝えにきた坂崎も俺の顔を見るなり何かあったのではないかと勘も良く聞き出してきたものだった。

無論周りの生徒たちや担任の工藤先生も俺の怪我に興味津々らしく、一体どうしたのだとか、誰にやられたのだとか鬱陶しい質問責めにあったものだった。

自業自得ではあるのだが。

「マジ大丈夫なのかよ？」

「問題ない。自分で撒いた種だからな」

心底心配そうに強面の顔を歪めた完二をよそに、俺は屋上にて弁当を喰らっていた。

隣に座る完二は購買から買って来た菓子パンを頬張り、時折こちらの弁当を見つめたりしては羨ましいそうにジト目を浮かべている。残念ながら母の作った弁当を譲るわけにはいかないが。

曇り空も相まってか、屋上で呑気に昼食を喰らう俺達の他には誰もいなかった。

「あのよお、もしかして尚紀が休んだのって」

「まあ、俺のせいだろうな」

「……何したんだよ、お前」

敢えて簡単に言うのであれば、無神経な言葉で彼の傷を抉った、というところだろうか。

それを話せば完二の表情が心配から怒りに変わるのを密かに感じた。相変わらず、義憤には事欠かない真つすくな男である。

しかし、必要なのだ。

早紀さんが殺されてから早二カ月。いや、まだ二カ月と言うのか。どちらにしても、俺達の間でその話題は当然のごとく暗黙の了解として話に出すことをタブーとしていた。

当たり前の話である。何せ親しき人が死に、しかもそれが殺人だと言うのだから。

あの体育館に集められ、校長が無慈悲に吐いた言葉に啞然とし、坂崎や松永を相手にまずは落ち着けなどと言っていた頃から変わらな

い。

俺たちは、無力だった。

そしてようやく事態が鎮静化し、尚紀が登校し出してからもそのことについて俺が何か気を回すことはできなかった。

時に彼の愚痴を聞くことが出来たとはいえ、本当に聞いていただけだ。答えをだすためにアドバイスを言ったことも無ければ、自らズカズカとその問題に入りこんだ覚えもない。

故に、この段階に至ってもまだ、尚紀は泣けていない。

それに気付いたのはいつだったのだろうか。

幾度も尚紀の愚痴を聞き続けていく中でかすかに抱く違和感。誰からどう見ても悲劇のそれにしか見えない家庭の中で、彼は一度も姉の死を悲しむ言葉を発さなかった。

訳が分からない。何か姉が死んだらしい。家の中も冷めている。どれもこれも他人事のような、あまりにも無機質な。

「なあ、完二。それは幸せなのだろうか」

「それは……………」

「幸せを決めるのはその人自身だと言う。だがな、友である自称するならば、その幸せにほんの少しでも関わっていたいと願うのは間違いだろうか」

周りを見ず、常に自分のことしか見ていなかった十余年。ようやくにして自分の愚かさに気付き、立ち向かうための何かを知った。俺を支えてくれていた縁を知った。

ならば例え患者の手だったとしても、差し伸べてやりたい。

「多分、俺も泣いていない」

「洗征…………お前」

「完二。もう少しだけ、俺に任せてくれないか？ どうしてもだめ

ならば、もう一度助けを呼ぶさ」

「俺だってあいつのダチなんだぞ……」

それは分かっている。

コレは俺と尚紀の問題だけじゃなく、むしろ完二や、言つなれば彼を慕う坂崎にとつての問題でもある。

友人であるならば、誰であれ。

だが。いや、だからこそだ。

「報いたいんだ。こんな俺を信じてくれていた友人に」

「……………」

「分かち合つてやりたいんだ。あの悲しみを」

それは、別に意味もない独り言に近い決意。

ただ黙つて心の底に埋めるだけでもよかったが、せめて完二には聞いてもらいたかった願い。

この曇天にも劣らない霧のような迷いはまだある。

だがそれ以上に、それを撥ね退けるほどの覚悟が俺にはあった。

「本当に大丈夫？ ちょっと青いの見えてるけど」

「綾音、気にし過ぎたってしょうがないでしょ？ そもそもくっさいのよ、その湿布」

「……鉄臭いはんだごての匂いを漂わせるような奴が良く言う」

「あの香ばしい匂いの魅力を知らないとか、ロマンに欠ける奴っ」

「あ、あははは……」

昼休み。何の因果か食堂にて坂崎と松永と飯を食う羽目になった俺は、周りの騒がしい喧騒に紛れて俺の避難する坂崎に苦い顔を向けた。

わざとらしく鼻をつまみながら顔を歪める坂崎に、それを苦笑する松永の態度にどことなくほっとしたものを感じつつ、俺は何故に誘ったかを聞いた。

「気まぐれ」

素っ気なく答えた坂崎の弁によれば、らしい。

どちらにしてもまあ、賑やかな昼食を済ませられるならば異議はないだろう。完二辺りを誘おうとも思ったが、どうやら奴は休んでいるらしい。

携帯でメールをしてみれば今現在寝ているのだとか。サボリやがって。

「そういえばさ、来週から林間学校でしょ？ 面倒くさいよねえ」

「えと、若者の心に郷土愛を育てる、だっけ？」

「そうそう、それぞれ。洗征さあ、生徒会に掛け合って中止にしてくれない？」

「馬鹿な」

不躰にも箸の先端をこちらに向けてくる坂崎を一喝しつつも、話題に出た林間学校についても俺も少々面倒なことだと思わないでもない。

八十神学校、梅雨時の行事としてそれはあるのだが、その内容というのも昨今の高校事情からはかけ離れたものである。

近くの山で二年と共同でゴミ拾いをし、夕方からはグループに分かれて夕飯作り。さらにそのまま山にテントを張って一夜を過ごし、そのまま次の朝には帰る。

……中学でもやらんようなことを、何故高校になってまで。

一説によれば、何かと教導の厳しさで話題に出る諸岡先生が今回の行事を取り仕切っているのだとか。

「花も恥じらう乙女になってまで野宿とかマジあり得ないし」

「ほお、難しい言葉を知ってるようだな。珍しい」

「あ？」

「口が滑った。忘れてくれ」

少しからかってみれば、このロマン女はすぐこれである。

松永のような性格を見習えとは言わないが、もう少し奥ゆかしさを

……里中さんにしろ、天城さんにしろ、俺の周りには中々に強烈な女子が多い気がしてならない。

天城さんのなど父の理想を打ち砕くような天然の　話がずれた。

「でも実際生徒会でも不満たらたらじゃないの？　聞いた話によると行事の纏め役するらしいじゃん」

「率先してゴミ拾いしなきゃいけないんだよね？　あっ、別にゴミ拾いが悪いってわけじゃないけど」



「……まあ、な。サボれば停学などという暴論が通るとは思わんが、それなりに厳しい監視を付けなくてはならんよつだ」  
「モロキンってやつのはせいでしょ？ マジ最悪」

果たしてそこまでの価値がこの林間学校にあるのかどうかは疑問ではあるが、その諸岡先生が気合いを入れていると言つのは事実だろう。

噂では夜になったら教師同士で酒を酌み交わすという話もあるのだが。

どこまでいっても半端な行事である。

「でもでも、夕飯皆で一緒に作るんでしょ？ ちょっと楽しいかも」

「あー……それには同感かも。うちらって何作るんだっけ？ やっぱカレーとか？」

「うん。大体みんな同じみたい。中にはインスタントラーメン作るっていうグループもあるけど」

「おっ、そっちにしない？ 簡単そつで楽じゃん」

「つまりはカレーすら作れない女だと」

「あ？」

「今日はよく口が滑る」

あと、一週間。

いろいろな問題を抱えてはいるがこれでも学生。参加しないという選択はとれんだろうな。

第二十七棒 とある（後書き）

マジ筆が進まねえ。

ちよつと短く小出しになつちやうけど更新。

これから更新間隔もこれくらいになるのかしら……やだなあ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5496n/>

---

Persona4 現語りノ夢

2011年5月13日22時32分発行